

奇譚クラス

1954
2



新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ

2



縛られた女ばかりの三十二態

美しき縛しめ 第二集

辻村隆構成・塚本鉄三撮映
 頒価 一冊 五百円 (送料五十円)

(モデル嬢) 木田雅子嬢・村田那子嬢・高橋忍嬢
 久子嬢・川端多子嬢・厚沢春江嬢
 杉美嬢・坂口利子嬢・中宮綾子嬢

◆貴め写真に欲しいが印刷紙に焼付けたのは高くて困るとおっしゃる方は是非この傑作集をお求め下さい
 印刷紙と多量の極鮮明なる高級印刷により絶対他の追随を許さぬ低炭素版で常々三十二態のあらゆる姿態の貴客が手元に届くのです。市販はいたしませんから直接代理部へお申込み下さい。厳重荷造の上急送申し上げます。

責めのアルバム 第二集 完成

この一冊を買えば皆さまは他を必要としない位満足されることでしょう

9人のモデルを駆使して得た未発表の秘作
 本誌が一機に他の諸々の貴客を圧倒すべく半年前より企画開始なる準備の結果こゝに驚嘆に値する超高級版の完成を見ました

【豪華な責めの色刷画帖が極めて安価に皆様のお手許へ届きます】

極彩色美術オフセット
 多色印刷特アート使用
 絵の大きさ B 6 版
 画帖の大きさ B 5 版

図装釘、縦6寸横8横5分
 横トジ豪華美本

三条春彦・画

画帖 時代物責絵巻

- | 内 | 容 |
|--------|--------|
| 一、山法師と | 二、女スリと |
| 三、淀吉と千 | 四、大公方と |
| 五、侍女 | 六、新撰組と |
| 七、の最期 | 八、小紫と悪 |
| 旗本連 | |

特價 三百円
 (送料五十円)

〇〇各葉説明文句入り〇〇
 絶対市販致しません〇〇

縛られた女ばかりの16態

美しき縛しめ 第一集

(各葉解説文句入・美術コロタイプ印刷)

美濃村晃構成・塚本鉄三撮映

工足兼手 小 資 術 手 打 虫 責 り 吊 物 念 白 縛 結 台 目 巾
 内容

【全部未発表】

四人のモデルを使つて完成した縛られた女の集大成、優美さと緊縛感の秀れた代表的な責め写真集、痺れるような妖しい雰囲気は素晴らしい反響を呼んで瞬く間に限定部数を突破、これは同好者のために若干増刷した分です。

例年売切にならぬ中にコレクションの一端へお加え下さい。

略書房代理部

(頒価一部 500円 送料60円)

本誌6,7,8月号の3回に亘り連載大好評を博したクリスチーヌの受難の全譯遂に成る！

再版出来！

クリスチーヌの受難全訳
 キドロシニョットク 被虐の家
 吾妻 新・訳

可憐なる美女クリスチーヌに対する緊縛と狼くつわは汚辱と鞭打と凌辱の地獄図絵サディズムの粹をつくしたクリスチーヌの全訳、幽霊の一方の楚、某氏のアブノーマル補綴相俣つてこゝに完全なるサディズム文学の金字塔が打ち建てられた。

定価 三二〇円 (送料四〇円)
 申込所 略書房代理部

奇譚クラブ臨時増刊号ノ

[原名 THE GLOOMY EXPERIENCE]

吾妻氏の麗筆により心にくき感執拗に描写されたサディズム文学の決定版
 美少女に対する折檻と凌辱の世界を描くサディ・フラツケイズ◎吾妻 新訳

アリスの人生学校

(価目)

堂々五百枚に垂んとする長篇サディズム小説
 口絵(色刷・単色)カット・挿絵多数挿入
 第一部 純潔教育 第二部 貞操教育
 書店にてお買渡れの方は直接発行所へお申込み下さい。
 送料別

月 刊 **KK通信** 定価 20円 半年100円

(既に第十六号迄毎月) 休みなしに発行

奇譚クラブの誇る特別會員の機関誌

本誌愛読者を中心に楽しいグループ
 B6判十六頁に新聞用縮小活字にて記事掲載
 挿絵、写真等毎号多数掲載、本誌愛読者の欠かすことの出来ない伴侶です。一般市販せず予約者にのみ送付、目下予約の会員を擁し毎日増た一方は是非KK通信も併せて御愛読下さい。絶対他の真似の出来ぬ内容を誇つております。旧号は第六号より第十五号迄在庫しております。〔六回分送共百円にて急送〕
 値か百円の会費で半年分(送料別)負担
 毎月B6判十六頁の機関誌をお送りいたします。〇〇〇〇本は切手二十円にて急送します

【略書房内KK通信係】

眞寫縛緊 の分譲

断然卓絶した特写
群を抜く素晴しき傑作
類例のない犠牲的安価

女体悦虐眞集

光沢面焼付 手札型
五枚一組(一集分)二百円
第六篇(五十一―六十二)十集
第七篇(六十一―七十)十集
第八篇(八十一―九十)十集
第九篇(八十一―九十)十集
本誌九月号口絵参照の上御
好みの姿態をお選び下さい
【一集単位】
第十篇(九十一―百)十集
本誌十一月号口絵参照下さい。
御指定の集をお送りいた
します。

★ 写真は同好者本位の迅速・確實で信用のある曙書房代理部へ！ すべて送料共

野外全裸の縛り

キヤビネ判

三枚一組 三百円

灼熱の夏の陽の下にぴち
／＼とはねる白魚の如き
肢態にからみつく縄、野
外の傑作中より選り出し
た快心の作品揃い

制服の女学生

キヤビネ判

三枚一組 三百円

川端多奈子嬢

悦虐姿態集

手札型 七枚一組 三百円

典型的マゾ女性多奈子
嬢の好みに従つて、敢
行した強烈な縛り、そ
してこゝに美しい悦虐
の姿態を得た

ナイロンに包

まかれた女体

キヤビネ版 三枚一組 三百円

高手小手 三態

キヤビネ版 三枚一組 三百円

新人モデル木田雅子嬢による豊麗なる
女性に掛けた物凄い緊縛感、縄に悶え
る処女体の美しさ！

磔 2 態
キヤビネ版 二枚一組 三百円
一女正面のハリツケ、と三女の中二女
が横面一女が正面のハリツケ、何れも
一糸もまとわぬ全裸の縛りである

〔急襲〕 連続十五枚続き

手札型 十五枚 一組 五百円

女が縛られる迄の過程を十五枚の連続写
真にしたもので、猿ぐつわをされ完全に
自由を奪われるに至る経路が如実に活写
された興味溢れる作品、どこにも負けな
い安い値段で鮮明にして恰かも自ら手
を下す如き写真を提供

女が女を責める

第一集 オール・ヌード

一女対一女

第二集 オール・ヌード

一女対二女

何れもキビネ版

三枚一組 三百円

責めの雰囲気を出させ
るために、全裸の責手
の女の出演を求めた。
女が女を責めるところ
に妖しい倒錯的な耽美
の世界が描き出されて
いる。

吊り 5態特集

第1組 第2組 第3組 第4組
キヤビネ版 各組3枚1組 500円
トリックでの必す魅
ないし責めは様々し
吊姿や了し

灸責めの 3態

キヤビネ版 3枚1組300円
熱さにのたう
熟女体のエロ
チシズム

鞭打ちの 3態

キヤビネ版 3枚1組300円
鞭打たれて肌
についた斑

溪流の飛魚

谷間の岩の間に縛
られた飛魚の表情
三枚一組三百円

基盤責め

キヤビネ版 三枚一組三百円
基盤の重さにひし
やけた女体の白さ
に見るサシズム

女性切腹姿態 第一集

手札型 9枚1組 300円

熱烈な要望により、川合伊都子さんから送られた写真を参考にして新に撮映したものを加えてこゝに第一集を発表した。切腹マニアの一見を希望する。

あぶの一まる・ふおと・せくしよん

色刷口絵 地下室の怪
面芝居の図 瀧 麗子・画
美しき馬の調教(よし俺がその馬を訓練してやろう) 伊藤 晴雨・画
アメリカンスタイルの責め 杉原 虹児・構成
舶来の縛り寫眞(後手、股間縛、戒具各態) 杉原 虹児・指導
磔(はりつけ) 杉原 虹児・指導
煙草責めのポーズ 組写真 猿轡をされるまで
うしろ手に縛つて頂戴! 足紙め 意気地なし
さしすちつくな貢 鞭を持つ女(さしすちつくな女)
都築峰子・画業 邪淫教祖責絵地獄(密室の祈禱)
國解 ゴム紐利用の縛り方 滝 麗子・構成並に画

▽ 本 文 △
輪物語 悦 虐 の 家
靡 靡 り 責 め の 圖

嵯峨 紀世 (33)

悦楽の銀座裏

(告白) 人間燭台

☆ 蜘蛛と蝶々 ☆ (五)

女腹切八景

散 紅 葉

裕子とお仕置

古川 裕子 (70)

現代文藝に現れた責め

囚獄記 模範 囚

人耶馬耶

沼 正三・抄訳並解説
シュベルヴィエル原作 (96)

悪の部屋

二俣 志津子 (100)

感情教育 (四)

伊藤 晴雨 (69)

女腹切雑話

切腹研究夜話 (一)

痴 迷 (ちめい)

人身御供 (流選八年より)

私の求めた男 (二)

あるマゾヒストの手帖から

非小説 性 液

特異 男色考 「しまやのばんとう」

復讐

岡田 咲子 (172)

残虐なる女性達

女体自虐圖

蜘蛛とバンテイ

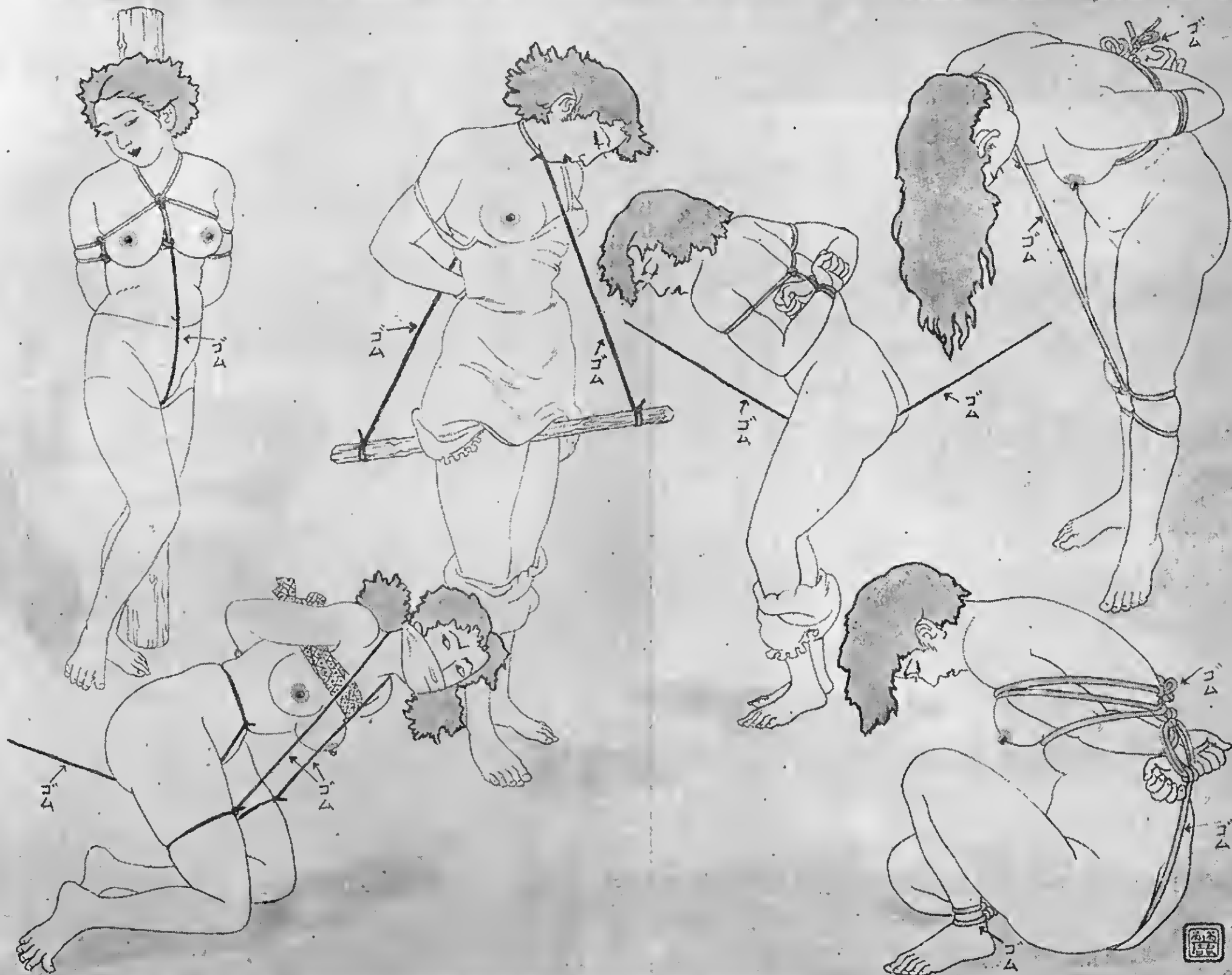
罪ある女

京子の蛙腹 抜け 縄 (悦虐に關えて)

森本 愛造 (184)
三富 浩生 (188)
芳野 眉美 (120)
櫻井 京一郎 (196)
羽村 京子 (169)
川端 多奈子 (194)

ゴム紐利用の縛り方

瀧 麗子

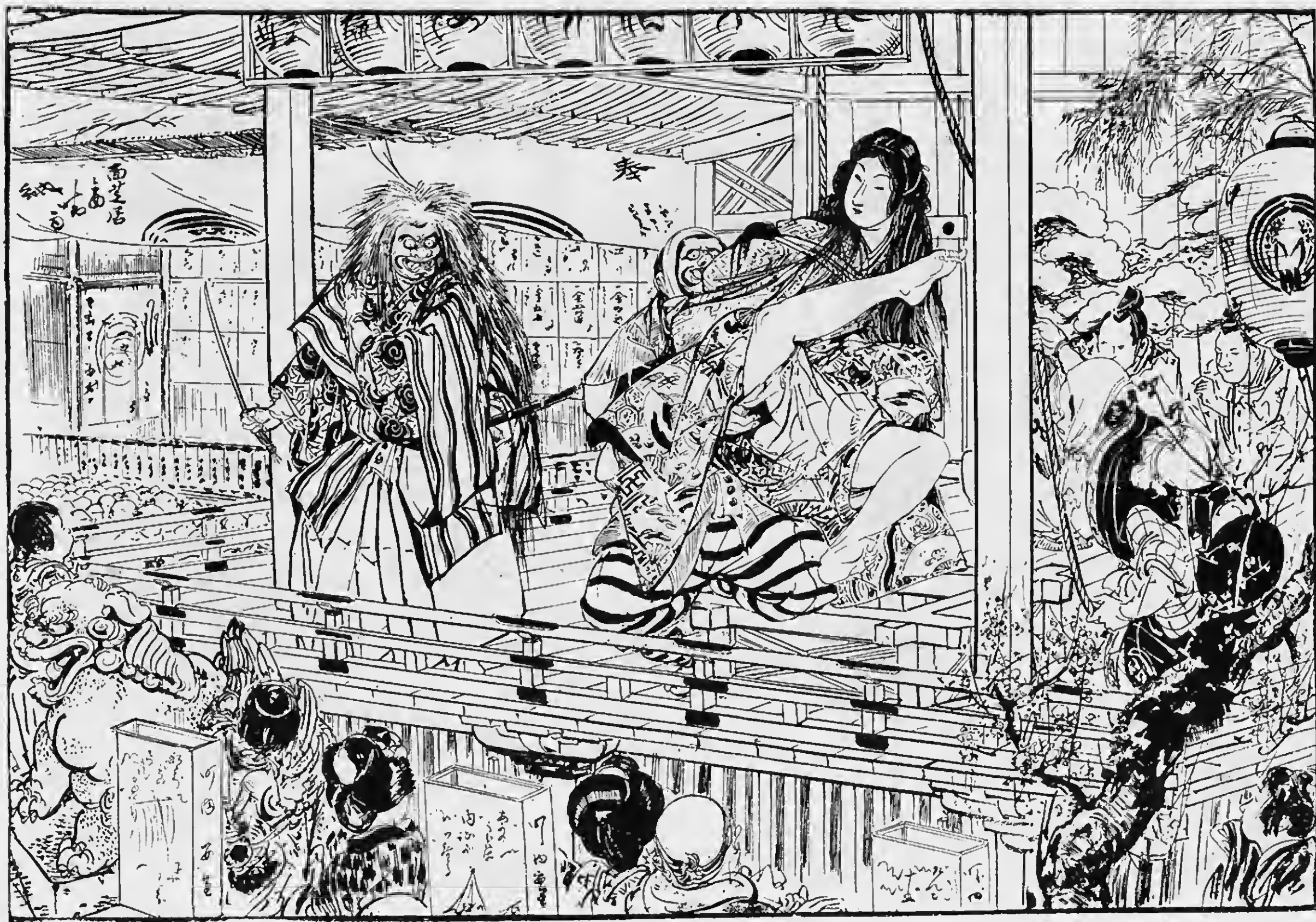


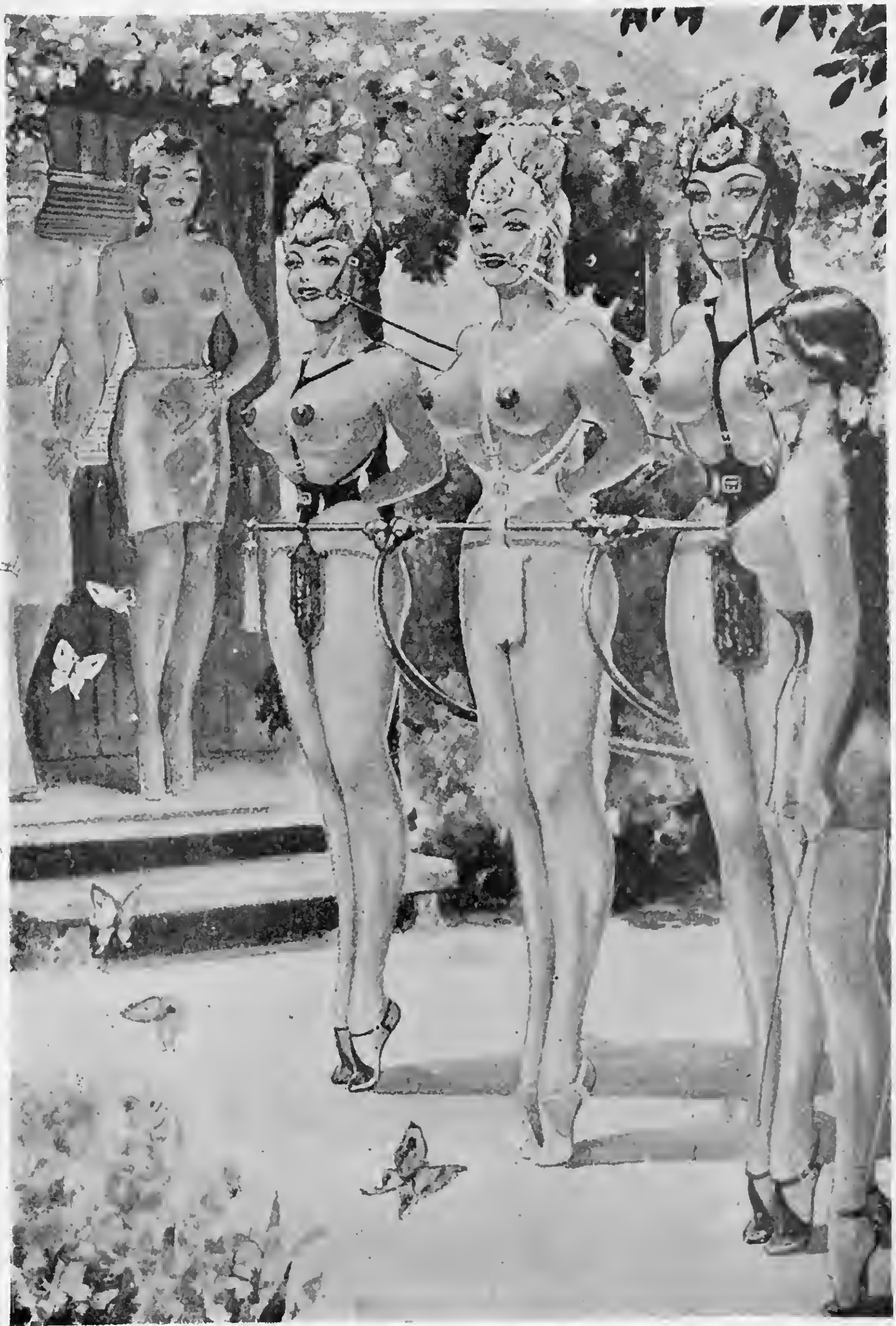


面芝居の図

(解説本文)

伊藤晴雨





美しき馬の調教

「よし俺がその馬を訓練してやろう」



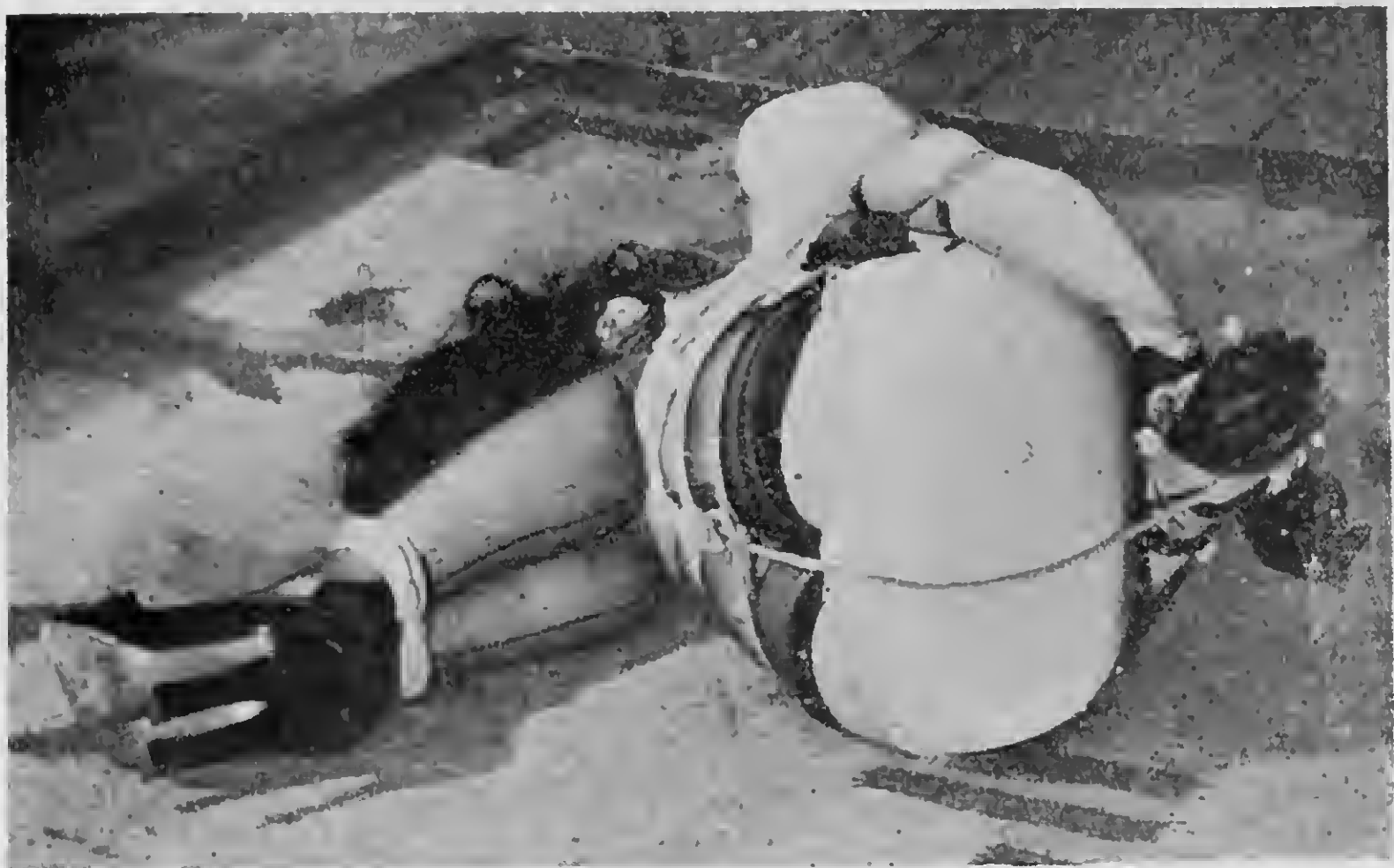


アメリカン・スタイルの責め



杉原虹児構成

眞寫の縛來舶







南川和子絵

案と絵 南川和子

煙草責めのポーズ



猿轡をするまで

辻村 隆 構成





新しい試み

逃げようとする女を掴まえて後手に柱に縛りつけて猿ぐつわをかます迄のシリーズの中の一部をピクアップしました。次号では三女の闘争をごらんにいれましょう。



うしろ手に縛って頂戴！



モデル

中富綾子嬢
村田那美子嬢

鞭を持つ女



~~~~~ さじすちつくな女 ~~~~~





ハリック  
磔



杉原虹児指導  
モデル・坂口利子嬢

# 邪淫教祖責繪地獄

## 禱の密室

都築峯子

女信者地下密室へ

聖台にのせられたまゝ地下の密室へ運ばれる

新しく入ってきた女信者は猿ぐつわの上全身を縛しめられて、

むき身部屋

剥がされてゆく

俗世でつけていた諸々の罪の衣を巫女たちの手によつて次々に



身捧げの室

祭壇上に縛り上げられて神の御前に罪の半身を捧げる

洗礼の室

暗闇の室で洗礼を受ける





おさすりの室

神がいけにえの全身あますところなく、さすり廻す

清よめの室

汚れた身体のスミズミまでも神の御唇が清めたもう、かしこし。



車  
部  
屋

ぐる／＼廻る首の台の上に縛りつけ  
られて多くの男の信者になぶられる



入  
神  
の  
儀

最後に高い台上で入神の儀がお  
ごそかに行われる。



ヒヤリとした肌寒さと息苦しさにユリは正気付いた、が、どうした事か何時の間にか両腕は柱を背負う様に縛られ、両足首は交叉して括られ高く柱から吊られていたではないか。而かも全裸である。「あつ」と驚きの声をあげたが、口には猿轡さえもはめられている。



「フ、驚いているね、そうジタバタせずにそちらを見てみな」  
男はそういつてあごをしゃくつた。  
ユリは首をねじ向けてみて恐怖にからだが震えた。そこにはユリと同じ様にして連れ込まれた娘でもあろうか、口には猿轡をされ、天井から吊られた一本の棒に両手

「おや、おめざめだね」  
突然、聞き慣れぬ女の声が出た、ハツとその方を見るに、あつ、あの男だ。田舎から出て来たばかりのユリを、親切そうにいたわつてくれたあの男が盃を手にニヤニヤと笑っている。そこに居た。傍に小肥りの若い女が寄り添っている。ユリの白い若肌を吸いつく様な眼をからませてしげしげと眺めている、こんななじめな姿を見ず知らずの人間にみられて、しかも肌には喰い込んだ縄以外、何一つ纏っていないのだ。そう思うとユリは死んでしまいたい程の恥しさと怒りとで全身がぼてつた。



をひろげて括られ、両足は後に曲げて足首を交叉して縛られ、更に首から縦に掛けた縄は股間を通し、その縄尻を左右に開き天井の滑車を通して男の上に垂れてある。娘はもう長い間責められたのか、ぐつたりとしていた。  
「ハハ……、そう怖がることはないさ、そら、スミは怖がるどころ

か、あんなに悦こんでいるじゃないか」  
男はそう云いながら、垂れている縄をぐいと引いた。スミと呼ばれる娘は縄を引かれる度に前のめりになる姿勢で苦しうに身体をよじり、かすかな呻き声を立て、もがいた、豊かな隆起を持つ胸が大きく波打ち、縦に掛つた縄

が、今にも身体を二つに切り割るのではないかと思われる程肌に喰い込み、羽を上げた蝶の如く宙に泳いだ。ユリにはその様が正視出来なかつた。目をつむり自分がこんな目にあう迄に何とか逃げ出そうと腕いたが、縄が強くと腕に喰い込むだけだつた。  
どれ位経つただろう。激しい痛みが我にかえつたユリは、愈々あの娘に代つて自分が責められている事に気が付き、「あゝ」と絶望のうめきを猿轡の中から洩した。やはり全裸の儘両腕を背中にくくし上げられ、右足は足



首とももを一緒に括りつけ、左足は強く背中の中の手首に引きつけられている。  
「ふふ……どう、いゝ気持だろう」  
先刻のあの女が、何か情慾に燃えている様な激しい眼をしながら、ユリの肌を鞭を振り下した。  
「うう……」ユリは一鞭毎に尻と

ち廻るユリを眺めていたのである。ユリは全身がヒリヒリと痛み、カーツと燃える様な痛みの中で、不思議に思った。「アノ人どうして逃げないのかしら、あんなヒドイ目に合いながら……」  
スミに猿轡と縄を解かれたユリは長時間縛しめられ、あぶくの果に鞭打たれた為に動く気力さえな

いわず背といわず肌に巻きつき、喰い入る痛みに猿轡の中からうめき、悲鳴をあげてのた打ち廻つた。  
「始めてだからこの位にしとこうね」  
女がこう云つて鞭を捨てた。  
「そうだな、少し休ませた方がいゝかも知れん。スミ、縄を解いてお前の部屋で休ませてやんな」  
男が傍にシユミーズ一枚で坐つていたスミに云いつけた。先刻あれ程責められたスミがどうした事だろう、責められる事に対して恐怖も恨みも抱かないのか、うつとりとたた打



く、ぐつたりした儘スミに隣室へ運ばれた。一人になつたユリはどうしてこゝへ連れ込まれたかを考えた。親切な青年と思つたあの男にレストランに連れて行かれソーダ水を飲んだ事は記憶がある。然しその後気付いてみると全裸にされ、柱に縛りつけられていた。そうだ、きつとあのソーダ水の中

に眠り薬を入れられたのだ。そこで考えついたユリは「早く此処を逃げ出さなくては」と痛むからだを無理に起したが、全裸であることに気付き何か衣服を探そうと、そろ／＼と這いながら次の間との境の襖迄寄ると、「うーむ」と云ううめき声が耳に入つた。ドキツとして襖の隙間からのぞいてみて

中の光景に息を呑んだ。そこではユリを鞭打つた女が全裸で椅子に腰掛け、両手首を縛つて頭上に吊られ、左足は椅子の足にくくりつけ、右足を天井から高々と吊上げられた姿で、あの男とスミの二人に所嫌わずくすぐられて、からだをよじり、のた打たせながら、猿轡の下からうめき声をあげているのである。しばらくする中に女は疲れ果て、男とスミは女の縄を解いた。自由になつた女はよろめき乍ら立ち上つた、が然しすぐ其の場へぐつたり坐り込んでしまつた。男が前にしやがみ

込んで云った。

「今夜は大分こたえたらしいが、満足……」

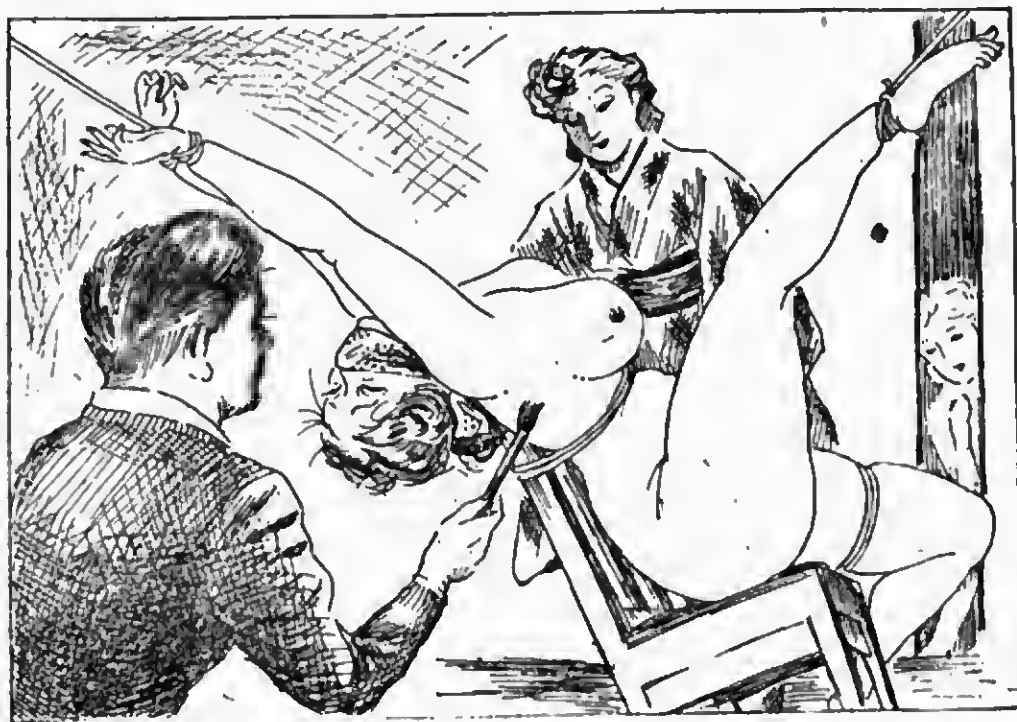
言葉の途中で、女は急に男に抱きついていった。横に居たスミは、それを見るとソ、クサと立ち上つて襖をさらりと開いた。

スミは何気なく開いた襖の蔭にうつ伏せになつて、ユリを見て一瞬立ち止まつたが、何を思ったか傍にしゃがみ込み、

「あんた見ていたのね、それでしよう。かくしたつて駄目よ」

と云い乍ら着ていたものをすると脱ぎ捨て、パンティも素早く取つて

「ねえ、私も今のようにして、ね、ね」と、どこからとり出したのか、帯をユリに押しつけ、自分はどうにでもして、といわぬばかりにそこへぐつたりと倒れた。ユリは帯と投げ出されたスミの真白



な裸形とを見比べて困惑したが、急に何か胸の奥でうずくものを感じ、頬がかあツと熱くなると同時に、夢中でスミの両腕を背にねじ上げ手首を括つた帯を両肩から前に廻して股間を通し、からだをくの字にしつかりと曲げ背中の手首に結びつけた。これだけでも大分

苦しいとみえて、スミがうめき声を出すまいとつとめている様子を見ると手拭をスミの口の中にぎゅう／＼と押し込み、その上から固く括りつけうめき声さえ出せない様に猿轡をかまし、両足がまだ遊んでいるのに気付くと足首を縛り傍の柱にくくりつけた。からだを伸ばそうとすれば股間に帯が喰い入るのを更に両足を柱に高々と吊られたのでは流石のスミも余程苦しいらしく猿轡の下からかすかにうめき声を洩らし乍らもがきにもがいていた。ユリは不思議でならなかつた、……何故縛つてくれと頼むのかしら、こんな苦しい目にあわせてくれなんてどうしていうのかしら、……いくら考えても、今のユリには理解出来なかつた。自分が縛つた人がこんなに苦しんでいる、そう思うと何か非常に悪いことをした様な気がして、大急ぎで帯を解いてやつた。

逃げよう、どんなことをしてでもこの家を逃げ出さなくては殺されてしまう。ユリは夜具の上に起き上つて、先程からそのことばかり考え続けていた。横に無心な顔をして、眠っているスミに用心し乍らそつと立ち上つた。足音を忍ばせて、襖に近づいた時、パチリ

とかすかな音がして反対の部屋に電気がついた、どきつとして身を縮めるユリ、感づかれたかと思つて立ちすくんでいると、向うの方で、襖を開く音がして、パタパタと足音が遠のいていった。女が便所にでも立つたらしい、男が寝返りする気配も聞きとれた。偶然の出来事ではあつたが、ユリにはこれの上もなく怖く思えた、一刻も目を離さず監視されている様に感じて、元の寝床へ転り込んだ、心臓が早鐘の様に激しく打ち、冷汗がたらたらと流れた。逃げそこなつたら、それこそどんなヒドイ目に遭わされるやら……ユリは何か無性な絶望感に涙がとめどなく流れるのをどうしようもなかつた。

翌朝スミは長じゆばんと腰紐をユリに差し出しながら、  
「さあ、これを着て、すぐ行きましよう。あんたお腹が空いてるでしよう」

「優しくこう云つてユリを食事にさそつた。然し何とかして逃げ出したいと考えつゞけているユリは、空腹ではあるが胸が一杯で何も食べたいとは思わなかつた。  
「私、何も食べたくないの、だからしばらく一人にしておいて」  
「何？ 食べたくない、食べない





でどうするんだ」  
と男の声がしたと思うと襖がさ  
らりと開いて、あの男がづかづか  
と入つて来るなり、ユリの手をつ  
かみ、ずる／＼と隣の部屋へ引ず  
つて行つた。その部屋はユリやス  
ミの責めさいなまれた部屋であ  
る。

「よし、食べたくなる様にしてや  
ろう。おい、縄を持つて来い」  
云うなり、ユリが先刻身に纏う  
たばかりの長じゆばんは、あつと  
云う間に剣ぎとられ、女の持つて  
来た縄でぎりぎり縛り上げられ  
てしまつた。そして背中からねじ上  
げ縛られた両手首は天井に吊られ  
更に両手首から首をまわし股間を  
通した縄は部屋の隅の梁に引張ら

れ、両足首はもをもを開  
いた形で、昨日の棒に  
くくりつけられ、それ  
に首縄から柱の根元に  
も強く引いた縄がか  
けられ、僅かに両足指が  
畳につく程度で空中を  
泳ぐ様な姿勢にされて  
しまつた。  
「あつ、許して、あつ  
つ」  
やがて、口にしつか  
りと猿轡をはめられる  
と、この悲鳴も、うめ  
き声も聞えなくなり、  
身動きも出来ぬ姿で、  
唯僅かに首と手足の指  
と膝とがあがく様に動  
かされているに過ぎな  
かつた。

「おい、ぼや／＼しな  
いでエサを顔の下へ置

いてやれ」

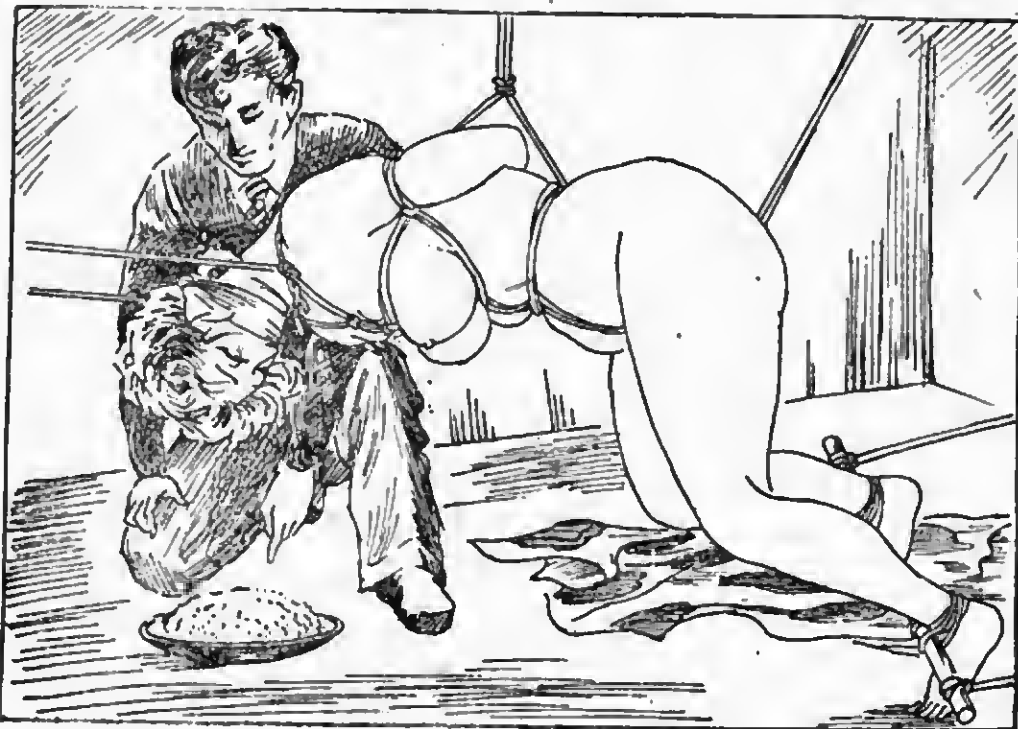
とスミに云いつける  
と、二人共元の座に坐  
り、ユリの吊られた姿  
を見ながら、箸をとつ  
た、スミは何を思つた  
のか、

「ユリさんを許してあ  
げて、此の人は未だこ  
んな苦しい姿勢にする  
のは早いんです。私な  
らい／＼かも知れないけ  
れど……」

「何を云うんだスミ、  
お前、今朝は少し変だ  
ぞ。おい、ナツ、こい  
つも少し仕事をして  
らわんといかん」

二人掛りでスミの着  
物を脱がせると傍にあ  
つた椅子に腰掛けさせ  
両腕を椅子の背を背負  
う様にしてくくし上げると、ばた  
つかせる両足を押え、足首を交叉  
させて縛り、縄尻を両肩から背の  
手首を縛つた縄に強く引き乍ら椅  
子の上でからだをえびの様にきつ  
く曲げられた姿勢にしてしまつ  
た。

「朝飯前に二人共、仕事をしてく  
れるとは、今日はうれしい日だ

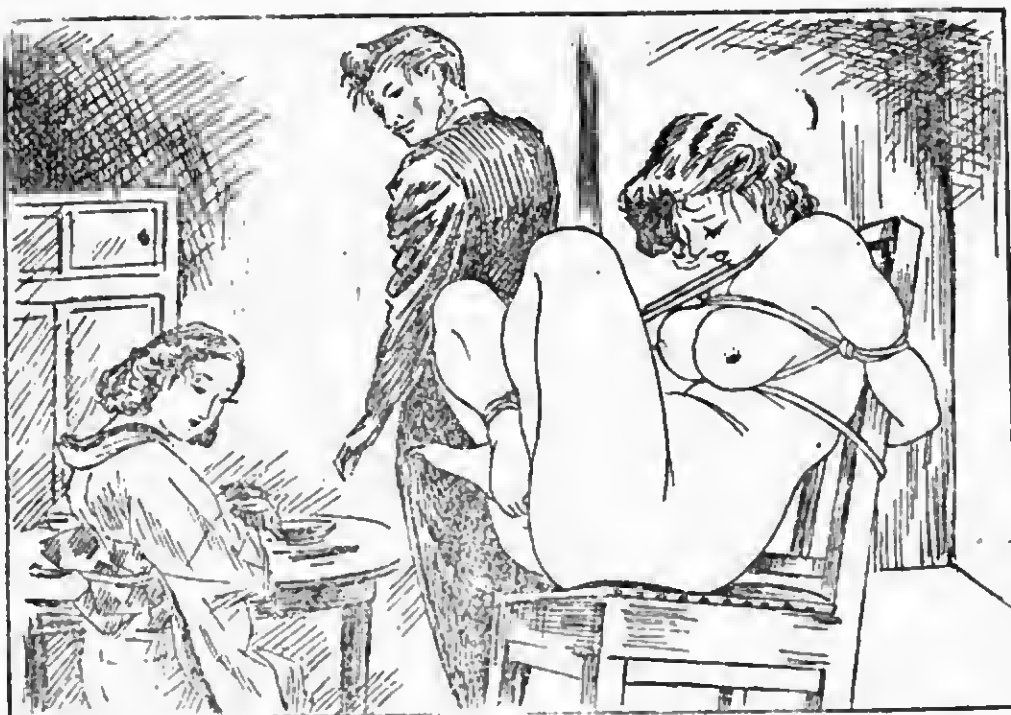


な。おつと、ユリにエサをやつて  
なかつたじやないか、お前やつて  
くれ」

スミをも縛り終えた二人は、ユ  
リの目の下に皿に盛つた朝食を置  
き、上機嫌で食卓についた。彼等  
の云う仕事とは、スミやユリを責  
めさいなむ事を云うのである。彼  
等は顔をほころばせ、二人の苦

しむ様を心地良げに眺めながら朝食をとつて居た。

やがて正氣付いたユリは背中に



後をみると、あれからすぐ解放されらしくスミが甲斐々々しくたすき掛けで部屋の掃除をしていた。声を掛けたが猿轡の為にうめきに

しかならなかつた。氣配を感じたかスミが傍に寄つて来て、  
「ユリさん、氣が付いたのね、御飯食べる？」

とたづねてくれたユリは頭で返事をした。やがて夢中で食事をしたユリは前に坐つてゐるスミに話しかけた。  
「スミさん、私これからどうなるのかしら」  
「私も初めはその事だけ考えたわ、だけど今は……、もう此処を離れられないのよ、あんだだつて今にきつと、きつと、そうなると思わ」

棒を通して転がされていた。空腹の度が過ぎ胃が鳴つてゐる。先刻、無理にでも食べ置けばよかった。誰か居たら頼んで縄を解いてもらおう、と不自由な首をよじり

あてがつて固定され、あの女の為に鞭打たれるのだ、一打される毎にかすかなうめきを洩らして苦しむ様は、ユリには到底正視出来ぬものだつた、女はそのユリに鞭を握らせて云つた。

「スミはね、お前にぶつて欲しいらしいんだ。一寸可愛いがつておやりよ」

ユリは驚いて後ずさりをした。

「さあ早く、スミが待つてるじゃないか」

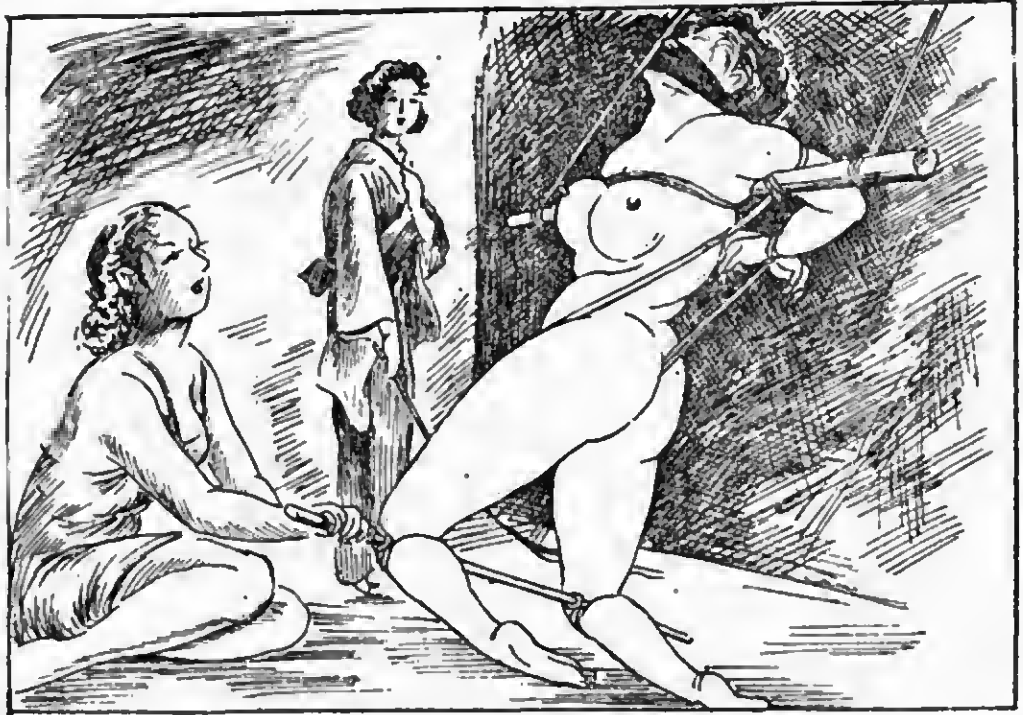
女は急ぎ立てながら、スミの足に縛りつけてある棒の片方をぐつと引いた。からだをねじられて苦しそうな姿態乍ら、スミはユリに目をむけ片目をつむつた。ユリはその表情につられて鞭を振り上げた。スミの肌が激しい音を立てふるえた、白い身体がくねくねとよじれる。一打、二打、もうユリは夢中であつた。

「もういい様だね」  
女に声を掛けられて我に返るとへた／＼とその場へくずれる様に



坐つてしまつた。

日が落ち、夕食後しばらく経つとユリの目の前で、今度は女が責められ始めた。男とスミは女の裸身を椅子を倒して縛りつけた。両膝を折り曲げ背当にくくりつけると、あおむかせて胸から二の腕をまわした縄を椅子の前脚に固定した。男が、  
「どうだ？氣分は」



云い乍ら猿轡をかまし、開き切つてゐる女のあらゆる部分を、鳥の羽や筆の穂でスミと二人でくすぐり始めた。女は涙を流し、うめき乍ら緊縛された身体をよじり、波うたせている、ユリはその光景を見ている中に何か身内に燃え上つてくるものを感じた。自分を苦しめた女が縛られている。私を鞭

「どう驚いた？ 私ね、あんなにしたらとても我慢出来ないの、あんたしばらく辛抱して、ね、ね」ユリが何か云おうとしたが、その間もなく口に手拭が押し込まれた。次にはユリの裸身のあらゆる敏感な箇所を狙つて確実に鳥の羽が攻めて来た。ユリは身を出来る限りよじりこれを逃れようとした

打つた女がすぐ目の前でうごめいている。苦しむといいのかわ、もつと、もつとよ、と思ひ乍ら何時しか自分も二人の中に入つて、一緒になつてすぐつていた。やがてこの責めも終り、スミと二人きりになつてホツと一息ついた時、いきなり押し転がされた。両手を後にネジ上げられ高小手に縛られてから、顔をネジ向けてみるとスミが眼を異様に光らせ乍ら、両足首を縛りつけていたその縄尻を手首に引いて括りつける

と、スミは顔を近づけてさゝやいた。「さあ今日はあんたの仕事日よ、うんと

が無駄だつた。くすぐられると云う事がこれ程苦しいものだとは思わなかつた。涙がポロ／＼こぼれ無意識の内にうめいていた。恥も外聞もなく白い肌を畳にこすりつけ腕きに腕いた。気が狂いそうだった。攻撃の手は止みそうにない、「あゝ、あゝ」訳の分らぬ声を立て乍ら遂に失神した。目が覚めた時はもう朝日が部屋一杯に差し込んでいた。腕やもの付け根がずきずきと痛む、思わずからだのあちこちをさすつていると横に寝ていたスミが起き上つた。「お早よう、昨夜は御免なさい、苦しがつた？ それとも、うれしかつた？ うれしかつたんでしょ、私がして貰えばよかつた」スミのこの言葉にユリは返答のしようがなかつた。然し何故か憎めない様な気がした。



「おい、ユリ、用意をしろ」と云われた時反射的に次の間に逃げ込んだ、男は怒りを爆発させて云つた。御飯を食べて頑張らなくちゃあ」と云い乍らスミはユリを急ぎ立てた。この家での仕事とは責められる事なのだ。ユリはジーンと胸が鳴つた。朝食、後男に呼ばれて、





「こら、逃げるといふのか？」  
忽ちのうちに三人に寄つてたか  
つて押さえつけられると後手に縛  
られた縄を両足首にまといつかせ  
その縄尻を脊中で分けて両方の二  
の腕に括りつけられた。  
そのまゝの姿勢で抱え上げられ  
たユリは  
「いや、いや、いや……」

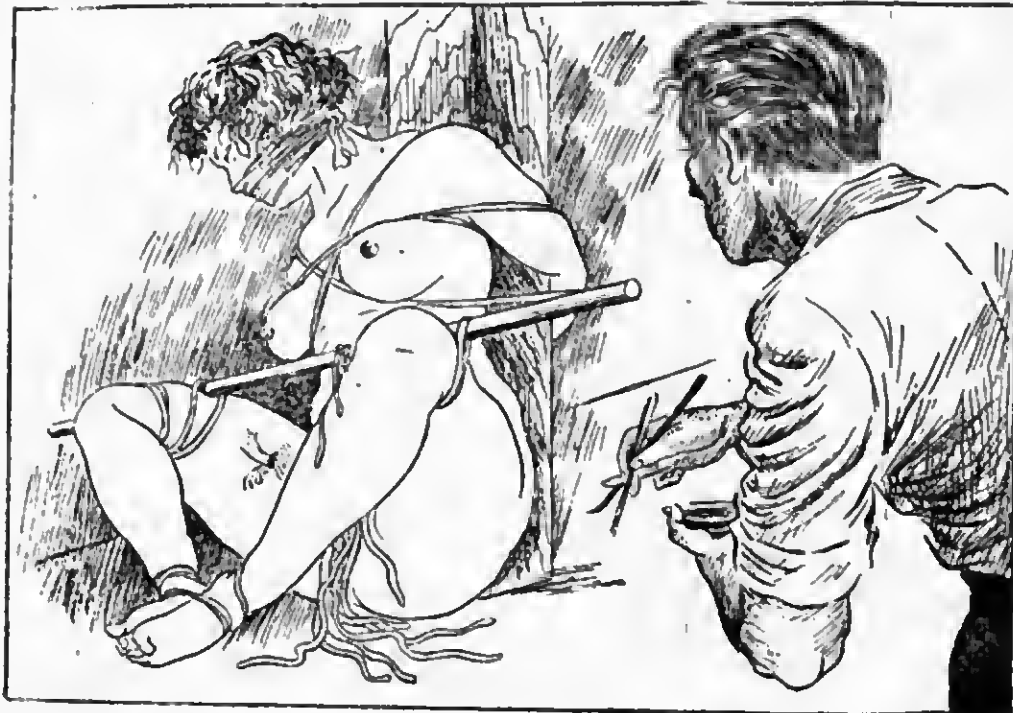
と両手の中で暴れまわつた。  
「うん、うるさい奴じゃ」  
男は布片をとつてしつかりと猿  
ぐつわをかますと声の音を止めて  
しまつた。ユリは昨日全身のあら  
ゆる個所に加えられた擦り責めの  
痺れるようなもだが、今更のよ  
うに思い起されて、屈むことも身  
をすくめる事も出来ないやるせな  
さを、只両眼にこめて  
スミに哀願するばかり  
だつた。

然しスミの手にされ  
た鳥の羽は、容赦なく  
ユリの無防備にさらけ  
出された肌めがけて適  
確に狙いうちされた。  
「ウム、ウム、ム、ム、」

昨日とは違つた全身  
の燃え上りであつた。  
擦られるというものが  
このように快いもので  
あるということが初め  
てわかつた。こうなれ  
ば痛さも、むしろ快さ  
であつた。  
こういうユリの心理  
の変化を掴んだ男はニ  
タリとほくそ笑むと、  
ぽつてりと肉づきのよ

い肌に嗜虐的な眼を向けつゝ、次  
の素晴らしい責手を考えるのだつた  
それは今迄何度も彼の心を駈り立  
たせた空想であつた。  
全身を汗ばまして、もうぐつた  
りとこのびきつてしまつてゐるユリ  
の紐を解くと畳の上に投げ出すよ  
うにねかした。紐を解かれても、  
ユリはもう動いとうもしなかつた  
猿ぐつわをとられた顔  
はうつとりと恍惚境を  
さまよつてゐるようだ  
つた。

男は湧き上つてくる  
胸の思いを吐き出すよ  
うな言葉にあらわして  
いた。  
「よし、今日は、烙  
印を押してやろう。」  
ユリは抵抗したが三  
人の為ギリギリ縛ら  
れ、柱を背負わされ、  
両足の裏と裏を合せて  
括られ、膝を開いて渡  
した棒に縛りつけられ  
た。猿轡が済むと、男  
は女の持つて来た刺  
青の針を構えてユリ  
のにもに手を掛けた。  
白蠟の様な清純な柔肌  
に刺青をほろうとする



のだ。  
男の意図を察したユリは、自分  
の肌に針を触れさせまいとして、  
僅かに自由な両足の上下の運動を  
繰り返して、裏返えしに足の裏  
を揃えて縛られたまゝの足首をバ  
タバタさせた。両手は後手に柱を  
抱えるように縛りつけられてゐる  
ので身動きも出来なかつた。



しかし、その足首のはかない足搔きもいつ迄も続かなかつた。両膝は思いきり開かされて棒の両端にぎつちりと縛りつけられていたので徒らに疲労を増すばかりであつた。

「どうだ、もういゝ加減に往生したら、お前のようにそう無茶に暴れたつて、俺がほろうと思つたらどんな事をしてやり遂げるのだからなア」

全身をビクビク慄れんさせているユリの傍へしやがみ込んだ男はゆつくり、そう言い置きかすのだつた。叫ばうにも声も出せないユリ。そんな姿を女とスミは、立ちほだかつたまゝ愉しそうに眺めるのだつた。

「それ、こゝへこうして——」  
もう、すつかり観念して動かなくなつたユリの肌へ、チクリと墨を含んだ針が突き刺つた。

「ムム、ムム、ムム」  
猿ぐつわの下で呻めくユリ。更に一針、二針……。

足の拇指が針が肌にさゝる度に、弓のようにそりかえる。  
息づまるような一瞬又一瞬、静けさの中に只ユリの呻めき声だけが洩れてくる。男は狂気のように

針を白い肌に打込むのであつた。ユリは恐怖と絶望に氣を失つた。男が柱に縛られた両手首をほり始めても一針毎に、筋肉が僅かにビクビクツとするだけであつた。  
「チエツ、しよりのないアマだ、おいスミ、こいつの代りにお前が仕事しなよ」

男はいまいましそうにそう云つてスミに手を掛けた。女が手伝つてスミをさかさにして柱に縛りつけ両もを開かせ後で足首を括り合せた。女が膝の上に太短いローソクを立て火をつけた。融けた蠟が流れる毎にうめき声があがり、身のよじりにつれ火がゆれて内ももをなめた。彼等はうつとりとその様を眺めているのだ。フト氣付いたユリは、スミのその姿を見て息をのんだが、何故か美しいものに見えた。ももがヒリヒリ痛むがこの痛さも、腕に巻きついて同繩の苦痛も、昨日迄のそれとは同じ苦しみとは感ぜられなかつた。



「あんだだつて今にきつと、きつとそうなると思うわ」  
スミが先日確信あり氣につぶやいた言葉がサツと頭に閃めいた。  
あゝ、私もとう／＼責められ苛

められることに喜びを感じる女になつてしまつたのだらうか。ユリは柱に縛られたまゝの姿で目の前にくりひろげられている有様をじ

つと眺めていた。  
女は手にした百奴ローソクの蠟涙をタラ／＼とスミのお臍の上にたらした。スミは全身を波うたせてもがく、次には逆さになつて大きく膨らんだ乳房の上へたらず。膝の上に立てられたローソクは次第にとけて太ももへ流れてゆく、全身、蠟にまみれ乍らもだえるスミの姿、それは何物にもかえ難い美しい姿態であつた。

男はもうたまらないといった感嘆の声を放つと、女の手にした蠟燭を奪いとつて、所嫌わずスミの全身にローを流すのであつた。やがてスミの肌という肌がローで埋つてしまふと、ユリの方へ視線を向けた。

「どうだ、氣がついたか、お前もスミと同じにしてほしいのか？」  
火のついた蠟燭を手にした男は、ゆつくりした歩調でユリの前に近づいた。ユリは思わず「あゝ、アムツ」と口の中で声にならない声を出していた。

異常なる生活、日夜を問はず責めつ責められつ互に満足し愉悦に浸り切る生活、此の家では尙こうした暮しが続けられて行くであろう。  
(完)

新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ

1954年 2月号

(第八卷 第二号 通刊第六十五号)

揉り責

女子に自白を強要する時に用う、身体に傷をつけることなく、相当効果があつたので昔奥女中の間ではよく行われたという。



# 悦 楽 の 銀 座 裏

高 賀 魔 千 子

(島 崎 静・絵)

(一)

光夫さんの第一印象は、正直に云つて、あまりよいものではなかった。

入社第一日というのに、油気のないバサバサした髪、顔が黒ずんでみえる程の無精ひ



げ。絵具筆をゴムバンドで何本も無雑作に束ねたのを手に下げて、ノックもなしにドアを開けたのだ。その時、あいにく部屋には私人だけだった。私が事務の手を止めて顔をあげ、「どなた様でございましょうか？」と訊くと、それには答えずに

「社長、まだ来ませんか？」

と、ぶつきらぼうに訊き返す。その云い方が、如何にも人を小馬鹿にしているのだ。私は、いさゝか癪にさわつたが、顔には見せず、丁寧に返事した。

「はア、まだお見えになつて居りませんけれ

ど……」  
すると、

「実は、ぼく、今日からこちらで仕事することになっているんですが……」

私は、アア……と思わず声に出した。二、三日、社長の黒川さんが、近いうちに一人親戚の青年を入れるよ、と話していたのを思い出したのだ。

「あの……失礼ですが、今度からこちらで仕事をしてくる方ですかしら？……」

と、訊いてみる。やっぱり私の感は当たって、

「ハア、北川といいます。よろしく……」

その青年は、片頬に微笑を浮べてペコリと頭を下げた。笑うと、左の唇から八重歯のぞいて、私はチヨトツ可愛いな、と思った。しかし、いかにも「俺は図案家でござい」といったようなバサバサの髪、小脇にはさんでいるムキ出しに束ねた筆。(フン、芸術家ぶっているわ) 私は心の中で嗤った。

西銀座の一劃、コロナという喫茶店の階上に、アポロ商業美術社のスタジオ兼事務所がある。製作した看板や広告塔などを置くのでスタジオの中は相当に広い。螢光灯に照らされた仕事机が部屋の片隅に五つ程置いてある

だけで、あとは絵具棚、各種の紙の束等が乱雑に並べてある。

左隣りがアムールというキャバレー。境の窓を開けると、細い通風窓から、踊っている男女の姿がみえる。

昼間はそれ程でもないのだが、夕方から夜十一時頃までこのあたりは喧騒を極める。なにしろ繁華街の真ん中に位置を占めているので、一日中どこからかレコード音楽が流れこむ。私がこのアポロ社に入社したのは一年程前であるが、当時は周囲の雰囲気あまり賑やかなので仕事に手につかなくて弱った。

社長さんはじめアポロの人達はかなり腕のよい技術家らしい。

キャバレーや喫茶店、レストラン等の建築デザイン、ネオンや電気看板のデザイン、ウインドの装飾などの造型ものからポスター、ビラ、メニュー、マツチのレツテルのデザインまで、宣伝美術一切がアポロ社の仕事である。世は万事宣伝時代で、洗練された技術家を持つアポロ社は、場所もいゝ故もあつて、かなり繁栄していた。

入社してから一週間程たつと、光夫さんは気軽に冗談をとばすようになった。気がころみ知れてみると、その風貌のように気さくな

面白い青年だということがわかった。ウィットに富んだ洒落や冗談で皆をわらわす。笑うと眼尻に皺を寄せて子供のように無邪気な表情になるのだが、黙って仕事をしている時など、まるで中年男のような分別臭い顔になつて、私は、この人は一体幾つになるんだろうか、と考えたりした。煙草をくわえている時など、臉のあたりに虚無的な頹廢の蔭が漂うのを私は見逃さなかつた。

「北川さん、あなた、幾つ？」

なにかの話題がはずんで、ひとしきり騒いだあと、私はふと訊いてみた。

「ぼく？ ぼくは二十四才……まだ独身です」

「へええ……」

私は驚いた。独身は知っていたけれど、年令は四つも五つも多くみていたのだ。

「それ、本当なの？……」

「こんなこと嘘云つたつて仕様がないでしょう。何もそんなに驚くことはないさ。」

「三十ちよつと前にみていたわ。案外、若いのね。」

「貴女は？」

「え？」

「貴女のとしは？」

「あなたより三つ姉さんよ。」



「へええ。今度はこつちが驚く番だ。あなたははくより若いのかと思つていた。せいぜい、二十二か三……」

「ボンヤリしている人は、年令よりも若くみえるんだつて……。あたしもその口ね。」

「いや、あなたは中々リコウな人ですよ。都会の女には珍しい……」

「なんですつて?……」

「いや。……さアて、今日の昼は、また八十円のライスカレーでがまんするか。」

光夫さんは話をそらすと席を立つた。私を無視する風に、トントんと階段をおりていった。(生意気な……) 私はその後姿をちよつと睨んだ。

## (一)

私は、光夫さんの、捉えどころのない性格に興味を持ちはじめた。二十四才という年令も、満更嘘ではないらしい。

仕事をしながら急に大きな声で英語の歌を歌つたりする。時々絶叫とも思える程のキチガイ染みた声で何か怒鳴つたり、笑つたりするので、階下の喫茶店から苦情がでたりする。アポロ社に働く人達は社長以下それぞれ一癖も二癖もある連中で、少し位の奇矯な行

動には驚かないのだが、光夫さんには一目置いた形で

「社長の甥とはいえ、大変な奴が入つてきたねえ。奴からみれば、俺達なんかノーマルなほうだぜ。」などと感嘆している。

普通の会社や商店と違つて、芸術家の集りなので時間的にも精神的にも束縛というものがない。仕事さえキチンとやればよいのである。その代り忙がしい時には徹夜することも珍らしくない。私にとつても、自由な楽しい職場であつた。そして、北川光夫さんが新しく入つてきてからは、何か別な楽しみが加わつたような氣持だつた。年令が三つ下ということが、私に、弟のような氣易さをもたせたが、精神年令は明らかに彼のほうが上だつた。私はせいじつぱい彼を書二才扱いするのだが、それが私の負け惜しみに過ぎないということは、私自身が一番よく知つていた。

親しくなるにつれて、私は彼と一緒に映画をみたり、退社後夕食を共にしたりした。私は彼が、女に対して物欲し氣な顔をしないのが小癪だつた。私は少しばかり容姿に自信がある。一寸甘い言葉をかければ、大抵の男はすぐ調子につて手出しをしてくるものなのだ。中には、一、二回食事を共にしただけで

露骨に誘惑してくる図々しいのも居る。

ところが光夫さんときたら、私の意識的な媚態に対して、なんの反応もみせないのだ。のみならず、私の誘いに、時に迷惑らしい態度さえ示すのである。そんな時、私はやりきれない侮辱を感じた。私とて変愛のテクニクというものを知らないわけではない。

だが、光夫さんの冷淡さの中には、そんなテクニク以上の憂鬱があつたのだ。光夫さんと何気なく交す言葉の端々に、私は現代のインテリーの苦惱を感じた。その苦惱を、彼は日常の道化にまぎらわしているらしかった。私が彼に惹かれたのも、案外そんなところに魅力を感じたのかも知れない。(甘つちよろいな) 私は自嘲したが、その時はもう四つ年下の光夫さんに、普通でない感情を抱いていた。

## (三)

月末になると、精求書を出すやら、諸方への支払やらで、私の仕事は多忙を極める。いつもは夕方五時で終いにするのだが、七時八時まで残らないと整理がつかない。

その日、男の社員は早々に仕事を切りあげると、いつものように打ち揃つてお酒を飲み

に出掛けた。光夫さんだけが急ぎの仕事があるといつてスタジオに残った。

男の連中がドヤドヤと階段を下りて行くと、スタジオの中は急に静かになった。

「嵐のあとの静けさだね。」

と、光夫さんが云つた「明日は又、宿酔で青い顔して、ひる過ぎに出てくるわよ。」

と、私もソロバンを弾きながら、相槌をうつ。

「ぼくと君とが、貧乏クジをひいたつてわけか」

「あたしは何時も貧乏クジひきつばなしだから平気だけど、光夫さん、皆が飲んでいる時飲めないの辛いでしよう?」

「あとで充分その償いはするさ。」

それから一時間程、珍らしく無駄口も出ずに、私達はそれぞれの仕事を終えた。

「できたぞウ……」



光夫さんが嬉し気な奇声をあげた。私はそばへ寄つて、その作品をのぞいた。

「なアんだ。広告の版下じやないの。」

「なアんだとはなんだ。版下も食う為には書かねばならぬ。」

「でもいゝわ。あなた方はチョコチョコと絵や図案を描けば、それでいいお金になるんだ」

もの。奢つてくれてもいい筈だわ。」

「よし、今夜はここで酒を飲もう。君もつきあうだろう。」

もう八時を過ぎていた隣のキヤバレーのバンドが漸く狂躁の度を加えていた。

「あたし、もう遅いから帰るわ。」

「まアいゝじやないか」彼は私の腕をつかむと一度立つた椅子に坐らせた。

「帰るんじやないぜ。ぼく、今、酒買ってくる」

光夫さんは身を翻えす

と、ドアの外に消えた。

十分後。

「さア買ってきたぜ。ウイスキー、君にはビール、チーズ、ハム、はじき豆、フルーツ、寿司……」

テーブルの上へそれらの色とりどりの飲食物が並んだ。このスタジオの中には、仕事上

泊り込む場合が多いので、日用品は一通り揃っている。私は栓ぬきだのナイフだのグラスなどを並べた。誰も邪魔者は居ないこの部屋に、光夫さんと二人きりで晩餐を楽しむなんて滅多にないチャンスだわ。私は柄になく世話女房のような気持になつて、いそいそと仕度を整えるのだ。(私も案外、いじらしいところがあるんだわ)自嘲まじりの苦笑が軽くこみあげるが、そんなものはすぐ消えて、

「さ、お仕度できたわ。」

私は自分の声が媚態を含んでいるのに気づくのだ。小さな夜のアバンチュール。私の中の悪魔が急に勢よくのさばりだした。(思いきり飲んでやるから)

ビール一本あけないうちに、私の全身はカツと燃えてきた。顔が熱い。窓のカーテンを引くと夜風がヒヤリと肌に触れる。きらめくネオン。

「案外弱いんだね。強いのは口先だけか。」

光夫さんが、ウイスキーのグラスを口にあてながら眼もとに笑みを浮べる。

「あたしは顔にでる夕チなの。シンは平気、ネ、だからもつと飲ませてよ。」

「もうよしなよ。身体に毒だぜ。ロレツだつて大分怪しいじゃないか。ビールの酔はすぐさめるから、少し休んでからにしなよ。」

そう云われると、私はよけい飲みたくなつた。酒飲みの心理は男も女も変わらないらしい。理性なんてものは完全に麻痺していた。雲の上に居るようなフワフワした心地よさ。

「ねエ、いいじゃないの、飲ませてよ、よう……」

「駄目。」

「どうして。どうしてさア……」

「身体に悪いよ。ぼくらと違つて君は飲みつけて居ないんだから。」

「身体に悪い?……へええ、あんた、そんなに親切気があるとは知らなかつた。それ、本心? あんた、あたしの身体をそんなに心配してくるの? へええ……」

私は、無性にからみなくなつて、自分でウイスキーの瓶に手をかけるとコップに注ぎ出した。ど、男の手が私の手首を抑えた。

「よしなよ。」

「いゝじやないの。離してよ、離しなさいつたら……」

揉みあううちにコップがガチャリと床の上落ちて割れた。私は何時の間にか立ち上つ

て、よてろめきながらビール瓶を振りまわしていた。

「危い、危いからよせ。君が酒乱だとは思わなかつた。」

彼も立上ると、私を静めようと背後から私の腕をつかんだ。ビール瓶をもぎとると、私の身体をドスンと椅子に坐らせた。その乱暴な仕打ちが腹立たしく、私は猛然と彼にムシヤブリついた。

「痛い、離せよ、離せ……」

彼は私をもて余したようにあしらつていたが、隙をみて私の身体をギョツと抱いた。私は彼の強い腕の中に息もつけぬ程抱きすくめられた。強烈な異性の体臭が私の鼻孔をおおつた。

「いや、いや……」

私はかすれた悲鳴をあげた。

光夫さんの手が素早く私の左手首をつかむと、うしろへギョツとねじあげた、残つた右手を振りまわして抵抗したが、すぐこれも背中へ廻されて、男のガツチリした片手の中に私の両手首は完全におさえられてしまつた。

「何するのさ、痛いわよウ……」

「あばれるからさ。」

彼の眼が一瞬妖しく光つた。壁に掛つた仕

事用のロープに手をのばすと、片手にとつて器用にほどいた。酔い痴れた私の脳裏にかすかな不安が横切った。麻縄は生き物のように私の腕に握みついた。アツという間に背中の中両手首が括られて。縄は背中から胸へとキリキリと捲きついた。二の腕から胸乳に縄が喰い込む時、私の背筋に異様な快感が走った。「椅子に坐れよ。」

男は、縄にまかれた私の身体を抱えると、静かに椅子に運んだ。ポケットから、ゆつくりと煙草を出すと一本をくわえ、火をつける。私の顔にフウと紫煙を吹きかける。私は煙にむせて涙がでる程苦しい咳に耐えた。「きれいだな。そうやって縛られている君はよけい綺麗だよ。」

何か反撥しようとしたが、何故か舌がしびれたように動かない。と部屋の電燈が消えて真暗になった。光夫さんの仕業だ。パチリ、と今度は仕事机の螢光燈が点つた。ポオツとした青白い光が、スタジオの中を淡く照らした。ネオンの光が部屋の中に射しこむ。暗い室内に、青、赤と明滅し、移り変る。

光夫さんが私に近づいた。酔つてトロンとした男の眼に淫蕩的だつた。その顔が静かに

かぶさつてきた。私は眼を瞑つた。酒と煙草と入り混つた男の息を（臭いナ）と感じた時私達の唇は重つていた。男の腕が私の肩を抱え、息ずまる程の烈しさで私は唇を吸われた「ムムウ……」

と、私は呻いた。と、男の舌は抜かれ、逆に私の舌が、彼の酒臭い口の中へ引き込まれるように吸われた。猛々しい男の吸引力。私の舌の根は、もぎとられる程伸びきつた。男の唾液の中で私の舌は痺れた。苦痛と快感が交錯して、無意識の中に私の咽喉が鳴つた。

彼の唇が離れてからも、私は椅子の背にグツタリと頭を垂れて眼をつぶっていた。全身ぬけるような心地よい気だるさだつた。

再び彼は近寄つた。私の髪の毛をグイとつかんで前に倒すと、後ろ手の結び目をほどこいた。私は自由になると、思わず腕の縄のあとをさすつた。何か物言うところの痺れるような興奮が逃げてしまいそうな不安に、私は黙っていた。次にくる期待を思うと私の胸は妖しく弾んだ。

「服を脱げよ。」

光夫さんが、圧し殺したような低い声で云つた。私はドキリとして首を横に振つた。

「脱げよ。」

繰返すと、男の手は私のブラウスのボタンをはずしていた。私は魔術にかゝつた女のようになり、抵抗もなく彼の手によつて衣服を剥がれていく。シユミーズに手がかゝり、引き剥がされる時、私はさすがにハツと眼をつぶつた。

「ウム、中々いゝオツパイじゃないか」

男の声が、まるで地下から聞える悪魔の囁きのように響く。私はズロース一つの裸で再び縛られた。手首が前に重ねられ、縄が遠慮なく一つに括つた。

彼は私を壁際まで引きずつた。天井と壁との境い目に、製作した看板を吊り上げる鍵型の金具がはめてある。彼は踏台にのつてその金具の縄を通した。彼の手に力が入ると、私の縛られた両手首は、縄に吊られて高く上つた。私は壁を背にして、両手を高く掲げたまま、一本の棒のように吊られた。身体の重みはわずかに床に触れている足先で支えた。

「苦しい……」

私は声をあげそうになった。が唇を噛んで耐えた。キリスト教徒の受難の姿が頭をかすめた。胸の動悸がドキンドキンと自分の全身に響く。眼をあけると涙がこぼれそうになるので、私は固く閉じていた。



「眼をあけるよ。」  
不気味に低い男の声。私は  
まず／＼固く眼をつぶった。  
「ようし、云うことをきかな  
いな。」

グラスの触れ合う音がし  
た。男の顔が近づく気配。と  
いきなり、ブウツと私の顔に  
粗い霧がかゝった。強いアル  
コールの香が鼻孔を突きさし  
た。彼がウイスキーを口に含  
んで吹きかけたのだ。

「ムウ……」と私はむせた。

「ゴホ、ゴホ、ゴホ……」と、こみ  
あげる咳。眼の中に液体が流  
れこんで、私はポロポロと涙  
をこぼした。必死になつて咳  
を耐え、濡れた顔を吊られた  
両の腕で身をよじつて拭いた  
「オイ、これからオレのする

ことをよくみてな。面白いことが始まるよ。」

男は濡かれたような手で絵具棚から泥絵具  
の皿を下した。ヤカンの水を注いで溶かす。  
筆をドツブリと赤絵具の中に浸す。赤絵具の  
したたる筆を右手に持った彼は、私の顔を意



味ありげにみると唇をまげて、フフフとわら  
った。

「まず、赤から……」

男の手が私のズロースにかゝると、いきな  
り下腹の見えるところまで下ろした。

「アアツ……」

私は悲鳴をあげた。脂肪に  
ふくれた私の真白な下腹を、  
男は掌で舐るように撫る。

「いゝ肌をしているなア……」

彼はなおも私の下腹を愛撫  
し、みつめていたが、やがて  
赤く染つた筆先をグイと白い  
肌を突きさした。タツブリと  
穂先にふくんだ赤色の泥はタ  
ラタラと肌を濡らして滴り落  
ちた。(冷たいツ)と思つた瞬  
間、私は思わず俯向いて自分  
の下腹をみた。筆先から流れ  
落ちる冷やかな赤泥は、押し  
下げられた純白のズロースに  
伝わり、じわじわと滲んで広  
がった。男はなおも力をこめ  
て、下腹を横一文字にグイグ  
イと筆を動かした。身を悶え

ながらも私の脳裏に、幼ない頃みた歌舞伎の  
一場面が鮮明に甦つた。白粉を真白に塗つた  
若衆の下腹に、無惨にもグサリと突きさゝる  
短刀、ドツと噴き出す血、血、血……。  
嵐のような恍惚感がどつと私の全身をゆす

つた。思いなしか、泥絵具特有のニカワの匂いが、あの生臭くも刺激的な血の匂いとなつて私の鼻を襲うのだ。

ドクドクと噴きだし、肌にひろがる血は、下腹からズロースへ、ズロースを通して太股へと間断なく流れた。腹をえぐつた男の刀は新たな血糊を含んで、今度は私の頬へサツと斬りこんだ。続いて肩から乳房へ、脇腹へ、……その度に私の肉体はヒクリ、ヒクリと快感にふるえるのだ。

ズタズタに斬り苛まれた私は両腕を高くあげたまま、ガツクリと首を垂れた。

男は矢庭に筆を捨てると、ハアハア息を弾ませながら、血にまみれた私の下腹にその手を触れた。

「……………」

もう私には声を出す力もなくなっていた。

「ビシリッ！」

お尻の鈍い痛みに、私はハツと現世へ引き戻された。私の顔は先刻とは反対に壁に向かせられていた。首をねじまげて光夫さんを見ると、彼は竹の定規をふりかぶつて今うち下ろそうとすると、

「アアッ……」私は思わず悲鳴をあげた。

「ビシリッ！」三尺の竹製の定規は、ビューと空間に鳴つてお尻を打った。

「痛いイ……」私は、吊り下げられた身体をよじつて叫んだ。

「やつと眼が覚めたかい。いくら酔っぱらつたつて、そんな恰好で眠つちや風邪をひくぜ。」

男はセセラ笑いながら、又もや竹のムチで私のお尻をビシリ！と打つのだ。いくら感覚の鈍いお尻でも、同じ所を重ねて打たれると脳髓に響くほど痛い。私はヘタヘタと床に崩れてしまいたかつた。

「ク、クルシイ……」あとから、あとからとめどなく涙がこぼれて、私の泣き声は嗚咽に変つていった。親に叱られた子供のようになンオンと泣いた。それは、自分をこんな目に合せた男を恨む声でなく、恋しい男に虐げられ、辛い苦しい思いを耐えることの興奮、歓喜、そして、限りなく甘美な幸福感に他ならなかつたのだ。

隣りのキヤバレの音楽も止み、夜空に君臨していたネオンも一つ二つと消えて、大都会の夜も静かに更けた頃、私を縛つた縄もやつとほどかれた。赤い泥絵具でベトベトに濡

れた私の肌を、光夫さんはガスでお湯を沸して洗つてくれた。ズロースまで洗濯してくれた。後片付けを済まして、宿直用の簡易ベツトを広げた。疲れ切つた私は、男の広い胸に顔を埋め、死んだようになつて眠つた。

#### (四)

白々と夜が明けた。

都電がゴォーと静かな街なかを走る。しかし銀座はまだ眠っているのだ。夜更しの人間が、いつまでも朝寝坊しているように。

銀座街が眠りから覚めるのは、八時を過ぎ、サラリーマンやオフィスガールがそろそろと出勤する頃である。

一晩中グルグルまわっているM製菓の地球のネオンも、朝はなんの変哲もない一個の物体にすぎない。東洋一と云われる大きさもむしろ醜怪である。

光夫さんはまだ眠っている。私は彼の腕をソツと抜けて身ずくろいする。窓から朝のさわやかな風が一夜の濁つた空気を追い払うように吹く。

銀座の屋根を、名も知れぬ鳥の群が舞つていた。

幾多の人間が、泣き、笑い、怒り、そして

哀しみながら、夜毎のネオンに享樂する銀座裏。酒と色と慾とが、ぶつかり合い、わめき叫びながら、この街の暦はめくられていく。

誰一人知らない。一夜明ければ、世の多くの情痴と共に、過去へと無心に押し流されるだけだ。

私は、一夜のうちに染みついた光夫さんの体臭を吹き飛ばすように、窓から外へ向つて手を伸ばして、大きく深呼吸をした。

(終)



## 〔告白〕

# 人 間 燭 台

沼田扶二世

の現在あるわけはございませんが、何事も金次第で金一つで物事が通る所ですから、金に縛られた奴隷女といつてもいいのです。女の貞操なんてものも、夜毎店の前へ立つて一人の客の袖を何人もの女で目に角をたて、引つ張り合うことを考えると不思議な夢の国の空ろなお話のように聞えます。自分の体を売つて金に替えるのにさえ、こんなに競争しなければならぬなんて……。

でも金で買われて男の玩弄物になるのが私たちの商売であつてみれば、それもいゝのですが、同僚の姐さん達の横暴には最初は誰でも泣かされるのです。私も今では馴れてしまつたのか割合平気でこういった告白の一つでも書ける程、心に落ち着きが出来ましたけれど初めの中はとても嫌で仕方がなかつたのです。

夜は私達の働く時ですから、お客があつてもなくても一応忙しそうにしていなければい

皆様お元気でいらつしやいますか、めつきり寒くなつて参りましたが私もお蔭様で元気に日々を送っております。さて今日はこの間お約束いたしましたお話を書かせていただきます。お友達に奇クの読者が又一人増えます。私出来るだけ自分の見聞したことをありのまゝ書こうとして後で恥しくなつてしま

うのですが、今度はつとめて自重しました。でも書くうちについて調子に乗つてしまうものですから、いけない所は適当に削つて下さいませ。

特殊地域と呼ばれます私達の所は本当に世間の常識ではちよつと判りにくいところが多いのです。奴隷というようなのは二十世紀

けませんが、日中特に午前中は殆ど自由です。私の棲には女が十人おります。四十七のお時を最高に、これから私が書きます十九才の栄子さんが最低です。

その朝、十時頃でしたか、朝をさましますと隣りの八畳の部屋で人の声がします。七時前に昨夜の泊り客を送り帰えして、一眠りしたところですが、もう陽は東側の窓へ眩しい位照りつけています。昨夜は案外早く客がついたので私は宵の口から部屋にいましたが、遅く迄栄子さんを囲んで何か言い争っていたようでしたので、今朝はもうそんな事からリンチでも加えられているんじゃないかと、ふと思つたのです。私は寝巻きの上から部屋着を羽織つて早速隣を覗いてみました。

彼女は松本栄子といつて、家は鳥取県のお百姓だそうです。齡の割に肉づきがよくて、背丈は五尺を少し越す位ですのに、腕や腰廻りがずば抜けて太く、肌の色は今迄お百姓をしていたと思われぬ位白く、只、足や戸の指が幾分頑丈で力仕事をしていたことを偲ばされるだけでした。この部屋は明いていて平常は蒲団の置場になんかなつていました。詳しい事情は何にもわかりませんが、栄子さんを真中に取り囲んでお時等四人の年増組が立ち

はだかつています。

「訳のわからない奴つたら、ありやしない、今日はみんな可愛がつてやるからね」

「あゝ、勘忍して、私は何にも知らなかつたものですから――」

こんな社会へ来て間のない彼女はすつかりおびえきつて十分物もよう云わない様子です。リンチを加えられる女は例によつて、全部が全部裸にされてしまいます。それは隙を見て逃げ出さないためと、相手の羞恥心をかき立て、一層の苦痛を与える為、それともう一つ女達は同性の裸体に対して或る種の興味を持つているのではないのでしょうか、これは私自身、男の人の裸よりも、同性の裸の方により強くひかれる気持があるところから、そう考えたのですけれど、間違っているかもしれません。

「なにをぐずぐずしてるんだ、自分で着物をお脱ぎしたら」

お園の相も変らぬトゲのある言葉がとびます。「あたしや気が短いんだよ、言う通りしないと、今に腰を抜かすような事をしてやるからね」

栄子さんは寝ているところを引つ張り出されてきたのか、寝巻一枚のまゝで身体の割に

大きな足が膝のあたりまで裾がまくれて投げ出れています。いつもお風呂へ入つたりして同性の裸には見飽きている筈ですが、今こうして皆から苛められている栄子さんの身体の一部を見ていると、栄子さんを助けてやりたいという気持よりも、もつとヒドク苛められている所を見たいという気持が起つてくるのは不思議でした。

相手から無理矢理に脱がされるのなら悲しい諦めも出来ない事はないでしょうが、皆の見ている前で自分から裸になれるというのは無理な注文です。「なんだい、脱げないのかい」やにわに近づいたお政の手で、うづむいている襟首を掴まされると、ぐつと吊り上げられました。腰紐が解けて前がはだけましたので、

「あら、止めて下さい」思わず前を気にして手をやるのを逆にクルリと剥いでしまったのです。ズロース一つになつた彼女の肉体美にはのぞき見していた私も驚きました。どうと盛り上つた肌は身体を動かす度にぶちぶちと躍動するようです。年増達には嫉ましい若い女の潑刺とした身体です。

「今度は全部とつてしまおうよ、あつさりしていて、いゝから」



そういうお政の言葉に賛成して、私も少しでも早く、彼女の全裸を見たい気持です。

「それだけは許して、お願い、お願い」

そんな哀願もあらばこそ、忽ち四方から伸びて来た手は髪を握り、背を押えつけて海老のように身体を曲げて脱がせまいとするのを無理矢理、脱がせにかゝります。この時、榮さんが両手を押えるお定の腕に噛みついたのです。「痛いッ」というなり、噛みついてきた彼女の額に手を当て、「いやという程押し上げました。もんどりを打つて仰向けに倒れる彼女、ズロースはお定の手に残つて、スベスベとしたお尻がむき出しになりました。

「ビシヤ、ビシヤ、ビシヤ」

むつくりと盛り上つたお尻に平手打ちの連続がとびます。榮子さんは何かわめいているようですが、呻めき声にしかありません。私も思わず身体を乗り出します。「そこを閉めて」お政の声で、唐紙を閉めますと、いつしか私も責め手の仲間へ入っている恰好になりました。人間とは不思議なもので、口だけで言い合っている時はいいのですが、一度どちらから手出しをして、それに対して手向うと、もう後は無茶苦茶になつてしまふのです。お時達も最初はこんな事迄しようとは考

えていなかったかもしれません。然し、このように興奮し合つてくると、とんでもないことになつてしまふのです。

お尻を二十ばかり叩かれた挙句、腰紐で後手に縛られると、柱の所へ連れてゆかれ顔を天井に向けて仰向けに、背中は柱を背負つた恰好でお尻を突き出して屈まされたのです。

うすれば両足が自分の顔を挟んで身体はエビのよう曲がるのです。お尻の双丘は伸びて皆の眼の前に突き立つています。私も最初彼女が裸にされた時、はつと思いましたが十九というのに、私なんかと比較して彼女はなんと毛深いのでしよう。

猿ぐつわはされていませんけれどもお腹はくびれるように圧迫されて息



苦しくて声も出せないでしょう。いや、それよりも自分の目の前に最も恥しい個所がクロ―ズアップされるのですから、若し彼女が悲鳴を挙げるとしたら大変な恰好になつたことでしょう。伸ばされた足の踵はお時に踏まえられているので、どうもがいても逃れることは出来ません。

こんな恰好でこれからみんな彼女のお尻に好きなようにいたずらしようというのです。同性間の責めそれに平常から刺戟を求めてうずうずしている商売女のことですから男の人達が考えられないむごたらしい事をするものです。「今更泣き喚いたつて後の祭さ」「今日はブツタオレる迄やらされるんだヨ」

いくら顔や身体に化粧していても、こんな部分をこのようにあからさに出すということとは絶世の美女でも余り見よいものではありません。ましてこのような商売をする私達には自ら特にそういった個所の衰えというものがあります。だから私達がこゝをかくそうという気持は普通の女の人以上なのです。

四人はぐるりと立ちかこんでそんな哀れな姿の栄子さんを見下しています。私は一番後から覗き込んでいましたが、四人の誰よりも最も興味をもつて眺めていたのは私だつたかもしれません。若い同性の肉体の秘密をこれ迄あらわに目の前に見せつけられたのは初めてです。お時に踏みつけられた栄子さんの足の拇指はピンと伸びて畳へ爪先をべつたりと押しつけています。白い足指の爪に黒い垢がぼつちり溜っているのが、不潔という感じよりも、この時にはたまらなく色気を感じました。

お時がいきなり立つて「ビシツ」とお尻を叩きました。それがきつかけとなつて忽ちあちらからもこちらからも手が出て平手打ち、「ビシツ、ビシツ」という音に混る彼女の悲鳴、そんな顔を上から見下すというのも誠に小気味のよいものです。この時お政の持ち出

したのはテグスと香水の空瓶です。私達は自分から香水なんて買いませんが、きつとお客さんからでも貰つた安香水なのでしよう。女の人のお尻というよりも肛門に、特に興味を持つている私は、それからお政のやる事を想像するだけでも、もう身体中がぞくぞくする思いでした。テグス責めが終ると、同じ姿勢のまゝで今度は筆責めといつて、お習字に使う筆の先を鉄で切つて平らにしたもので擦るのです。これには栄子さんも辛抱出来ず「ヒーヒー」と身をもだえて絶叫しましたが頸が殆ど直角になる迄曲げられているし、どうにも動きがとれないので、全身を波うたしているばかりです。身体に痕をつけないで責めるにはこれが第一のようです。ぐつたりと疲れきつた彼女はもう皆のするがまゝになつて、次のローソク責めの時は、(直径一厘ばかり長さ千種蠟燭です)両足をうんと左右足に開くため、今迄お時が踏まえていたを離しても、逃げ出そうともしませんでした。そして相当痛かつただるうに、足を膝のところまで三四度バタバタさせただけで、あとはじつとしていました。只、その時涙が二筋、三筋つうと耳の方へ流れてゆきましたが、相当こたえたようです。

このようにして私は生れて初めてローソク責めというものを具さに目の前で見たのです。その時の私の最も感激した美しい光景は公刊誌の性質上詳しく書けないのが残念です。ローソクに火がつけられると音もなく燃え出す炎、とりまく女の真赤に充血した瞳！お時もお園もお政も、何か光々しいもので眺めるようにじつと眼をこらしています。

栄子さんもすつかり観念しきつたように、只じつと身動きもしません。この時、私の身内の奥底から得体の知れない熱いものがじいつと湧き上つてくるのを覚えました。自分が苛められた時はいまいましいばかりでしたのに、可憐な栄子さんがこんなヒドイ目に合されているのが、嬉しく感ずる自分の気持がわかりません。そうかといつて、私は自分からすゝんで苛めて見ようとか、見たいとかいう気持は少しも起らないのです。

女たちも、もう毒舌を吐こうとはしません。只神妙に身体をまかせてリンチを受けている栄子さんを見つめているばかりでした。やがて縄も解かれて、リンチも終わりました。が全身！汗に塗れた栄子さんは暫くは起き上がることも出来ない位でした。

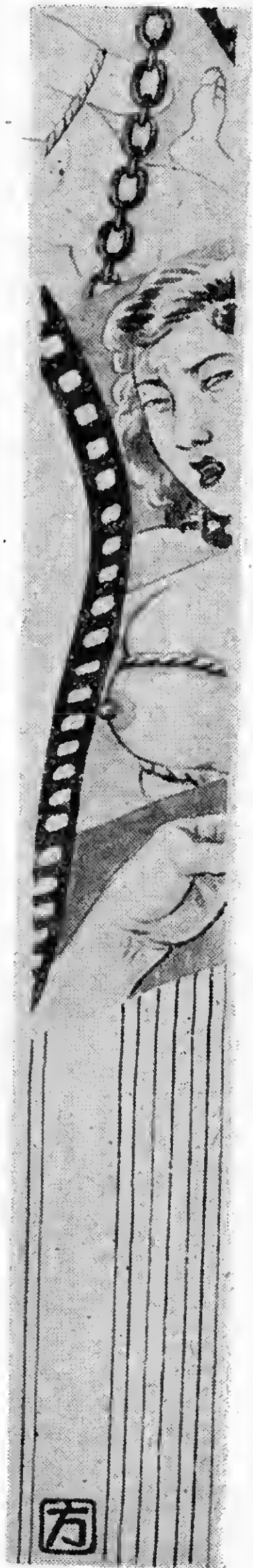
## 蜘蛛と蝶々

(五)

—不運なニューフェイス—

飛田良二

方金三画



御川里枝主演——三度目の映画「フアッションモデル」の撮映もローケーションの一部を残して完成も間近かに迫りました。今度の監督は有名なK、スタッフも豪華な顔ぶれで今や「スター」の栄冠も輝かしい「御川里枝」が大きくポーズをつけた宣伝ポスターも印刷に掛る速かさでした。

そんな一日、やつと暇を見つけた里枝は大急ぎでMデパートを一巡りしてきた所でした。

それも今度のロケに是非必要な衣裳に合せるアクセサリを購め

る為で、撮映に使う衣裳から小道具の端迄非常に神経を使うのも有名なK監督でしたが、里枝のセンスを高くかつて、カットカットに必要なそれらの品々はすべて里枝自身で取揃える様任せられているからでした。

釣籠落しに暗くなる晩秋の、はや冬の気配の色濃い騒音の街を、里枝はなるたけ人かげにかくれる様に有楽町駅へと急いでいました。そんな里枝の姿は、凡そ人氣が立ち初めた女優らしくはありませんでした。身に背負わされた運命の十字架、その秘密が常に里枝をおびやかす、撮映所にあつても努めて見学者の群などからは遠のいているのでした。

然し世の中というものは皮肉なもので雑誌の口絵やスタイルブツクのモデルの依頼は、里枝に人気が出だし、里枝が断れば断る程口うるさい程の交渉があるものでした。遂に断りきれず、二回程婦人雑誌に、ウエディングドレス姿を出された時は忽ちファンレターの数が増える仕末に里枝は心の中で一層苦しまねばならないのでした。清純で、高貴なドレス姿で微笑んだ御川里枝に世の多くのファンは万雷のような讃辞を浴びせましたが、（私は騙している。私はそんな女じゃない！）殆ど連続的な出演で過労をまぬがれない毎日の疲れを慰してくれる筈のアパートのベツトに里枝は反転し苦悶するものでした。処女作品では白衣姿の「御川ミツ」次の大作「純愛」の「御川ユキ」、そして今度は新企画のシリーズ物で「ファッションモデル」の「御川ハル子」と異例の抜擢を重ねる新しい宣伝手段、合せて莫大な宣伝費を注ぎ込んでいる撮映所は最も大切な売出しの期間。素晴らしい理想的な女性のイメージを御川里枝の上に作り上げるのでした。

当然御川里枝を夢中になつて支持する若い同性、或は異性のファンレターは机上に山積するものでしたが、その一枚一枚が里枝の心に辛く、そしてまるで茨の中を歩くように恐ろしく思われてなりませんでした。

（私は違う。私は一正の犬です！ ケモノなんです。いやそれ以下……………）

たつた一人になると里枝は絶叫したくなります。そして常に落着かない不安そうな里枝の毎日を心から気づかつて何かと親味になつて介添えしてくれるM助監督の態度にもたまらなくなるのでした。（もう一人のかくされた里枝を知らないM、尊敬するMを欺き続け

る事は私には出来ない、私はもう人から愛される資格のない女だ！）然し、そういった絶望的な里枝の悲しみは一層、当のMは勿論の事、他の人達にも殆ど驚異に似た哀愁を帯びた美しさとして反映するのでした。陰翳のある美しさ、淋しい不安そうなマスクから、又その罪を意識した控目な態度は、口やかましい撮映所雀から当然受ける逃れない嫉妬の冷たい眼差しからも追求されず、誰からも好感を持つて迎ええられる結果となるのでした。

巧妙な罠をかけた瀬田や滝尾の前に女性の肉体の生理の悲しさをしみじみと味わされ、ひきずり込まれるようにその悦虐の底なし沼に突き落された瞬間！ それは本当に瞬間的なものではありましたが、それが故に却つて一層鮮烈な記憶となり、時を経るに従つて激しい自己嫌悪とたまらない罪悪感を作り上げてしまったのです。

何故なら？……………この春先まで大部屋にくすぶり、自分の不運をなげき続けていた何も知らない一人の娘を、瀬田達は淫虐な奸計と残酷な仕打ちによつて教育してしまい、又一方は近代映画という巨大なシステムが世の多くの人々の羨望と憧憬を一身に集める典型的な「新進スター」という一直線のルールにかつぎ上げてしまったのです。今やまったく二人の「御川里枝」が創り上げられた感じなのです。しかも不幸なことは当の里枝自身には此の二人になつた「御川里枝」を巧みに繕い操縦してゆける手腕も逞ましさもなかったからです。だから誰に打明ける事も出来ない秘密におびえ乍ら、慌しい撮映所の毎日を（いつ、どんな破綻が……………）又（若し、もう一人の里枝が白昼に晒されることがあつたら……………）という危惧が目に見えない魔手となつて襲いかゝつてくるのでした。

そして、あれ以来、不思議にもパツタリと連絡も呼出しの電話も



掛つてこない事が、今の里枝にとつては（もしや？）とそんな黒い雲が悪夢となつて衰れた里枝の心を一層さいなんでやまないのです。

## 二

里枝が三日三晩、あの地獄のスタジオに閉じ込められ、幾度か氣を失うまで彼等の考え出せる限りの淫虐な手段で責め続けられていた時、里枝の処女作「堕ちた花」の撮映中だった為、支障をきたした事は当然でした。大事な第一回の出演作品に突然原因不明で無断、欠勤を重ねたことは、Y監督以下スタッフ一同の氣をもまし、長身童顔のM助監督の心痛も一通りではありませんでした。

然し当時はまだ名をなき一ニューフェイスの失脚位は会社としても大して宣伝効果も考えられず、やむなくストーリーの一部を修正して、そのまゝ撮映を続行されたのです。所が又々そんな事故が里枝に味方して、まるで尻切れトンボのような里枝の印象が一層強調されてしまう結果となつて、ありきたりの思春期物でありながら、不幸な過去から立ち上つた里枝の演じた白衣の乙女が、若い故に冒した過失、又その女であるが故に背負わねばならない十字架の重さに、ともすればくずれようとする親友をも励まし助け、自らをも鞭打つて築いてゆく過程が、さすがY監督の手腕で小氣味よくまとめ上げられて、予想以上の好評裡に封切られたのです。

その「堕ちた花」を里枝は或る場末の映画館で人のかげにかくれてこっそりと見ました。名あるスター達と共に並んで写し出された「御川里枝」のタイトルは到底説明もし難い複雑な感情で里枝の全身を圧倒し、夢にまで見たスクリーンの自分の姿、止めどない涙で

曇り続け、逃げる様にして席を立つた里枝の耳に、

「御川里枝つて、素敵ね」

「私、断然好きになつちやつた！」

若い女の感歎詞が飛び込んできました。里枝は秘密の罪惡感にこらえきれなくなつて、そゝくさと外へ出てゆくのでした。

里枝はようやく有楽町の駅へ出ました。国電は割にこんでいました。

「あれ！御川里枝じゃない？」

「まあ、本当！」

「ステキね……」

里枝の立つた釣革より右手の数人先から若い視線が小さくなつている里枝を射すくめてしまいました。里枝は急いでハンドバックからマスクを出してかけました。なるべくマスクは掛けたくなかったのです。白い清潔なこのマスクも忘れようとしても忘れることの出来ないあのいまわしい記憶と直結するからだつたのです。幸い前にかけている中年の男の人は御川里枝の名をまだないのでしょう。たゞ際立つた美貌と垢抜けした服装に注目してチラ／＼と見上げるだけでした。

ラッシュ時の電車は停車する度に益々こんできました。と背後に迫ってくる無遠慮な圧力を意識すると同時に

「しばらくだつたね」

一瞬、全身の血が凍るような衝撃でした。車窓のガラスに映っている里枝の美しい顔がかすかにこわばつてふるえました。ピツタリと身体を背後から押しつけ、小鳩のようにおびえる里枝を抱く様に

立っているのは瀬田でした。

「例のフィルムね……」

間を置いて里枝の反応を愉しむ悪魔の表情が彼女の顔の真上に重つて、ガラス窓の中で不逞不逞しく不気味に笑っています。

「買い手があつてね、いや心配は御無用、誰にも一度も見せてないよ、しかし、此方にもチヨット入用な事があつてね——」

明らかに金をゆすり取るうというのでしょうか。いや金より、又々例の思い出だけでも恐ろしい光景が、血の氣も失せた里枝の脳裡をよぎつてゆくのでした。

「いや、本当に丁度よかつた。さつき電話をかけたところ、今日はまだ撮映所にはいないつて、岩木の返事だろう、君は運がいいよ」

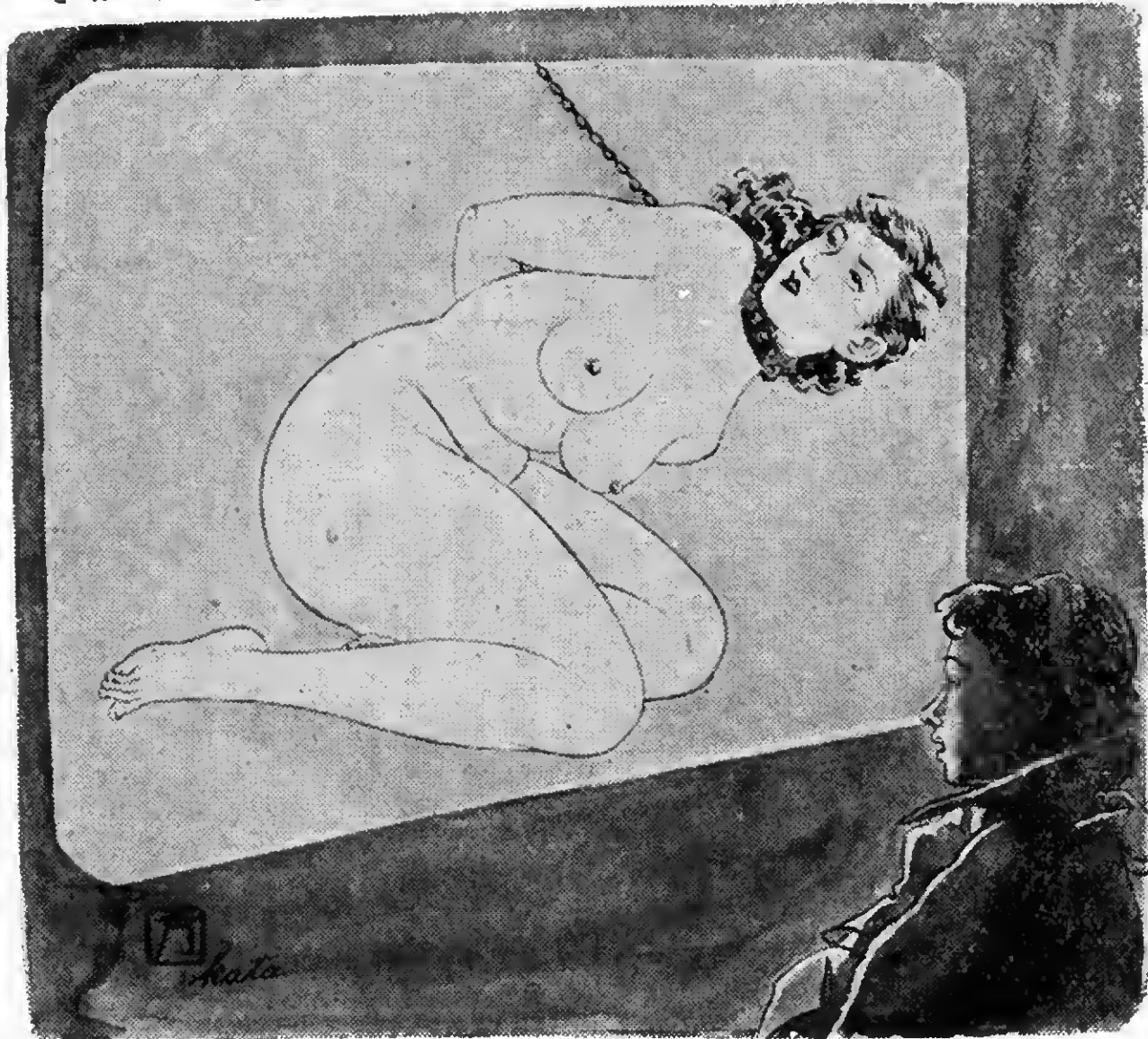
そんな身勝手な言葉を里枝にだけ聞えるように耳元で囁やくのです。

「今日はビジネス・オンリーだ。フィルムの事でぜひ相談したいんだ」

里枝が目的とする駅に電車が止まりました。然し里枝はまるで金しぼりにでも逢つたように身体が動きません。自分の今置かれてある弱い立場にくつと下唇をかみしめてうつ向いていました。ドアが閉つて電車が走り出しました。窓ガラスに写つた瀬田の顔が笑っています。負けてはいけない、自分の心に強く言い聞かせて初めて口をきりました。

「どんな話ですの、私急ぎますから、とにかく次の駅で下ります。」

「いや、久しぶりに僕の処へ遊びにいらしやい、その方が万事都合、いや、是非君にも安心して貰う必要があるんでね」



里枝はぶる／＼と身体がふるえました。何を言われても、とても信用出来る相手ではない。しかし、今の里枝にとって彼の言葉に逆うどんな準備があつたのでしょうか。すっかり暗くなつた郊外の駅へ

とうとう瀬田と一緒に下りてしまったのです。この駅からの風景だけは里枝にとつて忘れることの出来ない悲しい記憶の一コマなのです。瀬田は勝利者のゆとりを見せるようなゆつたりとした歩調を運んでゆきます。

彼等の手中にあるあの「フィルム」あれがある限り里枝は巢にかゝつた哀れな蝶々のように完全に生殺与奪の權をにぎられているのです。(なんとかして、あのフィルムを取り返えしたい) そういつた気持が、今フィルムを見せてやろうという瀬田の言葉が見えない糸となつて里枝を縛つてしまつたのです。

「馬鹿に此の頃は人気があるじゃないか」

遅れ勝ちな里枝に顧つてのぞき込むようにして言います。

「僕たちも大変結構な事だと喜んでゐるんだがね、君の人气が上れば上る程、あのフィルムも値上りするつて訳だからね」

悪魔は愉快そうに笑つて、家の扉に手をかけました。留守番の例の婦人がいる外、人の気はありません。茶を運んできた中年の使用人を用が出来れば呼ぶから、それ迄上つて来ぬようにと言つて追いつ返えすと、里枝を二階のスタジオへ案内しました。

「さあ、御川さん、今日はお客さんだ、一つゆつくりして呉れ給え、さて、君の熱演で出来たフィルムの事だが、あれは僕の苦心の作品でもあるんだ、まあ、今夜は一つ試写会という処さ」

「私、観たくなんぞありません、それより晩くなります。早く用件をおつしやつて下さい」

里枝は突立つたまま事務的に冷たくそう答えました。瀬田はニヤ／＼含み笑いをしながら答えません。スタジオの中には嘗ての日、里枝を羞しめ苦しめた異様な責道具類は全然見当らず、僅かに調度

類が片隅に積み上げられたまま、ガラソとした部屋の空気は不気味な冷たさが漂つています。瀬田は素早くドアの鍵を下してしまいましたので、里枝はあきらめて椅子に腰を下しました。覚悟をきめていても、ともすれば溢れそうになる涙をこらえていました。瀬田はそんな里枝の姿、しばらく放し飼ひしたつもりらしい家畜の姿をじつと舐めるような視線で包むのでした。(どんな御馳走でも食い足りりや、飽きてくらあ……) そんな滝尾の提案で一応手離しておいた自分達の計算に間違いのなかつたことを満足げに貪欲な笑いにまぎらわすのでした。

事実僅かな月日に、見違える程、美しく垢抜けしてきた里枝でした。今、目の前のピッチリ身を包んだスーツの下で、典型的な八等身の若々しい肉体がもはや、あの鞭のあとと止めず、抜けるような白さで回復してることだろう。……心持青白く光つた彫りの深い美貌、それが深刻な恐怖に打たれて、まるで雨に打たれた秋海棠のような魅力。

(バランスよく髪を押えている帽子をはね飛ばし、見事に着こなしているそのスーツを剥ぎとり、下着を引きさき、パンプスも、ナイロンのストッキングも……)

瀬田はつき上げてくる衝動を押えながら一台の小型映写機を運び出してきました。里枝の向いている壁へ一枚の白布を押ピンで止め終ると、室内の電燈は消されました。

「さあ、お嬢さん、君の熱演ぶりを見て頂くか？ 細い相談はすべてそのあとで……」

闇の中から瀬田の自信に満ちた声が洩れてきます。とうとう里枝の虐げられ、のた打ち廻つた生々しい歴史が再現されたのです。

「やめて、お願い、やめて下さい！」

我を忘れて里枝は叫んでいました。

——雌犬の飼いならし方——

そんな侮辱的なタイトルが割に明るい画面となつて眼前に浮かび上つてくると、もう里枝は頭を上げていられませんでした。

「そうら、始まつた、かわいい、ジャジャ馬が泣いてるぜ——」

面白そうな瀬田の声、羞恥に身をふるわせながら何度か薄目を開けて里枝はその浅間しい無言劇の主人公、それは一目で御川里枝とわかる巧妙なカメラの移動で、刻々に変化する全裸身の苦悶する姿を見てしまいました。

時々、淫虐にひきつた笑いを見せて滝尾が現れたかと思うと、微細な表情までありありとキヤツチした里枝のアップが十六ミリは完全に捉えているのです。思い出すのもいまましい例の犬の首輪が無理にはめられ、猿ぐつわが喰い込んで目かくしがされました。首輪のくさりで宙吊りにされた哀れないけにえ、その首輪に鈴がつけられて猫のように鉄棒や十字架へ吊り下げられるカット。

拷問椅子に坐わされ、いじめられなぶられ、白い波のような汗を流している里枝。いつしか里枝はそんな自分の姿をまるで憑かれたように瞳孔を見開いて、凝視していました。

何がそうさせたのか、里枝自身にも解りませんでした。ただそれは恐ろしく長い映画でした。僅か三巻程のこの怪しげなフィルムには一瞬一瞬が身を削られる思いで永久にでも続くように感じたのです。そしてカットが重なるに従つて、里枝自身がまるで知らなかつた自分の体を見てしまつたのです。

目を蔽う様な羞しい部分の無惨なクローズアップ。スリツパを口

に喰わえて、四股を張つてヨタヨタと這い廻る自分の姿。

「もう沢山！」

里枝は発作的にそう叫んでいました。突然おかしくてたまらない様な瀬田の笑い声と共にスタジオは急に明るくなり、里枝は思わず顔を伏せました。全身の血が羞恥で逆流する思いでした。

「どうだい？ お氣に召しましたかね、〃堕ちた花〃や〃純愛〃とやらよりこの方がよつぽど面白いじゃないか、アハ……、これでたつたこれだけさ、安いもんだ」

浜田は長い指を一寸立て、見せるのです。

「現在の処、時価百万円さ、——新進スターの主演というだけで買手が多すぎる！」

「君が買い取るといふなら、それでもいいよ」

なんとというずるさ、

彼等は僅かな金で釣り、何も知らない里枝を騙し、遂にはあらゆる汚辱を押しつけ彼女をドン底へ引きづり込んでその快楽を愉んだあと、尚あき足らずに今度はとことん迄里枝から絞りとりうとしているのです。

「悪魔ッ」

抜ける事の出来ない弱い立場を忘れて里枝としてはせい一杯の反抗をぶちまけました。本当にあらんかぎりの憎悪を浴びせかけても尚あきたりない相手だつたのです。

「ハハ……、おい御川さんよ」

急に瀬田は聞き直つてドスをきかせてきました。

「おい、大きく出られるすじじやないぜ、少し甘く扱えば図に乗りやがつて。俺達に向つてエラソウな口をきけるかい。どんな事にな



るか、まさか俺達とベツトとの関係を忘れた訳でもあるまい！」  
勝ち誇つたように瀬田は尚続けるのです。

「これも親心、こつちさえその気になりや、どんな事でも出来るんだぜ、何も大切な証拠のフィルムを知れた額で返えそうとしなくてもね」

一口に百万円といつてもまだまだ今の里枝に都合出来る金額ではありません。そんな事は十分計算に入れている瀬田でした。

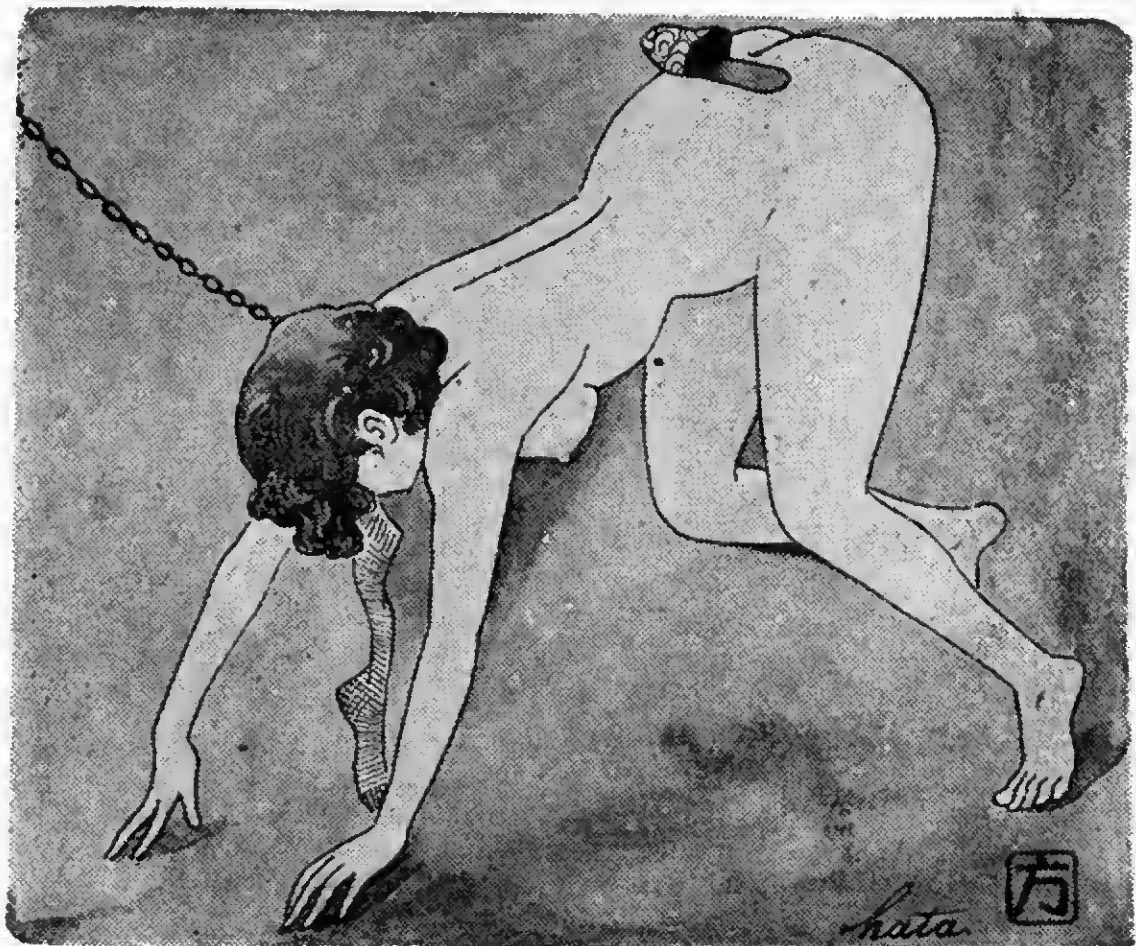
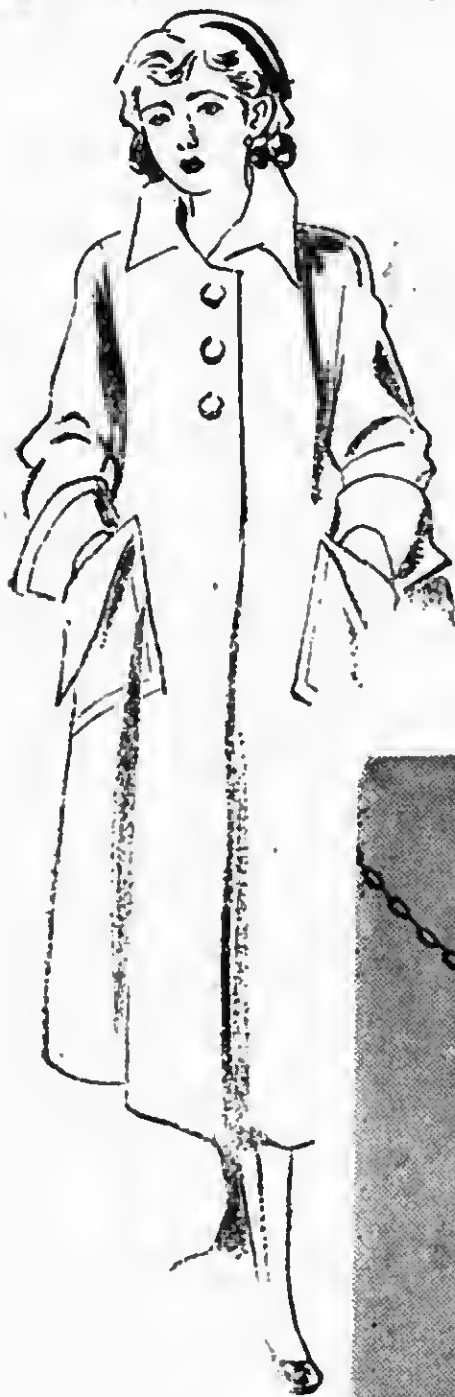
「このフィルムを人に売られたり、公開されたりするのがイヤだつたら、いゝか、よく考えて貰おうか？、フィルムの保管料としてだ、毎月十万づゝ届けて頂くとして、手を打とうかね」

もう里枝には口もきけません。

「大スタート御川里枝の出演料からすりや知れたもんじやないか、質流れがこわかつたら、月の始めにキチンキチンと入れて頂くさ……処で断つておくが、それとベツトの関係とは全然別口だぜ、そんな端金で今後一切俺達と縁切れというそんな甘いわけにはゆかないぜ、さあ、ビジネスが済んだら今夜は特別にお目こぼししてやる。滝尾が居らんのが幸いだ、お帰り。」

そのかわりいゝかい、明日の夕刻までに必ず第一回分の十万円也、耳を揃えて持つてくるんだ、わかつたね、約束、いや命令を忘れたらそれまでだヨ」

瀬田は咽喉から手が出そうな御馳走を目の前にしながら、ぐつとこらえて明日の段取りを胸



の中で計算するでしした。本当は突然だったんで今夜は一寸都合が悪かった。もつと完全な準備を整えた上で一段と美事に成長した獲物をゆつくりと味う方が楽しみも利益も多い、と考えたのです。このフィルムを見た以上は美しい犠牲者は必ず明日入場料を用意してやつてくるに違いないと自信たつぷりに確信したからです。

瀬田の高笑いを背に里枝は逃げるように真暗になつた道を駅へ向つて歩いていました。打ちのめされた脳裡にはたつた今観せられたばかりのあさましい自分の姿が、ぐるぐると廻り廻つて、その上明日に迫つた新しい重荷が大きいのしかかつてダブつてきます。

(明日中に十万円! どうしよう?)

それでも、今夜はあのフィルムを見せられただけで何事もなく自由になれた事はやつぱりほつとする安堵でした。

哀れな私、人影もない夜道を一人とぼとぼと力なく駅へ向つていると、涙がどつと溢れて頬をぬらすのでした。

### 三

「お早う、サツチン」

高い所明るい弾んだ声が飛んできました。

「お早うございます」

里枝は無理に微笑うとして頬をこわばらし乍らMに挨拶をかえしていました。一晚中悩みに悩み抜いてその挙句、勇気を出してMに頼んで会計からでも借りて貰うより方法がありませんでした。眠れぬ夜が明け、里枝はジンジンと鳴る頭痛を押えて出勤してきたところだったのです。

「顔色が悪いヨ、どうしたんだい? この頃めつきり元気がないじ

やないか」

親切なMの言葉に思わず目頭を熱くしながら「チヨット、お願いがあるんです」言つてしまつて途端に里枝は後悔していました。

「どんな事?、なんでも言つてごらん」

Mは努めて明るく笑つて里枝の顔をのぞき込みました。

「えゝすみません。でも、チヨット、あとから又伺いますわ」

「そう、では——」

気軽にうなづいてMは大きなコンパスで第三ステージの方へ去つてゆきました。次のロケに出かける迄二三日は暇が出るらしいのです。里枝は今日は今度の「フアツションモデル」の「スチール写真」の撮影が控えています。Mに頼んで会計にかけ合つて貰えば、なんとか十万円都合つかないでもない。勿論月給の前借り位ではそんな大金には及びもつかないのですが、出演手当として先の「純愛」の手当を今月中に貰える筈だったからです。

まだまだ今の里枝には大スターのギヤラに比べて足もとに寄りつけない収入だったのですが、今度の出演料は大分値上げしてくれるらしいと聞いていたのです。でもたとえいくら出演料を沢山貰えるようになつても、瀬田達から逃れられない以上、すべてを彼等に巻き上げられてしまう事は火を見るより明らかなのです。(なんとしても、あのフィルムを取り戻さねば……)

昨夜のあの光景がまざまざと眼前に浮んでスチール撮影の時間が近づいても、里枝は何度も化粧をやりかえさなければなりません。昨日迄のようにせめてこの撮影所で忙しく時間に追われていた。昨日迄のように関係を忘れる瞬間があつたのに、……昨日、はからずも瀬田に逢つて、あのフィルムを目のあたりに見せられて

からは、居ても立つてもいられない焦燥にかられて、ドーラン塗り一つだけでもヘマばかり重ねているのでした。やつと撮影が終ったのが昼前、それから今度はK監督の召集でロケの打合せのためK組の全員が顔を並べました。

急に予定を早めて、明後日、ロケ班は出発することになったのです。むろん主演の里枝の撮影が主目的でした。予定地も変更されて伊豆方面の温泉地に宿をとることになりました。一行百名に近い大ロケ隊の発表が同時にされました。

「サツチンは顔色が悪いが大丈夫かな？」

K監督が言いました。

主演の里枝が扮するモデルの御川ハル子デザイナーに扮する大スターのHが繰りひろげる大胆なラブシーンが今度の予定の中に組まれているのです。百名に近いロケ隊がロケバスを連ねて伊豆へ、しかも主演女優として一行の花形である里枝、少くとも彼女は幸福でなければならぬ筈でした。それに当の里枝には昨夜の瀬田に云われた事の方が当面の問題でした。たとえ十万円が都合出来、なんとか今度のロケへ行けるとしても、あの悪鬼のような瀬田と滝尾が待つスタジオへ今夜再び行かねばならないのです。行けば無事に済むはずはないのです。

一匹の犬にされて芸を仕込まれている里枝の姿を印したフィルムが里枝の頭を一杯に占領しています。打合せがすむと、もう一般の退社時間も近づいてきました。Mに前借を会計に話してくれと頼む事が又大きな苦痛でした。詳しい理由を話さずとも掛け合つてくれ、そうなのはMだけだったし、又一人ではとてもそんな事を直接会計へ言える里枝ではありませんでした。

「御川さん、お電話よ」

部屋へ帰り着くなり、そう呼ばれて里枝はドキンとして胸が高鳴りました。然し電話はMからでした。やつと安心した里枝の顔がみるみる曇つてゆきました。

（ロケの都合で今からどうしてもビュロー迄行かねばならないが相談とは何か？ 明日の朝だつたらだめなのか？）というのです。

「はあ、結構です。では行つていらつしやい」

そう答えるより仕方がありませんでした。里枝は力なく撮影所の門を出ました。

（とうとう今日は出来なかつた。明日迄待つてくれというより方法がない。）

（行かないわけにはいかないし、金を持たず行けば、………どんな事になるか？）

約束の時間が刻々と里枝の左手首で秒を刻んでゆきます。夢遊病者のような足どりでフラフラと歩いている里枝の脇へ急ブレーキをかけて自動車が止まりました。

「危いッ」

我に返つた里枝が一瞬立ち止つて（本当に轢かれてしまいたかつた）そんな事を考えている目の前へ扉を開いて下りてきた人。

あゝ、それは滝尾だつたのです。

未完

愈々好調「蜘蛛と蝶々」

あと二回、四月号で完結の予定！

# 散<sup>ちり</sup> 紅<sup>も</sup> 葉<sup>みじ</sup>

亀岡 絃七郎

女腹切八景

— — —

「お帰り遊ばしませ」

いつものように志津が三つ指ついた、あの顔の冷たい白さが映るような、その、鏡に似た式台の滑かささえ、佐七郎には、眩ゆいようであつた。

つい半刻前、桜色の臉を震わせて、微かに開いた瞳から、白い露が一つ二つこぼれ落ちた、あの風情、お万<sup>よち</sup>千の方の忍び忍びな声さえ、今も艶めいて耳に残っているのだ。

「志津どのに済まぬことゝ思う、なれど、いとしてならぬ其方、何れは共に身を滅ぼさうとも、忘れられぬさだめじやなあ」

「お方さま、思ひは同じ此の佐七郎、若しや

亦、此のほどのようなことが……」

「それを云うてたもるな、もう覚悟は出来ている」

「お方さま、不忠不義の臣佐七郎、一生の果報にござりまする」

「佐七郎」

不忠不義の臣、と、みずから口には出しながら、帰るさ、佐七郎は苦笑を思わずもろしていた。

忠とは何か、義とは何か、他律的な此の武士道の倫理よりも、更に奥深く心豊かなものが、人生には有るのだつた、愛し愛されることとが何故に悪いのか、何故に人目を忍ばねばならないのか。——尤も、今日此の頃では、奥方と彼との秘めごとば、必ずしも二人切り

の秘めごとでは無くなつていたのであつたが。——

志津が、もう少し温かい妻であつてくれたら、と思う、成るほど美貌であつた、才女であつた。然し、それ丈けに男心には物足らぬ何ものかゞ欠けている。それが、奥方との、身を蕩かし尽くさずにはおかぬ、愛慾の美酒へと彼を趨らせたのであつた。

生れ付いての美男ぶりが災いして、佐七郎は早くから、藩中の女の眼を魅きすぎた、邸に見習奉公の、町家の娘とも何時しか懇ろになつていて、勘当同然の身を伯父の家へ預けられたのが、つい二年前、彼が二十三の春である。

その時の、実家松井家の父の、苦り切つた老顔を、彼は忘れなかつた。

「次男坊の其の方、野口家との縁組さえ無くば詰腹は免れぬものを」

父が厳しく云い放つ横で、兄も困惑と憤懣の面もちを隠そうとはしなかつた。

朝早く、空えづきして黄みずを吐く娘に、母が気付いての此の始末である。

松井家と野口家とは、父親同士の懇意から佐七郎と志津とは三年前からの許婚だつた、口当りの軟かい、ものごしの優雅な佐七郎が



野口武太夫の氣に入つたのである。

「遅い一人娘、まして早うに母を亡くした志津には、温なしい、優しい婿を持たせてやりたい。おぬしの、それ、佐七郎とか云つたなあ、の次男坊をくれぬか」

若仲間の武太夫から頼まれて、松井信蔵、二つ返事で承諾した。

信蔵も志津を見知つていたから、あれ丈けの美貌なら件とも似合いの夫婦、俗に云う、冷飯喰いは、うだつの上らぬ泰平の世に、是は幸いな縁組と喜んだのである。

佐七郎にしても、細面の利潑そうな美貌を持つ志津が、彼を志操堅固なまゝにはしておかなかつたのである。

武太夫老人の取りなしも有つて、勘当を許された佐七郎が、野口家の人となつたのは、つい昨年の秋、そして彼は奥付きの勤めに就いていた。

主君の織田下野守信方は、間もなく参勤で駿府へ赴いた、その留守、奥方が慰みに催した初春の酒宴で、さまで飲ける口でない佐七郎は、強いられて思わず酔い伏した。

御前を立てて側の間に入るなり、倒れたままの佐七郎の枕もと、いつの間にか、お万千の方が坐つていたのである。……

此の日から二人の仲は、身分の隔てを超えて急速に近付いて行つた、そして当然来るべき破局は奥方御懐妊の事実となつて現れた。奥女中の驚きは一と方でない。早速、中条流を称える女が密かに召し入れられ、内密の治療を施した次第であつた。

佐七郎は、妻を愛してはいないのではなかつた。然し一つには、若年からの不行跡を顧りみて端正な志津が氣詰りであつたし、慎しみを閨にまで持ち込んで、飲びの声も袖を含んで押し耐えようと云う彼女とは、何うしても反りが合わなかつた。

懐胎のことが有つてからは、家中にも噂は伝わり、何れ此のまゝでは済まぬと判りながら、お万千の方の、三十すぎながら一途に愛慾の焰に悶える可憐さを、看過することは出来なかつた。

「女の飲びとは、此のようなものかと思う」  
お万千の方の泌々とした述懐は、多分に政略的な大名の閨門を思わせるのであつた。

「義父上のお謡が聞えぬが」

佐七郎は、ふと妻を振り返つた、いつも夕近い一とき、独り謡を染しみ、夜は若三昧の武太夫である。

「今日は、若の方で、……それより、一寸お話申上げたいことが、ござります、お手間取りませぬ故……」

「うむ、では先に聞くとしようか」

平常着に着更える前に、そのまゝ佐七郎は座敷へ入つた。瞬間、敷居ぎわから、  
「御覚悟！」

激しい声と思づかいが迫つたかと思うと、志津が体を打突けて来た、と同時に、彼は左脇腹に受けた、火のような衝撃を伴う疼痛に呻き声を挙げて倒れていた。

唐紙が、纏れ乱れた佐七郎の足に蹴外され大きな音を立てた、咄嗟に黒髪を掴まれながら、真蒼な志津の右手に確と握られた懐剣は柄まで徹るかと思うほど力一杯、佐七郎の脇腹に刺さつていた。

「うゝむ、うゝつ……」

腸を断ち切られた耐え難い苦痛を忍びながら、佐七郎は怒声を振り絞つた。

「おのれ、よくも欺り居つたわ、密夫でも出たか、……うゝ、む、一と討ちに、して、

——くれようぞ……」

足を踏んぱり起き直ろうとがす、氣ばかり焦り、自由は失われて行つた。

「お情けないお疑い、再三のお諫めも役に立

たず、今は家中のお噂、お二人の身のみでは済まじ、野口の家もとより、お主の家さえ仇しては、何と申訳仕りましようぞ、御了簡下されぬ上は、お命申受ける他はござりませぬ。」

血に染んだ刀を引きそばめ、寄り添つて美しく俯向いた志津の頬に、白い露が散つた。

「待て」

震う手に脇腹の血汐を押えた佐七郎、志津の顔を振り仰いだ。

「許してくれ、……迷いは己れ一人でない苦しさ、一そ腹切つて果てるがお家のためと知りながら、……心弱い、……それがし武士に生れるではなかつた」

ホーツと苦しい息を吐いたが、もう気力も薄れたか。

「早う、こゝを、こゝを……」

咽喉を指す手も震えながら、早や舌も纏れかかる気配、顔は臘のような不気味な白さに變つて行く、溢れる血が、どろ／＼と畳に滴つていた。

「わたくしも直ぐお跡を追ひ申します、お怨み下されますな。」

微かに肯き、眼を閉じた佐七郎の咽喉へ、懐剣が刺さつた、気管が塞がれ息は絶えた。

「あうつ……」

がばと泣き伏した志津の脳裡に、過ぎ去つた月日が走馬燈のような早さで、蘇つては又消えて行つた。

幼くて母を失つた志津は、乳母の手で育つた、日常は甘やされる方であつたが、女芸万般の躰は厳しかつた。

「片親の娘なら、あれあの通り、とは云わせようない」

と、武太夫の口ぐせだつたのである。

郎は、むかし砦のあつた辺り、古城という中流の武家郎が並ぶ一郭に在つたから、古城小町と、口さがない仲間小者の口の端に上つたのは、未だ色の恋のと判らぬ内からであつた。

十八の春、佐七郎がゆく／＼の夫と定まつた時は、満更見知らぬ仲でなし、まして家中に美男の噂高いことゝて、

「御異存ござりますまい？」

と、さも可愛くてたまらぬような眼で、乳母の見る風情も恥ずかしく、袂に隠した頬を火照らせる志津であつた。

従つて、不行跡から佐七郎が、勘当同様の身となつた、と知つた時は、頼りにならぬ男心、とも悩み、また若し、妻の我が身が付き

添つていたなら、そのような不祥は無かつたものを、とも悔み、鬱々としてしまなかつた。

俄かに臥りがちとなつた娘の気を酌んで、武太夫が松井家へ申入れ、勘当も解けて佐七郎が野口家の人となつた、僅か一年目に手ずから夫を刺さねばならぬとは、志津の思いもよらぬところであつた。

奥勤めとなつた初春の宴に、奥方のお覚えめでたく、御酒を賜つたと聞いて、野口家のため、佐七郎のため、有難いことと喜んだのも仇となつて、……

（流産なされたあとは、必ず直ぐまた宿るものと聞き及びまする、嫉妬の心で申すではござりませぬ、主家のため、我が家のため、きつとお考え直して下さりませ。）

必死の願ひであつたが、佐七郎は有耶無耶に聞き流していた。

もう末の見込は無い、命にかけても家を守らねばならぬ、と志津の決心は哀れであつた。奥方とお合せした肌と知つては、夜の衾に身も心も燃え上る事も、稀となつて。――

留守の夜は、宿直と聞けば猶のこと今頃奥方と、と思う身の、女盛りのいとおしさに、我と我が身を慰める夜も屢々であつた。

女の幸は諦めた今、たゞ家を守り、そして  
 自分も死にたい、そう願いつつ、我が指の切  
 ない動き、誰が見るでない、たゞ我が心に羞  
 恥し、責めるような、慰めるような、揚句に  
 刃傷と自害への決心が、彼女の心の内に形作  
 られて行つたの  
 である。

佐七郎を刺し  
 た上は、予ての  
 決心通り自害を  
 と、思いながら  
 に、志津は、未  
 だ冷え切らぬ死  
 骸に縋つたまゝ  
 泣き崩れていた

——二——

「おしづ、遅か  
 ったか」

大声で呼びか  
 けて、武太夫が  
 駆け入つて来た  
 制限を見計つて  
 志津は砦会所へ  
 仲間を走らせ、



刃傷せんと書置きを、齎してあつたのであ  
 る。

はつと頭を上げた志津は、  
 「お父上、是を」

袂から取出した一通の封じ文。

「是がまことを  
 書置き、直ちに  
 お焼き捨て下さ  
 りませ、夫と奥  
 方様との秘めご  
 と、もはや秘め  
 ごとで無うなり  
 ました。身を棄  
 て、お家と我が  
 家の安泰を計り  
 たさ、なれど、  
 お上には、痴話  
 喧嘩の果ての刃  
 傷と思召されま  
 すよう、先ほど  
 の書置きを、五  
 平に持たせたの  
 でござります」  
 涙を見せじと  
 背けつゝ差出し

た文を、受取るなり読み下した武太夫、  
 「何故に早う、わしに申さなんだ、不縁すれ  
 ば済んだものを」

「いゝえ、父上のお言葉とも覚えませぬ、一  
 旦縁組した上は、夫の不行跡、たとえ離縁致  
 したとて、すべて野口の家に関わり無しとは  
 申せませぬ、主従が三世なら夫婦は二世の道  
 理、親子の縁より猶深い、此の上は志津、此  
 の場で自害仕りまする」

ひたと手を交えた娘に知れず、武太夫は眼  
 頭の涙を払つた。

「ならぬ、父が帰らぬ先ならば知らず、夫殺  
 しの重罪は氣まゝに自害もさせられぬわ、さ  
 りながら、よう覚悟して計つたものを……」

男手一つに育て上げた娘の不運に、武太夫  
 は云うべき言葉も無かつた。

「先立つ不孝の罪、お許し下さりませ」

泣き崩れる志津の背を撫でながら、武太夫  
 も暗まさり行く部屋に瞳を凝らしたまゝ、涙  
 の流れるまゝに坐つていた。

刃傷の次第が即時に駿府へ注進された。

信方は、健気な女、定法は重科ながら、父  
 の武太夫が勞に免じ、武太夫に任せ、と自害  
 を許した。



その当日を迎えて、武太夫は落着かなかつた、早朝から身を清めた志津は、詰めかけた縁者の一人々々に別れの挨拶を済ませ、素湯だけを口にして、今は最期の身じまいに忙しいのである。

昨日、恩命を伝えようと、閉じ籠つた志津の居間へ入つた時、武太夫は、一腰色白く端麗さを加えた娘の表情に打たれた。

明り障子に、さつと鳥影のよぎるのを見てから、志津は静かな瞳を向けた。

「父上、佐七郎臨終に申しました、一そ腹切るがお家のため、と思いながら、心弱い、と悔んで果てました、自害を許されました上はわたくし佐七郎に代り切腹仕りまする」

「何と申す、武士でさえ切腹はなか／＼に潔うは出来ぬものを、女の非力、万一、仕損じたら何とする」

武太夫の危惧は尤もであつた。

「いゝえ、苦しいことは覚悟致して居ります。一つにはお上への申訳、更には夫へのわび、ほかに志津の致しようはござりませぬ」

凜然と云い切ると志津は瞳を庭へ向けた。櫓の木が鮮かに紅葉している、暗然として武太夫が、きびしい志津の横顔を見守つてゐると、ゆつくり彼女は、独り語のように口を開

いた。

「わたくし、もの心ついてから櫓の紅葉が好きでござりました、燃えるだけ燃えて、潔う散りまする」

わたくしは、思うまゝに燃えることも無しに、とは言葉に出なかつた、微笑んで

「よいものを見納めて死ねます。」

十年の昔を今に、清々しいあどけなさが浮かんでゐた。――

あれなら大丈夫、見苦しい真似はすまい。

と思う、然し万一切り損じたら、女だてらに切腹などと大それた、後々の評判が気がよりな武太夫である。

検使到着まで少し間が有つた。

武太夫はそつと志津の居間の襖を開いた。髪を後ろに高く取つて結び上げ、頸筋を白く見せた他は、平常と何の変りもない、薄く

刷いた白いものも、しつとりと肌に付いて、冴え／＼と志津は、死仕度に忙しかつた。

「父上、何となされまする」

後ろ手に隠し持った大刀は、既に志津に感付かれていた、鏡に映つた武太夫の表情が、それほど切迫してゐたのである。

「うむ、そなた、あゝは申しても、其の場面に及んで気怯れやせんと、親の迷い、許せ」

一つには、口にこそ出さね、愛しい娘が苦痛に耐えて我れと我が腹切るさまを、武太夫は正視に忍びないのであつた。

故。」

云うなり志津は、鏡台の剃刃を取つた。

「御免なされませ。」

ずいと、裾を聞き、むつくり肉付いた太腿の中ほどを、さ／＼と一と引き、忽ち血が噴き上る。

「布を」

顔色一つ変つてゐない。驚きと怖れに真蒼な女中の手から、有り合う端切れを取ると、手早く巻き締めた。

「着替えまする。」

父に、あちらへ行つてくれ、と眼で合図した。

武太夫は庭へ下りた。軟かく朝陽に照り弱る苔を踏み、櫓の紅葉を見た。

「志津！」

口の中で呟き、鼻が、じーんと疼くのを覚えた。急に、疲れのような胸苦しき、節々の切なさを感じ、老いを思つた。

右手の離れ座敷に、切腹の支度が見えた。椽へ上り、裏返した畳を巻いた白布に、た



るみつないのを見届けてから、玄関の方へ行つた。

検使の三村小兵衛と立会の木村新八郎が設けの席に着いてから、志津は、二つ重ねの白無垢姿で、白布の中心に坐つた。

ひたと手を支え

「お役目、御苦労様に存じまする。」

挙げた顔は、平常と変らぬ端正であつた。

そこへ、部屋使いの小女が三宝を捧げて、

おすくといざりよつた。青白い切先を三寸余り残して、柄まで白紙で巻きこめた腹切刀である。捧げる手が細かく震え、小女は唇まで蒼かつた。きちんと揃えた膝の前へ三宝を置かれて、軽く会釈する志津と瞳が合うなり小女は崩れるように俯伏した。嗚咽が切れ切れに聞える。

「さと、早う退れ。」

武太夫が見兼ねて声をきびしくすると同時に、志津は帯をゆるめ、腰骨の辺りで締め直した。

白無垢の右肩を滑らせ、次いで左肩を思い切りよく抜くと、咽喉もとから胸乳へかけて艶やかな肌が惜しみ無く露れる。

きつと唇を結び、帯ぎわへ白無垢を押し下げると、右手を伸ばして三宝の刀を執つた。

左手を副えて押戴き、巻き締めた紙の中ほどを破り、握り直した志津は、左掌で臍の辺りから、ゆつくり撫で上げた。真白に張りの豊かな肌を、さら／＼と細波のような翳が見えかくれ、居合す人々は思わず息を呑んだ。

静まり切つた緊張の中で、右腕を廻して切先を左の下腹へ当てがい、志津は大きく息を吸い込んだ。

「待てッ」

突然、武太夫が声をかけた。突立てようとする手を、はッと押止めた志津は、詰るような瞳を父に向けた。志津の手もとを見つめていた人々の方が、ホッと思を吐き、空気が一瞬揺れ動いた。武太夫が口を切つた。

「切腹に介錯人は有るはず、今日の介錯は如何でござろう。」

小兵衛と新八郎は顔を見合せた。よもや女の身で、まこと腹を切ろうとは思えず、乳下心の臓を突くか、咽喉を刺すのであらうと、介錯の儀は何の達しも無かつたのである。

「尤もの次第、上より達し無ければ、直ちに詮議致させ申す。」

小兵衛は言い終ると共に新八郎へ、眼で合図した。その合図で、新八郎が座を立つた。その時である。

「不束ながら、お騒がせも恐れ多うござりますれば、此のまゝお暇仕りまする。お見届けのほど願ひ上げまする。」

言いさま、今一度、腹撫で下した志津は、発止と脇に切先を突込んでいた。次の瞬間には、左掌が柄頭を押し、刃の光りは、悉く腹に喰い込んで、刃を巻いた紙に血が滲んでいた。

「むうッ」

と低い呻きであつた。立ちかけて又膝を折つた新八郎へ、軽く目礼したまゝ、両掌に確りと刀を握りしめ、志津は血の気の引くほど下唇をかんだ。

白く膩づいた臍下一寸の、ふつくらと湛える肉を、刃は横一文字に裂いて行く。

その動きにつれて、切口には真白な肉が見え、次いで、ぱ／＼と血が噴き溢れて来た。

白く冴え返つた志津の額の、生えぎわの辺りに、つぶ／＼と脂汗が浮かんだ。右脇迄充分引き付けて引き抜いた刃先を、やゝ前のめりになつたまゝ、熟れ切つた両の乳房の谷間やゝ低い辺りに震える手で押し当てた。

大きく喘いだかと思うと、紅の糸を乱したように血の流れる傷口から、厚い脂肪層が血を弾いて覗けた。それにも構わず、

「ううむッ」

腹から絞り出すような呻き、切先は鳩尾に刺さつて、左掌が上から柄を押している。

激痛に蒼白んだ頬が、異様な美しさを保ち血にまみれた手も小刻みに震えてはいたが、志津の意志通り、臍下へと刃を押し下げて行つた。

新八郎が、つと立上つて志津の背後へ廻つた。臍のやゝ右横を刃が切り下げたとき、

バサッ

と音を立て、志津の首は前に落ちた。片膝ついたまゝ、新八郎は凝然と動かない。

血が斑々と白布にしぶき、武太夫も小兵衛も、その血の色に見入つていた。

つい先に掃き清めた許りの庭に、櫓の紅葉が二つ三つ、是も亦、血のような赤さで散つている。

未だ卯の下刻には、少し間が有るようであつた。

(完)

東京都墨田区諸地町(前回須崎は誤り)に鎮座する高木神社は、祭神宇賀内魂にして天慶年間の創建と伝えられ、此の社に七五三繩祭りの珍らしき行事がある。

氏子の農民が各自の田から取つた稲を二尺大の太さの長いシメに造つて此の神社の鳥居を十重二十重に縛る行事で、此の繩の全部を大八車に積んで球燈を沢山に飾り神社正面の石の鳥居をグル／＼巻きにする。此の繩を巻く人々は非常な意気込みで、各村競争で若い者が鳥居の上へ飛び上つて繩を巻くのに優劣がある。

此神社に面神楽というものがあつたのは明治時代の事でその面神楽というのは略、能舞台に現れるのと能く似た形式のもので、飛出や能曾利の様な能楽まがいの面と

それに相対的な半被や大口などを着用して黙阿弥の脚本をやるといふのだから、八王子の車人形などより現代的で図に示したのは黙阿弥作「新血屋敷お蔭の賣場」で磯部主計助に扮したのが、日本武尊と同じ形で、岩上五太夫の役が普通の「馬鹿」のこしらえて、これで

### 口繪の解説

## 面神楽について

伊 藤 晴 雨

面の中でセリフを云つて芝居をするのだから珍中の珍で、これを見たものはアツ氣に取られて居るが此の他に岩見重太郎の狛々退治や、宮本武蔵なども上演される。引幕は使用するが大道具を用いない処が流石に神楽の本質であろう。現在でも此の面神楽は川越市の附近に残つて居ると思われ、其の創始者

葉を發せず、全部手真似を以て表現するのが神楽の原則となつてゐるのが、明治時代から茶番狂言と能面人形の間を行く様になつて其の結果が此の面神楽という神楽とでは異端なものを生んだのであるまいかと考えられる。而して

責められる女は羽衣の天女のような面をかぶり、髪はこれも能楽の下げ髪、譬えば「桜川」の班の様な「かしき」という冠り物で、かつら巻き無しに凄味と色氣を見せる為には添毛をしてある。可笑しく感じるのは神楽師の黒い顔に面丈け真ツ白なのと面の中から出る女形のセリフは妙な風に響いて来るのが疵であるが演る事は相当に、歌舞伎に近い賣場も十分にやつて、井戸は実物の井戸側を使つて居た。私の見たのは明治時代であつたから、現在こうした珍しい芸術が行われて居るか否かは判然しない。

(本号口繪芝居の図参照)

×

×

# 裕子とお仕置

——裕子の夜ばなし(二)——

古川 裕子



「裕子の夜ばなし」がマゾヒズムの女の心理の詳細についてお話するのが目的であることは、その一、「猿轡と私」を読んでくださったかたがたには、よくお解りでございましょう。

今回は、私—裕子とお仕置について述べたいと思います。お仕置とは云うまでもなく、何か悪いことをした時に受ける懲罰の行為であつて、これは本質的に受け身のものです。「お仕置と云う言葉は、あくまで人から自分にされるものであることの実感を良く表わしていると思います。「折檻」と言う言葉は、もつと厳めしく、何か苦痛をともなつて響きます。まして「責め」なる言葉は、更に陰惨で余り愛情を感じることが出来ません。そこ

へゆくと「お仕置」と云う言葉は、語感が柔かく、懲罰を意味するにしても、如何にも、それを受ける人に対する愛情を感じさせます。私はやはり女です。たとえマゾヒストではあつても、そう言う遊戯には、お互の間の愛情が欲しいのです。純粹のサディストの男のかたは、全然相手の女のかたに対する愛情なしに、その行為だけを楽しんでいらつしやるのでしようか。そのような場合には、「責め」という言葉がよくあてはまります。相手の女の人が、ただ一個の女体という物質であつてこの物質を（やわらかく、重くあたたく、しめつばい物質を）縛り、猿ぐつわを嵌め、吊りさげ、鞭打ち、くすぐり、哀願させ、悲鳴をあげさせ、うめかせ、悶えさせ、屈伏させる。その行為だけに興味を感じて、一人の人間としての被害者の女の人には何の感情も持たないものでしようか。

たしかに純粹な意味では、その方が本当でしょう。恥しいことですが私自身、（私の心とは別に）その行為だけを、一縛られ虐げられるその行為だけである程度の本能の満足を感じ得るのです。それ故に、「続・囚衣」や「凌辱の幻想と期待」に浅間しくも告白したあのような行動があるのです。本当に残念な

ことですが、真からのマゾヒストである私はあんな行動を現実に行っているのです。だから、真のサディストのかたが、その加虐行為だけに本能の満足を感じることは、我身を顧みて良くわかるのです。

しかし、（と私は思います。）あんな行動をする私が、このようなことを云うと、わられるかも知れませんが、私は、その上に加虐被害の行為の間に「人間の愛情」が欲しいのでございます。そのことは、余り虐いたげず、余りいぢめぬかないで欲しい。そんな行為にも、何らかの手加減が欲しい、というのは決して、ないのです。いくら強く縛りあげてもいい、悲鳴をあげ、呻き悶させてもいい、一切の自由を奪い、ドレイとしてあつかわれても結構です。ただそれを私に加える男のかたを私は愛していたい。そしてその方は（もし出来るなら）心の底に私への愛情をもつていて頂きたい。加虐被害の行為が二人の幸福となりこの行為に依つて、二人はもつと親密に、もつと愛し合えるようでありたい。二人でこの行為を楽しみ、これらの行為が、二人の愛の樂園でありたいのです。

そんなのは、マゾヒストのお前には、贅沢だ、マゾヒストはマゾヒストらしく、ツベコ

べ言わず、余計な要求など出さず、大人しく虐げられていればいいのだ。お前はドレイ、ドレイに何の意志が、何の権利があるか、と私をしゃりつけるかたもございましょう。でも私は出来るなら前者のようでありたいのです、「お仕置」と云う言葉には前者の雰囲気があります。「責め」と云う言葉には後者の臭いがします。私が敢て標題を「責めと私」とせずに、「裕子とお仕置」としたのは、こんな想いからなのでございます。

ともあれ、私は「お仕置」を受けることが好きです。本来ならば辛い懲罰であり、何とかして避けようとする筈の折檻を、自ら進んで受け、しかもそれに陶醉するなどは、何と悲しい宿命なのでしょう。

お仕置を充分効果あらしめるには言い換えれば、もつとも楽しくお仕置をうけるには、それが、精神と肉体の両方面から私に下されねばならぬのです。

肉体的に懲罰を受けることのほかに、精神的に私は「罪人」だと云う意識が必要なのです。そのためには、囚人として女囚として扱われねばならぬのです。刑の申し渡しを受けそこで手錠を嵌められ、囚衣を着せられる。判決は石畳や廊下の板敷に正座させられ、う



なだれて、その云い渡しを受ける。申し渡された刑の重さに依つて着せられる囚衣の色が違ふ。そのような芝居染みた、一見無駄と思われる手続が必要なのです。

更にお仕置には、単なる苦痛のほか、精神的な凌辱感をともなつていなければなりません。ですから嵌められる猿ぐつわも夫の分泌物に汚れた下帯であつたり、又自分自身の分泌物のついたズロースを利用されたり致します。つまりこう云つたことは、かくもみじめにとり扱れているとの凌辱感が大切なのであつて、多くの場合苦痛よりも、もつと重視されるのです。どうもお話が理窟つぽくなつてきました。この辺でもつと実地的なことに返りましょう。私にとつて「お仕置」の陶醉の第一は、まず縄で縛られる瞬間にあります。大人しくひざまずかされて思うさまに括りあげられる場合もありますし、出来るだけの抵抗を命じられ、遂にねじふせられ、馬のりにのしかかられ手を背中にねじあげられ頬を畳みにおしつけられて、ぎりぎりと縄をかけられ、髪はみだれ、猿ぐつわで頬もゆがむ無惨な縛られかたをする場合もあります。

何れにしても、この時には私は一切の想念を去つて、ただこの遊戯にのみ熱中致します。

ます。前者即ち一切の抵抗を許されない場合には、向うむきに素直に正座致します。大抵この時は既に全裸にされているか乃至は腰巻又はパンティ一つに剥がれている場合が多いのですが、縛る人即ち私の場合には夫がゆつくりと私の右の手首をとつて背に廻し、縄のさきに、あらかじめつくつてあつた輪を手首に嵌め、ぐつと締めます。これだけで私の下半身は、ぶるつとふるえ身体が熱くなつて来ます。次に左の手首を背中中で重ね、縄は両方の手首に十字に交叉して嚴重に括られてゆきます。更にその縄は首にかけて思い切り締めあげられますが、この時の咽喉への縄の喰ひこむ感覚は、たしかにマゾヒストの欲びの一つです。ただ、獄様も指摘されていましたように、この縄が咽喉仏（むつかしく云えば甲状軟骨と云うのだそうですが）より上にかかつて、締められますと、大して締めなくても呼吸が出来なくなり、悪くすると失神致します。私もその経験がございますが、苦しくて（しかし快感はありますが）すぐに苦痛が余り強くなりすぎ、更に危険ですので、特殊な趣味のかたのほかは、注意してこれをお避けになつた方が宜しいのです。咽喉仏より下ならば、相当つよく縄が喰ひ入つても女で比較

的肉附のよい私などに細い細引縄が、肉で見えなくなる位、締めても、苦しいことは苦しいのですが、失神するようなことはありません。首縄を強くしめますと、嫌でも仰向になり、両方の乳房が突き出すような恰好になります。私の場合は、大きな鏡の前で縛られるのが例でござりますので、このような自分の姿は何と申しても刺戟的です。縄は更に脇に廻り股をくぐり時には足首をむすばれます。股の縄は、吾妻新様が御推奨なさるところですが、女にとつて、たしかにこれは刺戟的な――余りに刺戟的な――方法です。私はこうして、一つ一つ念入りに縄をかけられてゆくその過程が身に沁みてたのしみなのです。腕の胸や首や股や足首の皮膚にだんだんと縄がかかり、皮膚の縄の摩擦、ぐつと締められる感じ、その過程に於ける、こまごました感覚的快感を充分に味えないような荒っぽい情持の持主は不幸なマゾヒストだと云いたい気持ちです。本当にハシタないことを申しますが、そう云うよりほかはありません。上半身をすつかり縛られ、裸の腰をかかえられて、ずるずると引きづられ腰を高くして、両足、両股で柱を抱かされる縛られ方は、イデーとしては決して目新しいものではありませんが、実際

これをやられたり（又男のかたから、女の人をそう云う姿にして）ごらんなさい。身も世もない情感のときめきを感じるでしょう。女にとつて、最も恥しい部を、いろいろな方法で無理に露出されることだつて、例えば「奇譚クラブ」の誌上には、いくらか絵や写真に出ています。しかし絵や写真では駄目なのです。実際におやりになつてごらんなさい。又は、本当にそのような恥しい目に会わされてごらんなさい。その身振いをするような刺戟には、圧倒されてしまうことでしょう。

出来るだけ抵抗を命ぜられた場合には、私は本当に抵抗します。手加減をして、よい加減のときに、わざと力尽きたふりをして縛られたりすることは、絶対にございせん。ですから、これをするときには、最後に雁字がらめに括られた私が床の上に転がされたり、柱に身うごきも出来ぬ程、ひしひしと縛りつけられてしまうまでは一時間もかかることがございました。時には普通では夫の手におえず革鞭で叩きすえられて、やつと縛られたりゴム引のレインコートの端で口と鼻とおさえつけられ、呼吸をふさがれて、なかば窒息状態にされてから括られたりしたこともありまふ。でも何と云つても男と女の体力の差は

殆ど問題なく必ず私の方が負けます。結局はあばれれば、あばれる程、強く、むごたらしく縛られてしまうだけです。夫も、この時は本当に夢中になつて、遠慮して縛るなど云う余裕を失つてしまいますので、縄の締めあげかたも、自然尋常一様ではなくなつてくるのです。二人とも全裸で組合い、大抵は私が夫の膝の下に組みしかれてしまうので、お互の皮膚の触感が、ひどく煽情的でございますし、やつと目的を遂げ、私の自由を奪い去つた夫の、そのあとのお仕置は、大人しく括られた場合の比ではございせん。思い切り恥しい目にあわされ、辱されるのは、特にこのような場合なのです。私たちは、このようなことを「囚衣」に於てお話した地下室で行いましたが夫婦同士、自由にこんな遊戯が出来る環境を持つていらつしやる方は、すくないのではないかと思います。ですけれど、たしかにこれは新鮮な、肉体的にも精神的にも充実した性技と申すことが出来ましよう。まるで原始時代にかえつたやうです。夫婦の間には、時には、こんなことも必要なのではないでしようか。

しかし私たちのようなのは特別かも知れまふ。一般には、（正常なかたが、時に気分

転換のために異常な遊びをなさる時には）もつとおだやかに上品になさるのが良いでしよう。その場合の御注意を少しつけ加えておきましよう。第一に苦痛を与えることを主とするより、愛する旦那様から、「愛のお仕置」を受けられる気持で、自由を奪われ、旦那様の思う通り、どんなことをされても抵抗出来なくなつたその気持をお楽しみにすることです。「凌辱」などと申すと、ドギツすぎましよう。こう云つた時には、縄はなるべく柔かく、やゝ弾力性をもつた絹縄使用なさるのが宜しいのです。そんなものの御用意がなければ、昔ながらの「しごき」や旦那様の兵児帯御自分の「腰紐」などで結構です。むしろこれらの方が、お互いの身についたものだけに却つて気分が出るかも知れまふ。そしてやはり後手が良いでしよう。でも手首は、動かせず、ほどけない限りに於て余り強く縛られないことです。手首が一番痛みがこたえるところだからです。血の循環がとまつてしまふまで締めるのは（少くとも一般の方々には）不必要であり、逆効果でさへあります。首縄は、おかけにならず、すぐ胸にお廻しになつた方が宜しいでしよう。股間を縦に縛るのはむしろ「通人」の趣味に属して、一般には最

後にはコイトスを行う前戯的なものであります故、そのようなことは、お避けになる方が賢明だと思えます。

猿ぐつわは、おはめになつた方がいいでしょう。でも、これは口の中に一杯に布をつめたりする本格的なそれである必要はありません。猿ぐつわを大変嫌がる奥様方も多いと思います。でも夫の方にすれば、大抵は猿ぐつわを奥様が嵌められている姿は、相当の刺激になることでしょう。ですから手ぬぐいで口と鼻（乃至は口だけ）をおうて頸のうしろに結ぶ程度にはなさつたらいいと思います。この程度でしたら用いられた布が、法外に厚くない限り、我慢が出来ない程苦しいわけはありません。せいぜい普通のマスクと同じ程度です。そして見た目は、切れの長い目が媚と恨みをふくんで旦那様をじつと見る雰囲気を感じることが出来ます。たゞ猿ぐつわは当然接吻の邪魔になります、手拭をとつては、抵抗出来ぬ奥様の唇を充分に味い楽しみ、また猿ぐつわをしてしまうと云うのは一興でございませう。猿ぐつわに不潔な布——たとえば旦那様の下帯とか、奥様のストッキング、ズロースなどを用いられる場合は、余程の前準備が入りましよう。充分に奥様の意向をたしか

めてからおやりにならないと、一刻のたのしみも、思わぬ結婚生活の障礙とならないでもありません。

総じて、お仕置は余り長時間に亘ることは良くありません。殊に奥様の方が、お仕置中に興が醒めてくると、ただ不愉快なだけになつて、何のための遊戯だか、わからなくなります。良い加減のところで、正常の行為によつて充分に満足させてあげることが必要です。かくして段階を追うて順々に馴らしてゆけば遂に悍馬も之を統禦することが出来るようになるのです。焦つては駄目、根気よく訓練してゆくことです。余りサディズムやマゾヒズムの傾向が強くない方々の、たまの遊戯は右の程度で、充分にお互に思いやつて、遊ばれば、これは夫婦の和合の一つの新鮮な方法となり得ましよう。

いや、お話が、私自身を離れて、おこがましくも、正常の皆様には何か威張つてお教えしているような有様となつてしまいました。ごめんなさい。私自身のことにかえりましよう。私は自分でも驚く位徹底したマゾヒストのようです。ですから「お仕置」に手加減は、余り必要ではないのですが、それでも、いつも最高刑を加えられるよりは、罪の軽重によ

つて、いろいろな段階があり、それに従つてお仕置が行なわれる方がいいのです。一つは多分に精神的な要素が必要なのです。ですから、お仕置に用いられる道具、縄や枷や鞭や棒なども、いろいろなものを用意し、又その組合せに変化を与えてマンネリズムに落ち入らぬようにお互いの努力がいらいます。たとえば縄ですが、私は殆どあらゆるもので縛られた経験がありますが、一般に縛られる方としては、二つの方向があります。つまり受ける「苦痛」を楽しむか、縛られるという雰囲気を楽しむかです。それによつて選ぶものが違つて来ます。

「苦痛」を受けることを楽しむならば、又男の方として相手に「苦痛」を与えようとするならば、縛る縄としては、鎖や荒縄（又はしゆる縄）、ゴム管などを用いるべきです。しかし快感と致しましては、鎖は余り適当なものではありません。強く縛れませし、不必要にゴツゴツしていて、「縛る道具」としては、私は良いとは思いません。たゞ鎖は視覚的效果がありますので、これを女体にまきつけることを好まれる男性もございませう。鎖は、むしろそれ自身で縛るよりも、手錠や首枷につける方が効果的です。見た目と如何

にも刑具らしく、鎖のふれ合う音は刺戟的でしょう。足枷の鎖をならして歩くなどは、

たしかに特異なエフエクトがあります。鎖の本当の使い方は、首枷につけて犬のように柱につないだり手枷や足枷をつなぐために用いることです

荒縄やしゆる縄もやゝ鎖に似ています。これで、しつかりと縛られることは相当以上の苦痛となります。しかしこれは割合に加減が出来ますし凌辱感もあります。私は鎖よりは、この方が好きですが、これとてもいつも常用すると云うものではありませんまい。

荒縄などは、どうも感覚的にも古さを感じます。荒縄には日本髪を連想させます。伊藤晴雨さんのお描きになるものに出てくる女のかたに似合いそうです。

でも物置内でお仕置を受けるような場合には、荒縄でなければ、どうもしつくりしないと思われる時もあります。何れにしても私の場合は荒縄やしゆる縄は、もつともよく



用いられるものではないことはたしかです。

「苦痛」と云う点で最も直接的なのはゴム乃至はゴム帯でしょう。これは縛られた直後はさほどにも感じませんが、時間がたつにつれて苦痛がいやまさり、到底長い間これでお仕置を受けているわけにはゆかなくなります。止血帯に用いる位ですから、縛られた部の静

脈を止め、じわりじわりわね肉体を

責めて来ます。お医者様の様な聴診器のゴム管程度のもが一番苦痛が多いものです。却つて幅広いゴム帯の方が楽ですが、楽だと云つても程度の問題で、概してこれらは、お仕置を始めるための基礎たる自由を奪うに用いるよりも、それ自身が折檻の方法となり得るものです。鞭打ちや、くすぐり責めや、海老責と同様に折檻の一つの方法なのです。獄様のお書きなるもので御紹介されました刑務所の革の錠や搾衣と同じ原理なのです。ですからこれもそのようにして用いられ面白い道だと申せましょう。

そのほかには電燈のコードや針金があります。これは絶対に切れない点で、よく本当の強盗などが侵入した家の人々を括るのに用いるものですが、これは鎖と同感覚のもで、何となく微妙な味がなく私は余り好きではありません。

人を縛るために一番よく用いられるのは、う何と申しても麻縄（細引）でございまして



これは適当に硬く、適当に柔かく、且つ弾力性もある程度そなえており縛られる感じはまことに微妙なものがあります。ごく平凡なものですけれど、ある意味では、「縛られる感覚」のあらゆるものをもつており「お仕置」の楽しみはこの細引で縛られる微妙な味を充分に理解し陶醉することによつて始まるときえ云いたい位です。私の場合、細引が一番愛用されました。もつとも細引（麻縄）と申しても、太く硬いゴツゴツしたものから、使いたれた軟かいものまでいろいろあります。やゝ細めでしかも柔軟なものが最も結構です。私はそのような細引が好きですが、一般のかたには、むしろ刺戟が強すぎでしょう。麻縄よりも、もう一段やわらかい綿縄が宜しいと思います。これでしたら相当強く縛られてもそう痛くありませんし、視覚的にも細引と同じ効果があります。私はこれを御すゝめ申しあげたいと思います。それでも猶むごたらしくお思いになるかたがたは、兵児帯や腰紐を用いられるのがいいと思います。このようなものは、すぐ手近かにございますし、ごくやわらかく他のものにはない色彩の刺戟もあります。女のかたを裸にしてゆく過程で多くの

紐類を組合せて、そのまま自由を奪つてゆくなど、仲々悪くございません。全裸の白い胸ふくよかな乳房のあたりに赤い腰紐が喰いこんでいるのも風情があります。

とに角、女を縛るものは、なる程単なる道具にすぎず、何でもよいわけでございますが加虐被虐の遊戯は、もつと繊細な感覚を味うものののです。この遊戯の細部に亘る繊細きわまる微妙な感覚を、お互が感じ得られる限りそれは永遠に興味のつきないものとなるのです。荒つぽい。たゞむやみにいちめたり、いちめられたりするだけでは、じきに厭きが来て、より一層強い刺戟を求めるのは宜しいが、そのために身の破滅を来すようなことにもなり勝ちです。こゝに深いおとしあながあると知るべきだと思います。このようなことにも理性と感性とが必要なのです。それがあつてこそ、長つゞきもし、一層の甘美な陶醉も味わえるのでございます。

「おやおや又お談義になつてしまいました。お話を先にすゝめましょう。」

お仕置の時の服装はいろいろです。多くの場合は結局半裸又は全裸にされてしまいますけれど、すくなくとも最初はずいぶん囚衣をつけています。私たち（私と亡夫）は「囚衣」に

も書きましたように、ゴム引のレンコート（あのごく普通のラバーシルクと云つてゐる絹地で裏がゴム引になつてゐるもの）を使い、罪の重さ、刑の軽重に依つてその色を区別していました。これは私と夫とが、ぬめぬめして冷たいゴムの触感に特別な興味を持つていたからでありまして、一般に通ずる普遍的なものではありません。私はこのゴムの触感に対する異常性を、マスクに対するそれと同様に母から受けついたのであります。何故なら、「猿ぐつわと私」でお話したように、私のオナニーへの折檻の場合、母はよくゴム引のマントをすつぽりと縛りあげた私の身の上にかぶせて、雨の中の樹にくゝつたからです。このゴムマントの感覚とオナニーの性感とが結びついて現在のコンプレックスが形成されたと云うべきです。

夫の場合は少年の頃、始めて父母の寝室をのぞき見た時、父がコンドームをふくらましており、後に父母の手文庫からそれを見つけだし、ひそかに………見て異常なリビドーを感じてから、ゴムの触感への執着がはじまつたのだそうです。いずれにしても私たち夫婦は、こんな感覚まで共通していたのです。

ですから、そのようなコンプレックスのない、一般のかたがたにとつては、ゴム引のレインコートなどには、何の特別な興味もございませんでしよう。事実、あれだけ普及している女のかたの、この種のレインコートに対して、私たちのような感覚を持つたかたがあるように思えません。従つて「囚衣」としては、何でもいいのですが、白や浅黄や赤で筒袖の単衣でも作つておかれると面白いでしょう。尤もそれが面倒ならば、普通の着物で結構です。昔から長襦袢などは、このような場合に愛用されていたのですから、大体本当を申せば、全裸であるよりは、何かを僅かにまとつていた方が趣があるものです。肉体がすきとおつて見えるビニールのレインコートを着て、その上から縛られるなどは、誰でも思いつくことでしよう。嶽氏は、赤いシャツと赤パンツを好んでいられるようですが、夫々個人的にいろいろなコンプレックスがあつて、銘々好みのものを撰択すればよいと云うことになりそうです。

「お仕置」は夜だけ行われるとは限りません。いやむしろ制約さえなければ随時随所で行なつて然るべきものでしょう。私たちは、子供もありませんでしたし、男もなく、又住宅的

にも比較的恵まれておりましたので、「長期刑」にも書きましたようなことが、実際に行い得たのです。実を云えば、お仕置は夜よりも昼の方がスリルに富んでいます。お仕置の複雑な快感に、更に精神的な冒険感が加わるのです。

夜などですと照明の具合にも注意がいります。赤いシエードなどをかけて雰囲気を深め陰影を加えるのも一法ですが、逆に思い切つて明るくして行うのも悪くありません。

「お仕置」は、その行為だけを楽しみ、それだけに満足し得る人は、相当の異常だと云えましょう。私たちは、正常のコイトスは殆ど行なわなかつたのです。それは一つは純粹にそれらの行為だけで満足し得る程、私たちが變つていたこと、それから、もう一つは、子供をつくりたくなかつたこと、この二つの理由からでした。しかしこれは、特別であつて一般には、前戯的なものでありましょう。そしてその方が健全だと思ひます。

私は今まで、このような行為を「遊戯」と云う言葉を用いてお話し致して来ましたが、私にとつては、むしろ「遊戯」どころではないのです。もはや「生活」と云つてもいいかも知れません。これがなくては、人生の充実

感を感じ得ないとは、何と悲しく、何と喘ぐべきことでしょう。私は女でございますけれど、このことで所謂「世間体」を気にしてはおりません。

とは云うものの、自分の内心の声を扱い兼ねています。理窟ではたしかに、安寧秩序を害するわけでもなく、純粹に個人的な問題であつて、何ら他人とは関係のないことなので、すから、誰に遠慮することもないいいわけです。それは良くわかります。でも、そう云う理窟を超えて甚だ漠然とした罪惡感とも云うべきものが、私の頭の中から、どうしても消え去つてゆかないのです。これは多分、少女時代からの教育のしからしめたことでしよう。私がたとえば吾妻様の「感情教育」中の奥様のような、ゆきとどいた訓練を受けたならば私はもつと單的に、もつと開放的に心の底から堂々と楽しめるのでございましょう。或は逆説的に云えば、その罪惡感が、私の行為をもつと陰影深く、マゾヒスティックに複雑な情感を有するものとしてゐるかも知れません。つまりこの罪惡感は、私のマゾヒズムを裏返したもののようです。

またマゾヒズムと申すものは、一人で二役をするものです。「お仕置」をうけている苦

痛や快感をたのしむと同時に、自分の姿を鏡にうつして、男のかたから凌辱されている自分の姿を客観的に見ることによつて、更に楽しんでゐるのです。これはどなたも同じ御気持ちでございましょう。だからお仕置には「姿見」がつきものなのです。ある意味では精神的なオナニーだと云うことが出来るのです。

マゾヒズムの心理の迷路に入りこみますとかぎりがありません。おそらくは専門の精神病科のお医者様や、精神分析学者ならば、もつともつと深くサディズムやマゾヒズムの心理をえぐる事が出来るのでございましょうが、無学な私には、自分自身がこの程度にしか解りません。

つたない筆で長々ととりとめもなくお話しを来まして。冬の夜は長いとは云え、もう大分夜がふけてきました。

今晚はもうこの辺でやめましょう。熱いお茶でも召しあがつてお休みなさいませ、今回は、お仕置の心理と縄や囚衣のことについてお話致しましたから、この次は、一つ一つのお仕置の方法についての心理を申しのべましょうか。鞭を受けるときの気持、吊りさげらる時の気分、私のお話にも、もし価値があるとしたら、それは、実際の体験者であつて、想

像やつくりごとではないと云うこと、それだけが、たつた一つの価値でございましょう。

### 【読者通信】 (投稿歓迎)

一昨年六月号より毎号奇クを愛読して参り各号それぞれの楽しさを味つて参りましたが今回の新年号には待望のマゾフォトページが初めて実現し、我々マゾファンにとつて新年初頭の何よりのプレゼントとして本当に嬉しく感じました。全国マゾ愛読者の方々もきつと大いに期待して居られる事と存じますからどうか今後一頁でも二頁でも結構ですからマゾフォトの作製を続けて頂きたいと存じます。マゾフォトの出現で今後の発売が今迄以上に楽しい夢を持つて待たれます。女同志の責めフォトも大いに魅力的ですが、もう一息の真迫感を出して頂けたら尙一段と素晴らしいと思います。殊に責める側の女の勝誇つた表情をキャッチしたらと感じます。今迄日本には女同志の責めフォト、或は女の格闘フォトは全然ありませんでしたので、アメリカのもの大分集めて参りましたが、日本でも奇クがそのトップを切つて、かゝる企画された事は編集部の方々の鋭いセンスを大いに賞讃すべきで心より感心致しました。

(東京QQ生)

◎滝麗子さんが凄いいマゾ面を描いています。写真も新しいアイディアで撮影を開始しましたし、外国の珍しい女同志の闘争写真も沢

珍らくもないお話で失礼致しました。では今度こそ本当にお休みなさいませ。

山入手しました。口絵を増頁してでも豊かに発表したいと考えています。(編集部)

市今公子様に……。よろしかつたらお友達になりたいと思います。市川様のお手紙をお待ちします。馬族保様に……。読後雑感の短評有難うございました。特に「金属性の冷たさ」との評有難く拝見いたしました。編集部の方々に……。女性の異常告白集はすばらしいと思いましたが、御婦人のサジストをもう少し見つけて下さい。

(東京 芳野眉美)

○ 東京の市川公子さまへ。僕は一月号にコンビネーションという下着についてを誓いた長谷川洋という今年二十才になる少年です。同じ一月号に貴女の通信文で貴女もコンビネーションを常用されていらつしやるとの事を知つてなんとなく嬉しく思いました。あの文中「びつたり喰い込む様なズロース……」とありましたが、あれはやはりコンビネーションと同じ様に股下が割れている物でなくてはならない筈ですね。コンビネーションは実に素晴らしいと思います。

暇があつたら貴女も誌上でお便り下さい。

(長谷川 洋)

# 現代文芸に現われた責め

村田 誠一

☆

第一回、第二回とも幸せにも頗る好評であった。殊に第一回発表に対しては、「異彩を放つ作品を持つて来られた筆者の非凡さと責めの描写を広くみておられることを感ずる」とか。「思いもよらぬところから現われた、責めの深刻な描写に喜びと驚きとを体験する」とか、全く以て御過褒な御言葉を賜り、只管恐縮している。よい場面をぬいて、文獻的価値、責めファンの価値を保ち、責めは好きだが、大部のものを読むのは大変だしという人々に、格別の手引書となる様にと心掛け

るつもりでいる。読者諸彦の熱烈なる御声援を深く感謝すると共に、更に一層の御鞭撻を希う次第である。

## ◎解説

邦枝完二「歌磨をめぐる

女達」四六版 四六四頁

昭和六年十二月新潮社発行  
序文、里見 淳。  
装幀、山村耕花。

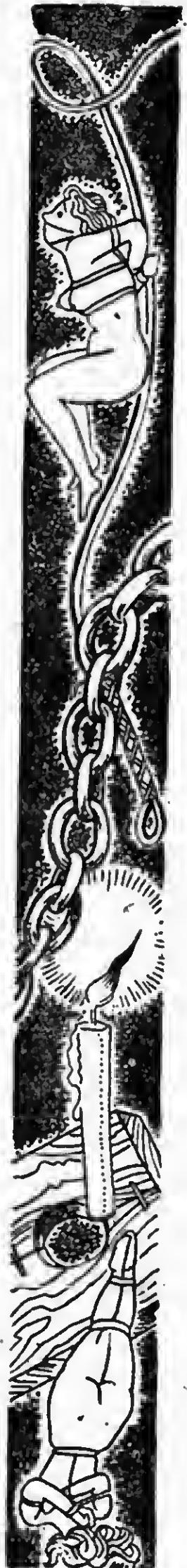
邦枝完二

明治二十六年東京に生る。慶応義塾中退。

三田文学の初期から、永井荷風に師事し、帝国劇場女優学校の教師、時事新報記者等を経て独立した。江戸前の持ち味で、草双紙趣味で據頭、実際の生活も四疊半趣味といわれている。

## ◎作品観賞

喜多川歌磨——余りにも有名すぎる位有名な浮世絵画家。当時婦女の風俗をかゝせては、並ぶ者が無いといわれた絵師、十六才から遊里に足を入れ、四十有余年、一人の正妻





をむかえる事もなくすど歌麿と、それに絡んで、幾多の美しい女性との間に織り込まれた、恋ものがたりというが、それを邦枝完二氏は、氏独特の鋭筆によつて、まこと我々がその時代に、あらしめる趣に描き出されたのが、この作品である。その全篇の中に、次に展げられる様な、美しい夢の様な、艶麗な責め場の数々がある。簡単に登場人物の主な人名を挙げておこう。

喜多川歌麿 浮世絵師 四十三才

庄三郎 銀座一丁目紙問屋仙香堂の若主人。おきたとも多賀袖とも

交情、多賀袖と駈落する

難波屋おきた 浅茶観音隨身門傍水茶屋の

女。歌麿の一枚画により有名

となつた美女。庄三郎、勢之

助、歌麿等と交情

小出勢之助 麴町二番町旗本小出信濃守（

四千石）の二男、おきたに夢

中になつてゐる男

多賀袖

吉原京町一丁目大文字屋の遊

女。歌麿の下絵に依り、唐草

権次に背中へ、菊寿童の図を

ほらせる。庄三郎の彼女、勿

論歌麿とも交情

お

蘭

京橋木挽町五丁目松平周防守  
康員の侍女。鯉つかみの日、

その裸身に魅せられた歌麿が

懇望してそのモデルとした美

女。

其也、北斎、一丸、葛屋重三郎、等いろ／＼

出て来るが、抄出した責め場に関係がないか

ら略す。

.....

（世話をしているおきたが、お袋の病氣見

舞といつわつて、庄三郎と駈落をして来た

事を知つた歌麿が、嫉妬からそれを責める

のであつた。おきたも仲々者で「あたしや

二十才の身体、囚人かなんぞならいぞ知ら

ず四十三にもならふといふお前さん一人を

後世大事に守つちやアゐられませんか……

……と啖呵をきられたので。

青簾が静かに揺れて、風鈴の音が、憎いほ

どかすかに軒場を流れた。

歌麿は、おきたの啖呵を聞きながら、時折

その表情を偷み見てゐたが、そこに今まで見

たことのない、一層の美しさが感じられる

と、突然むら／＼と起つた嫉妬に眼先が眩ん

で、手許に置いた煙管を把るや否や、いきな

りおきたの襟元をむんづと掴んで、肩のあた

りを二つ三つ、続けさまに打据えたのであつた。

「おや、おぶちなすつたね」

打たれながらも、おきたの声は透き徹るやうに落着いてゐた……歌麿は、無意識に手が

顫えるばかりで、もう口が利けなかつた。

「あたしや若旦那に首つたけさ。首つたけも

首つたけ、命も何もいらなんだよ。たとへ

おまへさんに、こゝでこのまゝ打ち殺された

つて、誰があゝの可愛い人を思ひ切るものか。

義理があると思へばこそ、眼をつぶつて帰つ

て来たのをいゝことに、百両出して引かした

情婦か、長の年月連れ添つた女房でもあるやうに、いゝ氣になつたその態は何んてこと

さ。日本一の歌麿が、たつた一人の水茶屋の

女を持て余して、撲りつけたといはれたら、

さぞや値打が上るでせうよ……。さ、そんな

ことぢやこたへない。もつと、もつと、肩や

背骨が折れるまで、打つて打つて打ちのめし

て貰ひませうよ。」膝下に引据えられて、白

蛇のようにのたうちまはるおきたの容姿は、

それが湯上りの直後であるだけに、浴衣の胸

が乱れるにつれて、眩惑を感じるまでに、凄

艶の色と香を、画室一杯に漲らせて行つた。

画室には、歌麿の筆に成る幾枚かの秘戯図

が、二枚折の屏風に貼られて、常に訪ふ人を悩ましてゐたが、いま歌麿に打据えられたおきたが、青畳の上をのたうち廻る有様にくられば、寧ろその影の薄さは、あはれなくらいだった。初めてのうちこそ、嫉妬に燃える思ひをこめて、肩といはず背といはず、無闇矢鱈に打ちつけてゐた歌麿であつたが、打たれば打たれるだけ、却つて一種の快樂を感じてゐるやうなおきたの態度をみると、いまは次第に明るみまさる心持に還つて、快心の作を描き上げた時と同様な興奮に、限りなき満足を覚えすにあられなかつた。と歌麿の胸裡には、忽然としてこのままの姿と閃めきとを、紙の上に躍らせることが出来たらといふ欲望が、雲のやうに湧き起つた。

「おきた、おれが悪かつた。堪忍してくれ。」まつたく思ひ掛けない叫びをあげると同時に、歌麿は今迄確かと握りしめてゐた煙管を投げすてて、畳の上へ俯伏してしまつたのだつた。「畜生、さんざ撲つておきながら、なんたら態なの。……さ、



もつと男らしく、足腰の立たないまでに、打ちのめしておくれよ……」おきたも今は夢中

だつた、身も魂も痺れるまでに打据えられて、男によつてのみ与へられる絶対の満足を死身になつて受けたかつたので

あらう。畳に突いた歌麿の手にしがみつくと、今度は自分の長煙管を無理にその手に握らせた「さ、速く打つとくれ。あたしや決して、歌麿に打たれてゐるとは思はない。庄さんに、あの可愛い若旦那に打たれてゐる氣であるんだよ」その言葉を聞くと再び歌麿は、持った煙管を振り上げようとした。が、それと同時に同時に、歌麿の眼には、今は半裸体になつたおきたの乳のあたりの曲線がむつくりと降起して。小氣味よいまでに滑かに映つた。「勘弁してくんねえ、おれはこの上、おめえを打つこたア出来ねえんだ。」「意氣地なし。それでも日本一の浮世絵師かい。あゝあたしや若旦那に会ひたい。若旦那の手で打つて打つて、打ち据えて貰ひたい……。」「夢中で叫びながらの

たうちまはるその曲線の動きを、歌麿は感激の眼で、いつまでも凝視してゐた。

(嫉妬に狂う責め折檻も、惚れた弱身というか、年令の差の悲哀というか、強く責められない歌麿の心がにじんでいる。その心の中にも芸術に対する心が湧いて来るのは、流石一流の浮世絵師の心だ。正に一幅の活きた浮世絵の情景である。)

麴町山王台の掛茶屋「やまもと」の奥座敷に、先刻から唯一人肌の汗をふきながら、しかも障子を閉め切つたまゝ、人待ち顔にねそべつてゐた若い女があつた。背中から腰のあたりにかけて数ヶ所、紐を引いたやうに、紫に染めた痣を気にしながら、時折そつと浴衣を捲つては、その痣に視線をやつてゐたが、やがてやけに起き上つて縁側の手摺に身をもたせると帯の間にはさんだ紅色の煙草入を取り出して、細いいぶしの金の煙管に刻みをつめた。

(歌麿に責め折檻をうけたおきたは、若い恋人庄三郎に逢つて、その責めのあとを示し、庄三郎の手によつて、責めの喜びを味うのであつた)

女中が立つて障子を開けると同時に、敷居をまたいだのは、仙香堂の庄三郎だつた。

(中略) そのまゝ氣を利かせて、女中が出て行つたあとを見送りながら、女の手は庄三郎の方へ忍びよつたが、いきなり指先に力を入れると、いやといふ程股のあたりをつねつていた。「あ痛。……」「おほゝゝ、男のくせに、こんなことが痛くつてどうしましょう。

あたしや若旦那、あなたのために、これ、こんな目に遭つてますよ」そういひながら、女はさつと両の肌を脱いで男の前に身をくねらせた。「あッ」「どう、いゝ色でござんしやう」「だ、だが、そんな。……」「こんな事をする人は、たつた一人しかありませんのさ」「ぢやああの歌麿が……」「若旦那、あたしやこんなになされてから、あの歌さんが、義理を離れてすきになりましたよ」おきたの眼は妖しく動いた。「なんだつて、おきた……」「思ひがけないおきたの言葉に、庄三郎の睨はきゆつと上つた。「おやそんな怖い顔をして……。あたしやたゞ、歌さんがすきになつたと申したばかり。お氣にさはつたら堪忍しておくんないましょ」「おきた、おまへもう一度、いまのことをいつて見な」「あれ若旦那、何度いつても同じこと。おきたは背

中や腰にこの紫の痣を染上げてもらつてからあの歌さんが。……」さつと煙管が、庄三郎の手の上にしなつて、いきなりおきたの腰のあたりを畳へすべつた。「そ、そいつを、おれに聞かせることかい。……さ。この腕にも力はある。痣の染上げなら、歌麿を頼むまでもない事だ。立派におれが務めてやる……」庄三郎の手には再び煙管が振上げられた。

「若旦那。おまへさん本当に、わたしを打つて打つて、打ち抜ける氣。……」「打てなくてどうするものか、今更あんな面相描に、見返られちゃア男が立たない」吸口から羅字にかけて、小さい波が起つたと見ると間もなくびしつという音が鋭く聞えた。「あッ」「これでもか」「若旦那……」きゆつと齒をくいしばつたおきたは、櫛巻から解けた髪が、頬のあたりへかかつたもの忘れて、丁度芋虫のやうに、青畳の上をひとつうねりうねつたが、さりとて逃げる氣配など少しもなく、なかば苦痛のうちにも、押え切れない喜悦が足の、指先にまで滲み出てゐた。びしつといふ音がまた響いた。「あッ……」「どうだ」三度煙管の鞭は鋭かつた。「若旦那」「これでもか」「あゝたまらない。もつと、力一杯……」庄三郎の眼は据つた。「あゝ嬉しい、嬉しいう

「ござんす。命までもと思ひ込んだ若旦那の手で、打たれるんなら、どんな辛抱でもしましように……さ、歌さんを思ひ直したあたしが気に入らないとおつしやるんなら、どこなと好き勝手なところを、打つなり蹴るなりしたがい……。あゝもうあたしやどうしよう。若旦那、手加減なんかいたりやアしない。あたしが憎いと思つたら、もつと、もつと骨の砕けるまで打つて打つて、打ち抜いておくんない……。」絨地に一刷毛、蠟と引いた虹を見るように、おきたの身体には、一つ打たれれば打たれる度に、一文字の色が鮮かに残されて行つた。肩から胸、胸から腰と、次第に剥がれてゆく浴衣の下から、寧ろ怖ろしいまで蠢動している肉塊の現はれるのを見ると、庄三郎はまつたく夢中だつた。煙管がしなへばしなうほど、おきたは、苦痛とも喜悅ともつかない微笑を頬に湛へて部屋の中を転げ廻つた。……中略……と夢中で煙管をしながらあつた庄三郎は、のめるようにそこへ身体を投げ出した。「若旦那、あたしやおまへさんにこうしていつまでも、打ち続けてゐて貰ひたい。今こそあたしや本当に極楽でござんす。」「いけない」庄三郎はかぶりを振つた。「では若旦那も、あの歌さんのように、あた

しに頭を下げようといふ。……」「……………」  
「まあ男といふものは、誰れもかれも何んて意気地がないのだらう。あたしやこのまゝ死んでもいい。死んでもいゝから、好きな人にいちめて、いちめて、いちめ抜いてもらひたい。……………」

新緑を掩うた雨音は、おきたの声も庄三郎の声も、部屋の中に包み込んだまゝ、決して外へは洩らさなかつた。

(あゝ、たまらないもつとく力一杯……などという言葉は、正に悦磨の極みであろう。責めの悦びを堪能するおきたの姿は生々しくも眼前に彷彿として来る。打擲の快楽にのたうちまわる凄艶なおきたの姿態を描き度い歌磨は、庄三郎を無理に頼んで自分の家へ来てもらつて、おのが眼に映じたありの儘を画絹に写す事にした。歌磨の家では、おきたが待ちくたびれて一服吸つた煙草……それは支那の媚薬阿片であつた。一服二服と吸つていゝうちに、次第に酔つた様になり、はては帯をとき、着物を脱ぎ遂には緋縮緬のゆもじ一枚となつて、恰も刺し殺された様に横たわつてしまつた。そこへ現われ

たのが庄三郎であつた。)

「おきたさん……………」掌の下に芋虫のような蠢動をつゞけてゐるおきたの、こんもりと盛上つた乳房を通して、おのづから全身の血管に伝つて来た媚薬の悩ましさに思はず声をふるはせて身をすりよせた庄三郎は……中略……真白き胸の上におのが頬を押当たのであつた。……中略……今度はおきたの襟脚のあたりに乱れかゝつた黒髪を、己が指先へ丁度子供が箸へ水飴をまく時のように、くるりく……とまきはじめた。

にやりと歌磨の頬には微笑が浮かんた。……それは嘗て人に聞いただけで、いまだ一度も自分では見たことのない、女の黒髪をしやぶつて、その冷たい黒髪の中から滲み出る脂を、飽くまで舌端で味はい尽そうといふ、一つの底気味悪い妖楽が始まるのではないかと思つたがために外なかつた。果せるかな。おきたの黒髪を指にまきつけた庄三郎は、そのまゝ髪を口一杯に押込むと、噛むともなく、しやぶるともない行為を、話に聞く、鬼が人形の血をすゝる時のような満足さのうちにつつけ始めたのだつた。おそろくおきたの髪には、その一筋々々に、云ふにいはいれぬ滋





いけて、びしツといふ音が薄暗い部屋の中を圧した。——下略——

(誠に奇怪なこの情景、たしかに底気味の悪い妖楽である。女の黒髪をしゃぶる、乳房よりも尊いものとして——読者の中には、こうした経験をもつ方もあろう、責める方も責められる方も快味の極致であろう)

味があるのであらう。齒と舌とに絡み附く冷たさに、心をとろけさせながら、牛のよだれにも増したよだれを、べつとりとおきたの盛り上った胸の上へ垂らしてゐる有様は、快味の極致とも想はれて、見てゐる歌麿をおのづから興奮させずにはおかなかつた。

二十数年間の教へきれぬ永い遊蕩の年月の中には、歌麿はあらゆる秘戯を見、あらゆる

快楽を味はつて来たが、しかし女の髪の手を乳房よりも尊いものとして、かくも夢中で舌弄する實際を見たことは正に稀有の出来事だつた。ふと、おきたの呻く声を耳にした。と同時に、今度はびしツと打つ鞭のような音がきこえた。「あッ若旦那——」「しッ静かにしろ」庄三郎の声には、普段のやさしいそれとは、まったく異つた鋭さがあつた。——つ

から滲み出る、自分の美に酔うてゐるものゝ如く、時に孔雀のような腕を庄三郎の首にまきつけるかと思へば、時にすつくと立上つたまゝ、殊更身を反らせて、青畳の上へまつ逆様に倒れるの危険を敢てして、その度毎に、庄三郎の手で押へられ、打ち据えられるのを、こよなき歓喜のうちに悦樂してゐるかに見えた。

——前略——歌麿が、今になつて初めて覚えた表現上の不安に、独り悶々としているのを、知つてか知らずにか、庄三郎の打撃を全身に受けながら、無二の快楽を擅にしているおきたは、潑刺たる若さ

歌麿は突然戸棚をあけて、大形の絵絹を取出した。あきらめてもあきらめきれぬ芸術慾が心の底から燃へ上つて来るのであらう。筆洗で洗った筆を手許の硯の中につけると、さつと白絹の中央へ一本の曲線を描いた。それは特に崩れかからうとする、おきたの頸から腰へかけての、浪のような線のうねりであつた。

(巨匠歌麿のこの姿は、芸術に生くる人のみ知る苦惱か……。流石荷風門下の逸足完二氏の筆は、歌麿、勢之助、庄三郎、多賀柚、おきた、お蘭等巧みに点綴し、それ等が織りなす情痴の世界は綿々として心憎い迄、この全巻に溢れて漲つてゐる。最後に責めの情景ではないが、女性二人の纏れ争う珍らしい情景を抄出してこの稿を終る。次回は誰か、乞御期待)

ぶそらくそれから半時とは経つてゐなかつたであらう、雨戸を固く閉め切つた歌麿の面室には、思ひも掛けぬ異様な情景が展開されてゐた。それは生ける女性の、ありとあらゆる美しさを集めつくしたような、お蘭とおきたとが、いづれも誇らかな肉体を、惜し気も

なくあらはにして、恰も球を争ふ龍の如く、互いの胸を飾つた胸のような乳房をしやぶるうと、纏れ争ふ情景であつた。

記憶を辿るまでもなく、絵にするために、男女の秘戯を垣間見た機会は、歌麿にとつては決して百や二百の比ではなかつた。が、かうして若い女同志が、大瀧のように全身をうねらせながら、息も絶えなんほどの、快楽の夢を追う情景には、流石に一度も接したことがなかつたのであらう。机の前から膝をのり出した歌麿は、次第に二人の身体に近付いて、はてはすぐ眼の前にある、桜色をしたお蘭の肩のあたりへ、ふるふる手先をのせたのだつた。はじめ、お蘭をみたおきたは、何んとしても、自分よりすぐれた美しさを持つ相手を、敵視せずにはゐられなかつた。

#### ——中略——

畜生、誰が師匠に、指一本でも指させるものか。……さうした心持で、身体を斜に構へたまふ、ちつとお蘭を見つめてゐたおきたが、半時の後にかく埒もなく、お蘭との快夢に耽けるようにならうとはまつたく、歌麿にさへ想像のつくことではなかつた。長煙管につめてのんだ、ただ一服の阿片が、意地も外聞もかなぐりすてて、おのが求める本能の的を

飢えた犬が魚骨をなめるように、しやぶりとくそうとする行為は、おきたと庄三郎の場合にも、知らぬことではなかつたが、しかも互いが女同志である今の場合、むせかへるほどの邪淫の渦に、この奇怪な世界を眼の前に見ようとは、余りにも思ひがけない出来事であつた。その一筋づつが、蛇の頭になるのではないかと疑はれるまでに、もつれ合つた二人の髪の毛は、ぎし／＼と互いの白い頸からんで、着衣の悉くをぬぎすててしまつた二つの肉塊は、相手の乳房に真紅の唇を当てたまふ、日光の遮られた薄闇の中に、あへぎ／＼の呼吸をつけてゐるばかり。仏像のように端座した歌麿は、ちつと眼を据へて、蠢く白裸の浪を凝視するより術がなかつた。

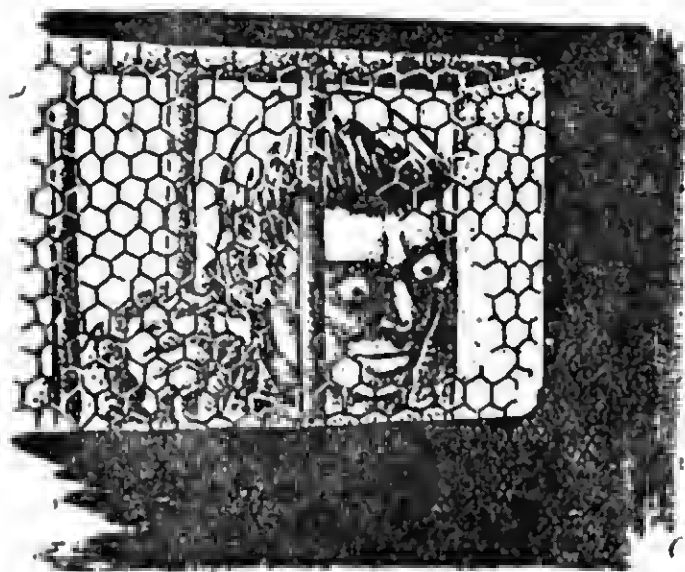
#### ——以下略——

【御連絡】 ○由利瑞江様、お便り拝見、詳細お返事差し上げましたが、現住所に該当者なしの附箋付で返つてきました。○羽村京子様、久方ぶりのお手紙なつかしく拝見、「京子の生活と意見」の補遺はKK通信第十六号に掲載いたしました。○沼田扶二世様、貴女に御連絡をとりたい件がありますが、局首にても連絡場所の指定をして下さいませんか。

(編集部)

## 【囚 獄 記】

櫻井英一



八月十五日の終戦の報道は私達一丈五尺の塀の中に閉じ込められている者にとつても大きなショックを与えずにはいませんでした。所長をはじめ、看守長、部長、看守、小使に至るまで只呆然としていただけで収容者が犯則しても挙げるどころか一言の文句さえよう言いません。その中で一番先に各自の置かれている立場に気づいたのは収容者達だったのです。

初めは「我々は全員釈放される」「いや、社会の治安維持を考えるとそんな事は有り得ない。それどころか殺されるかも知れない」「いやそうじゃない、こうだ。」「あゝだ」といろいろなデマや噂が飛びましたが、結局「我々には自由がないのだから成る様にしかない。明日の日がわからないのだから、好きな事をやつた方が得だ」という考えが圧倒的に支配してきたのです。洋裁工などは最も甚しく命じられた服などはそつちのけにして、背広を作つたりズボンを作つたりして、それを低給の看守に渡して僅かな煙草と交換していました、一方看守の方でもいつ餓首になるかわかりませんので「今の中に」という気がありますから職務を忘れて私利私欲をおさぼつたのです。だから工場では隅々まで煙草が行き渡り、甚しきは酒さえ手に入れる者もありました。

入手した煙草はバクチに使われたり、金の代りとなつて物品の取引の代価として支払いに使われたりしました。煙草を手に入れるルートを持たぬ若い男は一夜を共に寝てあらゆるサービスを行いその代償として一本のタバコにありつくのです。こんな事が刑務所の中で公然と行われていたのですから驚きます。只逃亡する事以外だつ

たら、すべて黙認の形です。札つきの不良囚には

「どうだい、いゝのを世話しようか」

と話を持ちかけたり、古参者などが気に入った若者を見つけてもそれが別の工場だつたり房が違つていたりすると、

「あの男を私の房に寄こして下さい」

と頼めばその日の中に転房になつてきます。何故看守達がこの様な事をしたかという不良囚の逃亡と暴挙を一番に恐れていたからです。そしてこの懐柔策は成功したようです。他の刑務所では集団逃走や看守に対する暴行等が頻々とありましたが、私の居たこの刑務所だけは一件もなかつたのです。

こんなわけで同性愛（アンコ関係と我々は言っていました）は急に盛んになりました。中にはそんな事が嫌で必死になつて拒む者もありましたが、同房者が協力してリンチを加え結局古参者の自由になつてしまふのです。

それが何時の間にか不文律の様なものになつてしまつて、新入者で二十五才以下、又はそれ以上でも古参者の気に入った新入者は房長に願えば一晩は房長と寝ますが、その次からはその古参者の配偶者となるのです。

先ず新入者が入つてくると犯罪の内容や、刑期、年齢、出生地等形通りの挨拶がすむと二十五才以下の場合ですと素ツ裸になつて皆の前で体を見せるのです。若しこれで古参者に見染められると、その古参者が房長に願ひ出るわけです。若し出願者が二人三人とあつた場合、その間で話し合いをして、それでも折合いがつかない時は房長が裁きをつけますが、これには絶対に苦情は云えません。

こうして獄中での結婚式？が挙げられると夫の立場になる者をオ

ヤジ、妻の立場になる者をアンコと呼びます。この様な不文律が出来たのは終戦後三ヶ月程してからですが、終戦直後に結ばれた夫婦？は大抵恋愛関係です。明日の知らない頼りなさや、半ばヤケ気味な心の動きから今迄一緒に仿っていた者同志の親近感や或は作業上の親方と子方等がお互いの拠り処として慰め合つていたのが、長い禁欲生活に悶え続けてきた欲情を抑えきれず終戦のドサクサを契機としてそれが同性愛へと移行していつたのでしよう。

終戦前にもこの所謂アンコ関係はありましたが、それはほんの一部でしかも密かに行われていたのに過ぎません。若しこれが発覚すると懲罰を受けねばならなかつたのです。羞恥心を忘れた収容者といえどもそれは恥しいものです。アンコは後手に縛られ、オヤジはアンコの後から両手を前に廻して手錠を掛けられて二人一緒に歩かれます。甚しい時は丸裸のまま、所内の工場全部を歩かされるのです。

時によつてはアンコは裸で四ツ這いにさせられ、肛門に棒や鉛筆を差し込まれてグリグリ掻きまわされ、その挙句の果が軽閉禁と減食（常食の三分の一）を五日間、そして二人は別々の工場へ出役させられてしまふのです。

海千山千の連中には懲罰はさして驚きませんが、この別々にされるのが相当こたえるようです。だから終戦前のアンコ関係は密かに行われていたに過ぎません。

## 二

私がアンコになつたのも終戦後で当時廿才の時です。オヤジは工場の事務雑役をしている一級の卅二才になる佐藤という男でした。



毎月の月末になると、佐藤は工場で整理しきれなくなつた仕事を房に持ち帰つて整理するのを丁度隣りで寝ていた私が手伝つていましたので、いろいろの噂は立ちましたが、然しその頃はまだアニコ関係は生じていなかったのです。そんな時終戦を迎えたのです。周囲が露骨になると、私達も「どうせ明日の命がわからないんだから——」という気持からいつの間にかおかしくなつてしまいました。

アニコになつた者は大抵女名前と呼ばれます。例えば「和夫」というのを「和子」だの、「寅次」を「お寅」「松五郎」を「お松」等々、初めの頃はそんな風には呼ばれるのを誰も喜びませんが、自然に慣れて来ると平気になり、遂にはそう呼ばれる事が楽しくなり、そう呼ばれないと返事もしくなくなります。全く不思議な心の変化です。私もいつしか「英子」と呼ばれる事に満足してしまいました。

最初の中は平凡な肉体関係だつたのですが或日、Kという廿四になる男が房内でのめ事を工場で他の房の者に尾ヒレをつけて話したのです。それが知れると十五人の同房者達は恐つて房に帰つてきたKをつかまえてリンチを加えました。その時は「布団ムシ」だけで済ますつもりだつたのですが、房長の命令で四五人が立ち上り、Kを包んだ蒲団の上から二人宛交互に乗つて踏んだり跳び上つたりします。これは一見布団の上からなので、大した事がない様ですが腹の上でドン／＼力まかせて反動をつけて跳びはねるのですから息もつまりそうで、大抵世分もやられたらフラ／＼になつてしまうものです。

「もういゝ加減にかんべんしてやれ」

と房長が声をかけたので皆が思い／＼の処に座り、じつとKの様子を見ていました。

暫く動く様子がありませんでしたが、やがて蒲団から這い出してきました。この時Kが黙つて房長の前に行き「有りがとうございました」と云えば何んでもなかつたのですが、息をフーフー切らしながら、思わず

「ひどい目に合つた」

と呟いたからたまりません。やにわに

「何にツ、文句があるか」

と一人が立ち上つて思いきり横面をぶんなぐりました。

「ふざけた野郎だ、オイ、誰か手を貸してくれ。踊らせてやるんだ」

「よしきた！」

さつと三四人が立ち上ると、Kを寄つてたかつて裸にした上、両足を縛り雑布を口に押し込み手拭で猿轡をかませ、窓ぎわ迄引つぱつてゆくと、両手首を頭で縛り窓の鉄棒に帯を通すとぎゆうと引きました。身体をもがいて逃げようとしたKは忽ち吊り上げられて、やつと足先が床につく位です。房の窓は背を伸してどうにか鉄棒が握れる位なのです。

「さあ、野郎覚悟しろよ」

一人が箒を持つて立つと柄で脇腹から下腹へとこづき廻します。

一人が疲れると次の者が代つて体中を擦つたりつねつたり、股の間に柄を挟んで力まかせにこじたり、入れ替り立ち替り各自が思い／＼の悪戯をしていましたが、誰かが、

「××××をやつてみる！」

と言ひ出しますと、

「面白い、やれ／＼」

更に二三人が立ち上つてKを取り囲みますと、その中の一人が或る動作を初めたのです

「……ハムム」

「もつとやれ〜」

皆が面白がつてワイセツな言葉でハヤシ立てゝその賑やかなことは大変です。

「この野郎……てやがるヨ、ハムム」

「オイ……か、いゝ加減……え」

Kは一生懸命にこらえていましたが、とう／＼………

しまいました。

「ハムム………や

がつた！」

「あッ、この野郎、きたねえ……」

暫くは皆の笠声が止まりませんでした。

「なぐつてやれ〜」

一人が手拭の端に結び目を作り、水にしめて近づきました。次の瞬間、ドスツと鈍い



音を立てゝ水しぶきが飛ぶと、Kの右肩から斜めに胸へかけて、赤い太い線が描かれると呻めき声と共に不自由な一本棒の身体がねじめるように悶えます。

房内は一時にしんと静まり返つてしまい後は鈍い音と呻めき声が時折聞えるだけです。皆の眼は異常に輝き、房内には重苦しい空気が流れます。

### 三

この日を境に私達夫婦？の間にも大きな変化が起りました。

その翌日の中食後の休憩の時です。佐藤は私を伴い工場の責任担当看守（平看守を担当さんと呼んでいました）の所へ行きました。

「担当さん、休憩には運動場に出ないで桜井に手伝わせて工場倉庫の整理をします」

「二人だけか？」

「そうです」

全員が運動場へ出ましたが、私達は倉庫へ

入りました。勿論看守は監視のため運動場へ出ています。広い工場はガランとして誰もいません。或る予感を持った私の後から倉庫へ入った佐藤は案の定、私に裸になるよう命じました。

「これはきつと変った体位で私を思いきり可愛がつてくれるのだなア」と思い、素直にいうまゝ裸になりますと、いきなり両手を後にねじ上げられました。

「あッ、痛ッ」

「英子、少しの辛抱だ、我慢しな」

「はい」

「俺はもう平凡な事だけでは我慢出来なくなつたのだ。一度でいいからお前を縛つた上で思う存分打ちのめしたいんだ」

私はハッとなりましたが、もうその時は縛り上げられていました。

昨夜のKの姿を見て刺激された事は明らかです。一種の恐怖にかられましたが、もうどうする事も出来ません。声を上げて助けを求める事は出来ません。彼を愛しているからです。

然し体に喰い込む縄の痛さに思わず叫んでしまいました。

「痛い」

「何、痛い？お前はこの位の辛抱が出来ないのか、それは俺を愛していない証拠だ」

「そ、そんな」

「よし、じゃ大人しくしている。痛いと言つた罰にうんと苦しめてやるがいゝな」

「えゝ、うんといじめて」

「さあ、口を開けろ」

手拭を押し込み狼轡をかませると梁からロープをからませ、その

一端を私の体を縛つてある縄を結びつけると、他の一端をたぐりました。私の足先が床板すれ／＼になるとロープの端を柱に結びバンドを手にして立ち足はだかりました。足先には力が入りませんので、私は自分自身の体重で胸や腕がグイ／＼と締められて呻めいてしまふのです。

「うう……」

ビューツと耳元でバンドが鳴つたかと思うとぴしりと音がして尻に激痛を感じました。二ツ三ツと続けざまにバンドの鞭が体に喰い込んで来ます。その度に私の体はわずかに揺れて足の爪先が懸命に床の上をさぐります。地の底にでもグン／＼引きずり込まれる様な錯覚と陶酔。

何時、私が縄を解かれたのか、ふと私が気のついた時には裸のまま佐藤に抱かれていました。

休憩時間が終り、全員が作業を始め、印刷機械が回転する頃、私は倉庫の一隅に横たわっていました。佐藤が、

「桜井は急に腹が痛み出しましたので倉庫にしばらく休ませてやつて下さい」

と担当に話をしたので私は大つびらで寝ている事が出来たのです。しばらくすると担当が倉庫に入つて来ました。

「桜井、気分はどうだ。病舎に入らなくともよいのか」

「いゝえ、それ程の痛みではありません。少しの間横になつていれば治ります」

「そうか、じゃ俺が今度休憩に行つたら、静腸散をもらつて来てやろう」

「はい、すみません」

そのまゝ担当は出て行きましたが、何だか済まない様な気がしました。一寸でも体を動かすと電気にも打たれた様に全身が一度にヒリヒリと痛みます。それにしても只痛いだけでなく何かしら快く感じられるのは一体どうしたと云うのでしょうか。佐藤に打たれている時の事を思うと心の底が疼くのです。

一度だけと云う約束だったのですが、それは一度だけでは済まされませんでした。何かと口実を作つては私を倉庫に連れ込んで責めるのですが、初めの頃は私も私には又かと思ひ倉庫に入るのをためらつていましたが、それが度重なるにつれ何時の間にか私の方から誘う様になつていました。この様な事は一体マゾヒストには共通した心境の変化なのでしょう。雨の降る寒い日などでも私は裸になつて佐藤の縄と鞭の愛撫を受けるのを楽しみにしました。十分もすると汗をグツシヨリとかき全身が火の様に燃えます。

鞭打つ箇所は何時も背中と尻です。それは当時私は三級だったので房に帰る時はカンカン踊りをさせられるので若し胸や腹に鞭の跡があつたりしては看守に見とがめられるからです。然し看守には背中を見せずにすんでも同じ収容者に見られない訳には参りません。同囚から変な眼で見られ、噂される事はたまらなくつらい事です、この時程早く一級になつて無検身で房に帰られる様になりたいと思つた事はありません。

#### 四

やがて廿一年の正月を迎え二月三月も過ぎ四月ともなれば暖かい日などは運動場に出られる様になります。或る日工場の向い側にある用度倉庫の屋根に雀の巣のあるのを佐藤が発見しました。

「担当さん、雀の子を取らせて下さい。用度倉庫の屋根に巣があるんですよ。部長には見つからない様に直ぐ帰つて来ますから」

「行つてもいいが部長に見つかるや俺が叱られるからな」

「大丈夫ですよ、担当さんの迷惑になる様なへまはしませんよ」

担当看守は不承不承工場の裏側の扉を開けてくれました。工場の裏側は七八米をへだて、用度倉庫があり、その倉庫の入口は反対側になつて居るのです。

こゝで担当看守が何故容易に佐藤の申し出を入れたかについて一言述べますと、廿一年になつてから各工場の雑役、作業責任者等で一級になつて居る者は独歩を許され三人迄平囚を連れて歩く事が出来る事になつたのです。それは看守の不足と云う事もありましたがきびしい規則だけでは収容者の自肅向上を期待出来ないと判断した所長の大英断だったのです。

事実雑役で一級者である佐藤は当然腕章をもらつて居ました。だから担当看守は不安を持ち乍ら佐藤の申し出に応じたのです。

佐藤も雀の子を取つて育てるつもりで苦心してやつと倉庫の窓にはまつている鉄棒にしがみつき、何の気なしにひよいと中をのぞいたのです。一体何を見たのかしばらくじつと中をのぞいていましたが、雀の巣はそちのけで顔を紅潮させて帰つて来ました。

「担当さんだめだった。まだ卵で雛にはなつてなかつた。もう四五日してから取りに行きます」

といふ加減な事を云つていましたが、やがて私の処に来ると興奮した口調で云うのです。

「英子、今素晴らしいものを見て来たぞ、実はな用度課長と倉庫係の野中良子の二人がな倉庫の中で……」



と語り始めたのはこの男女の白昼の愛慾絵巻だつたのです。

野中良子と云うのは十七才の頃から給仕として勤務をする様になりこの頃では女看守として拝命を受け用度課の倉庫係として課長の信用もありなかく権力を持った廿二才になる美しい女性なのです。倉庫の品の出入れは課長の印かこの女の印が無ければ一切出入れは出来ません。

「それでな、二人が倉庫を出る時女がハンカチを中に落して行つたんだ。勿論ハンカチはクシヤクシヤに丸められていた。俺はこれをネタにしてやるんだ」

と尚も言葉をつゞけるのです。何を考えたのか佐藤はその日に納めなくともよい印刷物一万枚を自分で五千枚、私に五千枚持たせて作業課に行きました。その帰りに

「病舎に行つて風邪薬をもらつて来よう」



とわざ／＼風邪も引

いていないのに病舎に行つたのです。病舎への往復には倉庫の入口の前を通らねばならないのです。いくら独歩を許されていても理由のない処は歩けませんかくしてアスピリンを手にして再び倉庫の入口の前に来た時

「さあ仕事だ。シキを切れ（見張しろ）」

突嗟に佐藤の意中を察した私はあたりを見廻わしました。

「テン（大丈夫）」

「よし来い」

と云いつゝ彼は倉庫

の大鉄扉を開き、私が入るのを待つて閉めました。

この倉庫の扉は二重になつて、日中は外側の大鉄扉は仮錠になつていて、中扉との間に丁度人間が入つて立つていられる位の隙があり中扉には頑丈な錠が下りています。この錠は課長と倉庫係の野中良子が持つて居るのです。扉と反対の窓から入るわずかな光をたよりに佐藤はドライバーと釘で錠を開けてしまつたのです、尤もこの

方にかけては専門の彼には何の雑作もない事です。

然し他の犯罪によつて入獄した私はガタガタふるえるのをどうする事も出来ません。目的のハンカチを拾つた佐藤は

「これだよ。見ろ」

と私に渡しましたがそれはまだしつとりとぬれています。倉庫に入るには入つたがさて出る時が大変です。うつかり出て、交代担当や巡回部長に出つくわしたら最後です。中扉をもと通りに閉めてじつと外の様子を伺いました。見る事が出来ませんので耳に頼る他はありません。思い切つてグイツと鉄扉を押し開け素早く飛び出し閉めると安心感がグ、と込み上げ二三歩あるき出しましたが私は「タ／＼と坐つてしまいました。心臓はドキ／＼と鳴り息使いの荒いのが自分でもよく判ります。」

やがて佐藤に助けられる様にして歩き出し倉庫の角を曲つた時巡回部長にばつたり出逢つたのです。

「どこへ行つて来たんだ」

となじる様な部長の声に私はドキツとしましたが、さすが佐藤は落ちついています。

「へえ、桜井が風邪を引きましたので作業課へ行つての帰り病舎に行つてアスピリンをもらつて来ました」

と平気でアスピリンの包みを見せるのです。

グツシヨリ冷汗をかいて私は工場へ帰るのにどう云う風に帰つたか覚えありませんでした。

## 五

それから数日した或る日、遂に佐藤は目的を達したのです。

その日は用度課長は出張して留守なので倉庫の出入れは彼女が一切やつていました。例の如く佐藤と二人で作業課に行きましたが模造紙大判を二百枚出してもらつた為に用度課に行きました。

「野中さん、委託の十二号に使用する六十斤模造紙二百枚お願いします」

「十二号は急ぎだからね、直ぐやつてよ」

「もう版が出来てますから明日の正午迄には出来ます」

「そう、じゃあ紙を出しに行くから」

作業課をのぞいた彼女は

「印刷の技手さん居ないの、今倉庫へ紙を出しに行くんだけど……」と大声で呼びましたが生憎と技手は外出中だったのです。

「仕様がないのね、まあいゝわ、じゃ行こうか」

彼女は私達をうながして倉庫に行つたのです。これが佐藤一人だつたら用心したかも知れませんが私も一緒だったので安心したのでしよう。二百枚の全紙を数え終つた時です。

「野中さん、五六日前これをなくしませんでしたか」

と云いつゝ出したのが例のハンカチです。一瞬怪嫌な顔をしていましたが直ぐにそれと気づいたのでしよう。右手の甲を口に当て、「アツ」と小さく叫びました。

「し知らない、そんなもの」

彼女の声はもつれ顔は真青です。誰も知らないと思つていた課長との秘密の証処品。羞恥と本能の恐怖に体は細まかくふるえている様です。

「そうですか、でもねこのハンカチの隅にYNと縫い取りがしてあるんですよ、これを拾つた場所はこの倉庫の中ですよ、それに私は

これを拾う少し前にこの倉庫の中で貴女と課長さんが何をしたか見ていたんですよ。それその窓の外からね、その時貴女は課長さんの後から倉庫を出て行き乍らこれを落したんですよ。若し御希望ならその時の貴女達の様子をお話してもいいですよ」

彼女は床にベタツと座り、うつろな目で佐藤を見上げています。

「まだ私は知っていますよ、貴女は用度課長さんとグルになつて随分うまい事をやっていましたね。私は用度の帳簿と工場の材料受渡簿が喰い違っている事も知っていますよ。購入しない物を購入した様にし、工場へ渡しもしない物を渡した様にして。随分肥やしましたね。これは貴女と課長さんがグルにならねりや出来ない事ですからね。然し用度課長は貴女の口を絶対にふさがなければならず、それには他人でいない事が一番安全で金がかゝりませんものね。勿論貴女だつて課長に妻子のあるのを承知でね。いやこれは順序が逆かも知れませんか。先に貴女達が結ばれて腹を肥らせたのが後かも知れませんか。とにかく二人が他人でなくなり腹を肥らせた事だけは事実ですね」

彼女はギクリしました。然しこれは全く当推量だつたのです。

「そ、そんな事迄——？」

「えゝ、知つてますよ、何も彼も」

彼女はまんまと引つかかつたのです。たゞ佐藤はこの位の事はあり得ると思つたのです。第一用度の帳簿など見られる筈はないのですが落着きを失つた彼女にはそこ迄考えが行かなかつたのです。

「然し僕はそんな事は他言しませんよ、知つてゐるのは僕と桜井の二人だけですから、只一つの条件だけで忘れますよ、このハンカチだつてお返しますよ」

彼はしずかに彼女の傍にしやがみ込み手を握りました。瞬間的に身をそらしましたが、彼女はそれ以上強いてさけません。

「おい桜井、倉庫の扉を閉める。ねえ野中さん、貴女だつて生娘じやないんだ。僕の条件が何か云わなくても判るでしょう。課長さんにしろ、貴女にしろ、身の破滅になるのはいやでしょう。一度でいいんですよ、ね」

グツと引きよせる佐藤の胸に、良子はクタ／＼とくずれる様に倒れるのです。

ブツ、ブツとホツクの外ずされる気配を後に聞き乍ら、外の様子をじつとうかゞつていましたが、高鳴る胸の動悸はどうする事も出来ません。しばらくすると佐藤が私の後に来て声を掛けました。はじかれた様に扉をはなれて振り返つた眼に彼女の裸身がうす暗い倉庫にクツキリと横たわつてゐるのが映りました。乱暴にはぎとられた衣服が投げ出されてあるのが印象的に見えます。フラ／＼と近づいた私はもう夢中でした。自分が何をしているのか、たゞ本能の命ずるまゝに手足が動きますが、五体が細かくふるえてくるのをおさえきれませんでした。

後になつてから、この野中良子が私の異常な性格を更に変つた形に伸ばさせるのに大きな役割を果たすことになるうなんて事は、この時にも夢にも考えませんでした。

牢獄の中に咲いた「囚人の女看守」の世にも不思議なアブノーマルな生活は次の機会に皆様の前に偽らず告白したいと思ひます。

x  
x  
x  
x  
x

人<sup>ひと</sup> 耶<sup>か</sup>馬<sup>うま</sup> 耶<sup>か</sup>

沼正三抄訳並解説

(Jules Superuielle)

シユペルヴィエル作



紳士騎手ルファス・フロックス卿、君は何故一体自分の名を馬につけたのだ？ 血の滴るようなビフテキ色の頬をした小男の君に、まるで地を踏むことも知らぬような、長い灰色の獣とすつかり一体になりたいなどという氣を誰が起させたのか？

実は、馬があまりに君に以ていなさ過ぎるため、君はあれを自分のものにし、自分に附属させるために、まるで焰の銛をぐつさり刺すように、自分の名を刺したのだつた。

競馬の日の馬見場でだけ持馬に近よるような、そんな熱意のない馬主ではなかつた。前晩は、厩舎の中で自分の馬の側に寝ることをためらわず、馬が寝込むまで、敏感な耳の産毛の生えた耳穴へ、明日の忠言をいろいろと吹き込んでやつた君だ。

無数の見物人の前に、馬の肌色と同じ灰色の帽子を冠つた騎手として、馬と一緒に競馬場を走ることがどれほど君には嬉しかつたろう！

オオトウイユ競馬に於けるアマチュア受賞レースで、ルファス卿は、終始先頭を切つて馬を走らせ、六馬身の差をつけて優勝した。がその瞬間、馬は発狂して早駆を続けたまゝ、エクセルマン街道に出、オオトウイユ陸橋に

沿つて、橋脚から橋脚までの間を殆んど一跳び宛で駆け抜け、啞然たる人々の目の前で、人と馬との両ルファス卿は、セエヌ河に飛び込んだのだ。乗手は馬が股の下で溶けるのを感じた。馬の耳が消失したと感じた瞬間、上なる騎手は、ひとり反対側の土堤に上つていったのだ。形見は、ただ手の中に残つた一握りのたてがみと、拍車に僅かについた血だけで、外には何もなかつた、少くとも彼はそう信じたのだ。

× × ×

翌日から、この紳士騎手は、馬の幽霊に苦しめられる。不図鏡をのぞくと、自分の眼が馬の眼になつていたり、心の中で、馬が「あなたのお蔭で私は溺死したのですよ。恥しくないんですか？」と責めるのを聞いたりする。負けん氣を出して午餐会に出かける。そして、競馬の時のことは話題に上せないでくれ、自分は今後は競馬は勿論、一切馬に乗ることは止めにすると言言する。その異様な昂奮に人々がどうもただごとでないぞと思つてると、果して会の終りに、ルファス卿の背中に、例の愛馬の濃い灰色の尻尾が生えて、洋服の上から、陽気に動廻るのが見つかり、家の主婦を氣絶させ、卿はほうほうの態で逃げ



出す。

この半ば馬になつたような状態が数日続く中に、外観よりも精神的にすつかり自分が人間でなくなつたように感じられてくる。卿には婚約中のアメリカ婦人がある。今迄深く彼女を愛していた。ところが、急にこのフィアンセよりも牝馬の方に魅力を感じるようになった。フィアンセを訪問する代りに厩舎を訪ねて喜ぶのである。

その翌日になると、朝食のため女中を呼ぶ時に、思わず嘶いてしまう。食事が来ると、美味しいものが沢山あるのに、芸をする馬見たいな御追従をして御愛想をして「角砂糖を一つ下さい」と彼女に頼むことになる。街を歩くにも歩道を避けて、自動車の間を通り抜けるのが楽しくなる。とうとう彼は自分が馬



になりたいということをフィアンセに告白せずにはいられなくなつてしまう。

× ×

告白を聞き終るとアメリカ婦人はいつ

「あなたは馬になりたいの？ 何でもないじゃないの？ 我慢することあつて？ 自分の性向には逆わないことよ。無理に我慢するから病気になるのよ。すぐ馬になる決心なさい。ボ

ワへ二人で散歩に行くことなら、今迄通りできるわ。私が乗馬服で（乗つて）行きさえすれば、おかしいことはないわよ。ホラ、こちら向いて、あなたの鼻面にキツスしてあげるわ。（彼女は素晴らしいながら男の首玉にぶら下つた。）じやあしたはラヌラツクの並木道で待つてゐるのよ。」

もう何の気兼ねもない、ルフアス卿は、一夜

にして、馬に化した。夜のあけてしまう前に彼は出来るだけ蹄の音をさせずに段階を下りて、階下で扉の引手の上うまく頭を支えた。しかし、鞍も手縄もない馬は、表通りに出れば、人間の裸と同じで、怪しまれるものだ。そして一体彼はどこへ逃げたらいいのだ？ 約束の時刻には早過ぎた。夜が明けきるまで彼は泥棒みたいに巡査を避け、通行人を避けて歩いた、通行人達は裸馬を見ると巡査を呼ばないではいられないほど馬鹿共だつたから。

無事にボワにつくと、彼はそこで草を食べ始めた。前々から、草を食べて見たいと思つていた彼には、いい機会であつた。

（結局俺にはこの生活の方が気楽だ、何の心配事もないんだからな。）と彼は思った。

.....

その中にアメリカ婦人はラヌラツクの並木道に現れた。前から承知していたとはいえ、彼女は婚約した男がこんな立派な馬に化したのを見て、非常に驚いた。

近くをボワの番人が通り掛る。馬はそれを見て、「ここで一つ嘶いてやろう！」と思うのだつた。しかし嘶いても番人は彼に特に気

をとめなかつた。

シャツも着ないで、おかにぼろぼろの上衣を着た貧乏な男がやつて来た。彼は縄を一本脇の下に持つていて、その様子から、首を縊るのに都合の良い樹をさがしているらしかった。

若い婦人の注意を惹くために、馬はその縄の方を見ながら嘶いた。

「あなたは何処にいくのです。縄を持つて？」

「何処に行つたつて私の勝手さ。」と宿なし男は急に怒つて答えた。

「そうね、でも若しかして……」と彼女はできる丈やさしい声でいつた。

「若しかして……なんて思うのは無駄だ。

さあ、私が樹を見つける邪魔をしないで下さい。」

「いけないわ、あなた。私にその縄を下さない？」

と彼女はいつた。そして男を安心させようとした。

「高価につきます。買つたつて、幸福は持つて来ないから無駄ですよ。」

濃い顔の中にそれとなく微笑を見せて、その男は一層哀れな姿に見えた。

暫らく経つと、女と馬と首を縊ることから脱れた男とは、ポルト、ドオフィンにある厩舎の方に向つて進んでいた。男は例の縄で馬を繋いで持つていた。今はこの縄は心地よく彼の掌を温めるのだつた。

ルフアス卿は、簡単に、乗用馬車用の馬になることができた。毎日きちんと、彼は彼のフィアンセを乗せた馬車を輓いて散歩した。こうして一日一日が平和に彼等の上に経つていつた。

彼女は、まるで自分の馭者に話しかけるように、彼にいう

「ボワへ行つてよ。染物屋に寄りたいからピュゴオ通り廻りてね。一寸寄るだけ。それからロンシヤンを一廻りして、アカシア街から帰つて来ようよ。」

命じ終ると、彼女は馬車に乗つて、安心して馬の走るにまかせるのだつた。

或る日、(厩舎から)アメリカ婦人を迎えるに行くと、彼女一人ではなくなつていた。彼女の若い同伴の男は、煙草屑のくつついたパンを、ポケットから取出して馬に与えたが、失敬極まる態度であつた。

この飛入りの男は、その後、彼女の散歩の度に、彼女に同伴するようになった。若い二人が車の上で話し合うことを聞こうとする余り、馬は屢々前脚を上げることが忘れるのであつた。然し、馬は、この若い男は、彼女がボワへ散歩する時だけの、ごく通り一遍の友達に過ぎないと理解していた。

或る日、ある日、曲角で、ルフアス卿がうっかりして歩道に踏み込んでしまつた時、この青年は怒つていた、

「何てやくざなコキユだろう！ あなたがいっつぞやおつしやつていたように、今度機会があつたら、こつびどく折檻してやりましょう。こいつめ、しよつちゆう疑い深い耳を動していて、充分私達二人の仲を承知しているんですよ。」

## 【解 説】

一

一寸変つた所を紹介してみた。シユベルヴィエルは仏蘭西詩壇の重鎮である。戦後「シユベルヴィエル詩集」が中村真一郎訳で出ているのを御存じの方もあろう。原文で読むと実に詩想の優れた格調の高い詩で、詩人ら

しい詩人といえる。右の中村直一郎の解説によると、戦前にも堀口大学の手で詩や小品が訳されているそうである。

この詩人は一方で実に良いコントを作る。アンデルセンの「絵のない絵本」などと系列の同じ詩的散文である。寓話的な作品が多いのは、象徴的手法からいつて当然であろう。これらは勿論マゾヒストを予想して書かれたものではない。(だから一部の人のように、マゾヒストのための文学、サディストのための文学ばかりを搜し廻つて、限定版を見つけ、この道の通人ぶろうなどという心掛では、シュベルヴィエルなどにぶつかるとはできないのである。)

それを予想していないに拘らず、マゾヒストを喜ばせるコントが少くとも二つある。一つはここに紹介したものだ。もう一つは「妻との再会」(La Femme Retrouvée)と題するもので、天国に在る夫が、妻にもう一度逢いたいばかりに犬に生れ代つて、妻に飼われるが、彼女は犬が夫とは知らず、後家を立てずに情失を作る。犬になつた夫はその情夫から虐待される。といったマゾヒスティックな筋のもので、こゝに紹介したのよりは稍長

い。これを収載した「ノアの方舟」(L'Arche de Noé)という本が今手許にないので訳出できなかったがいずれ機会を得たと思つてゐる。

「手帖」第九項で一言言及したのはこの作品である。)

ここに紹介したのは原題を「競馬

の続き」(Les Suites d'une Course) とま

り「競馬のあとで起つたことども」と題する

コントで「沖の子供」(L'Enfant de la haute Mer) というコント集に収載されてい

る。内容にふさわしく、「人耶馬耶」と訳文

に題してみた。

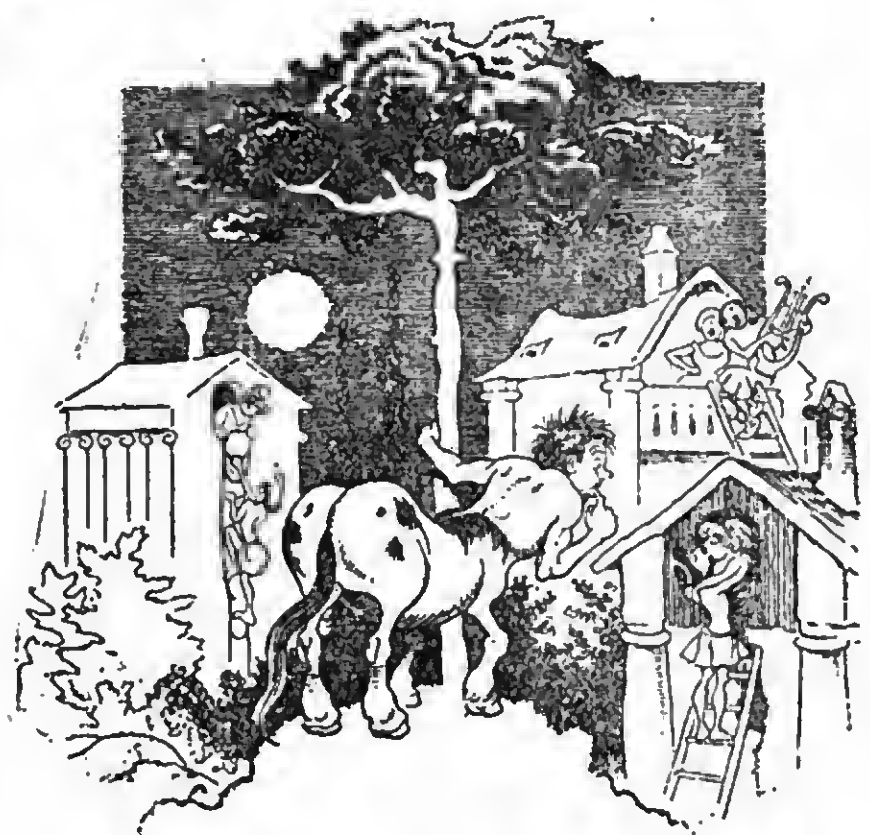
訳は例によつて全訳ではない。短いもの

から全部訳してもよかつたが、マゾヒスト

のために書かれたものでない以上、マゾヒスト

のための翻譯に當つて取捨する所ができてく

るのは当然であらうと思つて、一部を略し



た。訳文の中、馬の幽霊に苦しめられてから次第に自分と馬との区別がなくなつて遂にフイアンセに告白する所迄は梗概である。告白以後は、ボワで草を食つてる間の経験の部分と、思う所あつて、末尾の部分とを省略しただけで、訳出した部分は原文に添つており抄訳ではない。尤もかなり意識してある。

二

ゲーテの若い頃の詩(Lied)に、「求愛者は何にでもなる」(Liebhaber in allen Gestalten)と題するものがあるが、その一節に

私が馬であつたら良かつた

そしたらあなたのお役に立てるわけだ

から。

あゝ私が馬車だつたら

楽々あなたを乗せて運ぶ馬車だつたら

良かつた。

私が馬であつたら良かった  
そしたらあなたのお役に立てるわけだ  
から。

といつてゐる。マゾヒストとまで分類されぬ人でも、純情な恋愛感を昂揚させてゆくとかういうように愛人に奉仕したいというマゾヒスティックな境地に辿りつくことは決してまれではない。このゲーテの詩が広く理解され親しまれる所以だ。

然し、愛人に馬となり、馬車となつて奉仕することは奴隷制度の廃絶した今日では空想に止まらざるを得ない。そこにマゾヒストの悩みがあり、夢想がある。(その一例を私は「手帖」の第六十項に「輓馬志望者」としてあげておいた。)そして、このシュベルヴィエルのコントは、その夢想の境地を見事に描き出した一つといえるだろう。

アメリカ婦人が馬になつたルファス卿を受け入る際の平静は素晴らしい。卿の告白を聞いた時も彼女は驚かずに、彼に馬になれと勧める。ボワ(パリのブウロオニユに在る森の名で、東京でいえば外苑とでもいう所)で馬になつた卿を見つけると、縄で繋いで帰る。厩舎に飼つて、毎日の散歩や用足しに使役する。だが馬になつた恋人をいつまでも恋

人として意識しうるかどうか? これは無理である。だから結局彼女は新しい遊び相手を持つことになる。ルファス卿はもう彼女の厩舎の中にいる持馬の一匹としてしか彼女にとつて存在しなくなる。単なる遊び相手と馬の方で思つてゐる中に、二人の仲は進んでいくのである。そして彼女はただ馬になつた卿を忘れることで彼を裏切るばかりでない。

彼が馬でありながら、馬車の中の話し声に氣を取られて馬としての職責を尽さないことに對して腹を立てる。そしてそれは馬の持主としては尤もな立腹であるといわばならぬ。彼女は今や彼を馬らしく嫉妬することの必要を感じず。今迄は甘かしてゐたのである。この彼女の決心を示すのが、訳文の最後で青年のしゃべる中の「あなたがいつぞやおつしやつたように」ということばだ。彼女は青年にこの馬の前身を語り(これは青年がコキユ即ち寝取られ事主ということばで馬を罵るので分る。)この馬はこの頃やぐざになつてゐるからその中しつかり調教しましょうよ、と話してゐたわけなのである。

このアメリカ婦人の変り方は、しかし、マゾヒストの立場からは当然であり、彼女を責めることはできない。ルファス卿は馬になつ

た以上、飼主に対して不平を持つことは許されない。彼女が青年と正式に結婚したとしても、彼はやはり馬として、一生をこの夫妻に捧げ馬車を轆きつづけてゆくべきであらう。

ところが、(マゾヒストのために書かれていない以上、それを責めることはできないが)原文では、結局馬のルファス卿は怒つて馬車をぶつつけて、二人を殺す。そして、女の死と共に、呪縛がとけて人間の姿に立ち返るが、手綱や帯革に拘束されて轡や轡鎖を外すことができず、首枷と轡の下に這つてまだ脱けきらぬ馬の振舞するところでのこのコントは終つてゐる、マゾヒストとして私はこの一段は訳出する氣がしなかつたのである。

このコントは寓話として読むことが可能である。右の結末を知れば、三角関係の悲劇に終る一つの家庭生活を読みとることもできるしかしこれはもうマゾヒストのための解説の埒外であるから、ここでは詳説しない。その際、ボワで出逢う首縊り志望の男がどういう意味を持つかは問題であるが、私にはよく分らない。縄についてこの会話も何を意味するのかよく分らないが、その縄に繋がれたことで、馬のルファス卿が幸福になつたといふつもりなのであらうか?

この短い抄訳と拙い解説とが機縁となつて詩人シュベルヴィエルの近づく人か読者か一人でもあれば、私としてこれに勝る喜びはない。





悪あく

の

部

屋や

二

ふた

俣

また

志

し

津

づ

子

こ

今迄のことは、序章なのです。ほんの書出しにすぎません。描写もわざと荒削りにし、筋も整えませんでした。御免遊ばせ。

さて、私、二俣志津子が看板をあげましょう。何の？。勿論商売よ。読者諸兄姉も御注文あれ。と言つて何もことめずらしいものはありませんのよ。次の広告を一読下さいませ。

御淫章・ゴム淫彫刻

——極秘・低廉——

御値段

御淫章

ツゲ小判 百円より

水牛小判 二百五十円

象牙小判 七百元より

其他各種

書体御指定乞う。

ゴム淫。

一字につき二十円

但し大きい字は三十円

絵画

面積と内容により

値段不定。下絵持参

(送附)のこと。

其他。

総て前金のこと。

## 二侯淫房

二侯志津子

私は、玄関に小さな着板を掲げると部屋にもどつて、机に腰を下し、部屋を見廻した。

六帖と二帖のちんまりした古めかしい感じで床間やちがい棚がこの部屋の古さを物語つて黒光りしていた。無風流な私にも昔は茶室であつたことが想像出来た。六帖と二帖の間は襖で、東側は廊下になつて、そこには雨戸がある。窓は前記の通りで、厚ぼつたい緑のカーテンはそのまゝにしておいた。

着板をかけたからと言つて客が来るわけではない。第一、誰もその着板を見ることがないだろう。私にとつては、ハンコのお客は第二の問題なのだ。戦後人は何をして食べているのかわからない人が多くなつた。そう言えば私自身がどうやつて生活してきたのかかわらないし、今後の見通しもない。何とか生きて行けるだろう、と太々しく腰を落付けてしまったのである。

この時私は、ふと、この部屋に最初に来た時に、兄が、「ひどいことをしやがる。」と呟いて天井裏へ這上つたことを思い出した。その直後に私は兄の松葉枕で正木に殴られて

倒れたのだ。

私は急に天井裏へ上つてみる氣になつた。忘れていた恥部をまさぐるような感覚が全身を走つた。秘密の部屋だわ。と、私は口に出して呟き、押入を開けて素早く中に入つた。

天井板は二枚外れるようになっていて、何となく人間臭い。確かに昨日まで人が出入りしていた感じである。私はマツチをすつてローソクに灯を点け、天井裏へ這い上つた。そこは思つたよりも広く、茶色っぽいじゆうたんが敷かれてあつた。香水の匂いがして、とてもネズミが走り廻ることは出来まい。と、思われるほど、隅々にまで人の手入れがされている様子で、私は、ふーん、と、鼻を鳴らした。

——めつけものだわ、私がここに住んで、下を誰かに貸してもいいわ。

私は突然、何物かが動く氣配に緊張した。ローソクを高く上げて注意深くあたりを見廻した。しかし、何も見えない、隅の方に兄が置いて行つたらしい木箱や薬品函や瓶などが見えるきりだ。二帖の方かもしれない。と、私は梁を伝つて二帖の方へ行つた。人の氣配がそこにあつた。私は息をつめた。次第に興奮してくるのが自分でもわかつた。若し万一

のことがあつたら——逃げ場は全くないし、叫んでもどこにも声がとどかない。せめて下に聞える位だろうが、下には誰も居ない。

——ふん、面白いわ。

私はそろ／＼と二帖に這い寄つて、一寸高くなつた梁からそこを覗いてみて、危く声をあげそうになつた。薄いふとんをかけて若い女の人が寝ているのだ。枕元には小さなウルシ塗の抽出しや香水瓶、食器等が置かれてある。女は整つた顔をした可成りの美人で、幾分やつれてはいるようだが病人でもなさそうに見えた。色は確かに肌白で、豊かな髪を持つていた。

女はローソクの光りに目を覚めた。そして私を見ると、あッ、と、声をあげてふとんを引覆つてしまつた。それを見ると、私は急に残忍な興味に衝かれ、ローソクを梁に立てて彼女に近付いた。女はふとんの下で身をふるわせてすゝり泣いているようであつた。

「ねエ、あなた。あなた、誰?。」

「……………」

「私、こゝの部屋を借りている二侯と云う者ですけれど。」

「え?、二侯、」

女は美しい驚きの声をかすかにあげてふ

とんから顔を出した。

「では、お妹さん。あの……二俣さんの？二俣三郎さんの？」

「そうよ。」

女はやつと安心した表情になつて、唇に微笑さえ浮べた。

「あの、ローソクを消して下さいな。こゝ電燈がつきますの」

彼女は枕元のスイッチをひねつた。と、丁度彼女の腹の上あたりに四十燭位の電燈がついた。

「ね。」

彼女はなお他のスイッチをひねつた。すると、四方から五燭の電燈が一齊に灯つた。そしてそれはすぐに消された。私はローソクを吹き消した。その時私は彼女ののびた腕が肩まで裸であるのに気付いた。直感で、この女は素裸かもしれない。或いはシユミーズだけ。ひよつとするとズロースだけかもしれない。そう思つた。着る物がないから逃げ出せなかつたに違いない。



い。

「ねエ、あなた、何と言うお名前？」

女は憐れみを乞うような表情になつた。

「お聞きにならないで！」

「でも、これが御縁でおつき合いますようになるかもしれないでしょ？」

「そうね。」

女はあきらめたように目を閉じた。そして再び眼をあけると私をじつと見つめた。

「この名前は、あなたのお兄様がつけて下さつたのよ。私の本当のじやないの。それでいいかしら？。お兄様はいつもそう呼んで下さるのですけれど……」

「何て？。」

「あの……し、の、ぶ。」

「しのぶ？、いい名前ね。じやしのぶさん、お起きになりませんか？。」

しのぶの頬がさつと紅味をおびて、かすかに首を振つた。

「御病氣なの？」

「いえ、あの……」

「服がないのではありませんの？」

「ええ、それもありますの、でも……」

「私を持つてきますワ」

「はア、でも……」

「御遠慮なさらなくてもいいことよ。私達これからお友達になるんでしょ。」

しのぶの美しくいい眼から涙があふれ出た。

「有難う、でも、」

しのぶの手が、つ、と、私の手を捉えた。

私は彼女のなすまゝに彼女に手をあずけた。

見れば見るほど美しく上品に見えてくるのに私はすっかり魅せられてしまったのだ。こんな人を私のものにしたい。と、言う切望が湧いてくるのを押えようもないのである。

しのぶは私の手をふとんの中に静かに引き入れた。そして、私は思わず手を引込めようとした。なめらかな暖かい彼女の肌に手がふれたのである、が、彼女の手は私の手を捉えて離さない。そして静かに私の手を下の方へ導いて行く……。

私は、彼女の暖い肌に手がふれると、たえ切れなくなつて、ふとんの方から力一杯彼女を抱きしめた。このふとんの下には美しい

裸形が横たわっている。私は男のような欲望を感じた。この女の肌と肌をすり合し死ぬほどに抱きしめたい。この女を私のものにした。自由にしたい！

私は素早く服を脱ぎ捨てて、しのぶのふとんをはぎ取つた。しのぶは、あつ、と、身をよじらせた。私は彼女に抱きつこうとして、ふと身をくねらせた彼女を見て息を飲んだ。

彼女はブラジャーもズロースも身につけていなかった。そればかりではない。彼女の細い腰に革のバンドがしてあり、その一端が、丁度犬の首環のようにくさりて梁に打込まれた金具につながれてあつたのだ。

しのぶは顔を両手で覆つて、俯伏せになつた。

私は静かに彼女を抱き起した。

「そう、そうだつたの、可哀そうに。」

私はそう言いながら彼女の豊かな乳房を掌に乗せてみた。彼女はいきなり振り返つた。そして恐ろしい力で私に抱きついてきた。

「淋しいの、淋しいのよ」

彼女の唇が私の唇の上に強く押しつけられた。と、同時に、彼女の柔い舌が私の唇を押し開き、齒の間から私の口の中へ、私の舌を求めてでもいるように入つてきた。しのぶの

舌は私の舌の裏から、急に上あごを撫ぜ始めた。

私は、ぶるツと身ぶるいした。離婚して以来久しく触れなかつた身体が燃え、頭がジーンと熱くなつた。私は夢中でしのぶの背中の肉を掴んだ。彼女の舌は私の舌とからみ、私の口の中をまさぐっている。私は、次第に苦しくなつてきた。どのように？ そう、それは興奮のためだ。私はこの女を私のものに出来る。と、云う喜びのために、一人の女を自由にすることが出来る喜びのために、私は夢中になつて、彼女の豊かな髪の中に手をつつ込んだ。そして、ふと、彼女の手はどこにあるのだろう、と、思つた。私の身体はすっかり熱くなつていた、が、しのぶの手は、私の背にも髪にもない。私は急に不安になつてきた。

彼女には手がなかつたのではないだろうか。

あつたと思つたのは幻覚で……が、こんなことを思っているのはほんのわずかの間で、私の両股は彼女の腰で押しひろげられ、私は彼女の寝ていたところに仰向けに寝かされてしまった。

「縛るわよ。」



しのぶの音が耳元でそう呟いたように思つて、だめ、と、叫ぼうとした。が、もう遅かった。こゝには紐でも布でも何でもあつたのだ。

——叫んでも無駄だわ。

そのことはしのぶも私もよく知つている。私は両手両足を四方の梁に縛りつけられて大の字に寝かされてしまつた。四方の電燈が一齊に点いて私を照した。しのぶの冷やかな髪が私の下腹部にばらつと落ちた。次の瞬間、私は思わず声をあげた。

「よして！」

「あなたの、びりつとした味がするわね、処女がそうよ、最初だけね。」

私は不思議な感覚でふるえが止まらなかつた。その度に私は声をあげた。

「あなた、まだ赤ちやん生んだことないのねそれから、しばらく………ことがないでしょう。わかつているわよ。それからあなたは私のものよ。一日に一回はこゝへ来るの。いいこと、でない………」

しのぶはいきなり私の両の乳房をぎゅつと掴んだ。

「どう？、来る？、来ない？」

「来るわ。」

「本当ね？」

「ええ、」

「じゃ許してあげる。それから、このことお兄さんに言うとお承知しないわよ。きつと、あなたを殺しちゃうから。」

私は背いて眼を閉じた。彼女の唇が再び、太股から………私は身悶えた。

「お願い、それだけは、よして。」

「よしわ、よしわ。」

しのぶは身体を起して私を眺め下した。

「カメラがほしいわ。いい身体してんのね。」

私、一寸出掛けてくるわ。」

「え？」

私は驚いた。しのぶは含み笑いをした。

「苦心して、考えたのよ。お兄さんにお化粧品いろ／＼買つてもらつたの。何とか金物の付いたものはないか、と、考えたわ、ほら、この梁についた金具、木ねじで止めているでしょ。これを外そうと思つたの。」

しのぶは難なく梁から金具を外した。そして金具を股にはさみ、私の服を素早く着てしまった。

「ほゝ、もうだめよ。一年ぶりで私は土がふめる。今度はあなたの番よ。私が養つてあげ、赤ちやんを生みたかつたら男を連れてき

てあげるわよ。うゝん。赤ちやんを生みたくななくても、男が欲しいつて云う時があるでしょ。そんな時は、そうおつしやい。毎晩でも連れてきてあげるわ。うゝん、一晩に三人でも十人でも。私がお金受取るわ。シヨート五百円、上玉だから、オールナイト一五かな。

こゝ二た部屋でしょ。もう二、三人居れば楽に食べてゆけるわ。差当つて今夜連れてくるわ。こう云うところが好きな人が居るのよ。

一寸アブノーマルな、ね。食事、すぐ持つてくるわよ。商売道具をしなびさせちや何んにもならないからね。」

私は悶えた、が、手首足首の革が肌にすれるばかりであつた。

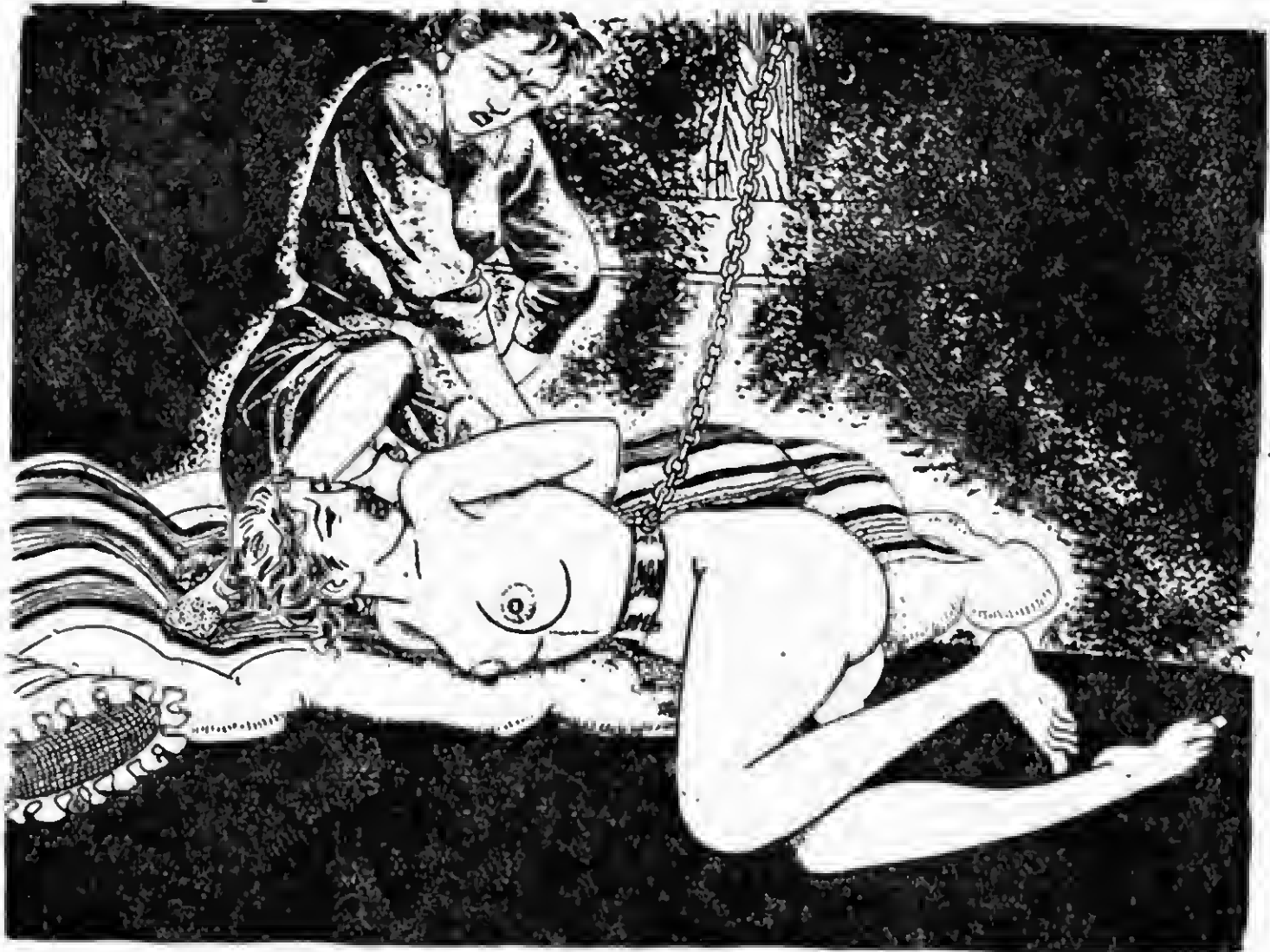
「着る物がなくて逃げ出せなかつたのだけどうとう機会が来たわ。あんたはまだねんねエさんよ。可愛い可愛いねんねエよ。」

しのぶは私の顔を一寸指で持上げてから電燈を消して去つて行つた。

## 二

私の胴に革のバンドが締められ、新しい金具は五寸釘で梁にしつかり止められ革紐がつながれた。

「どう、この感じ、なか／＼ロマンチックで



いいでしょう？」

しのぶは私の手足のいましめを解きながら言った。

「男に荒される前に私があんたをしばらく可愛がつてやるわ、あんたがお金を持っていたおかげよ。食べるのに困ったら今夜にでも商売させるんだけど……」

私は手足が自由になつても、まるで気が抜けたようにぼんやりしていた。しのぶは私を抱き上げ、指を、もう躊躇することなく、真直にお尻へすべり込ませてきた。

「そうね、それでも赤ちゃん生まれちゃ、困るわ。それは、私も少しは心得があるからおろしてあげるけど……しかし、こゝは思った

よりいいわ。縛るのに都合よく出来ているんだもの……よし、もつとつてやろう。傷をつけないければ縛つても宜しい、と云うことにして……少し儲けなくちゃ——」

私は恐怖におののいた。

「沢山です。」

「遠慮しなくなつていいわよ。どうせそのうちに大小様々な男が訪ねてくるのだから。下の商売は、そのまゝ私に受継がしてもらおうよ。ゴム印なら一寸得意な方だから。」

私は、このしのぶが、あの日記の主であることに今やつと気付いた。それにしても、あの日記からとは何と云う変りようだろう。いや、この部屋に居ると、みんな誰でも悪魔に魅せられてしまうのかもしれない。私は、彼女の手がお尻の肉を抓つたり、腋の下をくすぐったりするのを、彼女に身をもたせかけたまゝ、なすに任せていた。

「そうそう。」

しのぶは急に発見したように叫んだ。それから私の胸を固く抱きしめて耳元に囁いた。

「あんたの肌を下さいね。ほんの少し、小指の爪位。」

私はどきつ、とした。あれだ、皮膚を剥ぐのだ。私も他人の皮膚を剥ぐことは考えてい

だが、自分が剥がれることなど思いもかけなかった。

「ごめんなさい、許して。」

「大丈夫よ、注射を打つてあげる。それから目だたないところ……そうね、お尻はだめ裸の商売だから……太股、内股ね。早い方がいいわ。」

「ごめんなさい。」

私はしのぶに取すがろうとした。と、彼女は私を投げ出して髪を足でふまえ、両手を梁へ縛りつけてしまった。私は両足をばたつかせた。が、両手を梁へ引張られ、胴をつながれているので逃れようもなかった。しかし、それでも私は足をばたつかせた。と、革の鞭が、びしりと、私の足を打つてからみついた。そして、今迄よりも強く股を開かされてしまった。しのぶは私の髪を驚嘆みにして引っぱった。

「荒れる。え？」

その手にぎゅつと力が入った。私は唇を噛んだ。

「あんたは私のものなんだよ。もうだめなんだよ。血の一滴だつて自分の自由にならないつて言うことをよく承知しておき。口で言っただけじゃわからないんだから、今夜一晩

私がよく思い知らしてやるから、それ、この毛、今、きれいに剃つてやる。いや、これは商売道具だからよそう。これがないとがっかりする男が多いからね。え、と、そうそう、あんたが持つてきたローソクをあんたの身体に立て、灯を点けよう。荒れたら火事よ。一番先に燃えるのはあんただけだよ、こんな家燃えたつてかまやしない。」

私の両足は、ひろげたまゝ上へ吊し上げられた。

「ほ、完全なローソクたてだわ。」

私は私の身体の上に、立てられたローソクに灯がともされるのを眺めているうちに涙が流れてきた。

「商売なんかしないで、こうやつて私の玩具にしておこうかしら？ ほ、どう、素晴しいじゃないの、それでつと、あんたの名前は？」

「……………」

「云わないのね。いゝわ、言わなくなつて、その代りローソクの火を消してやらないよ。そうするとどうなると思う？、え、元まで燃えてくると——。ローソクがなくなつたら新しいのをたてるわよ。」

「……………」

「もう一度だけ聞くわよ。あんたの名前、何んて言うの？」

「志津子」

「ふん、しやれている名前ね。大方恋人にでもつけてもらった名前だろうけどさ。じや一寸外出してくるからね。」

「お願い、ローソクの火を……」

「ほ、自分で消しな。そうやつて、ふーつと吹いてさ。」

そして、しのぶは去つて行つてしまった。

ローは解けて流れた。可成りあつい。私は何としてもこの火を消したかった。そして、いろいろ工夫しているうちに、もつと腰を高く上げると股を閉じられそうな気がした。それは、確かにその通りで、また楽なことではなかった。私は出来るだけ腰を上げ、一気に股を閉じてローソクの火を吹き消した。次に手足のいましめを解くことを考えた。しかし、これも、どうにもならなかった。力を入れれば入れるほど革帯が肌に食い込むのである。私は、バツタのように手足が取れてしまったらどんなにいいだろう。と、思つた。下ではしのぶの出て行く気配がした。私は、彼女が私の新調の服を着て、サングラスをかけて出かけたのだらう。と、想像した。

.....

それからどの位たつたろう。一秒が一時間にも思える時間が流れた。或いはしばらくは氣を失つていたのかもしれない。下に男の話し声がするので、はつ、と、身を起そうとして自分が素裸で、両足をひろげたまゝ吊し上げられているのに氣付いた。私は闇の中で身悶えた。この闇の中に消えてしまいたかつた。

やがて押入れが開けられる音がして、一人の男が天井裏へ這い上つてきた。

「おい、しのぶ、電燈をつけろ、暗くて何もわかりやしない。」

——あッ、兄さんだ。

私は、こんな姿を兄に見られなくなかつた何とかして逃げ出したかつた。

「妹が帰つてくると、あいつは敏感だから天井裏に不審を抱くだらうから正木を下に残しておいた。若し帰つてきたら彼がうまく妹を外に連れ出す。それは俺じやダメだ。まさか妹にコーヒーをのみに行きませんか、とも云えないからな。とに角妹の留守の間にお前を連れ出すことにしたのだ。当分は俺の部屋に居るんだな。」

兄はそう言いながら近付いてきた。

「おい、眠っているのか、服を持つてきたん

だ。」

兄は電燈を点けて、あつ、と声をあげた。

「志津子！」

「兄さん、助けて！」

「本当に、志津子か。志津子だ。一体、どうしたつて云うんだ。また、このローソクは……しのぶらしいやり方だ。」

兄は私の身体から、まず足、それから手のいましめを解いて、胴の草帯の鍵を外した。

「どうしたつて言うんだ、え？」

彼は私の前へ服を投げ出して、注意深くあたりを眺めまわした。

「ふーん、金具を外したんだな。おい、お前

また助平根性をおこして、のこのことこの天井裏へやつてきたんだらう。馬鹿な奴だ」

私は嬉しいのか悲しいのか自分でもわからずに、しやつくりあげて泣いた。

「いずれしのぶの奴はこゝへやつてくるんだらう？。よし、おい、正木、上つて来い。

志津子、下へ行つて俺の松葉杖と二人の靴をかくしておけ。」

私は正木が上つて来るのと入ちがいに下へ行つて松葉杖と靴をかくし、再び天井裏へ上つて、隅の方へ小さくなつてかくれた。

兄と正木はしきりに何か工作していたが、

やがて電燈を消すと息をひそめてひっそりとしてしまった。

やがて下ではしのぶの帰つてきた足音がした。彼女は楽しそうに口笛を吹いて、どうやら食事の仕度をしているらしかつた。

「お二階のお嬢さん、今、御馳走を持つて行つてやるからね。」

よくとおる丸味のあるしのぶの声が天井裏へつつ抜けてきた。

私は息をのんで、どうなることかと、しのぶの出現を待った。(つづく)

## 責めのアイディアを募る

皆様の中で本誌に発表する責め写真や縛り絵、或は代理部の分譲写真について、こういつた構図やポーズ、或は趣向で作成してほしいといった御希望がございましたら、何卒御遠慮なく編集部宛御申出下さい。採用の分並に優秀なる企画に対しましては、画稿又は写真を差し上げます。説明以外になるべく略画を添えて下さるようお願い致します。

(編集部企画係)



# 感情教育

〔四〕

吾妻新

栗原伸・画

## ある事件

結城章三郎が妻に汚した服をきせて責めたのは、次のような事件が起きたときである。

十一月にはいつて、在学時代の友人がまた脚本朗読会を組織したというので、久方ぶりに彼は旧友の家を訪ねた。章三郎はまことに無骨な社交性のない男だけれども、こんな方面には多少の天分があつて、R・D・Sという朗読会をつくつたとき女の会員が一人もないので山本有三の「同志の人々」をやつた（これは男だけで出来る）。それが成功して「築地の舞台を見るようだ」という空恐ろしい讃辞をうけ、聴衆の女性から参加の申し込みがあつてたちまち男女同数の会にしたこともあるし、竜泉寺市民館のたのみで労働者たちにセリフを教えるため雪の降る夜を熱心に通つたこともある。そんな彼だから、友人にたのまれると夢中になつて、夜おそくまで話

しこんでしまつた。それでも郊外電車はまだあつたので、幾度もかえろうとしたが、そのたびに引き留められた。

「なんだ、新婚早々でもあるまいし、一晩ぐらい泊つたつていいじゃないか。それでも心配だつたら電報を打ちたまえ」

冷やかし半分にそう言われると、振りきつて帰るわけにもゆかず、とうとう泊ることにした。そこで友人と駅まで行つて、「コンヤトマル」と電報を打つた。結婚後一度も外泊したことがないから安心させようとしてわざわざやつたことだが、皮肉にもその親切がいけなかつた。

翌日の昼ごろ帰宅すると、由紀はとびだしてきたが、彼の顔を見るや否、「ゆうべは大変だつたのよ」と言うのだ。事情をきいてみると、こんなことである。

その夜、あまり夫の帰りがおそいのでさきに夕食をすませた由紀は、いつものネルのパジャマに着換えて、暖い茶の間で雑誌をひろげていた。もちろん、おそくも最終の電車でかえるものとはばかり思

つていたからだ。すると、玄関があいて、「電報です」という声がした。

どきん、とした彼女はいそいで立ち上つたが、あいにく手近に羽織るものがない。宵の口ならパジャマも着ないし、第一、来客とわかれれば手間取つても洋服に着かえたらうが、電報ときいたのですっかりあわてた。もしや夫に交事でもと思うと矢も楯もたまらず、そのまま玄関に出て電報をうけとり、その場で開いてよんだ。それでやつと安心したのだが、ふと気がつく、電報配達がタタキの上に立つたまま、立ち去ろうとしないでじつと彼女をみつめている。小柄の、おとなしそうな若い男だつたが、酒の匂いがする。

由紀はじぶんの姿に気がついた。前に述べたようにこれは普通のパジャマではない。からだに合せてびつたりさせ、袖口もズボンの裾口も締めたかなり煽情的なものである。もつとも無邪気な彼女はそう思つていないのだが、なんとなく恥づかしく感じたことは事実だつた。

「どうもご苦労さまでした」

いそいで頭をさげたが、返事をしない。夜は更けて、近所ははなれているし、夫が帰らないことはわかつたし、少々うす気味悪くなつてきた。

「お世話さまです」

思いきつて、強い声で言つた。

すると男は、煮えきらない様子でモジモジしていたが、やつと玄関を出たので、いそいでタタキへはだして下りると鍵をかけた。それから電燈を消し、廊下を通つて便所にいった。すぐ寝るつもりだつたのである。

その廊下は庭に面しているが、ガラス戸の外にまた雨戸を締めてあるので、もちろん外からは見えない。だが便所の灯をつけたとき、庭先にかすかな足音がしたような心地がした。一度しやがんだ由紀は、本能的に立ち上つてズボンを引き上げた。とたんに、眼下の細い擦硝子の引手に大きな手が映つて、がらツと開いた。

「どろぼう！」

夢中になつて叫んだ。たちまち荒い靴音が庭を横切つて遠去かつてゆく。つられるように由紀も廊下を走つて玄関にとびおり、手早く鍵をあけて表に走り出た。そして、五六間はなれた隣家の植込からまだ二階の窓に灯が洩れているのを見上げて、

「起きてください、どろぼうです！」

と、二三度どなつた。が、いつまでたつても人の動く気配がない。さつきの電報配達に乗つてきた自転車もみえない。しかたなく家にはいつて、また戸締りをした。

以上が、昨夜の事件のあらましだつた。

章三郎はさつそくその足で集配局に出かけ、局長に面会をもとめて事情を語り、そのときの配達人をここに呼ぶように要求した。時刻と場所を言えば、だれが配達したかはすぐわかるのである。はたして彼が予想したように、その男は欠勤していた。これで、いよいよ犯人の目星がついたわけだ。

「電報ならば大抵ああいう用件で打つ。それを利用していたずらをするのでは安心して電報を打つことができない。妻の話では、あきらかに酒の匂いがしていたそうだが、きつと彼は電報も開いてみて、僕が留守だということも知つていたにそういない。一体、執務中に酒をのむことが許されるか？ もしこれを僕が発表したら一般

家庭に恐慌を来し、大問題になると思うが、この始末をどうつけるつもりか？」

年は若いし腹も立つていたので、相手の返事によつては告訴するつもりだった。

局長は平謝りに謝まつた上、かならず当人をみつけだして責任をとるからと言うので、彼はひとまず引き上げた。

その晩、彼はめずらしく酒を二合ばかりのんだ。たつた一日留守にしただけで、お互いは十日も別れたような気分になっていた。ましてあんな伴奏のあつたあとだ。由紀は一段と美しく、熱っぽくみえた。そして、彼の酒が終るのを待ちかねて膝にもたれると、しきりにキスを求めた。もちろん彼の胸も燃えはじめていた。

「もうこれから、ぜつたいに泊つたりなんかしちやいや。とつても寂しかったわ」

「寂しいどころか、すこしばかり賑やかすぎたじやないか」

と、章三郎はからかった。

「それだつて、みんなあなたの責任よ。あなたが帰らなかつたから、いけないのよ」

「冗談言つちやいけない。こつちはそのために、ちゃんと電報まで打つたんだ」  
「だから騒ぎが起きたんじゃないの」

と、由紀も負けていない。



「だいたい、結婚したら原則として泊るものじやないわよ。昨日だつて、電報きたのが終電車のころだつたから、かえる気だつたら帰れるはずよ」

「そりやアそうだが……」

「よしよし、過ちを改むるに憚ることなかれ！」

調子づいて由紀は笑つた。輝く白い歯がたまらなく魅惑的だ。

「でも、私がすごく勇敢だつたから無事ですんだのよ。もしも臆病で声も出せないようだつたら、あの男、入りこんできたかもしれない。そうなつたら私一人つきりですものね。あなた、どうする？ まさに重大よ」

ますます攻勢に出てくる。しかも、けしからぬ場面を想像させて、煽ろうとする。

どうせ今夜はおたがい二日分楽しみたいのだ。魂胆はわかつている。そうなると章三郎は久方ぶりにうんと惑溺したい衝動にかられた。

れた。

由紀の気持は反対だつたらしい二十四時間も顔を見なかつたのだから、天国への階段を一気に駆け上ることばかり考えている。よもや夫が今日にかぎつてしつこい道草を食おうとは思わなかつた。

「大声でどろぼう！と叫んだことはいいさ。女だから、自衛上やむをえざる狡智だね。だがそのあとは、自慢するどころじやない。む

しろ反省ものだよ」

と彼は言いだした。

「あら、どうして？」

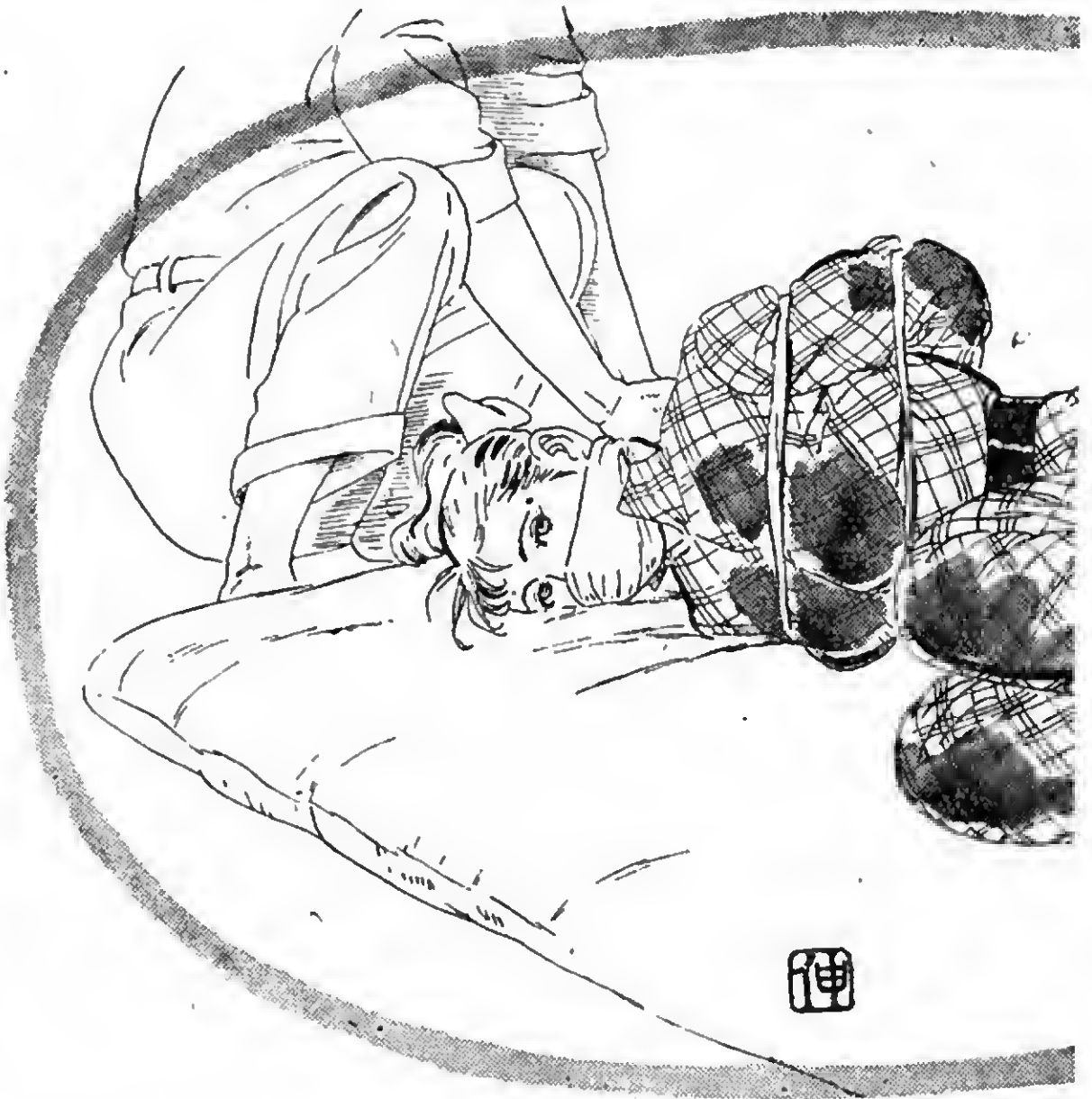
「相手が逃げだしたら、君は玄関の鍵をあけてとびだしたろう。僕ならそうすることは正しいんだ。男だし、犯人を捕まえるつもりだからね。だが君は女だよ。争いとなつたら負けるにきまつてるんだ」

「だから、お隣りを起そうとしたわよ」

「あの気の弱そうなサラリーマンが、ろくにつき合ひもしない家に泥棒が入つたからつて、わざわざ起きつかあるもんか。事なかれ主義で狸寝入りをしてるにきまつてるさ」

「だつて……」

「もしも相手が逃げたふりをして、隠れていたらどうする？ それこそ玄関から押し込んだかもしれない。そしたら、てつきり君はやられていたところなんだ。勇気どころか、軽卒だよ」



「しかもこの軽卒はどうでもいいところじゃない。大変な結果になつたかもしれない。大いに反省すべきだな」

「ハイ、ハイ」

「よし、じゃあ、あの服に着換えたまえ」

落語の三題話ではないが、やつと落ちがみつかった。章三郎は笑いたくなるのをがまんして、むりに威厳をつくつた。由紀は不意をつかれた形で、ちよつと口ごもつた。

「反省なんか、昼間ユツクリすればいいじゃないの」

小さな声だつた。彼は首をふつた。

「そういう心掛がそもそもよろしくない。君がそんな気持だつたら、よほど念を入れて後悔させる必要があるらしいね」

「過ちを改むるに憚ること……」

「ダメ。今夜は君は折檻されるんだよ」

思いきつて言つてみた。すると、一切が暗黙の約束事として進行するつもりなのに、折檻という言葉が妙に生々しくひびいて、章三



郎は生唾をのみこんだ。

## 凌辱へ

しばらくたつて寢室へゆくと、由紀はもう汚れたパジャマを着てじぶんの布団の上にすわっていた。

あの奇妙な汚染作業がすんでから十日ちかくたつが、この服を着るのははじめてだつた。いままでは「苛める」という言葉が「愛撫する」から転化してうまく利用されたために、縛っているいろいろなことをしても、由紀は冗談も言つたし、不安はなかつた。心理的演技の習慣はそのあとにつづく快楽を連想させて、章三郎が口を酸っぱくして説得したように紐をアクセサリとして愛することもできた。だが、この服装はなにか手落ちのあつたときに折檻するという約束とむすびついている。これは夫が残忍でないことをいくら承知していてもいやな気がした。

章三郎は彼らしく、このことを日記で分析している。

「折檻服とは全くうまいことを考えついたものだ。これは我々の遊びをどれだけ深くしたかわからない。

あの服に着換えるときに感じた漠然とした圧迫感と羞恥を、由紀はじぶんの清潔好きに帰している。わざと部分々々を強調して汚された服を身につけるのが辛いのだと信じている。だがそれは彼女が意識の上でそう信じたがつていることを証明するにすぎない。

もつと大きな理由は、これが懲罰のためにのみつくられた服だということである。それを着ればかならず——これが大切なのだ——責められる。この因果関係がハッキリしていて、それにも拘らずじ

ぶんの手で着なければならぬのが、彼女の胸を締めつけるのだ。もちろん我々の間には憎悪がない。これがどんな場合にも真の恐怖から救うところのものである。要するに彼女の不安は、なにをされるかわからない点にありながら、ほんとうの被害恐怖とは遠いのだ。目隠しをして、恋人に手をとられながら危い道を歩くようなものだ。スリルはあるが、嫌悪はない。じぶんはこの試みによつて妻を虐げたとは思わないし、妻も虐げられたとは思わないであろう」いささか我田引水の勝手なところもあるが、結城章三郎の本心なのであろう。しかし分析はともかくとして、由紀が多少胸をとどろかせていた証拠には、ふだんのように笑つたり冗談を言わなかつたことで察せられる。そしてこれを書いている私の推測をつけ加えるならば、そもそもこの服を着た瞬間から、由紀の心理的折檻ははじまつていたのである。着ることは懲罰の儀式に外ならない。だとすれば、おなじ仕立てのネルのパジャマを着たときに感じなかつた触感が、この汚れたパジャマでは彼女を悩ましていたにそういないのである。

章三郎はうしろへまわると、両手を重ねて縛り、胸にかけた。これもいつものことだ。つぎに俯伏せにころがして、五寸ほど開いて両方の足首をつないだ。

「ねえ、あなた今日、酔つてるんでしょ」

夫のだまつているのが不安になつて、彼女は声をかけた。

「酔つてやしないさ」

「酔つてるわよ。だから、こんなことするのよ……。ねえ、あんまり酷くしちやいやだわ」

「わかつてよ」

「ほんとに、しつこいのいやよ」

夫の声がまじめであればあるほど、彼女の声も真剣になつてきた。そのこと自体が、今夜の遊びを重苦しい真剣なものにしてしまった。

章三郎は手足を縛り終ると、そのままにして部屋を出た。茶の間をぬけ、洋間にはいると、かねて用意してあつた襦をとりだした。体臭の強い彼が今日の目的のためにこつそり隠しておいたものだから、由紀がみたら憤慨して棄ててしまうほど変色し汚れている。それをつかんだとき、来るべき光景が急に眼にうかんできて彼は強烈にエレクトした。それで、気分をしずめるためにしばらく彼はじつとしていた。

やがて寢室に戻ると、由紀は横むきに足を曲げてころがつていたが、章三郎の様子ではなにかあたらしいことがはじまるのを感じたらしく、落ちつかない表情でじろじろ見上げている。

枕元にすわつた章三郎はいつものようにハンケチを出し、「さ、猿轡」と言つた。素直に口をあけたのを幸い突っこむと、ズボンのポケットから襦を出した。それを見たときとたんによ紀は異様な声を立てて首をふつた。まさか永い間汚してきたものとは思われないが、手拭でないことだけはわかつたのだらう。章三郎は片手でしつかり口を押えておいてから、すばやく右手でまるめた襦を振りほどき、汚れた部分を鼻と口に当てて両手を首のうしろに廻した。

くだらないことを言つと、章三郎はいまに至るまで手足の縛り方はうまくない。一つには相手の意表を衝いて縄をかける必要がなく、納得すくのでユツクリできることと、いまひとつには、緊縛そのものを楽しむのではないから絵や写真で複雑な掛け方を研究す

る気がないからだ。ところが猿轡だけは相手がいやがつたり、もがいて途中で何度も弛んだりしたことがあるので、かなり熟達していた。のちには更にいろいろの技巧を用いたが、この頃は口に詰物をしてから襦をひろげて鼻にかけ口を掩い、布の上下をたるまぬように両側でねじつてから縛る。もつとも汚れた箇所は中央から少しずれていくから、結び目は首のうしろでなくやや横になるが、それは仰向けにしたとき由紀の首が痛くなくてかえつて都合がいい。つぎに垂れ下つている二本の附紐を一回よじつて左右に分け前に廻し、口唇の間に当るところで強く結んだ。こうすればめつたに弛むことがない。

彼はそれを迅速に手際よくやつたので、途中で由紀があばれ出したときはもうおそかつた。

「うツ、ううツ」

眉をひそめて声を洩らす由紀は、強烈な汚臭に耐えかねて身をよじつた。

「これはねえ、この服を着せたときのために、君に内緒でとつておいたんだよ。あとでゆつくり見せてやるが、いやもう、ひどく汚れてるんだ。でも君は僕を愛してるんだから、これだつて愛さなくちゃいけない。……どう、臭い？ うんと匂いをかいで、ゆうべのことを反省するんだね。そして十分反省したら、悪うございましたつてあやまらなくちゃいけない。いいかね、君がそう言うまでは折檻をつづけるんだよ」

酔つたように、勝手なことをしやべりつづけた。約束がちがうと言いたげに、由紀は首をふり、つぶれたような声を立てた。ときどき眼が細くなるのは、もがくたびに荒い息で湿気を帯びた猿轡の臭



気が、無視しようとしてもできないためである。  
う。

その絶望的な無力感がいとしくて、彼は顔を両手にはさみ、いくども額に口づけた。

「愛する、かわいい由紀！ どうしてそう綺麗なんでしょうねえ。でも、今日はどうしても反省してもらわなくっちゃ。どう、まだする気ない？」

あおむけにされた彼女は、むりに首を上げてうなずこうとする。が、その顔は空しく両手にはさまれて布団に押しつけられるばかりだった。

「反省したらあやまるんだよ。え、声が出ない？ そんなことあるもんか。じゃあ、出させてあげよう。そら、この汚れのひどいところを……」

たしかに声は出た。が、言葉にはならなかった。

「どうしても言わないのならしかたない。ねえ由紀、よく見てごらん、まだこんなに紐が残っている、これを何に使うか教えてあげようか。君をひとつ、縦に縛ってみようと思うんだ、全然痛くなんかしないさ。ただ、ちよつとばかり羞かしいかもしれないがね」

わざと眼の前で長い腰紐を二本とり、端から五寸ほどのところで結んでから、あまつた部分がなくなるまでその上へ結び玉を次々につくつていった、それもただ結んでゆくと鎖みたいに細長くなる。方法は、二回むすんでは一回をもとの二股に

かけるのである、こうすると最後に不規則な塊まりができあがる。

由紀は縦に縛られると聞いてから、いよいよ真剣にもがきはじめた、どんな姿になるか、空想しただけでもたまらないのだ、今夜の戯れはあまりにひどい。だが、もはやどんな風変りなことをされても避けることはできない。

出来上った紐は、ちょうど中央に団子の塊まりをくつつけたようにみえる、それを持つて近づくと、彼女は呻き声をもらして布団からころげ出ようとする、章三郎は腰のバンドをつかんで引き戻し、まず仰向けにして紐の一方を下からバンドに通し、結び目が股間にくるところまで引き上げた。それから俯伏せにして、必死に合せようとする腿をこじあげ、うしろにまわした紐をバンドに通し、二巻きしてしつかり結びつけた、そのときはむしろ結び目がややうしろに廻る程度にしておき、こうしておいて改めて前から尻の溝に紐が食いこむほど強くひつぱると、ふたたび結び目は股間を通つてわづかに前に出る位になる、前のバンドに通した紐はわざと結びつけない。これは、結び目がうしろに移動しそうになると、ときどきひつぱつて前に寄せたり、あるいは股間の中央に固定させたり、自由に調節して楽しむためである。

これだけでも由紀の氣持たるや思いやられるのであるが、章三郎は天成のサディストなのかもしれない。もつと「理想形」をもとめた。

まず彼はじぶんの敷布団をまくり、中央と下方に紐を一本づつ横にならべて、それぞれの端がはみ出るように、その上に布団を敷いた、それから由紀を抱いてきて俯伏せにし、両足をつないだ紐を解いて、はみ出している紐にむすびつけた、これで敷布団の巾だけ足

が開いたわけであるが、むりに力を入れれば布団がまくれて、多少足をすぼめることができる。その代り、すこしでも力を抜くと、布団の重みでまた開くのである。

それから後手をといた、さきに足を縛りつけたので、すぐ起き上つて逃げだすことはできない。それに、なによりも汚れた猿轡が辛かつたのであろう。首のうしろに手をかけようとするのを、すぐ抑えつけて左右にひるげ、足の場合とおなじように縛り直した。これも布団の巾に制限されて、両手は水平に開かず、ハの字型になつた。だが、どんなに近づけてみても身体に触れることはできず、攻撃に無力だという点では水平に固定した場合と変りないのである。

由紀の味わつたみじめさは、いまだかつて経験しないものだつた。このポーズだと肉体的苦痛はほとんどない。厚い敷布団の上に俯伏せになつていただけだから、一晩じゆうそのままになつていても、さして疲れることはない筈である。だがそのために全意識と全神経はじぶんの浅ましい姿に集中されて、我を忘れることができなかった。その上、臭氣のつよい猿轡と、股間に当る結び目がある、彼女は絶えず呻き、もがきつづけた。

固い台の上にギツチリ縛りつけられたら、そのポーズがどんなに見苦しくとも、やがて観念するに至る。なぜなら抵抗したくても全く不可能だということが否応なく絶望にみちびくから。由紀には見せかけの自由が残されている。彼女は平気で大きく股を開いているに耐え得ない。できるだけ足をちぢめようとし、重い布団はまくれ上り、疲れてはまたもとの位置にかえる。そのたびに結び目の刺戟は高まり、いつそう悩ましげにもがかずにはいられないのである。

章三郎はうつとりとその情景を見つめていた。一指も触れない



で、犠牲者は絶えず声をもらし、虫のように四肢をくねらせている。服を汚すというたつた一つの思いつきが、ここまで発展するとは予期しないことだつた。遊びは凌辱の域に入つた、彼はテレくさを忘れた、いまではどんなバカなことでも言える。

「なぜあやまらないんだ？ さあ、早く、わるうございましたとハツキリ言うんだ。……ようし、言わないね。まだ反省が足りないんだね、じゃあしかたない、これから折檻をはじめめるからな」

不可能を強いながら、彼はうしろむきに腰を抱きこんだ、もがき動くあた、たかい肉体は、抱きしめただけで彼の頭を火のようにした、すぐ眼の下にむつくり盛り上つた二つの半球の豊かさよ！ しかもそれは汚れきつた暗褐色のくらしい谷間に切れこみ、一条の紐が生々しい食いこんでいる、絶えず悶えている足先きは、彼女がこの執拗な紐の刺戟から逃れようとしていることを物語っている。彼女にとつて思いもかけぬあたらしい感触にそういないのだ。だが、どう身をくねらせようと、あわれな由紀よ、逃れられはしない。

彼の右手はそのなだらかな丘の曲線や紐の締めつけた谷間を心ゆくまで撫でまわしていたが、ついにがまんがなくなつて平手で叩きはじめた。それから前に手をまわし、結び目をさぐり、ねじたり廻したりして接触面を変えてみた。そのたびに猿轡の下からなんともいえない声が高まつた。

「これでもない声が高まつた？ これでも……」

前にかけた紐をバンドの上から引いて締めつけたたり、また弛めたり、あちこち抓つたりしてみた。おお揺れる！ 重い布団はまくれがあり、足は狭まつたかと思うとみじめに拡がる、呻き声は泣き声にかわつた、すると彼はとびおきて馬乗りになり、横にむけている

顔を両手にはさんで布団に押しつけ、泣き声の洩れぬように、もつと臭氣をかがせるようにした。

ついて限界がきた、彼はいそいで猿轡をとき、股間の紐をはずし、手足をほどいた、あわてているために時間がかつて、自己を制しきれないほどだつた、彼はあまりに永く惑溺したことを後悔した。

翌日、郵便局長がたずねてきた。

例の電報配達は、他地区の警察に保護留置され、さつき局に照会があつたというのだ。だんだんきいてみると、彼は平生はまじめすぎるほど実直な、親孝行で評判の青年なのだが、あの日は寒さのぎに途中で一杯やつたのが誤まりだつた。電報もあけてよんだが、そのときはなんの計画も持つていなかった。配達にいつて、こちらの奥さんを見たとき、ふらツと出来心を起し、あんなイタツラを思いついた、しかし叫ばれて逃げ出してから酔はすぐ覚めてしまい、青くなつた。てつきり警察に届けたものと思ひこみ、おそろしくて家へもかえれず、そのまま夜通し歩きまわつてるところを不審視問されたが、そのときの告白では死のうかと思つていたという。

「やつたことはよくないことですが、お話したような小心者だから、かえつて酒に酔つた勢いであんなことをしたんだと思うのです。全くの出来心です。まだ前途のある若い青年ですし、いまクビにしたり警察沙汰にしたら、それこそ本人もヤケになるでしょう。私からも嚴重に戒めますから、今度だけは内潜にしてやつて下さらんでしょうか」

人のいい局長の附け加えたところでは、もし章三郎が由紀が告訴

する気があれば、警察は受理して事件にするほかないそうである。つまり、生殺与奪の権が彼にあるわけだつた。

玄関で由紀も夫と肩をならべながら聞いていたが、章三郎の顔いろを見ただけで、だまつていた。

章三郎はその男の小心さに呆れもしたが、聞いているうちに気の毒でたまらなくなつた。もし彼が真の痴漢なら、由紀が玄関に出たとき、押込むこともできた筈である。酒の勢いで便所にまわり、のぞこうとしたなどは、或はそうした趣味があるのかもしれないが、あまりに傷々しい、彼は性の抑圧に耐えかねたのだ、それを思えば自分なぞはなんと自由に享樂をほしきままにしていることだろう！

「本人がそんなにまで後悔しているなら、もうけつこうです」と彼は答えた。

「一切不問に附しますから安心してください。それから、よけいなことですが、局でも減俸などしないで許してやつてください、聞いてみればむしろ可哀そうだ」

「そう言つて下されば……」

と、局長はよころこんで礼をくりかえしたが、やがて腰を上げて去るときに、由紀をみて、こんな冗談を言つた。

「しかし、こりやあ奥さんにも少し責任がありますなあ、綺麗すぎる」

警察でパジャマのことまで話したかどうか知らないが、二人は顔を見合せて紅くなつた。

局長を送りだして、章三郎が書齋に入ろうとすると、いきなりその腕をつかんで、由紀は茶の間にひつぱりこんだ。

「ずいぶん他人には甘いね。あなたつたら、事件の張本人はすぐ

許すくせに、どうして私をあんなに苛めたの？」

「苛めやしない、可愛がつたんだ」

「苛めたわよ」

「美貌罪ありさ」と彼は逃げた。「いまの局長もそう言つたぜ」

「そんなの、お世辞にもなりやしないわよ。……あれ出しなさい」

「なんだ」

「きたない禪。棄てちやうから」

「あれは君、また今後の用に立てるために……」

「冗談じゃないわ。悪趣味よ。もうゼツタイにいやよ、あんなこと！」

彼はちよつと紅くなつた。たしかに、白昼きまじめに思い出せるような行為ではない。だが、あのときも最後は愛のいとなみで終つたのである。だから、あまりに永いしつこい道程ではあつても、やはり責めるだけが目的ではなかつたのだ。

彼は弁解したかつた、あんなことは年じゆうやろうとは思わないし、じぶんたちが愛し合うのに絶対必要な条件でもない。一切の前提をぬきにして、裸と裸でいきなりぶつかつてもすむのだ。ただ、どんなことでも出来るし許せることを立証したかつたにすぎない。神から悪魔まで、禽獣から人間までの可能性を味い飲みつくしたいのだ。だが、そんなことは言葉に出なかつた。相手の承諾なしに勝手な振舞をしてしまつてからなにを言つても、取つてつけたような口実になつてしまう。

ところが、彼が触れるに躊躇しているようなことを、由紀はつけと言つた。

「第一、くさくて汚ならしくつて、たまるもんじやなかつたわ、そ

れにあなたは、もつとひどいことをするんだもの」

「そりやあ、どういふことだい？」

こんどは由紀の頬が紅くなつた、彼はそれを見逃さなかつた。

「知らないわ」

「ね、かまわないから言つてごらん」

「知らないつたら！ バカね」

全く彼はバカであつた。しかし相手が真剣に怒つていないことを知りえたのは救いだつた。二人は子供のように抱きあつた。かるい羞恥は大きな安堵のなかで柔らげられ、章三郎は朝にふさわしいやりかたで、やさしく妻を愛撫することができた。

そうだ、あの行為自体をとりだして突きつけられれば、彼は死ぬほど恥じたらう。だがすべて夜のおこないというものは、真昼の光りを浴びれば似た結果となるのではあるまいか。

ローレンスの描写は、ワイセツだと批難されてきたし、いまでも一部の人々に批難されている。だがそのことの是非はともかく、活字にたいして恥じたり眉をひそめる人々が、じぶんの寝室ではそれと同様の、或はそれ以上のことを演技して怪しまない。みたされぬ夫婦の場合には強姦にひとしいし、生きるために「年頃だから」という賢明な処世智にしたがつて嫁いだ女は、ある意味で売笑行為をくりかえしているのである。かれらが批難されないのは、まず第二には公衆の面前で行わないからであり、第二にはそれが最大公約数の常識として信仰され保護されているからである。だとすれば、結城章三郎のようにあまり輿論を信じない人間は、夜のとぼりのなかで愛する妻となにをしようと、それほど良心を苦しめる必要はないであらう。

由紀はよごれた褌をさがし出そうとせず、汚染したパジャマを破りもしなかつた。自然の結果として、脂っこい饗宴はその後もくつかえされる運命にあつた。ただちがつたことと言え、あまりに強い強烈な戯れは欲情を支え切れなことを章三郎が悟り、由紀は由紀で、いつまでたつてもあの種の刺戟には鈍感になれないが、なにをされるかという真剣な不安だけはなくなつたことである。

(未定)

### 【古川裕子さんより】

本誌十二月号の私の「告白」に對しまして全く驚いてしまう程の沢山の方から御手紙を戴きました。ただただこの御手紙の山を前にして溜息をつくばかりの有様でございます。とりあえず、最初の六、七人の方に對しては直接御返事を差上げました

ことが必要です。御好意の程は何と感謝して宜しいか言葉もない程ですが、何卒御寛容下さいまして、私の失礼を御許し願ひとう存じます。

十一月十二日

古川裕子

○

新年号の口絵は全く素晴らしいものでした。特に私が珍しく思つたのは「最近欧米女体責め」の四枚でした。右の三枚の絵は何れも、今にもお尻を鞭打たれそうに真に迫つたポーズは思わずしらずわく／＼させられました。

今後このような珍しい写真を載せて下さるようお願い致します。私も自らもう一度深く省みる

（奈良 元木生）

## 女腹切雑話

## 切腹研究夜話

(一)

中 康 弘 通



筆者が先に四回に亘り執筆した切腹研究は、その未完成にも拘らず幸い、読者諸兄姉の御好評を頂いたことは望外の喜びであ

った。何れ筆を改めて再度お目見得を約しながら、延引したことをお許し願いたい。

此の度は既にお馴染になつたことでもあり、無味乾燥な史実の列挙のみに終ることを極力避け、諸兄姉にお話する心持で筆を進めて行きたい。

さて筆者が、哀婉極まりない女腹切の悲愴美を説いてから半歳、本誌に現れる読者の投書、殊に女性のそれは、或る程度筆者の観察が誤まりではなかつたことを、示していると思う。

所謂性心理異常としての切腹願望の解釈に就ては、既に九月号に感想を寄せたのでこゝには再説しないが、簡単ながらあの文

章によつて、こういう種類の悩みや欲びを体験した方は、何故そうだつたのか、という理由（無意識心理）を、或る程度自ら納得されたのではないかと思う。その結果、信太蓉子さんのように、自己反省の末、異常さを意志の力で克服する方も有ろうし、又、いわば性的遊戯としての認識を新にした方も有るのではないか。（例えば川合伊都子さんの場合、切腹の擬態は一種の前戲的役割を果している。）

ただ、筆者は余りにも卒直に底を割りすぎた感じを抱いている。一般論とは云え、中には、心中深く秘めた哀歎の実態を発き出されて、失望と不満を感じられた方も有りではなからうか？然し、真実の把握によつて、大島一氏の如く、異常さの迷路を彷徨した末、人生への新しい希望を見出された方が一人でも増せば、筆者の努力は酬いられたと云うものである。そうした人々に対して、今後一層本誌は、昇華の場としての慰薬を提供するであらう。

こゝで「開花の契機」を取り上げてみよう。ヒロインは、まず切出しの刃をすり潰す。大切な自分の腹部に傷付けな



めである。此の事前の用心深さは、彼女が自称する如きマゾヒストであるよりも、ナルシストである傾向を明らかにする。

次いで、柄を外した切出しの握りを白布で巻き、所謂腹切刀の形態を整え、三宝をも準備する。是は厳肅な儀式的構成により自己暗示を強め、更には或る意味での自尊心の女性らしいデリケートな表現である。

さて深夜秘かに起きると、三宝を膝の前に両手で乳房を抱き目を閉じる。一種の乳房自慰行為である。同時に「自分は今、実際に屠腹せねばならない」という自己暗示により、悲愴感を盛り上げる。

「徐ろに腰紐を解いて、着物をするりと脱ぎ」「シユミーズを胸の下迄たくし上げ」

「少し間をおいてズロースを、ゆつくり腿のあたりまでずり下げる」此の描写は、彼女が最も愛し誇りとする自分の美しい肌を露出して行く、演出効果の解説に他ならない。かくして彼女のナルシスチックなエクスピシヨニズムは、最高度に発揮される。(此の時に当つて、鏡を用いる女性も多いのではあるまいか。)

次いで柔軟な掌で性感帯である下腹部を

愛撫する。かくして準備は一切完了し、いよいよ「切腹」に移る。臍に切出しの切先をあてがい、ゆるやかに突つ込む、という姿態は、明らかに刃物によつて男性を臍によつて自己を象徴した、切ない迄の自己愛慾の表現ではあるまいか。「始めはチクチクと痛みを感じるが、その内にお臍がシューと痺れるような気持」と彼女は懇える。是こそ「切腹」に憧れる人々が、陶醉せずにはおれぬ醍醐味ではなからうか。

(因に多山皓氏が臍に対し窃視慾を感じる理由も、女性器代替としての臍だからであり、女性器へのタブー感が、何らかの理由で、氏の無意識心理に残像となつていゝのではあるまいか。)

臍に限定せず下腹部一般への刺突刀至切開希求も、やはり、最も神秘的な部位であり且、性感帯としての下腹部に於ける圧痛感覚が、むしろ快感を予想せしめるからである。

「下腹に刀を思うさま突

き立て、紅の血が流れるさまを幻想する」という橘芳子さんや「女性の身でお腹を切る等と恥しい願望に苦しい夜を過して来た」という賤機礼津子さんなどは、此の場合であろう。

そこで女性の切腹願望は、性交慾のナルシスチックな表現に、ナルシストなるが故の自己加虐心理が絡み合つたものと解釈出来よう。所謂マゾヒズムと異質なのは、独りで愉しめる、という点であろう。そこには秘密性が強く、孤独感が深い。その故に亦、自己陶酔的でもある。人知れず切腹して果てるのだ、という設定が、悲劇のヒロインとしての自分を、美しくも哀れ深い幻想の中に押上げて行くのである。

是丈けでは勿論複雑な女性心理を解いたとは言えないであろう。例えば何れ男性に貰かれる自己の肉体を、我と我が手で貰いてしまいたい、というような幻想も加わつていゝのではあるまいか。



切腹に憧れる人は、男女を問わず、孤独的で内気な、潔癖な性格の人が多いようである。従つて、卒直な告白を寄せることは川合さんが、「告白も切腹と同じで、皮切りだけが苦痛だ」と言つておられるような心境に達するまでは、体験を文字にすることに、強い抵抗を感じられるのではないかと思う。然し、悩みを表現することは、欲びも減るかも知れないが、苦しみも亦減るものである。

殊に女性に在つては、切腹願望は、決して本人が思い詰めるほどの異常ではない。むしろ、所謂女らしい女性には、強弱の差こそあれ、此の種の希求乃至願望が有つて然るべきものではないか、と思つてゐる。

かゝる性衝動の具現は、殆ど無意識心理の作用であり、遠い幼女時代の記憶（無意識記憶を含む）を集積し、分類してさえ



確実な分析は不可能かも知れない。然し不可能を可能に近付ける努力が、人間性の追究に払われるべきである。その意味でも、女性の読者で此のテーマに関心をお持ちの方は是非感想を寄せて頂きたいものである。序に切腹に対する女性の関心度を示す一挿話を紹介しておく。

昭和十七年、歌舞伎座で「白虎隊」が上演された折、松平子爵家所蔵の「白虎隊切腹之図」が出陳されておりました。

その折ケースの前に立つた一少女が、突然、

——あゝ……あんなに血が出るのねえ……と、喰入るように切腹の惨状に見

入つていました。（黒部

竜二氏より筆者宛私信）

因に此の絵は、その模写が、やゝ構図を異にして

平石弁藏著「会津戊辰戦争」

に口絵として巻頭挿入さ

れているが、それも大正六

年版に限り、昭和二年改訂

版、昭和三年増補版には見

られない。口絵は、白虎隊

の深くも哀れ深い最期を追悼するため、旧藩士の一人が描いたものだから、絵としては巧いものではないと思うが、十六七才の少年たちが、思い思いに座を占め、或は臍の上又は直下を真一文字に掻切り、或は下腹の中心を刺貫いて、而も悉く平静、寧ろ諦念と陶醉を表わし、死に就くさまを描き尽している。流れ出る鮮血と溢れた内臓が原色版だけに、一層凄絶の趣きを加えている。

絵の話が出た序に切腹の絵に就て一寸触れておこう。是は芝居絵には間々あつても陰惨な誇張に過ぎて哀美感に乏しい。切腹の実相をリアルに伝えるものとしては、西鶴本の挿絵を描いた吉田半兵衛のような浮世草紙のもの、又は大阪物語等、合戦記のものの他はないであろう。是らは誇張がなく、姿態や流血が無理なく描かれ、嚴肅且つ悲愴な雰囲気がかゝられる。然し是とても女性が腹掻切るさまを描いたものは稀であろう。幸い本誌には連載の女腹切八景に、類のない凄壮な、然し哀切美に満ちた絵が見られる。

雰囲気表現という点では、前にも挙げ

た賤機さんが自らモデルとなつて鏡に向い描かれたという十二月号投稿の如く、切々たる哀美感を堪えた絵は少いのではなからうか。

苦痛に悶える乳房、死の陶酔と哀愁にうるむ双眸、心ゆくまで切り裂かれる豊満な腹部、こういう画題は総べて盛り込まれてゐるようである。庶幾すべくんば、此の雰囲気を保たせて時代風現代風、各種各種の構成により、風俗画帖としての女腹切図譜を後世に遺したいものである。

モデル嬢を煩わして、切腹の擬態を写真に撮ることは簡単なようでなかなか難い、いわば自虐する女体の耽美的な悲愴感が、ポーズ全体に溢れて来ねばならないからである。

従つて、ポーズするモデル嬢が、やはり或程度、切腹願望の心理を理解してくれることが必要と迄は行かなくとも、望ましいと思うのである。

此の試みは筆者の創案ではなく、大正年間「うきよ」という雑誌が、女腹切特集として女腹切の実例談と、着衣のモデルによる擬態写真を掲載した由、本誌の読者の方

から御知らせ頂いたことがある。その方も戦災で失い、正確な年月号を覚えておられないので、今尚入手出来ないのであるが、何の程度の着衣か知らぬが、やはり女体自虐のポーズとしての美を求めるならば、ヌードに近いものの方が、いいのではないかと思う。是には異論の余地もあり、今後の試みを俟つ次第である。

次に最近入手した実例資料を、新聞で見落された方のために一筆しておこう。

昭和二十六年三月二十二日午前一時頃、群馬県下で工員の内妻三十六才が、就寝中の夫の頭部その他に肉切庖丁で瀕死の重傷を負わせ、自分も其の場で割腹苦悶中を見られている。

二十七年二月十三日夜十時頃、東京都内で女工員二十三才が、失恋のため寄宿舎内で菜切庖丁を以つて下腹部を掻切り、苦悶中を発見された。

以上二例は未遂に終つたのではないかと思われるが、同年三月十一日午前九時半頃東京都下で、病苦の農婦四十三才が、自宅で庖丁を以て下腹部を扶り、是は死亡している。

二十八年七月十三日午後三時二十分頃、大阪で、官吏の妻二十七才が神経衰弱から突然「こうしたら死ぬる」と、出刃庖丁を取つて自分の腹に突刺し、居合せた実母の制止もきかず、長男三才を刺殺、出血多量のため病院収容後、死亡した。

八月四日には大阪で教員の母五十二才が狂信の末、発作的に刺身庖丁を取り、全身に首十四ヶ所腹六十一ヶ所の切り傷を残し死亡した。

以上五例中三例までが愛情に絡まる問題で悩み、切腹したもので、明らかに自虐心理がうかゞわれる。また極く最近、別れ話を苦に下腹部を拳銃で射貫き自殺を遂げた若妻があつた。是も射ち易い頭部や心臓部を狙わず、珍しい部位を射つているのは、若し刃物が手近にあれば切腹を選んだのではないか、と思わせる。

前記とは逆に、切腹願望の女性が異常な慾求に駆られて、敢て切腹の悲劇を起すか？と云うと、筆者は必ずしも同意し難い。それは彼女たちは恐らくナルシストに違いないからである。ナルシストなるが故に自虐する型だからである。つまり平凡な言

い方をするならば、自殺のために切腹を選ぶかも知れないが、切腹そのものゝために敢て行ふと云う心配は無い、と思うのである。是は、性の享樂のために麻薬に溺れたものが、今度は麻薬そのもののために麻薬を欲するのとは、全く異質なものである。然し、自殺を計る際に、何うせ死ぬのなら腹を掻切つて死にたい、という気持は彼女たちの潜在意識に在るかも知れない。又、幾分サド又はマゾ傾向のある人の方が自殺を計画し実行し易いかも知れない。

その意味でなら、彼女たちに危惧はあり得るわけである。

某誌に、自分の下腹部に愛著する余り、加虐を欲するようになった一ビジネスガールを取上げた記事があった。サディストの未亡人に虐められて喜び、下腹に



刺青を希う、という型だそうである。執筆の方々は、彼女に嗜被虐遊戯を禁じたら、実際に刃物を腹へ突立てる危険がある。と述べて居られた。

然し筆者は、むしろ、彼女が記憶を辿つて卒直に自己批判したならば、判つきり自己の性向を自覚出来る人ではないかと思う。そうすれば他分、愛する下腹部に刃物を差し当て、鏡に映してみたりすることに欲びを感じても、愛しい腹を実際に切るようなことは、決してしないだろうと思う。

一種の処女愛惜心理、自尊心、そういう心理は、男性への期待と矛盾しつつ女性の内部で暖められてることもある。又、マゾ的な自己加虐がナルシストである場合などもある。未婚の、そういう女性のために、切腹願望は、哀しい、然し女らしく美しい性心理と云える。切腹の擬態や切腹幻想に満たされぬ性的衝動の捌け口を、彼女たちが見出すとすれば、それは無難な

遊戯だと云える。

秘密性、孤独性、悲劇のヒロインの幻想程よい痛覚、それらは恐らく愛する男性が見付かつたら、消えてしまうが、一層川合さんのように楽しめる、さゝやかな愉樂であろう。

筆者が、始めて歌舞伎に於ける切腹の効果性が鑑み、軽演劇に於ける女腹切の効果性を予想したのは、終戦後、女の柔肌がタブーを解かれた時以来であるから、もう七八年にもなるうか。最近、殊に本誌が女腹切を取上げてから、道劇で活用されているようだが、こゝには東都での二三を紹介しよう。

まず二十八年四月には、新宿劇場大江美智子一座の「落花の岸」がある。是は先に紹介した映画「真葛ヶ原女腹切」と似たテーマの、刀詮議に絡まる哀恋物語である。

大詰、大江美智子扮するヒロイン梅野が仇敵を斬り捨て恨みを述べて一息入れ、刀を杖によるめくところを、捕手数多包囲する。

「もう此の上は死にもの狂い」と悲痛な叫びと共に大立廻り、乱闘の末



髪ふり乱して地上に、ドツカと坐し、馳け付けた愛人に「短い御縁でございました。」と別れを告げ、「思い残すことも」なしと乱れた着衣の上から、腹へ刀を突立て散りかゝる落花の中に死んで行く。

芝居巧者の大江が、肌を見せぬのは唯一の難と云えようか。演劇の女腹切が肌を露わさぬのは、効果半減と云つたら過言だろうか。

此の芝居、浅草劇場でも好評を得ている。八月には浅草竹松演芸場で筑波澄子の「さんさ時雨」があつた高野長英を匿つた義侠の少女が、父親との義理の板挟みとなり、捕手と乱闘する内重傷を負い、よろめきつゝ床に坐り、今は是迄と大刀逆手



に着衣の上から左下腹へ突立てる。娘の苦悶に驚いた父親が背後から支える内に、最期の見得を切つて幕となる。先代の澄子も先に紹介した如く、「明日女造酒」で幕切れ、着衣ながら見事な立腹を演じている。

九月には不二洋子が浅草花月劇場で「夏祭団七格子」を演じた。是れは八月、小松龍子が「夏姿女団七」を演じたあとなのである。竜子は乳房も露わに刺青の双肌脱いで、乱れ髪紅の腹巻姿で大立廻りの末、止めを刺して大見得を切り、幕となつた。自害はしないのである。

洋子の方は、さんばらの男髪、刺青の双肌脱ぎ紅の腹巻を胸まで巻いて乳房を隠し、捕手と大乱闘の末、高い燈籠台に駆け上り、右膝立てゝ坐つた姿勢で、「生きては居れぬ此の身の最期、親殺しの天罰を今、

目の前に見せてくれる。」

と呼ばわりざま、取上げ刀を逆手に返し布を巻き、「ウムツ」と左下腹に突て、左掌で刀身を抑えて右手に虚空を掴むこなし宜しく再び右手を添えてグツと一挟り、齒を食いしばり、ぶる／＼と刀を震わせつゝじりじり腹巻の上から引廻す。

此のところ細かい演技に観客を興奮させつゝ右脇まで引廻し終え、抜き取つた刀を投げ出し、両掌を合掌せんとして暫し合わず、苦悶の末、掌を組み瞑目する所で幕となる。

男装の女優が切腹する芝居は此の他にも弁天小僧ものがある。

二十七年一月池袋アヴァンギャルド劇場での「白浪五人女」がそれである。

大詰、極楽寺山門の場、若衆姿の弁天小僧に扮する千夏さきりは、捕手に囲まれただけ刺青の片肌脱ぎ、乳房まで巻き締めた晒の腹巻を見せて大立廻り、刀を杖によるめき、屋根瓦に右膝支き、捕手を睨んで左手で懐中から布を取出し、刀の切先を巻いて腰に当て右手に柄頭を抑え「アウツ」と一声突立てると柝が入り、苦悶の体で幕。

同月、浅草のテアトル浅草でも、弁天小僧大詰大川端の場がある。

女装の弁天小僧市川喜代子が、緋の襦袢で捕手と大立廻り、乱闘で襟がはだけ、同じく刺青と、乳房まで巻き締めた腰巻に禰まで覗ける。連れた遊女が舟の中で自害するのを見て、

「惡に生き惡に死する弁天小僧の最期を見やがれ」

と叫び、捕手の死骸に右足かけて、左手で取出した懐中の布で刀を巻き、右手でウムツと腹を突立て、息はづませて左手に虚空を掴むところで幕。

是らは主として男、女性の倒錯的セツクス・アピールを利しているものだが、喜代子に至つては三重の倒錯効果を狙っている。

尚近くは二十八年九月、蒲田ミュージックホールで女長兵衛湯殿の場がある。

大東あけみ扮する、かりがねのお長が、全裸で入浴中、殺気を感じ手早く浴衣をまとい、紅の扱帯を締めるところへ、敵が乱入。右の片肌はねて乳も露わに、有合う柄杓で応戦の後、手近な敵の槍をケラ首握つて

「女ながらもかりがねのお長、死ぬときやこうして死ぬんだ。」

と叫びながら、立つたまゝ穂尖を直かに左下腹に押当て、ウツと一声突立て、挟り息はづませて倒れる。(此のとき美貌のあけみは、悲痛な恍惚感を巧みに表現する) 苦しむお長が止めを刺されようとする処へ、女の乾分二人が斬込んで来て、お長は此の二人に支えられ落入る。

是など芝居としては余り大がゝりなものでは無いが、ストリップ的要素のせいで、女腹切の哀艶な美しさが表現されている。

是らの人々の他、市川少女歌舞伎の少女俳優や、エロ手本忠臣蔵で二度も判官を演じた藤アリサなど、切腹を演じた女優さん達の感想を聞いてみたいものだ。スチールも手に入れば保存しておきたいものだと思つている。その点、本誌十二月号道劇の女の立腹は、腹を見せはしないが、貴重な資料と思う。

今後此の種の演劇、殊に弁天小僧等の男装効果を狙わず純粹に女腹切をテーマとする軽演劇は、大いに試みられるべきであるし、又、大衆も試みられることを待望し

ているのではなからうか。(続く)

〔編集部より〕切腹研究夜話は前号で予告しました通り、目下中康先生の手で資料を集めて頂いておりますので引続いてその成果を漸次誌上へ盛り上げてゆく予定です。川合伊都子さんの紅花草紙とそれに挿絵を含んだ切腹通信は誌面の都合で翌月廻しになつたことをお詫びいたします。鳴竹さんから寄せられました「女性切腹の絵に關しての随想」と挿絵四枚は大変参考になりました。田谷敬生氏の「切腹の写真について御意見」詳細な御説明で得るところがありました。今後の企画に十分活用いたしたく思います。賤機礼津子さんの切腹の絵は同好者の方々から大層喜ばれておりますので引続いてお寄せ下さるようお待ちしております。若しお差支えなければ連絡場所お知らせ下さい。切腹写真お送りいたします。愛川晃子様、橘芳子様、吾妻京様、林安雄様、其の他切腹の絵や写真について御意見下さつた方々へ誌上を以て厚く御礼申し上げますと共に御期待にそうべく努力する考えであります。



# 痴迷

—アブニストの記—

(ちめい)

(2)

鬼山 絢策 (方金三・画)



☆

私は復讐と言う名を借りて、一人のマゾヒストと、一人のサジストを育て上げようと計画したのだ。

然もそのうちの一人は最愛の妻のきよ美である。その妻は現在のところ、極めて淑やかな貞節な良妻賢母である。

この平凡な女性が果して私の期待するようなサジストでなつてくれるであろうか。

又相手の三木安生が、私と、妻のきよ美の思い通りに従つてくれるだろうか。

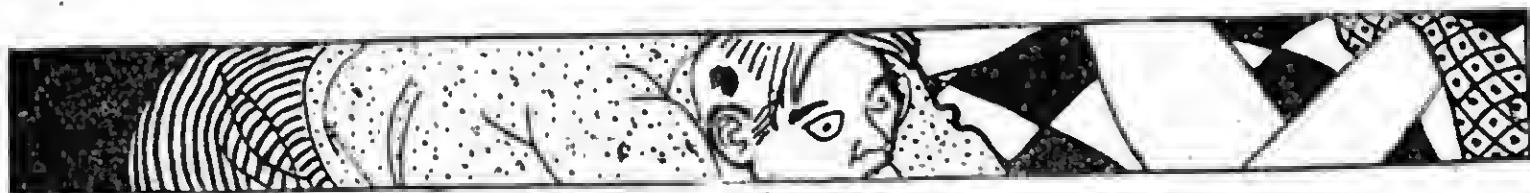
私はそれを考えただけで昂奮した。

## 七念力のはなし

三木と言う男は頭の毛をモジャ／＼にして、それが一見小説家のようなインテリ臭い感じを持たせたが、その眼はトロンとしていつも何かを夢想して居るような瞳だった。

たしかに彼は夢想家で、いつも口癖のように私に彼の夢を語つて聞かせた。

「まあ大したことはないから、差し当り百万円位儲けて基礎の確りした会社を創つて、生活の安定だけは得られるようにしておきたいと思つてゐんです。」



当時の百万円は現在では一千万円位の相場になるだろう。

昭和二十二年頃の話だから。そして

「将来は妻子に生活の安定するだけの財産を預けて自分は禪堂を建て、坐禅三昧に耽りたいと思います。禪堂一致の境地に達して、中絶して居る研究の透視や、予言を趣味的に研究して、事業や身の上に就いて相談に来る者があれば靈感で、それは斯うした方がいゝ、これはあゝせい」と指示してやる、病気の者も靈感で治してやる。勿論無料ですよ。そうやって、諸人を助けてやるのが私の理想的な生活なのです」

ザツと先ずこんな具合なのである。

「靈感と言うものはそんなに当るもんですか」

「自分の私慾が混らなければ当りますね。私が坐禅をやつてた頃はよく靈感や透視が的つたもんです。今東京駅の時計は何時かなと思うと、頭の中に東京駅の電気時計が見えて来るんです。あ、十二時十分前だ。自分の時計を出して見ると十二時ジャスト。オヤ十分進んでるかな。と思つて東京駅へ行つて見ると、案の定十分進んでるんです」

「へエ不思議なもんですね。だが我々には一寸信じられませんか」

「斯う言うことはいくらも実在するんですよ。私の療法にしても靈感が主体となつて居るのです。念力を指頭に集中せしめて、指頭から靈力を癒せしめて、患者の血液に仿らきかけて治すのです」

「てのひら療法と言うのがありますね。あれはあなたと同じ

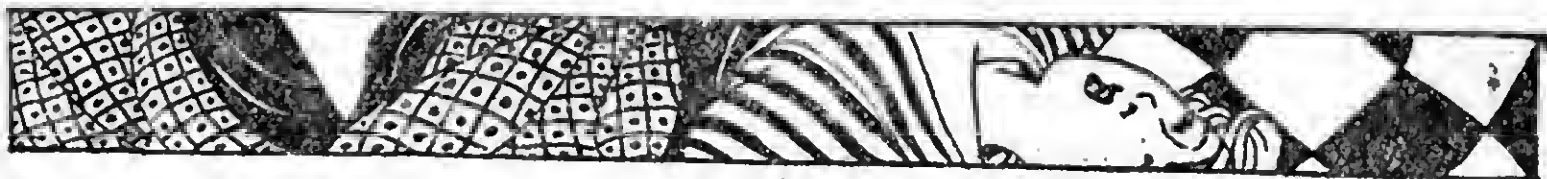
ものですか」

「あれとは一寸違います。私と同じ療法をやつてる人は山形県のお寺の和尚さんで一人居るのです。あまり奇妙に病気が治るので、中に嫉む者があつて、インチキ療法だと訴えた者があるんです。そこで法廷で靈の力と言うものを具体的に現わすことが出来るかと裁判官に言われた時に、その和尚は「出来る」と言つて、法廷の右と左に大きなローソクを五本宛立てさせたのです。それに火を点じて、自分の頭から四米以上も離れた所に並べて、立てゝおいて、思念を凝らして「エイツ」と右手を一閃するとそのローソクの火が十本共、一遍に消えちまつたんです。勿論そのうちの一本を手で起す風によつて消そうとしても到底距離も離れて居るし、大きなローソクだから消つこないものなのです。これには裁判官も訴えた者もびつくりして、今更の如く靈の実在を認めざるを得なかつたと言います」

と言うようなことをまじめくさつて、熱心に話すのであるこの念力が発達して来ると、五間位先にある燈籠に手を触れないで「エイツ」と気合をかけると、その石燈籠の石の笠を落すことができるというのである。ここ迄来ると、まじめに喋つて居る三木の頭を疑いたくなつてくる。

兎に角三木の性格の中にも一種の変つた分子が混つて居ると思つたのは、そんな話を聞いた頃から、頭の隅にのこつて居た。





## 八唇には唇を！

其の後三木は仕事のごとで十日間ばかり旅行して居て来なかつた。

その間、私は妻と愛情の交換をするカーテンレザーとして必らず三木のことを話題にのせた。話題にのせることに依つて私の情熱は昂まつた。

私達は三木を奴隷とする具体的な方法に就いて相談した。

それには、私は先ず第一の条件として、三木にクリンニングスに従わせることを妻にすゝめた。

「だから言つてゐるだろう。眼には眼を！唇には唇を！さ。それが先ず一番適当な報復の第一歩じゃないか」

「あなたが許すならどんなことでもやつて見せるわよ」

「タヴーの条件は前にも言つてある通り、お前の唇を彼の肉身に触れぬこと、それと彼の最も汚れた一部が、お前の肉体に直接触れぬこと。この二つだけさ」

「じゃあ、あなたは妾の唇だけを、貴重なものとして居るのね。もう一つのは貴重ではないの」

「それは見かたが違うんだ。僕にとつては勿論双方共最も貴重なものだ。だがそれは、僕とお前と二人きりの世界においてのみだ。それは両方共愛情を交換するに最も重要な電極だからだ。が第三者とお前と言うものを対立させて見た場合僕は愛情の直接交換は絶対に拒否して居る。情慾に無関係な門として見た場合、一方は清浄な門だが、一方は肉体の第二

の不浄門じゃないか。〃シツクステイナイン〃にしても、お互いを一番喜ばせてくれる器であることを、経験して認識して居るからこそそのものに愛着を感じ、不潔感も屈辱感もなくなるんだらう。それが憐通の裏づけがなければ、男性にしても女性にしても只不潔感あるのみじゃないか。僕はそう割りきつて考えて居る。お前もそう思わないかい」

「何だか知らないけど、またあたらしい理窟をつけて来たわね」

「だつてそうじゃないか。その道理だらう。つまり……」

「何でもいゝの、分つたわよ」

きよ美はかすれた声でそう言う。私の首を抱きよせて唇を塞いでしまつた。きよ美がかすれ声になつた時はもう問答無益なのだ。エクスタシーの境地に入つてくると彼女はもう囁語を好まない。私にはまだ三木のことについて色々話しておきたいことがあるのだが、又明日の晩にしようと思つて、私は三木ときよ美との間に、これから行われるであろう芝居の数々の場面を想像しながら私は私なりに妄想と官能のうづきをミックスして陶酔の境地に入つて行つた。私はきよ美のノーマルな性情に、満足と不満の矛盾した気持を抱きながら、今後これをどう言う風に導いて行けばよいかを考えた。

兎に角三木と言う人物が脳裡に描かれるようになってからは、妻への愛情が特にこまやかになつて行つた。

## 九 敬愛の「證據」



「お前はとう言  
う風に三木に対  
して持ちかけて  
行くつもりなの  
だい？」

翌晩私は妻の  
プランを聞いて  
見た。

「それはね、姉  
夫婦の話をして  
やろうと思うの  
よ」

きよ美の姉は

元海軍将校の許に嫁して居たが、この夫が帰還して、やはり  
きよ美の実家へ疎開して居た姉の許にやつて来たので、私達  
夫婦は遠慮して今の家に間借りすることになったのだ。

この海軍将校の夫が上陸して来て姉に与する愛撫は狂的な  
もので、姉の身体中に接吻の雨を降らすと言うのだ。

へト／＼に疲れた姉が、夢うつゝの状態にある時、ふと気  
がついて見ると、夫は愛の奉仕を行つて居ると言う。真底か  
ら愛して居るなら、不潔感など全然ないものだと言は姉に言  
つたと言う。

「その話をして、三木に『あなたがほんとうに妾を愛して居  
るなら、其の証拠を示して頂戴』と言つてやるわ」



「そりや面白い方法だね。だがあの謹厳な潔さん（姉の夫）  
にもそんな面があつたのかね」  
「妾と姉と、のろけ比べをした時に、姉が自慢してそう言つ  
たのよ」

そうかも知れない。姉はA小町と言われた位の美人だった  
から、潔の方が参つて居て、総てにサービス満点だったよう  
だ。

「それにひき替えてあなたはサービスが悪いわよ。妾にはほ  
んとの愛情があるのかどうか疑わしくなることがあるわ」  
「僕だつて、お前をこの世で又とない最愛の女房だと思つて  
居るよ」



「思つてるだけじゃダメよ。それを立証してくれなくちゃ」  
「この通り立証して居るじゃないか。然しお前のプランは、なか／＼思いつきだよ。だが問題は三木が果して応ずるかどうかと言うことだよ」

「大丈夫よ。妾自信があるわ」

「お前が生娘ならその可能性はあるが、人妻だけにね……」  
「そんなに心配しなくてもいいわよ。色んなこと言わなくなつて、脚でも見せてやればとびついてくるわよ。それから順々に仕事をしてゆくのだよ」

きよ美はこんな大胆なことを平然として言つて笑つた。今迄子供々々した女だとばかり思つて居たきよ美のどこにこんな蓮葉なところがあるのかと、私は自分の女房でありながらきよ美を見直さざるを得なかつた。まことに女と言う動物は不可思議なしろものだと思つた。

きよ美は自信タツブリで三木を奴隷に見せると言つて居るが、果して三木がその通りついてくるかは、私はまだ多分に疑問に思つて居た。又三木がそれに服従するとしてもきつと交換条件にきよ美の肉体を要求してくるに違いない。それに対してきよ美は何と言つて体をかわすか、又何となく、きよ美がその場の空気から、義理のような同情のような情にほだされて三木に肉体を許すようなことにならぬとも限らない。私はきよ美を信じて居たが、それでも度々その不安が私の脳裡をかすめたが、それでもこの計画を思いついた時から躊躇することすら出来ない私の浅ましい慾望を、時には自嘲

的に反省することもあつたが、この頃から私には、過去に於ける性道德の社会的通念と言つたものに疑問を持ち、これからの性道德には、もう少し広義な解釈が必要だと見直すようになった。これは決して己が行為に対する詭弁的弁解ではなく、飽く迄私は冷静に第三者の立場に立つて批判的に考えたつもりである。その理由は、この手記の事実の進展と共に折に触れて記して行こうと思う。

とに角その頃の来る夜も／＼私達夫婦の間には三木の話を持出して、それが私には楽しいものに感ぜられた。

## 十 サジ夫婦の話

つゝ(載)

暫くして、又三木がやつて来た。相変らず私の留守の時だつた。「今日三木さん来たわよ」と例に依つて妻から報告があつたのだ。

「どうした? やつたかい?」

「ウ、ン、やらなかつた」

きよ美はその日の模様を細かに話してくれた。

彼女は「姉夫婦の話」を持出したことは持出したが、それ以上強いて積極的な行動には出なかつた。やつぱりいざとなると何となく恥しくなり、馬鹿々々しくなつて来たと言う。三木はその話を聞くと「へエそうですかね」と言つて聞いて居たそうだ。

妻と二人きりになると、三木はかなり突込んだエロ話をして居るらしく、三木は三木の細君に対して全然愛情がなく、



子供二人もある仲でも、いつ別れてもいいと思つて居ると言つて居た。

大体彼の仕事がブローカーと言うあまり信頼性のないもので、大きな事ばかり言つても実際に成功したのは何一つなくたまに一万や二万儲けたつて、それを月平均にしたら、いくらにもならず、細君の兄に迷惑をかけた負債もいつになつたら返せるものやら、細君の実家は農家で、土地でも旧家の方だから細君の母親や、家長の兄にしても、堅実を旨とした地道なことしか考えないたちだつたから、細君も自然彼よりも家の人の言うことに感化され、彼の仕事も、彼自身も信用がなくなつて来て居るらしかつた。

彼にして見れば、そうした雰囲気のある家庭に帰るのはどうしても気が進まなくなり、自分の言うことより、事々に兄や、母親の肩を持つ細君の言行に、益々愛情がうすくなつて行くのも、止むを得ないなりゆきであつた。

そんな仲でも、細君が夜、畳をトン／＼と叩くと（これが彼等夫婦間のサインなのだそう）やはり子供達の寝息を窺つて、細君の床へ行くのだ、と、きよ美に話をしたこともあるそう。

私はきよ美が決行できなかったのに失望した。

強気なようでやはり女で、積極的には行動できなかったと見える。然し機会はこれからいくらでもあるのだから、そう焦らずに待つことにした。

その頃私の商売は順調に行つて、在郷の方へ行商に出る売

り子達が殖えて、これ等が一人で二百、三百と捌くので、売上げはグツと増した。その売り子の中に貸家を見つけてくれた者があつたので、又引越すことになつた。

家賃千五百円と言へば、当時のA市としては高い方だつたが二間で台所も物置も相当タツブリした場所がとつてあるので、きよ美が気に入つて、私達は早速引き移つた。

引越しの時には三木が手伝いに来てくれた。

リンゴの袋を売つてた時の知合いの百姓が一里もある所から馬車を引張つてきてくれたので、それに家財道具を積みこんで、運んだ。戦災で何もなくなつたと思つても二三年経つうちに結構ガラクタが殖えて居た。

まだ道ばたに残雪の残る四月の始めの頃だつた。

夕方に片づいて百姓に一ぱい飲まして飯を喰わせて返すと後は三木ときよ美の三人で食膳を囲んだ。

三木は非常に気嫌よく、珍しく杯を一二杯乾した、それでもう赤い顔になつた三木は

「私の知人の細君になま傷の絶えない人が居るんですがね。

それが何故かと言うと、亭主が物凄いやきもちやきで誰々と怪しい」と言つては細君を責めるためのなま傷だそうですが、それでも別れずに居るのですが奇妙なもんです。私が

行くと、細君は亭主の悪口ばかり言うんですよ。時には夫婦喧嘩の仲裁もしなきゃならないこともありましてね。あれでもやつぱりどこかいゝとこがあるんでしようかね」

私にそんな方面のことを話したのは今日が始めてだつた。





「それは恐らくサジストとマゾヒストの結合で、存外はたで思つてゐるより二人は楽しい生活をして居るんでしょう」

と私は言つた。

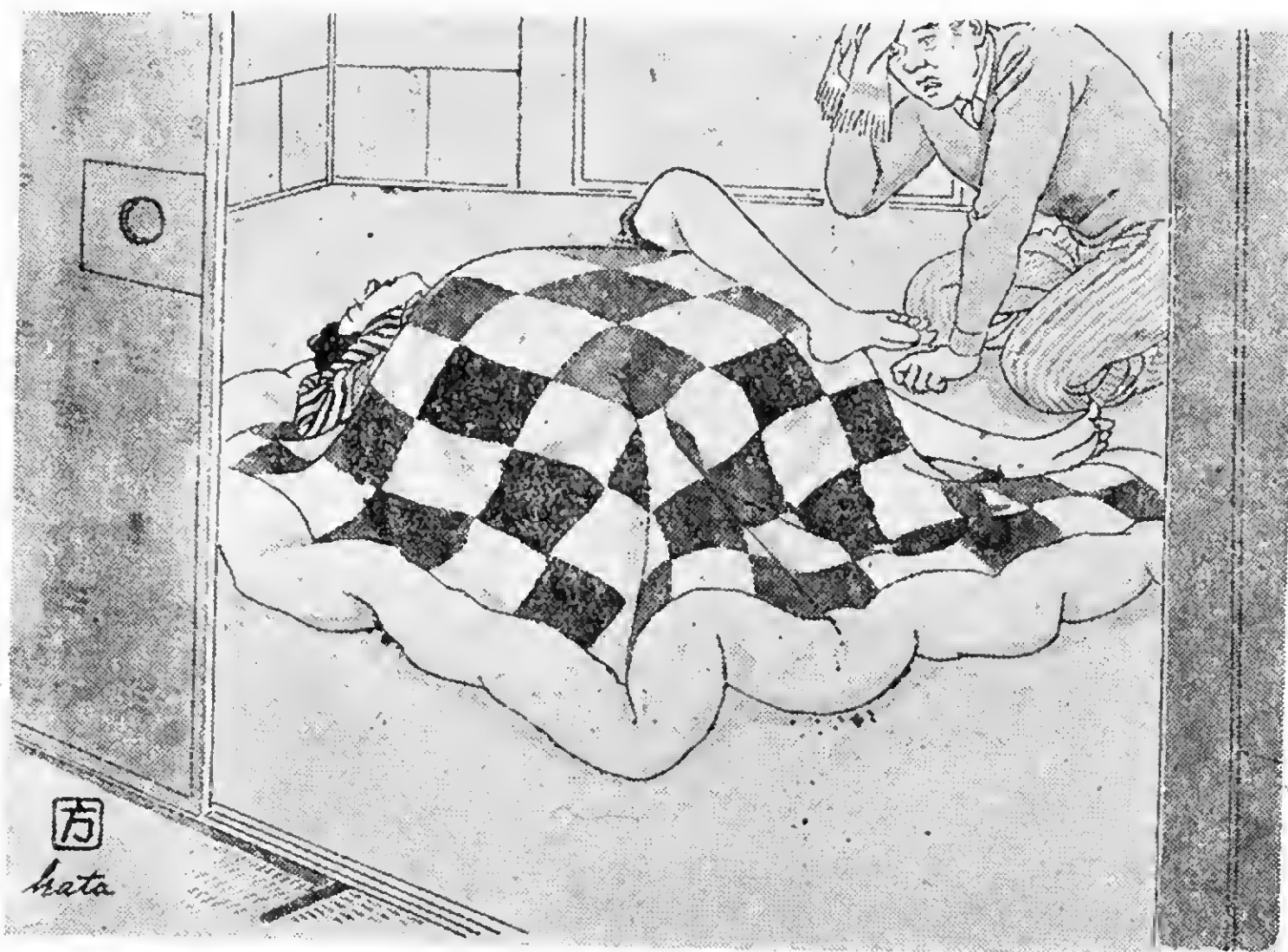
「そうですねえ、此の間も刃物迄持出して追つかけて廻したと言ふんですからね相当深刻なもんですよ」

「恐らく芝居でしょう。そう言う時に誰か第三者が居てくれた方が当人同志は張合があるんです。芝居と言ふものは観客がないとやれないものですからね」

私はサジストとマゾヒストに就いて実例をあげて、その心理をいろ／＼と説明した。

「兎に角夫婦生活のみは、他人の覗い知る処ではありませんよ」

「そんなにやきもちのひと



い亭主でも、私だけは絶対に信頼して居て三木さんなら私の留守に來ても安心だと言つてゐるんです。よく／＼私と言ふ人間は色氣がない男に出来上つてゐるんですね。ハ、ハ、ハ、」

私は（何が安心なものかお前こそ最も危い男じやないか）と思ひ、そのあまりにも又ケ／＼とした嘘に腹が立つと同時に、三木と言う男が今までまじめ一方の男と思ひ込んで居たのを少しばかり見直さねばならぬと思つた。

## 十一 性格の裏

がわ

私は月のうち二度か三度は函館に渡つて石鹼を仕入れに行かなければならなかつた。



DDTを服の上から、髪の毛の中迄ぶっかけられて、粉屋の職人みたいになつたのが、手首に消毒済みのスタンプをベタベタおされて、そのスタンプを見せなければ船に乗れない時代だつた。日本人が最も奴隷的に扱われた一現象だつた。

大学教授でも、お寺の和尚も会社の社長でも、素晴らしい美人でも誰でも彼でも、皆白い粉を噴霧器でかけられて行列を作り、スタンプをベタ／＼とおされ、船にのる時にそのスタンプを見せ、船をおりる迄はそのスタンプは消すことは出来ないのだ。当時は帰還兵や引揚者が続々としてあつたためそれ等の人々の消毒が主であり、北海道全帯発疹チフスが流行したために、虱退治の強制執行を、日本人全部に対して行うべく命令されたのだ。

函館にはドラム罐で魚油を煮つめてソーダを混ぜて作る石鹼工場と言つても三坪か四坪もあれば結構間に合うので、そうした小さい所もあつた。魚油の石鹼は臭いのが欠点で、あれで洗うと虱が湧くと、言つて嫌われたものだつた。魚油の石鹼でも、鰯や鯨の油で作つたものは非常に臭かつたが、鰯や鯨の油で作つたものは、色が真白で匂いもなく、上手に作ると非常に固くて、素人には「これは魚油で作つたものではありません」と言つてよく売れたものだつた。

私は支那人で非常に上手に作る石鹼工場を知つて居たのでそこで主に仕入れた。それでも一罐毎に多少製品が違つたし相場もインフレ時代で、チヨイ／＼変るので、仕入れるのは、その度に行つて品物を見て、値段を決めなければならな

かつた。

二百個位見本用に持つて帰つて、後は送らせたが、この支那人は堅い男で、金銭上の間違いはなく、品物も「洗剤」と言う名で送れば統制外なので抑えられる心配もなく、当時としては非常に良い商売だつた。

丁度その支那人からいゝ品物が出来たからと通知があつたので、転居先を知らせかた／＼私は函館へ行くことにした。引越してから三木はその翌日も次の日も来て、きよ美と話しこんで行つたので、きよ美との親しさは更に接近した模様で、こう言う時に一晩でも二晩でも家を明けることは、一寸不安な氣もしたが、チャンスを外すことは出来ないもので引越してから三日目の晩に、私は函館へ発つた。きよ美には私が函館へ行つたことを三木に知らせるなど言つておいた。もしも私が晩に居ないことを知つたら、泊めてくれと言ひ出すかも知れないと思つたからだ。

函館へ行くと第一回の製品は直ぐ売りきれてしまつて、今二かま目を作つてから明日迄待つてくれと言うので、私はその日は前に肥料関係の時に知り合つたブローカーを訪れた。麻雀をやつたり映画を見たりしてその夜は支那人の家に泊まり、翌日は出来立てのホヤ／＼の羊かんみたいな石鹼をギターの鉄線で切る仕事を手伝つたりして、一かま全部を仕入れて、四時の船に間に合わせ、夜の九時に青森に着いた。

家に着いたのは十時過ぎだつたが、私は直ぐ家に入らずに



荷物をおくと、足音を軽くして、庭の方へ廻り、窓から家の中を覗つて見た。

一間の方は寝室で、燈りが消してあり、子供達が既に寝入つて居る様子だつた。四畳半の居間の方を覗いて見ると、きよ美が電燈の下で子供のセーターを一生懸命編んで居た。

私は暫らくきよ美のその慎ましい姿を眺めて居た。他人が見たらいかにも貞淑な人妻に見えるであろう。

いや事実彼女は貞淑には違いない、貞淑でなくては困るのだ。だが私の心の中にはこの家庭的な女房に妖婦の如き手くたを仕込ませようと考えているのだ。

そして一人の男を思いきり黷りものにしてやろうと考えて居るのだ。

その私でさえ、世間では至極真面目で勤勉な、信用のある男だと思つて居る。事実その通りだと私は答えられる。人一倍偽いて居るし、当時は女房以外の女は見向きもしなかったのだから。

「フ、ン、これが世の中と言うものだ」

私達夫婦でさえ、こうした反面があり裏面の秘密な楽しみがあるのだつたから世間の人達には、皆それぞれ大なり小なり秘密があるに違いない。私の計画なども、世の中の裏面を覗いて見たら、極くありふれたことなのかも知れない。

私は三木の居ないのを見すまして、又足音を盗んで玄関の五六歩先から、今度は靴音を立て、家の格子を開けた。

## 十二「心中だて」

「三木、来たかい？」

仕事の話が済むと、斯う聞くのが私の口癖になつて居た。「おとゝいも昨日もきたわ、でもおとゝいはおばあちゃんが来て泊つて行つたし、昨日は夕方になつてリング持つて来たのよ。ありあわせのもので晩御飯を出したけど、それから帰ろうとしないのよ。妾何だかウス氣味悪くなつちやつて、町会があるから」つて言つたら、何だかんだと喋つて居て御みこしあげないでしよ。だから妾、子供寝かしつけると家に錠かつて、表へ出たら、一緒にいてやつと外へ出たのよ。図々しいよ、あなたが帰つてくるかどうか分らないし、一人だと何だか恐くなつちやうのね。いつつものように打ちつけた氣分が出ないのよ。」

私はきよ美の言葉に安心した。がこの頃三木は段々図々しくなつて、夜迄粘つて居るらしい。晩飯にありつけるのが一つの目的であるかも知れないが――

その翌日私は石鹼の注文取りに廻つて夜おそく帰つた。

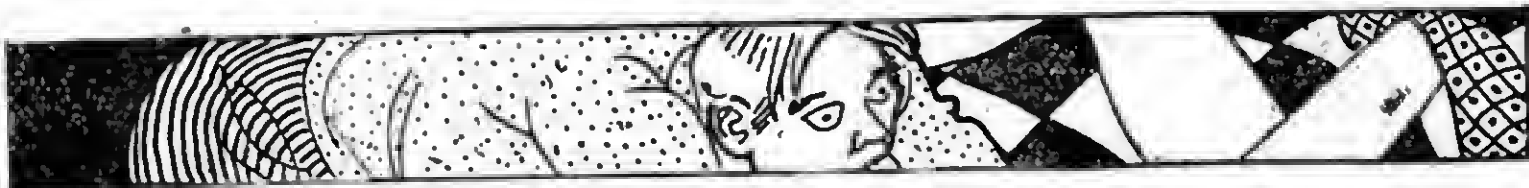
「どうだい、今日もやつて来たかい？」

きよ美はニヤ、ニヤ笑つて居る。

「どうしたの。来たろう、三木」

「遂にやつたわよ。フ、フ、フ。あゝ腰が痛くてどうにもならないわ」

私はドキリとした。



「よし、その話は後で聞こう。先ず飯だ、腹が減つて倒れそなんだ。」

私は飯を食いながら仕事の話をした。そして床に入つてからきよ美に今日のありさまを委しく聞いた。

三木は今日もエロ話に花を咲かせて居たが、その間に

「僕は命にかけて貴女を愛して居ます」と言い「御主人に済まないと思つて居ながらこればかりはどうにもなりません」と涙を眼に溜めて言つたそうである。

子供達は上の六ツになるのは外へ遊びに出て、下の三ツの子は傍に寝て居た。

三木は今日は非常に大胆で、きよ美を抱擁して接吻しようとした。きよ美はその唇を避けて

「妾だつて三木さんが好きなことは好きなのよ。だけどまだほんとに信用できないのよ」

「どうしてですか。僕がこれ程真剣に想つて居るのが分つてくれないんですか」

三木の眼は熱を帯びて、その指がきよ美にあやしく働きかけて来た。きよ美は私達の間に打合せて居た、第一目的の達成の為に、敢えてそれを拒まなかつた。

「あなたがしんから妾が好きならその証拠を見せて頂戴」

「どんな証拠ですか、僕は何でもしますよ」

「昔から恋人に〃心中立て〃するつて方法知つてるでしょ」

きよ美はそこで思いきつて仰向けになり炬燵の脇に寝た。

そして片脚を炬燵の上にのせて思いきつたポーズをして見せ

た。三木はそのふくよかな太腿へ唇を寄せ、その唇を次第にずらせて〃心中立て〃の要求に応じたと言うのである。

きよ美は私を抱いて頬をすり寄せながら耳許で囁いた。

「妾汗かきでしょ。だからもう……………フムムム」

「フムム、ほんとにお前の言う通りになつたね」

「だから言つたでしょう。あの人なら何でもするつて。兎に角夢中なんだから」

私はそれを聞いて異常に昂奮した。最近ハダブルヘツタ―は滅多に行わなかつたが、その夜は二時間以上も妻を愛撫した。きよ美も私の近頃にはりきりを喜んだ。

「今度来たらほんとうに奴隷にしてやるんだね」

「ウン……………」

「徹底的にやつてやれ」

私は私の空想して居た第一段階の成功に満足しきつて居た

### 十三 第二次計画

私は三木の心情についていろ／＼と想像をめぐらせてみた

——三木は真底からきよ美を愛するあまり、きよ美の命令に對して、多少その行為が氣に染まぬことでも我慢して服従したであろうか……………

或は三木に前からそうした性向があつて、きよ美の申出に〃望むところ〃と喜んで応じたのであろうか。

又は三木はまじめそうに見えて存外女にかけては強か者で女を喜ばすあの手この手を心得て居て、心はきよ美の要求を





好まぬものに思つても、最初のうちに負けて居て、そのうちに交換条件としてきよ美の肉体を求め、征服してしまつてからは、次第に本性を露わしてくるのではあるまいか。勿論この場合には三木のきよ美に対する情熱は一時的なもので、きよ美の肉体を得てしまつてからは、どのように変化するか分らない。

私はこの三通りに考えて見た、然し現在迄きよ美から聞いた事実からのみでは、そのいずれとも判断はし得なかつた。私は妻にも私の想像を語つて聞かせた。

「そりやもう三木はたゞひたすら私を愛して居るのよ、そんな変態的な性向なんてないと思うわ」

きよ美は私の第一の想像に無条件で決めてしまつて居た。

「俺は未だ一概にそうは信じられないね」

「そりや当事者でないからよ、三木のあの眼のいろを見たつて分るわ、いつものトロンとした眼が眠りから覚めたようにらん／＼と輝いてくるんですもの、真剣そのものよ」

「それはお前に対する真実の愛情のみの発露からか、獣慾的な燃え上りからくる場合か、区別はできないだろう」

私は第一段の計画の成功の次にもう第二段の計画をたてゝ居た。私は殊更に妻の自尊心に油をかける必要を感じて居たのだ。きよ美は直ぐ私の誘いにのつてきた。

「あなたが三木の妾に対する態度を見れば分るわよ。もし獣慾的なものなら、その後で、直接暴力的な行動に移るでしょう。ところが三木にはそんなところは全然ないよ」

「どうだか分らない。俺はお前を信頼しては居る。お前が俺との約束を破つたり、俺を裏切るようなことは絶対してないことは信ずるが、お前の話に些かの飾もない迄は信じて居ないんだ」

「妾は何もかくさずに一切合切をぶちまけて居るのよ。あなたが少しでも疑うんなら妾三木を寄せつけないわ。もうこんなことやめるわよ。皆あなたがそうしろと言うからやつてるんじやないの。三木さんだつてあれだけ真剣に想つて居るのを妾が擲擲うのは罪よ」

「まあそう怒るなよ。それじや三木がお前にどれだけ参つてるかお前と二人きりのところを俺に一度見せてくれないか」

「見せてもいゝわよ。どうせあなたのためにやつてんですもの。見たけりや見せてあげるわ」

かくて私の第二次計画の第一段階は思う通りに行つた。

きよ美がどのようにして三木を足下にひれ伏さしめるか、きよ美からの話を聞いて想像してばかり居たのでは私としてはサツパリ興味が無い。私自身がこの眼で目撃しなければ何にもならない。私の真の目的はそこにあつたのだ。

「だけど三木に感づかれるようなことしたら大変よ」

「大丈夫だ。うまくやる方法があるんだ」

私は斯うなることを予期して、前々からその方法に就いては考えて居たのだ。

(続く)

(流 浪 八 年 よ り)

人<sup>ひと</sup> 身<sup>み</sup> 御<sup>ご</sup> 供<sup>く</sup>

沖 野 恵 美 子

【一】

夏の陽も西に傾いて、まだ燈りをつけていない薄暗い部屋で与えられたお粥をすゝつてゐる時でした。荒々しく戸を開けて入つたのは武装した二人の満人でした。何事だろうとおびえて手にしたお茶碗を持つたまゝ、薬を敷いて寝床にしている片隅へ身を寄せようと

いざつた時、土足のまゝ、つか／＼と私の前に立つた男の一人は銃をつきつけて

「待、来」(お前来い)  
と一言云うと、腕を伸してグツと私の左の肩を掴んで引き立てました。「アアゝゝ」お茶碗は力の抜けた掌から転げ落ちてお粥が私の膝の上ばかりか近くの人の膝にまで飛び散りました。

「どうして?、どうして?」

私はそんな無駄な言葉をはき乍ら必死になつて両足をふんばりました。

「チエ、ジャ、ホウ……」

私の意味のわからぬ言葉をわめくと、無雑作にずる／＼と引きずつてゆきます。「走、走!」もう一人の男は銃の台尻で私のお尻を押します。私が戸口から引きずり出される迄中の人達は誰一人物を言う人も居ませんでし

た。只、私がチラツと顧つた時、美代ちゃん

の燃えるような眼が輝やいていたのを忘れません。  
暮れかゝつた薄闇の中にぼうと白い建物が浮かびました。土造ばかりの部落と思つていたのにこゝは昔日本人でもいたのでしようか練瓦造りの頑丈な奇麗な家でした。二人の満人に挟まれた私は入口に立ちました。ドアが半ば開かれたまゝになっています。満人は頸をしやくつて入れといいます。

「アハゝゝ」

朗らかな笑い声がすると、明るいランプの部屋から二人のソ連人が立ち上つてきました「イラツシヤイ、ムスメサン」

舌の廻らない日本語、あゝ、その時の私の驚き、昼間見に来たあのソ連の兵隊です。あの時私の方を見て何か通訳話していたのが今私に言葉をかけてきた男なのでした。思わず知らず二三歩退いた私、でも満人が閉めていつたのかドアは固く閉つています。二人は毛むくじやの腕を差しのべてニヤ／＼気味悪い笑みを浮かべて近寄ってきます。

「ムスメサン、コワイコトアリマセン」

「コツチヘキナサイ」

「オイシイモノアリマス」

ピッタリ身体をドアに寄せつけていた私の肩に、ズツシリとした熊の掌を思わせるような重みが両方同時にかかりました。

「ああ——」

思わず口から洩れる溜息とも絶望の悲鳴ともいえる呻めき声、私は観念の眼を閉じました。強い力がずる／＼と引きずってゆきます「ムスメサン、スワリナサイ、タベナサイ」私は押えつけられるように椅子に掛けさせられました。何故か静まつてくる心、それは今迄叩かれたり、侮辱されたり苛められてきたせいでしょうか、私は静かに眼を開きました。四角い事務机、その上に石油ランプが美しい光を放っています。

右に一人、左に一人、如何にも粗野な人種を思わせる荒けずりで大味な顔つき、そのくせ人なつつこい素朴さをむき出しにした容貌、私の眼の前の洋皿には真白い食パンがのつています。そしてその横にはコンビーフの罐詰、思わずゴクリと唾を飲み込みました



あゝもう何日こんな物を食べないでしょう。いや見た事もなかったのです。毎日、毎日、粟や玉蜀黍のお粥に漬物ばかり、私はじつと我慢して眼をつむりました。

「エンリヨシナイ、タベナサイ」

顔付きに似ない柔さしい声、私はフラ／＼と手を出していました。二人がゲラ／＼笑い乍ら話しているのも気がつかないようにガツガツ食べ終わりました。二斤近くもあつたでし

ようか、今迄食べた物の中でこの時のパンと罐詰ほど美味しいものはありませんでした。気がつくと二人は盛んに争うように大声で喋り合っていたが右側に坐っていた男が机の抽手からトランプを荒々しく取り出しました。器用な手つきでバラ／＼と繰るとボンと投げ出したタイヤのキングと、スベードのジャック、左の男はそれをとると、手を後ろへ廻しすぐ又両手に握って前に突き出しました。

右の男の手が伸びます。神妙な顔つき、ベシツと音をさせて左の男の右手を叩きました。開いた掌には皺苦茶になつたキングが机の上に落ちました。

「ワツハムム」

突然びつくりするような大きな声で笑い出すと、私の肩を撫んで踊るような恰好で立ち上りました。もう一人の男は一瞬臆抜けたような顔でぼんやり天井を眺めていましたが、ピューと口笛を鳴らすとすぐ諦めたような顔つきで煙草を取り出しました。

強力な力で振り廻されているような感じ、背筋をスーと走つてゆく恐怖、酒臭い息がフーと私の顔を掩います。初めてわかつた彼等二人の今迄の不思議な仕草私はありつたけの力で彼の腕から逃れようと跳きました。しかしそれが何の役に立ちましよう。軽々と抱き上げられて徒らに足をバタつかせるだけででした。「嫌、イヤ、イヤッ」暴れに暴れてぐつたりとなつた私は隣室の粗末なベットへ運ばれると、彼がズボン捨てパンツもとのをボンヤリとうつろな眼で眺めていました。

## 【二】

「ドウデス、ムスメサン」

ギリ／＼巻きにされてベッドの柱に結えられた私はもう悲鳴を上げる元氣ありませんでした。私が彼等の意に従わないで、腕に噛みついたりしたので、とう／＼こんな恰好にしてしまつたのです。

その時の恰好は本当の所、此処に詳しく書くのは恥しくてたまりません。でも、私のこれからの心がどんなに変つていつたかという事を知つて頂くにつけても、この時反抗した余り、どんな哀れな姿にされたかという事も皆さまに知つていただきたいと思ひます。

頭の先から足の先迄、糸くず一条つけていない私の姿、そして両の掌を合せて丁度万歳のような恰好で頭上に縛りつけられているのです。数え年十八の乙女にとつて、これが如何に恥しい恰好であるかわかつて頂けると思ひます。手首に喰い込む縄で両手がしびれるようです。胸から下は縄一本かけていないので、両手首の痛さとは反対にフカ／＼とした頼りなさが身体全体を包んでいます。

「ムスメサン、フラフラモウシ」

背の高い男が私の前に屈み込みました。ニヤツとした薄気味悪い微笑、次の瞬間、私は全身の力を右足先にこめて、その男の額を蹴飛ばしました。ベッド全体が反動でギ／＼揺れました。不意だつたのか、大の男が物の見事にドシンと尻餅をつきました。フツとこみ上げてくるおかしさ、けれど、それはすぐ恐ろしさに変りました。引きつった物凄いい形相で立ち上つた男は、ツカ／＼と部屋の隅の壁へ寄ると手にしたバンド、あゝ、それは日本兵隊さんがしていた帯革なのです。眼を覆おうとしても手は動きません。伸した腕に顔を埋めているのへ

「ビシツ」

股のツケ根の肉が千切れ飛んだように思ひ

ました。ヒリ／＼と灼けつく痛さ、私はもうその一撃で身体全体が硬直して、両足は棒のようにつまぱります。眼をつむつて待つ次の一撃、それはほんの一秒か二秒の僅かな間ですが、打たれそうに思う横腹、腰、尻にジンと痺れるような感じ。

「ギクツ」

私には確かにそう聞えました。耳が鳴つたのか、気が遠くなつたのか、二撃目が腰の所へ当たつた時は眼の中を星の様なものが飛び散りました。腰の所にはもう痛さというものはなく全身からスーと力が抜けてゆくような感じ、今当るか、今当るかと期待する第三撃目それは既に痛さというより、あの言うに言えない不思議な叩かれる興奮を望む気持でした。フワ／＼と空を飛んでいるようなフワツとした気持。そしていつの間にか、気を失つてしまつている私でした。

どの位、時間が経つたでしょうか、真暗闇で何も見えません。温かい毛布にくるまれていますがやはりあの時のまゝの裸なのです。ヒリ／＼と灼けるような内股から腰にかけての皮膚の感覚、両手は自由でした。本能的に手はそつと前へ行きます。それは恐ろしいものを見てしまわずには安心出来ない好奇心と



いうものだつたのでしようか。

次第にさえてくる意識の中で、私はあとからあとから湧き出てくる涙で枕を濡らしていました。可愛い、いとしい身体、やつとまだ数え年十八なのに、異邦のこんなところでこんな目にあうなんて。不思議にも、この時叔母さん達のことを考える暇はありませんでした。逃げなければ——。とにかく、じつとして朝を待つより、何とかしなくては、とそつと身体を起しました。

節々の痛さ。今にも腰の骨が砕けてへたへと坐り込んでしまいそうな痛さ、ようやくベッドから這い出して、じつと闇に馴れた目をすかししました。カーテンの隙間から星明りがかすかに洩れてきます。丸裸の私は何か着る物を探そうと手さぐりでベッドの上を撫で廻していますと、

「ウーン、ウーン」

向う側のベッドで寝返りをうちました。彼等二人はこの部屋に寝ているらしいのです。ビクツとした私の胸は早鐘のように動悸を打ちます。そうして私の焦つた気持ちが運の悪い時は悪いもので、ベッドから遠さかろうとしてお尻をいやという程強く机にぶつつけてしまったのです。

——ガラン、ガラン  
ドタン——

石油ランプででもあつたのでしよう、派手な音を立て、床の上に転げ落ちたのです。

【三】

何にやらわめいて起き上つたソ連兵、シュツとマツチをする音。

その僅かな明るさの中で私の見たのは、鳩が豆鉄砲を食つた様な大形の顔付きの一人。ぱつと毛布をはねのけると、太い腕、しまつた筋肉の腿、毛むくじやな胸、マツチの照らす一瞬の間に私はそこに

彫刻のような裸形の男を見てしまったのです。遅ましい男性の肉体、けれども、それは瞬時の事でした。次には両腕を八の字にひらいたその男が私に飛びつくように迫ってきました。私は「きヤツ」と悲鳴を上げて窓のカーテン



にしがみつきました。もう一人の男が部屋の隅のスペヤ一のランプに灯をつけました。

その時の光景を想像して下さい皆さん。ランプに照らし出されたその部屋の中では、追う者も追われる者も裸、そして動くたびにお

化けのような大きな影法師がゆらぐのです。

二人の大男に追われる私、どんなに私が素ばしこくつても、勝手の知らないこの限られた家の中で逃げおこせることは出来ません。それに氣を失つてからどれ程、ひどく痛めつけられたのか、空を踏むようでさつぱり手足に力が入らないのです。結局遊戯のように、右へ左へよろけ乍ら次第に追いつめられて、とうとう太い腕で抱きすくめられてしまいました。その力は私の背骨が折れてしまうかと思う位です。ぐつと息がつまつて、腕のグリグリとした筋肉で抱きすくめられた頬も曲るばかりです。

「いや、いや、イヤッ」

軽々と抱き上げられて、只足をバタ／＼させるだけです。いやらしい部厚い唇が迫ってきます。それを寄せつけまいと必死に顔をそむけますが、遅ましい腕が一とゆすりすると私の身体は塵芥のようにもみくちやになつてしまふのです。

背骨の痛さ、腰から股にかけての砕けるような鈍痛、そして息も出来ぬ程押しつけられた唇、私は身体をそらしたり、屈めたり、海老のようにね廻つてもがきました。

「ハム、ムスメサン、オトナシクスル」

やつと唇を離れた男はそう言いましたが、身体は相交らず締めつけられたまゝです。

その時まで傍で突立つて眺めていたもう一人の背の高い男は、突然何かわめくといきなりとびついてきました。私は物凄いい力を肩に感じて、ふわつと浮き上ると、そのノツボの方の男の手の中に移つていました。まるで木で作った玩具の様な私、又々浴びる接吻の雨、乱暴な抱擁。それでなくてさえ、足腰の不自由な私は、只されるがまゝになつている中に次第に全身の力が抜けてゆきました。もう怖いという気持も、これからどうなるだろうという考えも浮んできませんでした。たゞ意識だけがはつきりしている頭の中で、ランプの灯にクツキリと映えた遅ましく盛り上つた筋肉の裸形の男をうつとりと眺めていました。

石油ランプの下の輪のかげになつた暗いベツトが、巨大な魔物のように目の前にありまうす然しそれが、今迄山野の流浪生活を続けてきた私にとつてなつかしい故郷のような気持ちを起させるのです。

軟かい私の肉に喰い込むような腕の筋肉、痺れるような叩かれたあとの鈍痛、姦される怖ろしさ、そんなものがめまぐるしく交錯し

て私の身体の中をかけめぐつてゆきます。細痛、肉体に加えられた苦痛、それが私の気持ちをこのように変化させて、しまふのでしようか。この時の私の気持ちを皆さんはどのようにお思いになれますでしょうか。

それから、二人の大男にベツドへ運び込まれた私が、どのような事をされたか、それはもう申し上げる勇氣はありません。夜の白々と明け初める頃、私は疲れ果てゝ泥のように眠つてしまいました。

余りのことに氣もそぞろに、まるで人形のようになすがまゝになつてゐる私をもみくちやにしてしまふ二人の男、そして苦痛を苦痛と感じない私の身体、私はこの時はまだ自分の身体についてはなんとも氣づいていませんでしたが、今になつて考えて見ると、やはり私は普通の人と違つたところがあつたのでしよう。そういう素質が異常な体験によつてかりたてられたのに違いありません。しかし、まだこれは序の口なのです。次には私が凌辱の泥沼へ叩き込まれた恐ろしい体験をお話いたします。

(続)

# 私の求めた男 (二)

(松井籟子自伝的小説)

松井籟子

瀧麗子画



チャンバラ映画というのがはやつてきた。それは大抵女の縛られる場面が出てくる。だから、子供達がチャンバラ映画をまねしようとする、きまつて誰かお姫様か、町娘になつて、縛られなければならなくなる。

私は縛られたかつた。その縛られる役になりたかつた。しかし、なりたいたいと思う心が強いと、私には「私を縛つてよ」という言葉がどうしてもすらすらと口にのぼらない。「縛つてよ」と頼むのではなく、「縛つたつていいわよ」と、厭々承諾するように言うことさえ、私には出来なかつた。

「さあ、誰か縛られなきゃだめだよ。縄にしようか、帯にしようか」

と、男の子がいう。

その頃の下町の子供はほとんど和服だつたから、兵古帯は誰のも間に合うのだ。

私は真先きに私の帯をほどく。つけ紐がついているから、帯をといても、着物の前ははだけない。

「さあ、これで誰を縛ろう」

私はといひ兵古帯を手でしごきながら、まるで私なんかは縛られる側へは絶対にまわりませんという顔をする。私はいつもいじめる側で、大抵、山賊の女親分とか、夜嵐なんかというような女賊になる。

私は女の子よりは男の子を縛つた。竹野清という名のおとなしい少年が、いつも縛られる役になつた。

「そつと縛つておくれよ」

そういうながら、後へ手をまわす竹野の手を、ねじり上げるよう



にして私は縛りながら、自分がそうされたらどんな気持ちだろうとあこがれた。一と巻き、二と巻きと、縛られる肌の感じを自分にうつしながら、私は竹野を縛りあげる。

私の性慾はマゾヒズム的空想をのぞいては、ノーマルなのだと思う。ノーマルな性慾で、私は女の子よりも男の子を相手にしたのだ

ろう。一本の縄は私の女体と男の体を結び合わす情炎の絆なのだ。それは生れたばかりの赤ん坊が乳房に吸いつくすべを知っているように、縛るということが性慾につながり、性慾は異性を対象にするものだということを、私の体が先天的に知っていたのだと思う。私は決して征服慾で男の子を縛ろうとしたのではない。縛られたいと思う自分へのてれかくしで、人を縛つたのだ。だから縛られる男の子は美しい子がよかった。征服慾からなら、たくましい本当に男性的な少年をえらんだだろうに、私はただ、私の姿をおきかえるべくやさしい美しい少年を縛つた。竹野清はその頃流行した高畠華宵の絵に以ていた。

竹野の手に縄をかける時、私の体の奥で、ゴクンとつばをのみこむような感じがした。私はそれが恥しかった。恥しかったから、わざと乱暴に竹野を縛りあげた。

「夏枝さんは本当に女らしくない……」  
よくそういわれた。

私は人に虐げられ、おさえつけられてみたかつたから、反対に乱暴にふるまつたのだ。虐げられることを喜びと感じない人が、むしろ、おどおどと絶えずそれをおそれているようにふるまつて、おそれている通りに虐待されるのにひきかえて、私にとつては、虐げられ、無理にもてあそばれることを体の奥底で喜びの期待におののいていたからこそ、おどおどと恐れもしなかつた。恐れないことが、私から女らしさを奪つてしまつて、私の望む機会がなかなか与えられなかつたというのは皮肉なことだつた。

たつた一度だけ、私は私の望んだように縛られることが出来た。いつもの様に捕りものごっこをやつていた。私は女賊で、棒きれ



のあいぐちを逆手に持つて奮闘していた。捕吏になつた男の子が、方々から荷造り用の縄を拾いあつめて来た。問屋の多い街だつたから、縄ぎれは沢山あつた。それで私をつかまえようと、手に手に縄のさきを輪にして私をねらうのだ。

手首に縄をかけられた。本なら投縄が手首にからみつくのだが、そんな器用なまねは子供には出来ない。私は手首に縄をかけられる為に、少しの間じつとしていなければならなかつた。その短い間の期待は、雨足をみせて近づいてくる夕立を待つ気持ちに以ていた。

手首に縄がザラザラとまきつけられて、ぎゆうと結ばれた。私は縄がかゝつた手をそのままあいぐちをかまえて振りあげた。捕吏になつた子は地面に膝をおとして、縄をひつぼる。私がよつぽど力を入れて、それに抵抗していないと、よろよると、引張られそうになるのだ。そして、無理に力を入れれば、手首はちぎれそうに痛くなる。すると、今度は後から、縄を輪にして私の首から肩へおとした子がある。あいぐちをかまえて片手をあげていると、首へかけた縄は肩までおちずに、首がしめられそうになるので、私はあげていた手のひちを膝の下へつけなければならなかつた。縄は肩から胸へさがりぎゆうとしめつけた。思わず片手でそれをゆるめようとすると、又別の縄が片方の手首にもかけられた。私の自由はだんだんにうばわれていく。右に左に、前に後に、四方から力一杯に縄を引張られて私は身動きも出来ず、ただ足を泳がせるように、よたよた、よたよたと、一つとところでよろめきはじめた。

#### 「御用、御用」

と子供達は映画を真似してかけ声をかけながら、縄の距離をだんだんにせばめてくる。

そのうち、ひとりが後から私をつきとばしたので、私はもろくも前へ膝をついて転んでしまつた。

#### 「捕つた」

と、男の子達は私に折重なるようにして、私の手を背中へねじあげ、両手をつにして縛つてしまつた。あとは残つた縄が荷物を縛るようにぐるぐると私の体にからみつくのだ。男の子達の手が無器用なほど、がんじがらめに縄はまつわりつけられる……。

しかし、その時だつた。

「まあ、夏枝、なんですか」

するどい母の声がした。

私もはつとしたが、男の子達も急いで手をはなした。私は手首へ縄をぶらさげたまゝ、ワーツと泣き出してしまつた。

私は陶酔していたのだ。手首に縄がかゝり肩にかゝり、胸にかゝり、それが段々に全身と身を強くしめつけて、手が後手に廻された時、次はおそらく、芋虫のようにされてこづかれる自分の姿を想像していた。それは快い酔い心地だつた。そこへいきなり母の声だつたのだ。私は私の酔い心地を突然こわされた憤りと、それに酔つていたことへのたまらない恥しさを一緒にして、泣くより方法がなかつた。私は涙がこぼれてくれたのに、安心するような泣き方で泣きじやくつた。母は私が男の子達にひどいめにあわされていると思つたのだらう。

「あんた達、いつたい何をするの」

と、男の子を叱りつけて、大急ぎで自分から私の縄をといてくれた。

「出世前の者に縄をかけるなんて、本当に、何て子供達だらう」

男の子達は何か一言抗議をしたらしく

「だつて……」

と、口をとがらせていたが、母の見幕がおそろしいのと、私の泣き声に驚いたのか、だんだん尻込みして、逃げて行つてしまった。

私は往來の真中でワアワアと泣いていることに、一寸氣まり悪さを感じたが、それ以上に、そんな遊びを私が喜んでしていると母に思われることの方が厭だつたので、さも男の子達が悪いように泣きじやくつた。女というものはもうそんな子供の時から、嘘をつく術を心得ているものらしい。

そうした遊びを母に見つかり、もうこれからさき出来なくなるだろうということが、無念で残念で口惜しくて、ワアワアと泣いたが泣いていることは男の子にいじめられたからだと解釈してくれるだろうという打算があつた。

「出世前の者に縄をかけるなんて……」

母はよほどそれが心配だつたらしく、何度もくりかえした。そして、絶対にもうこんな遊びをしてはいけないといましめた。

「しやしないわ、私は厭だつて言つたのにみんながそうしなければ遊んでやらないつていうんだもの」

私はすらすらと罪を男の子にかづけた。私はその嘘の罪で、もう一度いじめられてもいいと思ひながら、私の被虐に対するあこがれを絶對人に知られたくはなかつた。

しかし母は私の涙にごまかされず、私の体の奥底の欲求に氣がついていたのではないだろうか。

長唄と踊りのお稽古だけでも精一杯な私に、英語まで習いにいくようにはかつて、私の放課後の時間をうばつてしまつた母は、私の

遊びを子供の遊び以上に氣にしたからではなかつたかと思う。母はそんな賢い女だつた。

しかし私自身はその時「出世前に縄をかけられるといけない」と言つた母の言葉が妙に氣になつて、縛られたいと思う氣持が幾分消されたようだつた。

子供の心には妙にそんな迷信というものは印象深く残るものだ。母や祖母はいろいろな迷信で私をおびやかした。葬式のある家の前を通る時、私は知らず知らず親指を手の平の中へ握つて、しつかりかくしてしまう、いまだにそれがなかなば無意識で行われる、親指をかくさないで、親が死ぬと教えられたからなのだ、もう片親は死んでしまつた現在、両手の親指をかくすことはいらないのに、私はつい葬式の家の前を通ると、両手とも握りこぶしをつくつてしまう、もうそれは一種の癖になつてしまつたらしい。

墓参に行つてお墓の道で転ぶと早死にするとか、朝、右の耳が痒いといいことを聞くとか、いいも悪いもいろいろとあつて、私は又それをいちいち本氣にした。だから、出世前に縄をかけられると出世出来ないという迷信は、タブーのように私につきまとつて、子供の心にはよけいそれが一つの懼れになつたのだ、縛られたいと願う氣持を押しつけて、それから年頃と呼ばれる年令に達するまで、あまりそのことを考えなかつたのは、母の言つたわずかな言葉のはしに原因するものが大きい。しかし、未だ出世らしい出世も出来ず、女ひとりの生活をやつとおくつているところをみると、私はやつぱりあの時、縄をかけられたのがいけなかつたのかもしれないと思つたりする。

こうして縄に対するタブーは出来たが、私にとつて、被虐へのあ

これがなくなつたわけではない、それは初恋の形の中にも現れてきた。

x

初恋は十三の年だつた。

同じ小学校の男の組の級長を好きになつた。

人はよく、いつから好きになつたかわからないという恋愛のしかたをするが、私の場合、いつ好きになつたか、何故好きになつたかはつきりわかる恋愛が多い、この初恋からして、そもそもそうだつた。

私は女の組の級長をしていた、そしてそれは地理の時間のことだつた。

準備室といつて、地図や動植物の標本をしまつてある部屋へ地図をとりに行くと、その地図はすでに男の組で持つて行つたという話だつた、同じ六年で、同じ地図を使うのだから、かちあわないように時間割が出来ている筈だつた、此方は成規の時間割で地図がいるのだから、男の組が地図を必要とするなら、それは臨時に時間割が変更したか何かであつて地図を使う権利は女の組にある筈だつた。小学校六年ともなれば、その位の理窟はこねたものだ、今の子供が理窟つばいとよくいう人があるが、昔の子供でも随分しつかりしていたものなのだ。

私は先生に相談するよりさきに、単身、地図を返えしてもらいに男の組へ行つた、男の組の黒板の上に、大きく地図がかけられていた、聞けば歴史の時間だけれどその参考に地図がいるのだという。

「返えしてちょうだい」

私は言つた。

「お前ンチ地図じゃないじゃないか」

宇津木進吾という男の組の級長が言い返えた。

「ちやんと準備しないと私の責任ですもの、地理の時間に地図がなかつたらどうするのよ」

「そんなことするかい、俺の方がさきにとつてきたんだもの、俺の方が使う権利があらう」

私は問答無益と、そばにあつた長い竹の掛け図かけをとりあげてはずしにかゝつた。

「何するんだい」

宇津木進吾は私の手をつかんだ。

私とその手をはらいのけようとすると、竹の棒をつかんでいる指をそのまゝぎゆうつと上から握りつぶすように力を入れて握つた。

「うーむ」

と、私は思わず息をつめた。

「どうだ、痛けりやはなせ」

「うーむ、痛くなんか……、ないわ」

私は押しつぶされたような声で言つた。

「よし、はなさないな」

宇津木進吾は私の手の甲に爪をたてて、ぎゆうつと押しつけた、私は手の甲の痛さと、手の平に握っている竹の棒の痛さで、指がばらばらになるような気がした、それでもじつところらえていた。



彼は今度は私の背の方へ体の位置をずらせて、私の片手をねじるようにつかまえて、四本の指をぎしぎしと、音をたてる程強く握つた。私は片手に竹の棒を握り、片手を後へとられて、男の子達の方へくしやくしやの顔を見せなければならなかった。

「さあ、どうだ。生意氣いか」

私は体が火の玉のように熱くなつていた。しかし、大勢の男の子の前で被虐をたのしむようなゆとりはない、私は自由な足で宇津木進吾を蹴とばそうとしたが、それをさけて彼のとつた体位なので、私の足はいたずらに空を蹴るばかりだった、男の子達がわあわあとはやした。

その時、

「何をさわいでいるんだ」

男の組の担任の先生が入つて来たのだ。

宇津木進吾は急いで私の手を離すと、事の次第を弁解した、私も負けずに弁解した、しかし、そう言いながら見上げた地図に、私の持つていた掛け図かけをうばい合う時突いたのか、大きな穴があいていることに気がついた、二人とも急にどうしていいかわからなくて、シユーンと首をうなだれてしまった。

「教室で喧嘩して、学校の地図を破いたのは二人の責任だ、二人とも立つておれ」

先生はきびしく言つた。

「地図は女の組が地図の時間なら、女の組の方へ返えしてあげなさい。誰か女の方へ持つていつてやれ。しかしお前は此処で一時間立つているんだ」

先生はそう私にいうと、宇津木進吾と私は並んで窓のわきへ立た





されてしまったのだ。

先生がいるので、さすがに男の生徒達は大声ではやし立てはしなかつたが、ここそと隣どうし、目引き袖引きしている様子がわかる。私は男の生徒達の前で、さらし者の様に立たされていることに奇妙な本能のうづきを覚えたのだ。尤も、子供の私に本能のうづきといつてもおかしいが、他に名づけようのない変な快感だつた。そして、それはやつぱり私にとつては尿意をもよおすことと、腕の皮膚が一枚厚くなるのか、薄くなるのかわからないような、チリチリとする感じで表れるのだつた。

それ以来、私は宇津木進吾に会うと、背中がカアツと熱くなつて腕の皮膚がチリチリするようになってしまったのだ。私は宇津木進吾に何かあげたいと思つた、私の為に立たされたのだから、私を怒つていやしいかと気になつたからだ、私は彼に好意をもちはじめたので、それが気になつたらしい。事実、廊下ですれ違つても、ことさらに私の方を見ないようにそつぽをむく、私をさけているように思われたからだ。

そのうち卒業式が来てしまった。

女学校へ上れた喜びも、宇津木進吾に会えなくなる悲しみで消される程だつた。私は好きになつたら夢中になるたらしい、わずかに十四才の女の子が、好きな男の子の姿に気をとられて、桜並木に頭をぶつけたと言つても、人は本気にするだろうか。

修学旅行の伊勢参宮で、私は校旗をかゝげて先頭を歩いている宇津木進吾の姿を見ようとして、次第に足が列をはなれ、あの伊勢の桜並木に何度か頭をぶつけたものだつた、私は初恋から、体の奥底にもりあがるような恋情で恋をしたのだ、どんなに清い恋愛でも、

その根源になるものは性慾だと思ふ、性慾というものは決してみにくいものではない。人間の生きる力なのだ。ただ、人間である以上犬や猫の様に、単なる性慾の満足を手がまわずに求めるのは間違つていふと私は思う、性慾が愛情になり、愛情が性慾になつて、はじめて本当の満足が得られるのではないだろうか。

私は乙女の夢の様な恋のしかたで宇津木進吾を好きになつたのではない、私は私の体で恋をしたのだ。しかし、体で恋をするような恋のあり方でも、十四の少女がそれを表現しようとする、宇津木進吾に何かあげたいというぐらいの思いつきが精一杯だつたのだから、やつぱり年は年である。しかもそれを、宇津木進吾自身に手渡すことが出来ず、私は近所の遊び友達だつた竹野清に頼んだ、この間立たされたのが私のせいだと思ふから、おわびのしるしにという口実があつて、別段私の好意を伝えてもらわなくてもいいのだ。それに、向うが知らん顔をしているのに、此方だけ好きになつていふという気持は被虐に通じるものがあるのかもしれない。私は洋行帰りの伯父から貰つた、ドイツ製の小さなナイフをあげることにした。女の子の私にくれたもので、赤い革のサックに入つていて柄も赤い色をしている小指ほどの小さなきれいなナイフだつた。

竹野清はそれを宇津木進吾に渡してくれたのだから、途中で会つても、宇津木は礼も言わなかつた、私は本当に渡してくれたかどうかたしかめたかつたが、竹野清に念を押して私が宇津木に感じている恋心をさられるのも嫌だつたので、ナイフのことにはそれつきりふれなかつた、それに卒業式が済むと、とりわけ仲のよかつた女友達以外には、小学校の同窓生に会う機会も少くなり、そのうち宇津木進吾の家は左前になつたという噂を残して、どこか郊外へ引

越していつてしまった。私は宇津木進吾の新しい住所を聞きかつたが、虚心に聞く術もなく、何度かもとの宇津木の家の前を通つてみるだけだつた。

x

学校の帰えりに銭湯の前を通ると、浮世絵の女のように島田のびんを高くかきあげた人が、菖蒲の葉を口にくわえて、のれんを分けて出て来た、すれ違ふと白粉の匂いの中に、青い草の匂いのようなものが漂つて、黄昏の中にひろがつていつた。

そんな宵だつた。

菖蒲湯で髪を洗つた私は、セルの着物に着かえて水天宮へお参りに行つた、正五九の水天宮といつて、正月と五月と九月は、毎月ある五日の縁日の中でも、一番賑わつたものだつた。

肩をかくす程にたれた洗髪に夜風が気持よく、私は急に大人になつたような歩き方で桐のあとまるをならして人混みを分けて行つた。水天宮から人形町まで行くと、左へ折れて親爺橋のあたりまで植木市がたつてゐる、それを途中まで行つて又人形町へ戻り、反対側を水天宮の方へ歩いてくる。そのうち、私は何となく背中がむず痒いような感じがして来た、誰か、背中へ話しかけているような感じなのだ、振り向くと、宇津木進吾と同じ組だつた小学校の同窓生が二人、私の後から歩いてゐた、私が振り向くと、二人は急にどきまぎと顔を見合しながら、同じように私に微笑みかけて、目で会釈した、私も目で答えて、そのまゝ又歩いて来た。

水天宮のお宮の前を通り越して土洲橋の方へくると、いつも同じようにそこへ店を出す貝の大きなのぼりがはためいて、磯臭い匂いがするが、そのあたりから人通りが少し淋しくなる。

「松野君」

ど、私は中学生らしい呼び方で呼びとめられた、振返るまでもなく、さつきの男の子達だと知つていた。

私はだまつて立ち止つた。

すると二人は又「お前言えよ」「お前言えよ」とゆずり合つていたが、木村という子が

「もう帰えるの?」

と、言つた。

「ええ」

と私が言う

「もう帰えらないと、おこられるのかい?」

と聞くので、

「いいえ」

と、私は答えた。

水天宮の縁日の夜は、家の者が順ぐりに参詣に行くのがならいだつたし、祖父や母も、出れば植木をひやかしたり、お汁粉屋へよつたりして帰えるから、その日に限つて夜あそびをしても目立たないことになつてゐた。

「舟にのりに行かないか?」

青木という子の方が言つた。

「舟?」

「うん、和船をかりて大川へ出るんだよ、面白いぜ」

「行つてもいいわ」

私は洗髪をなびかせながら、男の子達と大川へ舟を出すというのが、草双紙風で、何となく自分がもうひとつ大人になるような気が

がして心がはづんだ。

「それに君に会わせたい人がいるんだよ」

男の子がませた言い方をした。

私ははつとした。もしや、宇

津木進吾ではないかと思つたのだ。

そう思つただけで、宇津木に会つたように背中がカアツとほつた。

土洲橋から中洲の方へ折れて少し行くと、貸舟屋がある。

ボートの季節にはまだ早かつたが、赤い提灯をともしたボートがちらほらと浮いていた。

私達が近づくと

「遅かつたなあ」

と橋のたもとから声をかけられた。

私はドキツと胸を鳴らしたが宇津木進吾ではなかつた。しかし人影はもう一人いる。そしてそのもう一人の人影はわざと私から顔をそむけるようにして立つていたが、声をかけた方が、まるで逃げるのをおさえている



ように、その人の手を握っていた。

「俺、竹野を押さえておくのに骨折つたよ」

声をかけたのは同じ男の組の石河という男だつたが、「竹野」と

聞いて、私はもう一人の人が竹野清なのに気がついた。

宇津木進吾ではなかつた。

そう思うと、風船がすうつとしぼむように私はがっかりした。そして、私の視線をさけているような竹野清の様子が無性に癪にさわつた。

「さあ、のろうよ」

うながされて舟に乗つたが、おかしいことには竹野清を他の三人が罪人でも刑場へひいて行くような扱い方をしていることだつた。竹野自身も罪人の様に首を垂れて、殊に私の目をおそれているように見えた。私は夜目にも白く見える竹野のうなじを見ているうちに、幼い日に、彼の手を後手に縛りあげた触感がいまもよみがえつて来て、私の体の奥底に小さな波がひろがつていくような気がして来た。

倉庫の多い堀割には、幾艘も船がもやつて、七輪の火が赤く見えて、魚を焼く匂いなどが漂っていたが、大川の方へ出て行くにつれて、もやい舟は少くなつた。

男の子達はハーモニカをとり出してふいたり、その頃流行していた「紅屋の娘」や「君恋し」を小声で歌つたりしていたが、竹野清だけは、まるで縛られてでもいるように、じつと動かなかつた。

そのうち、あたりに舟のいない倉庫のかげへ入ると

「いいだろう、この辺で」

と、櫓をおしていた木村が言つた。

「よし」

青木が答えて、舟は波間にただよひにまかせた。

「さあ、竹野、松野君の前ではつきり言つてみるよ」

木村は竹野に言つたが、自分のポケットをさぐつて何かをつかむと、私の前へ手をひろげてみせた。

見ると、私が宇津木に渡してくれと頼んだあのナイフがついてた。

「松野君、これ本当に竹野にやつたのかい？」

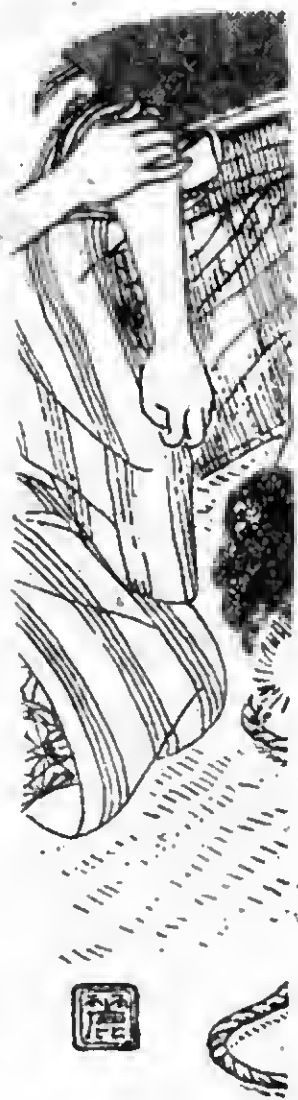
木村は私に聞いた。

「いいえ」

私が言う

「ほら、みる」

竹野をこづいた。



「やつぱり竹野は嘘を書つてい  
るんだよ。松野君、これは君の  
ナイフだろうか？」

「ええ」

と、私は答えるより仕方にな  
かつた。私のナイフではあつた

が、今、私のナイフではない。女学校で英語を習い出したばかりだ  
つたから、その過去と現在の言い方の違いをはつきりさせたかつた  
が、四人の男を前に、生意気な言い方をしてみてもはじまらないと  
思つた。

「やつぱり竹野が泥棒したんだよ。さあ縛つてしまえ」

いつの間にも用意して来たのか、一人が麻縄をとり出した。

竹野は私に訴えるような瞳をあげて、無言でとめてくれるように  
願つていたが、私はだまつてなりゆきを見ていた。

竹野の手は後へまわされ、背中へかつぎあげるような形で、高々  
と結えられてしまつた。

「松野君がこのナイフを伯父さんのお土産だと言つて持つていたの  
を、僕知つていたんだ。それなのに、此の間竹野の家で、僕、偶然  
このナイフ見つけちゃつたんだよ。竹野にきいたら君にもらつたん  
だつていうんだ。でも何だかおかしいと思つて、みんなと相談した  
んだよ。それで、もし竹野のいうのが本当なら、僕達で竹野を疑つ  
たことあやまれはいゝんだし、もしそうでなくて、竹野が泥棒した  
んなら、君の前で竹野をお仕置きして、それで許してもらえばいゝ  
ときめたんだよ。さあ、ナイフは君に返すよ。竹野の奴どうしよ  
うか。百たゝきにしてやるうか。この泥棒野郎」



木村は縛られた竹野の頬をなぐつた。

舟が反動で大きく揺れた。

竹野は私のナイフを盗んだのではなかったが、私が渡してくれと  
いつた人に渡さず、自分のものにしてしまったのは泥棒したのも同  
じだと私は思った。

しかし、私の目の前で縛られて、ぶたれたりしながら、どうして  
盗んだのではない、頼まれたのだけれど、宇津木に渡すのを忘れた  
のだと弁解しないのだろう。

「清ちゃん」

私は幼い時呼んだように竹野をよんだ。

「清ちゃん、あんた本当にそれ盗るつもりだったの？自分のものに  
するつもりだったの？」

竹野はかすかにうなづいた。

「じゃあ、ひどいめにあわされてもいいのね」

竹野はもういち度こつくりした。

私は頬にさわつた。竹野の血の中に、自分の血を感じて頬にさわ  
つた。後手に高手小手に縛られて、拷問されることを観念したよう  
に座っている竹野の姿は、私が夢みている姿ではなかったか。私は  
私の分身をまざまざと目の前に見せられたことに激しい羞恥を感じ  
ると、それはやりばのない怒りの様なものに変つていった。

私は竹野の頬を両手でビシヤツ、ビシヤツと交互にたたいた。竹  
野がそれをよけるよう下を向くと、後から石河が竹野の頭を抑さえ  
た。女なら髪の手をつかめばいいのだが髪をのぼしていい少年の  
頭はつかみにくいらしい。石河は自分のズボンのベルトをとつて犬  
の首輪の様に竹野の首にしっかりとかけると、それを後から握つた。

ビシヤツ、ビシヤツと、私の手の平も痛くなつてきた。それに、  
夜の川面にその首は大きくひびいて行く。あたりに舟の影はなかつ  
たが、空気を切るようにひびく音は何となくためらわれた。

「こうした方がいいよ」

石河は私の逡巡に気がついたのか、竹野の体を舟底に長く寝かし  
て、足首を縛つてしまった。

「こうしてみんなでくすぐつてやるう」

それはいい考えたというように、少年達は竹野の体中をくすぐつ  
た。足の裏をくすぐる手、のどを、わきの下を、お腹をと、体中を  
くすぐる手にことかかなかった。

竹野は体をひくひくと虫の様に蠢めかして悶えた。

「あばれると舟がひつくりかえるよ。僕達は泳げるけれど。お前は  
縛られているんだから、土左衛門になつちやうぞ。さあ、あばれて  
みる、あばれてみる」

そう言いながら少年達は、竹野の体をもみくちやにするように、  
何本もの指で撫でたりつまんだりした。胸ははだけ、裾も乱れて麻  
縄は竹野の白い肌をぢかに締めつけた。

「あつ！ううつ！」

呻めく度に舟がゆられた。

「聞えるといけないよ、誰かハンカチ持っていないか」

私は洗い髪をかわかす為に、衿へ手拭をあてていたのに気がつい  
た。私はそれをだまつて出した。

竹野が訴えるような瞳で私を見た。瞬間私はその瞳を美しいと思  
つた。酔っているような瞳だった。月の光で光っているように見え  
たのは、竹野が本当に苦しくて、涙をうかべていたのかもしれない

猿ぐつわをはめられることに、竹野は又一寸抵抗して体をくねらせたが、邪険な少年達の手は用捨をしなかつた。  
「そのかわり警察へはだまつていてやるからな。泥棒した罰だもの仕方ないよ」

少年達は竹野の体を身動きの出来ないように舟底へ押さえつけてひとりぐくすぐり、ひとりは学生服のポケットから万年筆をとり出して、そのペン先きで胸といわず、お腹といわず、腿といわず、ブツブツと突つついた。

猿ぐつわの下から、竹野清の呻めく声が、奇妙な楽器の様にひびいた。

私はそこに縛られて、苛められているのが竹野清ではなく、私自身であるように感じた。そして、それが理想の感覚だけで、本当には私自身に苦痛を感じていないことから、もどかしいような焦燥に体中の血がおどろ廻るようで

「さかさにして、川の中へ顔をつけてやればいいのに……」

とみんなに言った。

「やれやれ」

と、少年達は縛られて、棒の様になつてゐる竹野の体を持ちあげたが、少年の体は案外重く、舟がひっくりかえらないように、竹野の顔を川の中へつけるのは不可能だつた。

「もういいだろう。松野君、もうかんべんしてやつておくれね」

木村が私に言った。

私が少年達より残酷なことを言い出したので、ナイフを盗まれたことを、よつほど怒つてゐると思つたのだろう。

しかし、もし私が怒つてゐるとしたら、竹野の瞳を美しいと思つ

## 次号は倒錯の告白と手記の大特集

### 告白と手記 募集

次号は愈々待望の読者諸氏より寄せられました倒錯の手記と告白の大特集号です。今迄も読者本位の雑誌を作るといふ本誌の方針が守られて参りましたが、今後益々大幅に皆様の投稿を掲載したいと思つておりますので、文章の巧拙や長短、用紙、書き方等一切問いませんから、何卒奪つて御寄せ下さい。投稿者の秘密は厳守いたします。掲載した分には掲載後謝礼を差し上げます。皆様の真実の叫びを双手を上げてお待ち致します。

た私自身に怒つてゐるのかもしれない。竹野清の白い肌と、月光に光つてゐた瞳を私は終生忘れることが出来ないだろう。私の分身のような松井彌子によつて、此の時の思い出は小説風に書き直されてすでに二年程前に奇譚クラブの誌上で私は読んだものだつた。その小説の方が、今、私の書いてゐる同じ場面をもつと面白く書いていたかもしれないが、事実が作家の筆にかゝるとどう変わるか、読みくらべていただくと、又別の面白さもあるかしらと思つたのだ。

しかし、その夜、私は私の手で竹野清を苛めはしなかつた。ただ手拭をさし出したことが、手を貸したことになるといえはいえるだろう。

ところが、それから間もなく私が私自身の手で竹野を責める日が来てしまつたのだ。

(つづく)



## あるマゾヒストの手帳から

沼

正

三

### 第四十一 「犬の変奏曲」

他に何を書いているか知らぬがたしか木場草介という人の「犬の変奏曲」という短篇が、昭和二十三年春頃の読物時事という雑誌に載っていた。特に一項を設けるほどの作品ではないが、Hunde-mensch が主人公であり、前項と関係があるので、ここで取上げておく。

主人公の妻は猫が好きなのである。彼女は猫の高貴性を愛し、犬の野卑を軽蔑する。夫の野卑な物腰は常に彼女に犬を思い出させる。「あなたは犬ね。私は犬は嫌いよ。」と断乎宣言して彼女は彼と別の部屋に寝ることになる。夫の方は妻からかようにさげすまれていても、どうしても彼女を思切れない。恋しさはいやますばかりである。一夜遂に彼は妻が猫を抱いて一人眠っている部屋に忍びよ

る。妻は耳ざとくも夫の足音をききつけて目をさます。彼女は大嫌いな犬を追払う。「シツシツ。あつちへゆけ」……「ワン、ワン」の吠声がこれに応ずる。——這い寄つて来た夫は遂に発狂してしまつたのだ。「シツシツ」と追われる中に、錯乱した精神状態から、自らを犬のつもりで日を送っている。妻は……どう書いてあつたか、今記憶にない。ただ当時、「もし私がこの小説を書くのだつたら、発狂した夫を妻が座敷牢に入れて飼うことにするがなあ。」と思つたことだけはおぼえている。(夫を座敷牢に入れておいて、妻がその面前に他の男を引張り込んで勝手な真似をする。夫はそれをどうすることもできないという状況設定はその頃私の愛好したものであつた。その夫が更に自らも犬となつたつもりでいるなら、妻はその情人と共に、安んじて夫を犬として玩弄しうることになる。益々マゾヒステイクである。そう考えたのであつた。)

この小説では、妻は猫が好きで、犬が嫌いである。しかも夫はマゾヒストである。これは前項と一見相容れぬように見える。しかしここで猫好きといっているのは、自分と同じ高貴性を備えたものとして、自分の同類として猫を見るから、親愛感を感じるといっているのであつて、前項の猫好きとは意味合いが違ふ。犬に關しても、前項で犬好きの女の特性として数えたところを彼女が強度に備えているからこそ、夫の精神状態をば犬そのものと同一化させるまでの強い感化を与えうるのである。そしてかかる妻を溺愛したこの哀れな夫こそ、前項の意味での猫好きなのである。

だから本項は前々項の論の例証となるものであるが、必ずしも前項と相容れぬものではない。そして、前二項と本項とを併せて表現すると、次のようにいえるであろう。即ち、マゾヒストは猫好きであつて、猫のような女を猫を愛するよう  
に愛するが、自らは犬に親近性を感じて犬となるのを好む。マゾヒストの理想の妻は犬好きであつて、犬のような男を犬を扱うように取扱う女性であり、精神的には猫の同類で、夫に対しては猫となるのであると。

#### 第四十二 詩人ハイネの妻



今度は歴史的な実例をあげよう。先ず思い出すのはボードレーで、「悪の華」には女を猫に譬えた詩で数篇あつたと記憶するが、原本が今手許にないので、あとまわしにし、本項では青春独乙派の詩人（ユダヤ人）ハイネの妻のことを書こう。

ハイネは、いうまでもなく抒情詩においては、ゲーテと並び称される人で、「唄の本」<sup>フンク・デル・リダ</sup>を初めとする三冊の詩集は、詩を愛する人にとつては忘れることのできぬものであるが、マゾヒストにとつても、初等科、中等科を終えて、高等科に入り、マゾヒズム学の堂奥に参ずるつもりならば、一度は読んでおくべき詩集といわねばなるまい。ハイネと丈きいては知らない人でも、美女の歌声に身を誤る舟人を歌つた「ローレライ」の詩の作者といえ、成程と思ひ当るだろう。

ハイネ自身を単純にマゾヒスト丈いつて了れりとすることはできない。甘く柔く美しい女主人への恋愛を歌いフラウ・ヴェヌスを讃える一方では、痛烈骨を刺す皮肉でプロイセンの軍国主義の辛辣な諷刺をものしたし、革命思想を抱いてマルクスやエンゲルスと交り、急進的な哲学書を著す一方では、「俺の頭の中には発禁本の内容ばかり喋る鳥が巣を作つて



いる。」と自らいつた位、猥雑なものも書いた。浪漫主義を罵つた浪漫主義者。矛盾撞着に満ちた天才。臨終の床で神へ帰依する様に勧められたとき「神は自分が悪戯から作つたこの俺という人間を救すだろうよ。」といったという。こんな人間を単純にマゾヒストと丈定義づけることはできない。ザッヘル・マゾツホなどとは違うのである。

然し、彼がマゾヒストでもあつたことは事実である。それを、私達は彼の妻マチルド・クレサンシャ・ミラーとの関係に見ることが出来る。ハイネは独乙を追われてパリに來た時、ある靴屋の売子だつた彼女に魅せられた。既に四十に近かつた彼に比し彼女は十八才も若く、輝くような白い皮膚と、歌うような声と、褐色の髪の毛を持つていたが、全くの無学で、読み書きも出来なかつた。官能的で、享樂的で、お洒落で、浪費家で、出歩き好きで、氣まぐれで、詩や芸術のような精神的なものは少しも理解せず、家政については何の心得もなかつた。そんな彼女からハイネはどうしても離れることができなかったのである。私達は「痴人の愛」のナオミと讓治を思い出せばよい。

彼女はハイネ——この稀れなドイツ語の魔術師——と十年間一緒に暮しながら、とうとうドイツ語を理解しなかつた。彼が彼女に教え込んだつた一つのドイツ語は、

Ich bin eine wilde katze. (妾は山猫よ)

というセンテンスであつた。そして彼女は夫の病氣のために睡眠時間を犠牲にすることはなかつたが、自分の「猫ちゃん」の怪我した耳に湿布してやるためには夜を徹するのだつた。マチルドは猫族の女だつた。

そのマチルドに対してはハイネは犬であつた。彼が旅行先から彼女に送つた手紙に曰く、「お前が私なしでパリにいると思うだけでも私は身ぶるいする。……用心して下さい。狼のような奴等のある者は大変やさしい様子をしている。革の手袋をはめている奴等が一番悪い種類だ。お前の犬である私に護られている時にのみ、お前は安全であることをお前は知つてゐるね。私は冗談を書いているが、私の心臓は血を流している。……」こういう手紙では、ハイネは多く「お前の哀れな犬」と署名した。彼は十八才も年下の若い美しいマチルドの愛を信じられず、棄てられることを恐れて、嫉妬に苦しまれていたのだ。

そのうちにハイネは筋肉麻痺のため全身不随になつて、死ぬまで八年の間病床六尺を天地とせねばならなくなつた。更に背髓を病んで、病苦はいや増し遂には失明した。一方マチルドは益々健康で、その肉体は愈々豊かになつていつた。彼女を信じ得ぬ彼は悩んだ。彼女は彼を散々に悩ました。

しかし、私は思うのである。それはハイネが一方において望むところではなかつたかと。自分の愛する女のために悩まされつつ喜ぶこと、苦痛の歓喜(Wonne des Leids)、それは一の逆説である。だがそれこそがマゾヒストにとつては宿命的な恋愛の形態である。矛盾の天才ハイネはこの逆説的な恋愛を生きた代表選手でもあつたのだ。私の讀んでいる二行はこう歌う(原文がないので一寸不安だが)

Ist meine Seele worden krank,

Ich schmachte nach Bitternissen.

我が心は病めり

我れは苦悩を求めて思いやつれぬ。  
 ハイネにずつとおわれてマチルドが死んだ時、小鳥と三匹の犬が  
 残された、けれど身邊には一冊の本もなかつたということだ。これ  
 が詩人ハイネの妻であつた。

#### 第四十三

##### マゾツホと犬と猫

マゾヒズムの本家ザツヘル・マ  
 ゴツホのことを犬と猫とに關係さ  
 せて少し書こう。

マゾツホは非常に動物を可愛が  
 つた人である。大休マゾヒストに  
 は心の優しい人が多いので、殺生  
 なことはしないのが普通だが、マ  
 ゴツホのは少し極端で、食事の皿  
 に蠅が止つても、叩かずに舐めさ  
 せていたそうである。

彼は美女の犬になることを夢に  
 描いていたので、犬に対してはま  
 るで自分の友達のような気持をい  
 だいていたらしい。本当なら自分  
 も犬並みに床に這いたかつたのだ  
 ろうが、子供もあつたこととて、  
 さすがにそうはしなかつた。その  
 代りに、犬を食卓に乗せて人間と



同じ皿で同じ食物を食べさせた。そして「こういう賢い犬に床の上  
 で食事させ、汚れた皿を使わせたなら、犬は侮辱されたと思うだろ  
 う。」といつていた。——これは彼の別れた妻オーロラ・リユーメ  
 リンの回想であるが、このことからマゾツホがどれほど犬に対し  
 て親愛感を感じていたかが窺われよう。(尤もこういう感想は家の

中で靴を穿いたまま生活し、従つて犬が戸外  
 から室内にも入りうる西欧の生活様式を理解  
 していないと充分には理解出来ないかも知れ  
 ない。逆にいえば、日本家屋で畳の上に四ツ  
 這になると違つて、西洋家屋で床に這うこ  
 とは、戸外で這うのと同じく、単に犬の姿態  
 を模すに止らず、犬と同じ生活領域に入つた  
 ことになるのである。脱線のようなだが、これ  
 は西洋種のマゾヒズムものを読む時常に念頭  
 に置いていて欲しいことである。)

猫に対しては、畏敬に近い崇愛感があつ  
 た。これはマゾツホの精神的半自叙伝といつ  
 てもよい「毛皮外套を着たヴィーナス」の中  
 で、ゼヴェリンがワンダに告白している文章  
 があるから誤本で御存じの方も多いと思う。  
 マゾツホは毛皮フエチシストであつたから、  
 特にその点から猫の毛皮を珍重するように書  
 いている。いずれ別項で扱いたいだが、毛皮フ  
 エチシズムがマゾヒズムに結びついてくるの  
 は、一つには陰毛への連想もあることフロ

イドの指摘の如くであるが、正面切つては高貴と豪奢との象徴としての毛皮外套を媒介とする。マゾツホ自身は毛皮を着けた女を見ると電気に打たれたような感動を覚えたいらしい。そしてその気持がそのまゝ猫と奇妙にコンプレックスしていた。「興奮し易い精神家は、猫によつて、快い魔法のような力を受けるのです。」とゼヴェリンをして云わしめ、「毛皮を着た女は、結局大きな猫で、強い電池なのね。」とワンダをして叫ばしめている。私は特に毛皮に対する嗜好を持たないのでマゾツホの心理の経路がそのままには理解できないが、とにかく、マゾツホが女を猫に譬えていたことを明らかにした丈でもマゾヒストの猫好きの例の記述としては足りるだろう。

## 地外 二つの『赤御殿』

前号読者通信で富岡陽夫氏から、私が昨年七月号の「手帖」第十七項で、*Der rothe Edelfhof* をゲーテ（氏はゲーテと書かれたが恐らく誤植と思う。勿論文豪ゲーテ *Goethe* ではない、奴隸小説作家の *Gothe* である。）の作と書いたことに對し、あれはマゾツホの作であるとの御注意を受けた。

これは非常に有難い御指摘で、私としては兼々の疑問が一つ解けたことになった。氏への御礼を兼ねて読者諸君にそれを報告しておきたい。

順序として先ずいわねばならぬが、あそこで私の書いたことはそれ自体は決して誤りでない。ゲーテは確かに、「赤御殿」という小説を書いており、作中には男が女主人の犬にされてその醜をなめる所もあるのである。それで私はあゝ書いたのであるが、実はその時一つ引掛つたことがあつた。七月号の訳文からも分るだろうが、あ

の部分の原文は次のようになっている（「病的性心理」十一版）

*Später gelangte ich in den Besitz der „Damen im Pelz“  
Besonders enthusiastirte mich der „rothe Edelfhof“ denn  
ich fand die Idel, ads den Hund der Herrin deren Fusso  
hlen lecken zu müssen, entzuckend*

そこで *Besonders*（特に、殊に就中）の意味を普通に考えると、「赤御殿」が「毛皮を着た貴婦人達」の中に含まれていなければならなくなる。所が私は前者を独立の一冊（中篇小説の長さ。今手許にないので、年次、版元が記せないが）として読んだのであつて、後者は全く知らない。そしてその時には「赤御殿」という名の作品が他にもある、という考えが全然念頭になかつたため、私は「赤御殿」が「毛皮を着た貴婦人達」とは別に存在するとしか解せなかつたのである。しかもこう解しても必ずしも無理でない、というのは、*Besonders* とくう語（英語の *especially* などと同じ）の用法が、日本語の「殊に」とは少し異つて、そのあとに続く語が必ずしもその前にあげられていないことが多いからである。（例えば日本語なら、彼は「犬、馬、豚、特に犬になりたかつた。」と表現する所が、西洋的表現なら「彼はなりたいたと望んだ、馬に、豚に、特に犬に。」となる。）洋書を読める人にはこの私の考え方は理解していただけたと思う。私が現に「赤御殿」をよんでいなければ、又別の考え方をしたかも知れなかつたのだが。

で、そう考えて一応その場は割切つてしまつていたのであるが、とにかく引掛つていたのである。それが富岡氏の文を見て、「成程」と思ひあたつた。氏は「赤御殿」をマゾツホの短篇集の中の「つとのみ書かれて」いるが、この短篇集が「毛皮を着た貴婦人達」と

題するものではなからうか。毛皮を特に愛したマゾヒストという点からも、この題名がマゾツホに帰せられるのは無理がない。そしてそうするとあの時の私の疑問も素直に納得がゆくのである。私はマゾツホに「赤御殿」と題する作品があることは全く知らなかった。もし氏がマルブカという私の知らぬ女主人公の名迄あげて内容を説明しておられなかつたら、私は氏が「赤い宮殿」Der rote Palastと間違えてるのではないかとさえ疑ったかも知れない。「赤い宮殿」もマゾツホの作だが、蹠をなめる場面はない。然し彼は当時の通俗作家であつて、一生マゾヒズム小説を書きなぐつてゐるのだし、しかも全集がないのだから、到底全作品を読むことはできない。私は決して「マゾツホの作品など百も承知」ではなく、ほんの一部を読んだというに過ぎない。(この意味では富岡氏のように珍らしいものをお持ちの方に進んで訳出されるようお願いしたい。)

私は彼の「赤御殿」を知らなかつたことを恥かしいとは思わぬが簡単に割切つてゴータ作と書いたことについての存じ寄りを述べておく。マゾツホはマゾヒズム作家の源流として、その作品はエビゴンネンにとつては一のフエティシユだつたのである。だからその題名や女主人公の名は、後のマゾヒズム小説の題名に襲用されたことが一、二に止まらぬ。それは一つには、マゾツホ作品に親しんでゐる読者層を確実に掴むための良い方法でもあつたからだろう。丁度日本でいえば、今誰かが「痴人の愛」とか「赤い屋根」とかいう題で書けば、私達にピンと来るようなものである。襲用の例としては、マゾツホの傑作 Wolin (牝狼) の題名を、後進のシュリヒテグロルが用いてゐることをあげるに止めておく。いずれ別に詳説したいが、マゾヒズムの世界において、その初期におけるマゾツホの

影響力は実に強力なもので、毛皮フエティシズムなどは必ずしもマゾヒズムと必然的連関あるものではないのに、十九世紀後半には彼の著作の影響から両者の結びつきの見られる例が多かつたといつてゐる学者(モル)もある位である。ゴータにおける「赤御殿」もこの種の題名襲用の一例だつたと思われる。

問題の七月号の文における「赤御殿」は、以上の点から考え直してみると、マゾツホの作と見るのが正しいであろう(但し富岡氏のいわれるマゾツホの短篇集が「毛皮を着た貴婦人達」と題することを前提として)。読者諸君に失態をお詫びし、富岡氏に御教示をお礼申し上げると共に、マゾヒストのための共通の広場の建設に更に一臂の力を添えられんことをお願いする。

### 【編集部より】

前号の予告で、「あるマゾヒストの手帖から」の項では45、手紙(其三)まで掲載するように書いてありましたが、其の後作者沼正三氏から急に「二つの赤御殿」を番外として挿入するようにとの御申出がありましたので、右の二つの入れ替えを行いました。本号の口絵は予告と少々違つた恰好となりましたが、これは珍しい資料が豊富に入荷いたしましたので、優先的に掲載いたしました為、惜しい作品や資料が翌月廻しとなり甚だ残念でしたが、次号からは更に口絵アート頁の増頁を企て、手持の貴重な資料や力作の口絵や写真は惜しげなく御紹介したいと考えております故何卒御諒解下され、今後の本誌に御期待下さるよう御願ひ致します。



非  
小  
説性  
液  
(1)

絵  
と  
文  
伊  
藤  
晴  
雨



夏の新柳の如く快い風に髪をなぶらせて抜衣紋の襟足は山の手では見られぬ下町情緒がある。

千代紙で張った燕口(つばくろぐち)を抱えた小娘が軒端に吊した御神燈の提灯の下を潜り、「お師匠さん、今日は」と拭き込んだ格子戸を開けて入るのは清方描く一幅の絵巻物とも見られる。

鳥越明神は浅草元鳥越町に鎮座して日本武尊を祀つたと伝えられているが、俗説には俵藤太秀郷が平親王将門を討つて其の首を持つて京都へ帰ろうとした時、此の地へ来ると首が飛んで神田の地に落ちたので、其の首の飛んだ土地へ首を埋めたのが神田明神であるという伝説があつて、神田の氏子と鳥越の氏子とは祭礼の時には喧嘩が絶えないという事を古老は語つて居るがその真偽はいずれにしても今年は一ツ神田明神に負けない様に派手にやろうと宮元の若い衆の意気込みは素晴らしく、神社の神楽堂で毎年催す二十五座の奉納神楽を今年は一ツ趣向を替えて中村登鯉次門弟中の娘踊りを奉納しようという相談が纏まつて、今其の下ざらいの真最中である。〃汐汲み〃〃青海波〃〃手習子〃〃三ツ面子守〃〃お染久松の道行〃と朝からの稽古は段々に

江戸の名残りは下町に、祭礼という年中行事は娘を吉原に売つても踊りに出すという様な見得を張る様な事は流石に無くなつたが、豆粒の様な日本がロシヤという大国を向うに廻して勝つたというので国民が馬鹿騒ぎ、今年の鳥越明神の祭礼は例年より派手にしよう〃と氏子が張り切つて居る。

宮元の浅草元鳥越の踊りの師匠、中村登鯉

次は年は四十二、三のまだ少しばかり残りの色も香もある独身者、男の弟子はお断りと女弟子ばかりをとつて堅いという表面の評判に女弟子ばかり入門している数が多い。

髪油の匂いの強い赤い絞りを掛けた〃結い綿〃〃ふくら雀〃によく似た〃桃割れ〃や〃唐人髻〃太輪の〃銀杏返し〃や〃かつら下地〃の断髪のなかつた頃の年若い娘の髪は初

進んで苗売りの声の聞えて来ようという二時頃、女ばかりの家へ「お師匠さん御免なさい」と気軽に入つて来たのは町内で半ゴロの糸吉という若い衆である。糸吉は入るなり輕輕な声を出して

「ヨウ、これは綺麗々々、揃つた揃つたよ、よく揃つた、秋の出穂より猶よく揃つた、花屋の店より美しい。一反七十五銭のお揃い浴衣の紺の匂いがブンと来る所へ白粉の香りが交つて風に誘われて来る処はどうもたまらねえ、というとまた師匠に叱られそうだ。ま、御免なせえ」

登鯉次は一寸暗い顔をして今弾きかけていた三味線を舞台の下手の三味線掛けに掛けて「おや、誰かと思つたら何か御用ですの」「入つて来る早々、何か御用とは恐れ入り谷の鬼子母神でげすな。糸公だつて年中イヤな咄ばかり持つて来やあしませんよ、今日は一寸耳寄りの御相談に上つたてえ次第なんですがねえ」

「何かのお話ならね、早幕で願いたいねえ」「まあ、そう急がなくなつてもようがしよう、謀は密なるをもつてよしとすでね、実は師匠、今度のお祭りに皆さんで芝居を一幕出して貰いたという註文を出したのが何と、お師

匠さん驚いちやあいけねえ、あの赤にし」と評判の質屋の佐野屋の大将なんだから驚くじやあねえか」

「へエ、此の人達で芝居をやれという佐野屋の旦那の註文ですつて、あの人が、へエ、ソリヤアほんとうの事ですか。真逆いつもの伝で担ぐんじやありますまいね」「いくら御祭りでも神輿と違つて担ぐなんて事ありあしねえ、真実の咄さ」

「ソリヤまあ結構で御座いますが衣裳やかつらはどうにか間に合わせられますが、出し物は何で御座居ますの、何か御註文でも」

「大あり名古屋の金の鯢とおいでなすつた。実は其の註文の主というのはだよ、町内でも各ツたれと評判の質屋の佐野屋の大将なんだから驚いちやあいけねえよ、師匠それが曰く因縁付きなんだから、ウフム面白じやねえか、ちやあちやんの妹の友江さんに一幕明鳥の浦里の雪責めを演らして見たいと云い出したんだよ」

輪の細い根の低いいちよう返しに結つて阿波縮みの単衣物を着て三味線を弾いていた師匠の登鯉次は三味線をソツと踊り舞台の上手へ置いて茶箆箆から奥戸村の塩煎餅を出して漆塗りの蓋物へ袋から移して客の前へ出した

のは蓋し神武以来の大奮発という所、

「浦里の奥庭と申しますと御神楽堂の上ではどうで御座いますようかねえ、道具幕といつても内には鞆当てに使う仲の町なら有りますけど」

「道具かい、そりや何とかするだろう、七軒町の大道具の満さんと呼んで来て描かせてもいいや、何んでそんなとつ拍子もない事を佐野屋の大将が云い出したかという処が身上なんだ」

「身上と申しますとねエ、つけ込む様で御座いますがヨナイはどの位出して頂けましようか、そこん処を一つねえ、旦那。」

「相変らず師匠はすかさねえナア、ヨナイは昔から決つて居らあな」

「と仰有いますと、いか程に決つて居りますので」

「わからねえかね、ヨナイ百迄というから百円ではよからう」

「御冗談ばかり、衣裳とかつらは私持ちとしまして、如何でございましよう、百五十円出して頂けませんか」

「ウフフ、足元をつけ込んでんじやあいけねえぜ、師匠、一幕百五十円なんてそんなべら棒な相場がどこにあるもんか」

「旦那、あなたはまだ御承知がないからそんな事を仰有つていらつしやるんですよ、あの佐野屋の大將と来たら其の後が大変なんですよ、縛られた女を前に置いてお酒を召し上つてからが」

「よく知つてるナア、こいつは一本やられた」

「ですから一本半と申し上げたんですよ、ナニこれが只のお芝居なら二十が三十でも結構ですがね、其の後の一幕がねえ」

「判つたよ、出すよ、いや出させるよ、いゝ年をして大將も好きだね。女を縛るのが好きだというんだから始末にいかねえ、これが番頭に知れると（あなた様はナア）と来るだろうから極内だぜ、いゝかい、そこで師匠おれの方の割はどうして呉れるんだい」

「どうしてと申しますと」

「とほけちやいけねえ、百五十円丸ゴカシはヒトかろうぜ、百五十円ありあ師匠の処なんざア女一人だ、ナア師匠……半年の暮しが出るんじやねえか、四六にして呉んな、四分は骨折り賃、その位はアタ樺だろうぜ」

「よう御座んす、何でも御承知のあなたの事ですから、それで手を打つといたしましょうよ」

「じあや即金で百五十円だ。髪結新三の大屋じやあねえがソレ鯉は半分貰つて行くと云いたい所だが、それじやあ四分六に分けて此中からいゝかい六十円貰つて行くぜ、序に奥戸村も紙ぐるみ頂戴仕るとしようか、大きにおやまかしう左様なら」

若い客はガタビシする格子戸を開けて帰つていつた。

「ホントウにいけすかないオタンチンだよ」

登鯉次は忌々しそうにそう云つてヤケに長煙管を叩いた。

浅草鳥越神社の祭神は日本武尊を祀つた事になつて居るが昔は田原藤太秀郷を祀つたと伝えられて居る。神田明神の末社に平親王将門を祀つたものと信じられて居るので氏子同志が仲が悪い。神田祭りと鳥越神社の祭礼と昔は同日であつたので神田の氏子と鳥越の氏子とで大喧嘩をする事が珍らしくなかつたそうで、現在では祭り日を変更して居るからそんな事は見られなくなつてしまつたが、氏子の広い鳥越明神の今年の祭礼は日露戦争で日本が勝つたというカラ景気〴〵で各町揃いの浴衣は意匠を凝らして染め上り一反七十銭と聞いて驚く人もなく裏長屋迄行き渡り、名物

生駒様の三羽鶏の大幟こそ立たなくなつたが神輿よ花車よと狭い元鳥越の往来は芋を洗う様な雑踏で此の日特別に奉納された中村歌扇一座の手踊りが評判の焦点になつて居た。

神楽堂の前にはまだ東京市で百万燈計画をしなかつた頃で（百万燈計画というのは東京電燈株式会社が東京市民に電燈を百万個だけつけさせようとした頃で其の頃の電燈会社では五燭の電燈一個を新設するのに〴〵家主の保証〴〵を要し、家主の実印を押さなければ電燈を引いて呉れなかつたという、現代の人には想像さえ附かない頃であつたから）神楽堂の照明は御祭礼と書いた高張提灯と、石油を土台としたカンテラに依る外はなく、頗る不便極まる照明であつたが、それが普通で暗いと思う者も無かつた。

中村歌扇一座と記した書き出しが神楽堂に掲げられ隅切り角の中へ银杏鶴の定紋、黄色い暴れ慰斗に朱で晋昇と書いた書き印、中村登鯉次さんえと書いた柿色の「大多」の引幕そうしたもののは今や跡を絶つたが……。

泉鏡花描く処の三味線堀に泊船が四五艘浮んでいた頃で神楽堂で歌舞伎芝居をやるといふのが評判になつて、神社の境内は立錐の余地もなく、石獅子の頭の上迄一杯の人集りが

していた。

後年六代目尾上菊五郎をして「女形を習いたければ歌扇の処へ聞きに行きねえよ」と弟子に云つた程の名優中村歌扇の芸は此の時に胚胎したのであつた。

燃えたつ様な緋の長襦袢と真ッ黄色なウコン縄、責め叩かれて乱れる黒髪、十六、七の少女とは思われぬ程の艶があつた。それは歌扇の次の弟子の中村友江であつた。

後数年、浅草共盛館という見世物小屋に一座を其儘移動させて年中芝居を打ち通した。

而して女の賣場では紅血缺血などをやつて居たのを私が見物した事があつたが其の時は此の一座の評判が余りに高く市内の小劇場にも影響するので警視庁からの命令で本舞の使用罷りならぬという命令を出した。これは劇場側が当局へ或る種の運動の結果と伝えられて居るが、張子へ墨を塗つたカツラでは女の賣場で黒髪の乱れる処などが表現出来ないもので仕方がなく、責め場の乱れ髪は黒い布を用いて居た。これでも「こなし」で責めの表情は十分表現されては居たが演者はさぞやり悪くかつたであらうと思われた。これは後の咄である。

蔵前片町の貸席植木屋

といえは千社札の寄合席で知られて居る家で江戸時代の寄合茶屋の名残りを留め、九尺四枚の白張りの障子に短冊形を張つて植木屋とかいた簡素な腰障子、上り框を通つて奥の小座敷には織部床に投げ込みの一輪菊が笑つて居ようという寸法の床柱に、友江は浦里の扮装の儘縛られて居る。其の側に座っているのは佐野屋質店の主人の長兵衛である。

「旦那、もう少し縄をゆるめて下さいな、これじやあ、あがきもつきませんから」  
「ムム、もう少し我慢しなさい、序に一寸こうして」

「あれッ、いや、いやですつたらアいやです。且





「そんなお約束してないんですたら、いやですよ、アツ！あれツ！ウウウ痛い、首がくるしいつたら、痛い、ムーン」

「ウゝ、どうだ、これでいゝだろう、それもう一つ行くぞ」

「あゝ、いゝ……手がいたい、少し旦那のからだを曲げてよ、あゝだれか来ましたよ」

「御免下さいまし、開けてもよろしう御座いますか、佐野屋の旦那様、お宅からお電話でございます」

「今居ないと云つておくんなせえ」

「そう申し上げたんで御座います、が、イヤたしかにお出でのはずだ。何なら今伺うからと仰有いますがどう致しましょう」

「来られちゃ困るんだ、今は……よしスグ帰ると云つて下さい。チヨツ、」

「旦那もういゝでしよう、もうこれまでにしたらいいじやありませんか、妾しやア腕がしびれそうです。ほどいて下さいな」



「仕方がねえ、今日はこれだけにしておこう」

佐野屋は立ち上つた。遠くに祭り囃しが聞えて微かにワツシヨイノと樽天王をかつぐ子供の声が聞える。

………  
甚内橋というのは責場に大関係のある番町皿屋敷のお菊の父であつた庄司甚内が処刑された処で橋の名さえも閻魔堂のそれならなく

に名前になむ甚内橋、それと並んで三味線堀に掛けられているのが三霊橋という橋で、其の橋の袂に四、五本の榎や椎の木が交つて一座の林を為し、其の中に鎮座する一字の社は問口僅か二間の小社乍ら、靈験いやちこにして瘡を治すというので有名になつている永護霊神、一名を三霊様といつて前にも記したお菊の親、向坂甚内を祀つた祠である。甚内は元小田原の北条の家来で「庄司甚内」「鷲沢甚内」と共に三人義を結んで

賊を偽っていたが、徳川の天下が治まつてから庄司は遊女屋の元祖となつて新吉原町を開いて遊女屋の統領となり、鷲沢甚内は古着商となつて、後の日本橋区富沢町という町名を残したが独り向坂甚内だけは強盗を偽いて居て、中山勘解由に捕えられた時

「吾れもし瘡の病さえ無かつたら、かく捕われの身にはなるまいものを、吾れ処刑の後吾れを祈らば万病を治せん」

と云つて刑せられた処が現在の甚内橋（今は其の跡を止めず）

で甚内を祀つたのが三霊であるという伝説である。

宵宮も過ぎて本祭の晩は反つて淋しく、まして宮元となれば昨日と外の町内より静まつて居るのが江戸の祭りの習慣で、明神の社から程遠からぬ此の三霊様の境内は人通りも少く遙かに三味線堀を遡る舟の水を切つて通う音が時折聞えて其の向う河岸の盛座から響いて来るお囃子の音が微かに聞えるばかりの静けさは星も水に沈むかと思われる程である。

「旦那、ソコを何とかして頂かないと仲に立つた私が立つ瀬がありませんや。ネエ旦那、鳥越から上野迄他人の地面を踏まずにお出なさる佐野屋さんの旦那が踊りツ子の芸人一人位と仰有るかも知れませんが、怪我をさせてお仕舞なすつたんでは、跡仕末に困りますねえ」

「だからどうすればいいと云うんだね、療治代なら相当の事をしようと思つてゐるのに、お前さんも判らない人じゃあないか」

「イエ旦那、あつしやあ何も療治代をイクラカクラという訳じやあ御座んせん、友江のお袋から頼まれましてね、友江の面倒を見て頂きたいと、こういう丈けなんで御座居ますよ。これが表向きになりますとねえ旦那、少

うし御人体にかゝわる事が出来やあしませんか」

「だから話しは早い方がいゝと先刻から云つてゐるのに判らない人だね、君は、損害は出すと云つてゐるじゃあないか」

「イエ旦那、友江をお袋ぐるみ引取つて頂けないもんで御座いますようか、ねえ旦那、友江は旦那に縛られてへへへ、あの味が忘れられねえつて申して居ります。旦那、どうで御座いましょう、友江のからだの始末を何とかつけてお貰い申してえんですがねえ」

「そうかい、それじゃあ、あの女の始末さえつければ跡でイザゴザは無いと、こう云いなさるんだね」

「そうで御座いますよ旦那、あのお袋も江戸ツ子でさあ、どうせ芸人にして置きやあ一生独身で居る事ア出来やあしないしと、まあこう云つて居りますし、たつた一人で土当店の日限りのお祖師様の裏長屋で娘相手に人仕事をして暮して居ります。佐野屋の旦那に御ひいきになつたのは勿怪の幸いだから、一層の事女役者にしてしまつた方がいゝつて云つて居るんです、ネエ旦那、あの娘を一つ役者にしてやつて下さいませんか」

「役者にしろと云われても私は昔から代々の

商人だから芸人衆に付き合いが無いんだからどうしていいか判らないが、お金ですむ事なら何とかしましょうよ、あゝ飛んだ道楽をしてしまつた。」

「どうも済みません……旦那、丁度いゝ事がありますあね、開盛座に私の知つて居る武田清子という役者がありますから此の人の弟子という事にして一番茲は納めて置きましょう。就いては旦那、其の弟子入りの入費、それから人気をつける為の引幕とか幕内の行渡り、其の他の事を万端お願いしたいと思うんですがねえ」

「よからう、あの女が役者になる、いゝだらうが一度で解決をつけたいがどの位ありあゝと云いなさるんだね」

「ナニ、大した事じやあ御座いません、四五百円もありやあ十分でしょう」

「では近所の事でもあり、登鯉次師匠も仲に入つて居る事だから明日の夕方迄に私がお金を持つて行きます。」

(未完)

☆

☆

☆

☆

特色異  
男色考

## しまやのばんとう

むらた・せいいち

最近の雑誌をみると、男色ばかりで、男色礼讃の読物や、男娼体験記とかが目立つてふえて来た。終戦後八年、りべらるニッポンともなれば、満ち足りた性生活からか榮耀に餅の皮の粗か、前庭の花園だけではものたらず、後庭の秘苑にまで人々の趣味が進展して行つたのであろうか。変態か、悪趣味か、色情倒錯症とあつさり片付けるのもどうかと思うという筆者も亦、その一人かしら。

頃日、偶々知人の宅で、見せてもらった艶画の貼込んだ巻物の中に、面白い絵があつた。所蔵主はその絵の意味がよく判らないといつていたので、それは「島屋の番頭」の事であると話してやつた。ところで「島屋の番頭」つていつたつて、今の方々には通じないかもしれない。別に大問題ではないが、一口にいえば、徳川時代、江戸の一商家に起つた、小僧鶏姦事件である。只それだけであるが、当時としては相

当センセーションをおこしたらしい。何しろ流行唄迄出来、瓦版となつた位であるから。

現今「島屋の番頭」なんて言葉は、大言海や、百科辞典をひいたつて出て来ない。一番詳記されているといわれている唯一の虎の巻三田村鳶魚氏の「瓦板のはやり唄」だつて、昔々発禁になつて、戦後の今日神田の古本屋街を、一軒残らず歩いたつてありやしない(事実筆者は一昨年残響きびしい中を歩いてあるいたが入手出来なかつた。)こんな状態では何時の日にかは、語源不明なんて事になりあしないかという老婆心から、諸書を渉獵して漸く次の文献を蒐録し得た。

## ◎日本性語大辞典 桃源堂主人編

しまやのばんとう 島屋の番頭、鶏姦の隠語、天保十五年江戸小伝馬町島屋呉服店

の番頭が店の小僧を鶏姦し、小僧気絶せし為市井に喧伝され落首俗謡まであらわるゝに至りかくて鶏姦の代名詞となれり。当時の落首判じ物に島屋番頭〓大名五頭考。其の意は、堀田、土岐、丹羽、井伊、安部(はつたときにはいゝあんべい)なり。又吾妻男一丁作「春雨衣」第二編序に「韓雲子孟竜の島屋連」とあり。

## ◎川柳語彙 大曲駒村編

しまや「島屋」

小伝馬一丁目の呉服店、島屋吉兵衛。此家の番頭が小僧に暴行を加へたというので、当時の大津絵節にも「島屋の番頭さんには、秘蔵になされし釜があり」などと謳われたりして大評判であつた。

## ◎性慾学語彙 佐藤紅霞編

江戸時代の鶏姦の代名詞のうちに、紫磨家の主管（一に「島屋の番頭」とも書く）といふ言葉がある、その語源は太保十五年江戸小伝馬町島屋呉服店の番頭、小僧の後門を犯し小僧を氣絶せしめたというに基づいたので「天草軍記」にこのことを記し、その落首の判じ物として流行島屋番頭（大名五頭考）堀田土岐丹羽井伊安部（ホツタトキニハイイアンベイなり）というのが載つて居る。序文には天保十五年と年代を記しある国芳（淫号一妙開程芳）画の艶本（「仮寝廻遊女物語」の中にも粉屋節になぞらへた「お尻の好きな島屋の番頭さん」なる文句がある。藤原雀庵著「さへづり草」松の落葉の巻の中に、今年の弘化三年春より夏に至りて、紫磨屋の番頭といへる戯言その流行おどろくまで也。あるは手あそび団扇やうのものにまでわたれり。此比流行の風邪を島屋かせなどといへり。例の東童の癖ながらことにおかしきは商家の店先へ水虎（かつば）のものかりに來たるに番頭のおどろき困じたるさまをうつして

錦画出たり、こは又一時の戯ながら、かの水虎の尻によりて名高き一証ともいうべし云々といふ事が書いてある。

## ◎川柳変態性慾志 佐藤紅霞著

島屋のぼんとう子どもらは見ると逃げ

島屋のぼんとう〓鶏姦の隠語

「江戸紫あふつへ葉うたふし」に

（大津絵）

世の中にある物は、若息子にどらがあり、いきな娘には色があり。御殿女中にはりかたあり、人のないしよにはあまたくぜつあり。夜中に夫婦が夜なべあり、どの内にもかりがあり、サアも子供に迄もかりがあり、島やの番頭さんにはしそふ（秘蔵と書くのだからヒソウといふべきもの）になされしかまがあり。 三田村鳶魚氏著

## ○瓦版の流行唄

大津絵が流行を極めたのは文久以後であるから、此の端歌は元治慶応の作だろう。又古島屋の番頭のことは俗謡中に屢々見えて居る。是は弘化二年の暮から、市中の子供等が島屋の番頭尻堀番頭、小僧は難儀、

早桶だんノウ丸焼だんヨウと口々に云ひ囃した、其の事は藤岡屋日記に

天保十五辰年正月五日の事なるよし、

小伝馬町一丁目に島屋吉兵衛という呉服屋の番頭上州者にて、小僧の後門を男色致し、小僧氣絶せしより、宿より六ツケ敷掛合、金子にて事済みたるが番頭は暇出さる、其番頭後に吉原川津屋に住込みしが、此度の火事（弘化二年十二月十五日）京町二丁目河津屋鉄五郎方火元にて、廊中全焼にて丸焼になりしより謠ひ出しなり。

とある、童謡に依つて毎日島屋へ番頭の見物が群集して營業に差支える有様、己むを得ず暫時閉店したという。それ程の大評判であつただけに其後もこうした俗謡の中へ島屋の番頭が出て来る。実は好い戒節（いまいしめ）である、明治大正の御代にも馬鹿者はある、こうしたいまいしめを加える必要を確認させる人物も慥かにある。

## ◎世界艶語辞典 佐藤紅霞著

シマヤノバントウ（島頭の番頭）男興男の謂、三田村鳶魚氏の「瓦板のはやりうた」に詳し、尚ほ有耶無耶生の「島屋番頭釜堀伝」をも参照せよ。



扱てこの最後の有耶無耶生の「鳥屋の番頭釜掘伝」丈けはどうしても今以て手に入らないので御披露出来ないのが残念である。その代り一つ二つ珍しい図を挿入しておく。



それから筆者が見たというその絵と、文句を御紹介する、一つの絵は無難だが一つは遺憾ながら公表出来ないので割愛する。



右手に紺のれん（れん）（やたらじま）と染ぬいてある。その前に番頭風の男が竹の皮包（餅菓子）かをもっている。  
左手帳場格子。その前で小僧が算盤の稽古をしている図。  
「オム／＼よくおぼえた、それでもう八さんばかりになる。手めへよつぽどきよう

にうまれた、これから見一のわりかたをおしえてやろう、サア／＼これをほうびにやるからたんとくふが

い。のちにねてからまたおれにそろ／＼わらせる主はねえか」

「ハイばんとうさんこれはありがたうございます。しかしせけんへばつとしてはわるうございますから、ないしよでおまへさんとそのわけだんよをいたしませう。」

割愛した一図は、番頭が小僧の後門を

犯している図である。

「ア、／＼これはひどいこんでございますね、わたしやほそのをきつてこんなめにあつたのは、はじめて、ア、／＼そんなにひどくおされると、はらわたがつきあがつて、どうかくそが口からでさうだ。ばんとうさん

## 「京子の蛙腹」

羽村京子

大分長い間すっかりと無沙汰してしまつて、本当に何から申し上げてよいやら分りませんけど、でも「奇譚クラブ」は毎号欠かさず愛読しています。この頃は殊に絵や写真に興味があつて、麗子さんの「柱と棒」「柱とテコ」「股間縛り」のシリーズなど、とてもよろこんでいます。十月号の「安達ヶ原」、一月号の「妊婦の片足吊り」など珍しいもので、「妊婦」は是非今後も扱つてほしいものの一つです。

というのも実を言うと私、自身現在妊娠六ヶ月の妊婦の身だからかも知れません。妊娠してしまつて、いろ／＼と複雑な心境を味わいながら、今日までに至りました。十一月号の河真田さんの「自

おじひだからもつとそろかにやつておくんなさい。  
「これさ／＼今にげられたまるもんか、もうちつとのうろだ、しんぼうしてたとへ世

間へ浮名がたつとも、いれたおかわがよきりようかたんべえ、ソレ／＼なまこに、じゆんさいのやうにする／＼して来た。

島屋の番頭子供等は見ると逃げわつをした小僧を手代叱りかね島屋でもいろには小町ちとこまり淋しさに番頭うらをしめに出る。

虐鬼の独白」まして十二月号の住田さんの「剣玉子」には同じクロエイシスト（肛門愛好者）としてすぐにでもお手紙したかつたのですが、割り切れない気持ちのままに、書きかけた原稿もそのままに、すっかり筆を絶つたのもこのためでした。ただし、妊娠し、子を持つようになったからといって、私の性癖が改まるとも考えられません。むしろ腹部への執着は孕んだ腹に一層病的な嗜好を募らせて行くばかりです。子供の頃麦わらを蛙の肛門に突きさして空気を吹きこんだ思い出が、私自身身体をこの蛙の身に置きかえて倒錯したクロエイカル・マゾキズムとなりましたが、孕んだ女体こそまたこの蛙腹の幻想の一つの実現なのです。私たちの倒錯遊戯もここに一つの新しい面を開きました。

でもこれからの私を待っている出産と育児という大役が、かなり

の長期間「奇譚クラブ」誌上に筆を執らせないことと思います。「アリス」の最終回（十二月号）での女性肛門姦に引きつづいて沼田さんの「肛門いじめ」、森野さんの「高圧浣腸」の発表をクロエイシストとして一日も早からんことを願っています。「切腹」についても女性の体で、「切ることも快樂」「苦痛」ばかりでなしに、「はみ出たはらわた」の描写とか図解を望めないものでしょうか。多少医学的なものでも結構です。

かしこ。

羽村京子

追伸（住田さんに）

十二月号を拝見しますと私の「告白」を私の「空想」だとお取

りになつていられるように見える箇所がありますが、私は三月号で黒井さんに申し上げた通り、「実際に、行つたこと」と「頭の中で考えたこと」とはつきり区別してお話しているつもりです。だから信じていたゞけないのが本当に残念なのです。尚、申し上げて見ますと、十一月号の河真田さんの告白と、住田さんの「剣玉子」十二月号とはこの点で根本的にちがうのです。河真田さんのは実際の経験に基づいているのです。失礼ですが、実際の経験のない住田さんにお分りにならなくても私には分るのです。しかし私は住田さんが「空想」としてお書きになつていくことに對してとやかく申し上げるつもりはありませんし、パツシヴ・ペデラスの件に關しても、住田さんを侮辱する考えは少しもありませんでしたけれど、お許しを願いたいと思います。

奇譚クラブ 最近号 主要目次

昭和二十七年

○十月号特集切支丹迫害史

口絵 責め場面挿絵集 喜多玲子・構成

切支丹迫害史 五井野弘・画

大衆文学に現れた女の責め場 高月 大三

愛と苦痛の交錯 鳥上 源一

恋の烙印 井口 正憲

男色の海 鬼山 綱策

へばきうり 辻村 隆

夫婦愛と緊縛の考察 浅田 正人

宿命に哭く 岡田 咲子

悪女 早川 新一郎

縛られた妻 喜多 玲子

猿轡五態 喜多 玲子

○十一月号宗教刑罰戦慄畫譜

口絵 宗教刑罰圖集 風俗便所考

淫書開好記 緊縛の愛難(写真)

悲恋の管刑 松井 簞子

続・へばきうり 鬼山 綱策

ストリップ変態記 朝見 速夫

続・変態艶書 岡田 咲子

少年矯正院体験記 獄 取一

桃色の地獄 藤安 節子

夢性の美少年 三村 幾夫

悪魔と口紅 桂 牧次郎

発狂文学者の研究 杉山 清詩

男色魔の虜 井口 正憲

○十二月号惑溺の愉快特集号

口絵 フランス貴婦人の変態性生活

耽美派小説名場面集 一郎の巻

折込口絵写真 縛った女を写す 辻村 隆

濁れる愛欲 松井 簞子

奴隷妻 片矢 薫

孤獨なファンタジー 芳野 眉美

糊と泥と砂 長岡 愛一郎

非公開映画 世界の闘房 藤安 節子

囚衣(或る人妻の生活記録) 古川 裕子

ロマンチックなサディズム 森山 美歌

女囚私刑体験記 小坂 多美枝

セックスの記憶 緩 久江

錯乱の倫理 近東 規矩也

狂い咲くカンナ其の後の告白 羽村 京子

昭和二十八年

○新年号 縛った女を描く

口絵 吊り下げられる女 喜多 玲子

色刷口絵 掠奪 鬼山 綱策

口絵写真 縛った女を描く 鬼山 綱策

らぶ・すれいぶ 川端 多奈子

淫火(みだらび) 松井 簞子

桃色のベールに包まれて 読者座談会 交悦に伴う責めの衝動心理

マゾヒストの果て 福田 英一

潮の執着 長岡 愛一郎

鼻痔礼讃 升岡 金吉

告白記 僕の記録 黒井 珍平

女の責め場を描く時の心境 伊藤 晴雨

あなたのムチの下に 角田 平八

赤につかれた男 上村 秀久男

男色の花道 堤 行房

○二月号責めの小説特集号

口絵 怪奇派小説名場面集(乱歩の巻)

口絵 スペインの宗教裁判

口絵写真 恋に狂ったワン・カット

妖花(心の悪魔) 羽村 京子

夜開く孤島 岡 真史郎

若衆散華(同性愛欲史譚) 戸崎 平馬

変の字問答(第二話) 浮家 鷹三

らぶ・すれいぶ(第二回) 鬼山 綱策

燐光 久留木 栄

悩ましのサディズム 森山 美歌

しいたげられるよろこび 林田 澄子

硝子便所 芳野 眉美

映画とサディズム 雲井 彰

○三月号 東西拷問くらべ

口絵 柱に縛られた女 喜多 玲子

口絵写真 東西拷問くらべ

サディズムの精髄 吾妻 新

切腹史談 中康 弘通

同性的男性愛の謎 染田 玄

受難記(ある女の告白) 岡田 咲子

女囚私刑体験記(其二) 小坂 多美枝

艶書通信(喜多玲子さまへ) 高野 すみ子

文学・歴史のサディズム 仁比山 等

猿轡考 千葉 三郎

白い便器の幻想 芳野 眉美

緊縛女優列縛られた女優たち 升岡 金吉

アドニスのかげ 鷲巢 千芳

第七天国の夢想 梅井 清

○四月号 錯倒の告白特集

口絵 ぐすくられる女 喜多 玲子

口絵写真 緊縛美の考察 後手と高手 小坂 多美枝

搾衣(矯正院矯正院体験記) 獄 取一

神の酒を手に入れる方法 沼 正三

肥満体への郷愁 麻生 津和夫

乗馬服と長靴と靴 森本 愛造

不思議な拷問 有馬 稲高

私の新婚生活 島村 康雄

開花の契機 信太 蓉子

キメラ愛好会 岡田 咲子

責めの美的表現 小此 不蘭一

続・囚衣 古川 裕子

地獄繪行脚 長岡 愛一郎

美少年の死 岡 真史郎

風流猿轡 吾妻 新

○五月号特集男性MASO

口絵 戦後の挿絵に現れた女の責め場

怪奇圖集

口絵写真 荒瀬による緊縛感のスポット

マゾヒストの会 沼正三・沢

風流責各態 吾妻 新

捕縛難考 獄 取一

僕の記録(完結篇) 黒井 珍平

雌獣の手記 近見 啓

女王様ごっこ 飛田 良二

続・硝子便所 芳野 眉美

私の欲び 瓜生 珠子

少年及び女性の切腹 中康 弘通

吊られた白鳥 川端 多奈子

奴隷の安の記 中野 安太郎

縛られた妻以前 早川 新一郎

○六月号

口絵 お小夜嵐 喜多玲子・画

地獄物語(往生要集)

口絵写真 緊縛による一表情

クリスチーヌの受難 吾妻 新・沢

ヴァンプ女優列伝 朝見 速夫

アブノーマル・ファンタジー 岡田 咲子

責苦 竹谷 十三

出獄(少年矯正院体験記) 獄 取一

由紀子のお仕置 大川 由紀子

あるマゾヒストの手帖から 沼 正三

文芸に於ける切腹描写 中康 弘通

我が告白の断章 須藤 律夫

松井簞子女史を囲む読者座談会

○七月号

口絵 百鬼夜行の図



口絵写真 狼ぐつわ五態

クリスチーヌの受難(二)……吾妻新・沢

妻は縛らす……岡田 圭介

切腹本願……亀岡絃七郎

祭壇に君臨する脚……馬族 保

女体緊縛美について……千葉 三郎

囚獄の思い出……獄 収一

歌舞伎とサジズム……宮内 義雄

切腹願望……水内 武郎

変の字問答(第二話)……浮家 鷹三

磔になつたお姫様……毛利 綾子

くすくすされるよろこび……山本 百合

女囚私刑体験記(三)……小坂多美枝

新しいサディズム……吾妻 新

○八月号

口絵 戦前戦後の挿繪に現れたる責め

及び縛り繪……村田 誠一

鞭うたれる外国の少女たち

口絵写真 被縛女体の研究……辻村 隆

色 狼……児島 光

明治期の被縛画家……伊藤 晴雨

アームスへの讃歌……住田 弘志

苦悶する裸像……福田 英一

悦慶秘帖……信太 薔子

公妃の復讐……沼正三・沢

被虐の愛情……若林 啓子

甘美なるアリスの降伏……寒川緑・沢

アブノーマル・プレイ……獄 収一

女のズボンについて……吾妻 新

古川裕子さんへ与える……佐治 須十

ある被虐性愛者の手記より……天泥 盛英

夫婦愛の表現法と裸女緊縛……西沢 芳造

○九月号

口絵 本紙の旧号に現れた責繪……辻村 隆

灸をすえられる女……南川和子

口絵写真 縛られた女の美しさ

折込写真 緊縛美のオンパレード

鞭うたれる外国の少女達……吾妻 新

京子の生活と意見から……羽村 京子

両棲動物(男色夜話)……岡 真史郎

縛られた女ばかりの座談会

幸福なる隷属の告白……鐘坊 巡

私は何故責め繪を描くか……南川 和子

燃ゆる縛り票……川合伊都子

孤児院での経験……野々村由紀夫

秘め手 白粉地獄……中川 秀夫

愛と憎しみ……増 不二子

長期刑……古川 裕子

責めの自画像……越野 義夫

続・悩ましのサディズム……森山 美歌

○十月号

口絵 安達ヶ原一つ家の図 月岡芳年・筆

針に刺された女……南川和子・画

戦前に現れた責繪艶情女体地獄繪

東西風俗圖報襲う男と襲われる女

体操倉庫……滝 麗子・画

写真 野外の責め場……塚本鉄三・撮影

現代のサジズム……久留木 栄

聖書の誘惑……近見 啓

愛情の絆……北野 由紀

る記 我が生い立ちの記……大島 達也

さの記 孤獨な放浪記……小暮 達也

偽告白 奇妙な告白……水上流太郎

サジズムの芽生え……土井 慎天

大阪陸軍幼年学校……白石 悠

呪縛……辻村 隆

蜘蛛と蝶々……飛田 良二

哀艶責め場繪断……岩 広志

マダム紅鶴……野村恵美子

悦慶に哭く……川端多奈子

痴者の悲願……河真田子路

○十一月号

口絵 棒と柱を用いた縛り方、拷問部屋

私刑五態、滝麗子画集蛇男の幻想

砂にまみれて、溪流に縛られて

女が縛られるまで、緊縛美のオン

パレード、縛られた女の五十態

に記 白へのノスタルジヤ 河村 哲夫

まの記 自虐鬼の告白……河真田子路

ぶの記 倒錯艶情……三富 浩生

あやの記 縛に憑かれて……時山加代子

虐待の記録……前島 芳雄

現代文芸に現れた責め……村田 誠一

悦慶の旅役者……青山三枝吉

まさひと・さしすと……富田 陽夫

女を縛つた経験語る読者座談会

○十二月号

口絵 柱とテコを用いた縛り方 滝 麗子

女囚私刑の図……都築峰子・画

美女折檻図……南川和子・画

新しい縛り繪 強制・罰致

滝麗子画集 兄妹・悦慶遊戯

羞しい、女の立腹、野外の縛り

写真 ビニールの紐と鎖の応用

棒責め二態・吊り人形

細とマゾヒズム……那須不二天

淫火(完結篇)……松井 簫子

映画に現れた猿轡……鳴山 能平

春風座の旅行……青山三枝吉

錯圖 鷺の谷渡り……沼田扶一世

倒置 三つの色の交錯……住田 弘志

な花 野薔 芳野 眉美

味の 野薔 芳野 眉美

甘の 野薔 芳野 眉美

らぶ・すれいぶ(完結篇)……鬼山 絢策

凌辱の幻想と期待……古川 裕子

女奴隷の手記……北山カオル

昭和二十九年

○新年号

口絵 江戸時代大名の人飾り 伊藤 晴雨

残虐なる女性達・群像

股間縛りの縄の掛け方 滝 麗子画

楽屋裏の答責め……南川和子画

滝麗子画集 苛責・蜘蛛責

絵物語 質屋の主人と芸妓……都築峰子画

写真 屈辱への過程、台上の殉教者

最新欧米女体責めより

切腹・縛体・虐待・愉悅

悪の部屋……一俣志雄子

活版 股間縛りについて……桜井京一郎

の生 コンビネーション……長谷川 洋

私体 女装への憧れ……重田 正和

私の求めた男……児島 輝彦

痴迷……松井 簫子

犯された女……鬼山 絢策

美しき悪魔の哄笑……近藤規矩也

新・倒錯耽美論……真木不二天

男色の閉房描写……成瀬 亮

流浪八年……村田 誠一

私刑に泣く未亡人……沖野恵美子

女性告白 監禁十日間……小坂多美枝

狼ぐつわと私……北山カオル

選ばれた女……古川 裕子

異常の 檻の中にて……乗杉貴代子

現代マゾヒズム芸術時評……若杉 早苗

原 忠正

廿七年十月号より廿九年新年号まで 若十

在庫、廿年度の分は一部送共九十円、廿

八年以降の分は一部送共百円にて急送申

し上げます。



復ふく

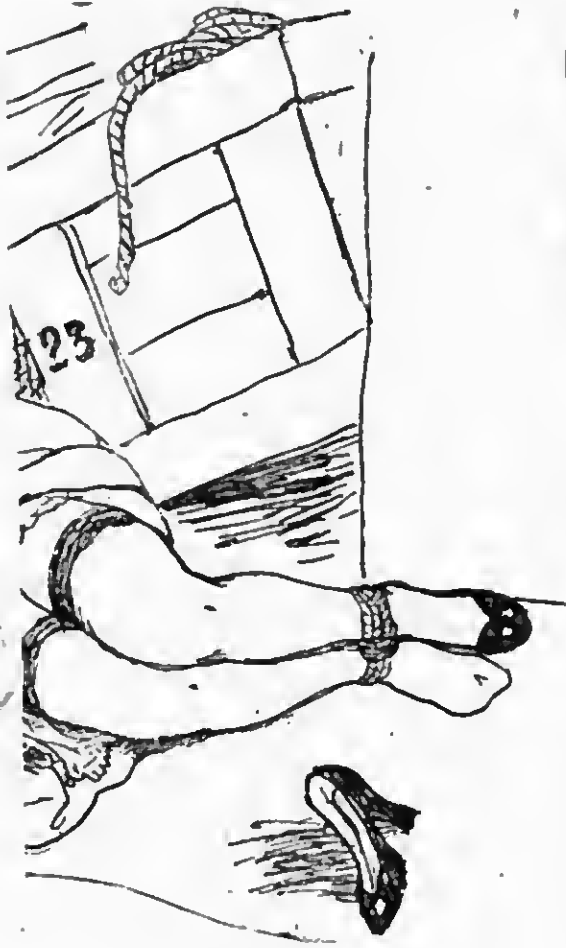
響しゅう

岡田 咲子

濱木 節・畫

1

多美子は不図、目を覚めた。頭が割れる様に痛む。体中がだるい。暗い。ただ暗い。



「一体、何処なのだろう、こゝは？」

次第に意識がよみ返つて来ると、今自分がどんなことになつてゐるのか、やつと判り始めた。多美子は起上ろうとした。声を出そうとした。とたんに「痛い！」と悲鳴を上げ、再び床の上にひっくり返つてしまった。

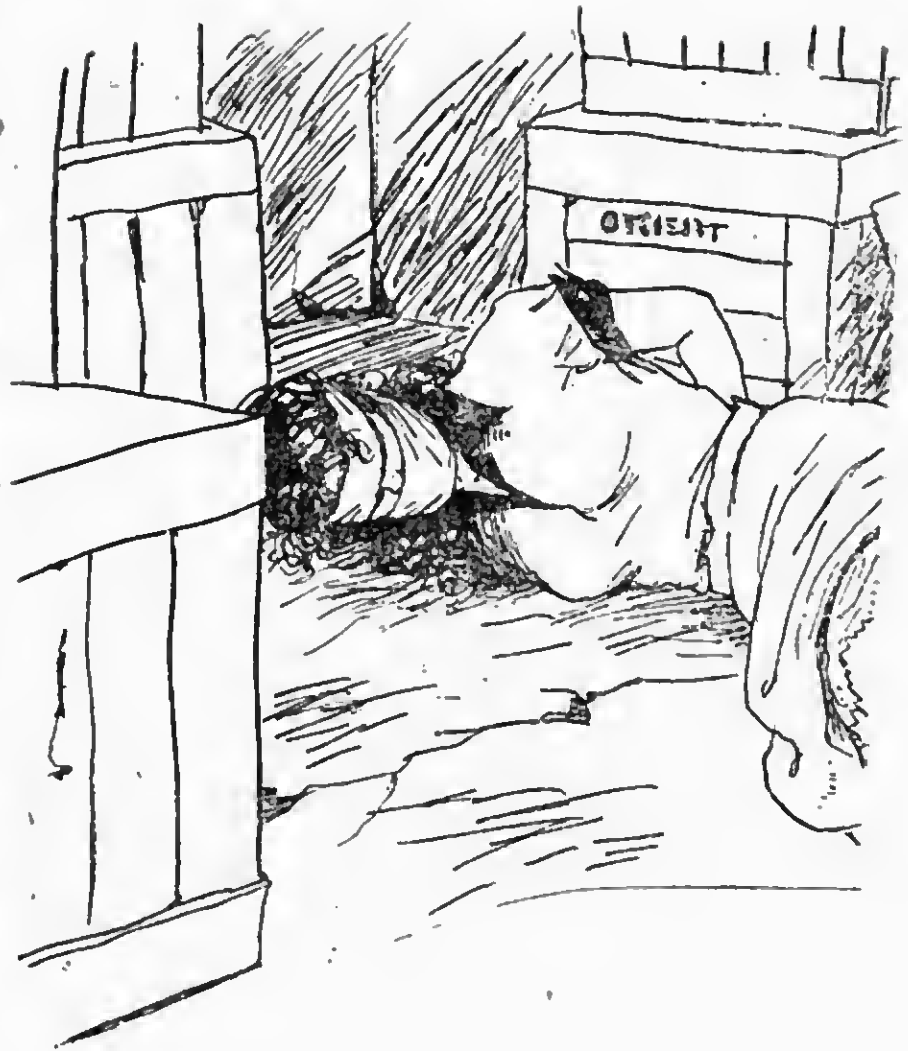
「そうだ。縛られているんだ。」と判ると思ひ出したように、再び両手首をうごかしてみたが、背中へまわされている両腕、手首に食い込んでゐる革のベルトの様ないまいしめが肉に食い込んで、びくともしないし、同様に両足首も縛られている。そして口は布片がおしこまれ、その上から息も苦しいほど強く別の布が鼻口をふたしてゐる。また真暗闇だと思つたのは固く目までふたされていたことに気がついた。

「なぜ？ なぜ？ こんな目に会わされなければならぬのだろう？ 一体これはどうしたことなんだろう？」

多美子はズキズキ痛む頭で、どう考えても考えつかない出来ごとを、身動き一つ出来ず床の上に横倒しになつたまま想いめぐらした

2

多美子は昨年大阪のある短期女子大学を卒業すると、母親のいない父を助けて家事に精出してゐる傍ら、洋裁を習ひに行つてゐる至極、平凡な娘で自分がこんなひどい目に会わされるのが、訳が分らず全く見当がつかなくつた。父は地方裁判所の検事だつたが、多美子自身は父の仕事については、まったく知らなかつたし、早く母親に亡くなつたと言ふこと以外は、父と二人だけの平和な暮してあつた。



その日は丁度、日曜日で多美子は休みの父と一緒に映画を見てその帰り道、二人は地下鉄の乗り場へ降りようとした時だった。父が急に立止った。どうしたのかと多美子は父が見つめた前方をみた。そこに盛り場の人の流れと逆つて、じいつとこつちを見守っている女がいた。洋装とだけは判ったが、顔も年も見分けがつかない間にその洋装の女は人の流れの中へ姿を消してしまった。

多美子は、その女が笑ったようにも見えたし、泣いているようにも見えた。

「お知り合いの方？」

多美子は父の顔を見て言ったが、父はなにも言わず首をふつたま

ま歩き出した。地下鉄のキツプ売場まで父はむつとりして、なにかを考えている様子に、多美子もだまて歩いた。父がなにか考えごとをしている時は、何時もこの調子だったので別に気にもとめなかった。

その次の日から父はなにか考えイライラしている様子だった。毎日新しい事件で朝早く出て夜はおそかった。でも毎朝出て行く時に必ず「何処かへ行く時は、戸じまりをしつかりしてお隣りへたのんで行くこと。外出したら明るい中に帰宅すること。もし電話がかかったら、直接、裁判所へかけてもらうように——」

と口のすつばくなるほど注意して出かけて行き、帰つて来て、なにごともしなかつたのを知るとホット一息して安心する様だった。だがその中にそんなことも忘れてしまい、洋裁にもかよつたし、日曜日になるとお友達と外出もした。

## 3

多美子は痛む体を少しでも楽にしようと二三度、左右に転がしても見た。少しの物音にも全身の神経を、見えない目に集中し耳をそばだてて体を固くしたが、何時までたつても、だれも来る様子もなかった。多美子は、手足を縛るいましめが解けないと知ると、せめて口と目だけでも自由になりたかった。顔をうごかし猿ぐつわをずり下げようと顔をザラザラしたコンクリートらしい床へおしつけ頬の痛さも忘れて猿ぐつわの布を、はずそうとしたが、肉に食い込んでいる布は一分もずり下らず息切れがして、苦しさが増すだけなのを知ると、多美子はがつくりとあきらめてしまった。

多美子は急におそろしくなり、悲しくなつた。これから自分にふ

りかかる未知の出来ごとは、なんだろう？どんなことがおこるのか全然見当もつかず、大声で泣きたくなつた。

多美子は、もう一度、大きく顔をうごかして恐ろしさ、悲しさに負けまいとした、その時、今まで固く目をふたしていた布が一寸ずり下つた。「目かくしはとれる。」と思うと急に元氣が出て来て、顔をうごかし、床にすりつけ、懸命にとろうともかく間に少しずつ目かくしはずり下り、片方の目が、目かくしの布からわずかたがらも、外が見えるまでになつた。

周囲を見廻した多美子は、そこが地下室のような窓一つない部屋で物置小屋の様な所であることに気がついた。そして唯一つの扉の下から、かすかな外の光線が流れ込み、多美子にとつては、それが地獄に差込む後光のように思えた。

「何処だろう此所は？」改めて多美子は、両手足を縛られ口をふたされている自分の姿を見廻した。

## 4

今日のおひる、お友達と映画を見て帰り道、フルーツパーラーでアイスクリームをたべながら、不図向う側の席を見るとじーつと、こつちを見ている女がいる。変な人だとは思つたが、そのまま、外に出てお友達と別れて、近道をしようと思つて、焼け残りのビルディングの間を足早やに来た時だつた。

背後から一台の自動車が近づき、よけようとした多美子の側で止つた。どうしたのかと多美子も立止ると、車のドアが開いて女が顔を出した。そして、

「山岸さん、でしたね。」

よばれて深く考えもせずうなづいた多美子は「どこかで見た人だ。」と思つた瞬間、その女は急に腕をのびし、多美子の二の腕をつかむと、あつと言う間に自動車の中へ、引ずり込んだ。

なにか言おうとした多美子の口が別に乗つていた女の掌でピツタリふたされ、前の女に両手首をおさえられたのと車が急に走り出したのと同時だつた。反動で多美子は二人のひざへひつくり返つたその体を、おさえた女が

「あれを出して」

運転台へ言うのと、運転手が振り返りざま渡したハンカチーフを、素早く多美子の鼻口におしつけた。ツーンと頭の中へしみるような、においを、必死に逃がれようとしている間に、多美子は頭がしびれて「助けてー」さけんでいる声が次第に遠くなつて消えてしまふとなにもかも分らなくなつてしまつた。

## 5

それはほんの一瞬間の出来事であつた。多美子は目を閉じて、今日の出来事を考えている中に、突然閉じた目を開き

「あッ！ そうだあの女だ。喫茶店で私を見守っていた人も車に私を引ずり込んで、こんな目に会わしたのもあの女にちがいない。」そして多美子はもう一度びつくりしたように心でさけぶ。

「すると、この前、父をおどろかした、あの洋装の女も、同じ人間じやないか知ら？」

そう考えると、父親が女を見ておどろいたこと。そして急に戸じまりや外出にきびしくなつたことなどを考え合せてみると、そこになにか謎がありそうに思われた。

「父も関係がある。」と思うと多美子は恐ろしさの中にもそれがな  
んであるか判るのだと言う、今までとちがった感情で次の采るべき  
ものを待つ気持になつて来るのだつた。

「あの女と父と、どんな関係に有るんだらう。」

多美子には分らないことの連続であつた。考えれば考えるほど頭  
は痛む。手首も足首も、もうとつくにしびれて、痛いと言うより、  
ぬけるようにだるくなつていた。猿ぐつわも汗と息と、よだれでぐ  
つしよりぬれていながら、ますます強く息苦しく口をしめ上げてい  
た。

ここへ連れて来られてから、どの位の時間がたつのか。つかれは  
てた多美子は身動きせず荷物のようにころがつていた。

突如、遠くから近づいて来るエンジンの音にはツとした多美子は  
身を起し、壁の隅によつて、聞耳をたてた。

停る音がして、階段を降りて来る二三人の足音がする。鍵を外し  
ている様子だつたが、ギイーと扉が開くと懐中電燈の円い光が隅つ  
こにいる多美子を捉えた。多美子は反射的に頭を下へさげた。

「あの娘さ」

「ふーん。」

「あの子をどうしようつて言うの？」

「ここから連れ出して、うちへはこんでくれつて言うのさ。」

「こんな子、いじめたつて始まらないだらうにねエ」

「姐さんも一寸ものずきがすぎるよ。」

口々にささやいて入つて来たのは、はでなショートパンツをはい  
たのを先頭に、その外も真赤に口紅を引いた、一見で水商売だと判  
る女たちだつた。

ショート、パンツの女はしやがみ込んで

「苦しかつただろ。大丈夫。私たちは貴女に恩もうらみもないんだ  
から、なにもしやアしないよ。」

笑うと、次の女が

「そうよ、あたいたち、あんたを助けて上げても良いんだけど、あ  
とで姐さんが恐ろしいからね。」

「まア！ こんなに布切れが頬ペタにくい込んで。これじや息も満  
足に出来やしないよ。可愛想に。ねえ」

と、別の女に

「扉、閉めておゝき。そして外を見張つてるんだ。まあ、こんな波  
止場の倉庫へなんか猫の子一匹来やしないけどね。ねえあんた、一  
寸の間、楽にして上げようか？。でも大声なんかたてたら承知しな  
いわよ。これから連れて行かれたら当分姐さんに可愛がられるんだ  
から、今楽しておかないと、たまらないよ体が。」

「それでも目かくしだけはなんとか外したんだね」

言いながら多美子の顔に顔を近づけ、猿ぐつわの結び目を解きな  
がら

「ああ固い。さアほどけたよ。ごらんよ、口の中へ一杯布切れがお  
し込んであるよ」

口からはみ出た布切れを、引張つてつかみ出した。

「これやあ、あんまりだよ、ねえ」

よだれと息でべとべとにぬれたのを置いて

「楽になつたらう」

多美子は、大きく肩で息をした。

「手も足も解いてやりたいんだけど、逃げられたら大変だから、こ



のままで充分空気をおすい」

女は立上ると、煙草に火をつけてすいながら、壁によりかかり腕



ぐみしてニヤニヤ笑つて多美子を見降ろしている。多美子はやつゝ  
我に返つた氣持で、笑つてゐる女に

「ど、どうして私、こんな目に会うの？。ねえ、教えて、あ  
んなたちはだれなの？。助けて、ほどいて、お願い。ほしいも  
のなんでも上げるわ」

多美子は、口元をふるわせ、その女の足元へにじりよつて、  
シヨートパンツからのびているサンダルをはいた肉づきのいゝ  
素足に顔をつけ、泣きじやくつた。

「無理よ、あたいだつて知らないんだよ。知つてるのは姐さん  
だけさ」

多美子は声を大きくして

「だれ？ だれなの？ 姐さんて人は？ 教えてー、ねえー」

女はうるさそうに、すりよる多美子の肩を素足のサンダルで  
軽くけつて

「うるさいねえ、あとは直接姐さんとお話しなよ。所でなん  
時だよオ」

「1時前さ」

「さあ苦しいだろうけど、またはめるわよ、猿ぐつわを」

「でも、こんな布切れもう駄目よ。このハンカチーフにして  
やろうよ」

別の女がなげる。受取つて

「親切だろ、さア口をおあけ」

「嫌、嫌、放して、放して、ウヴー」

多美子は呻き声を上げてさけび、最後には口を一文字に結び  
女たちの手から必死で逃れようとした。

でも二人に馬乗りになられて、おさえられ頬ペタを、親指と中指で両方からおされ、とうとうハンカチーフを、口へおし込まれてしまった。

「ねえ、あんたのハンカチーフおかしよ。これで上からこうやつておけば安心さ。あア暑い。人の気も知らないで暴れやがつて。ごらんよ私の腕を。かみつきやがんの。あゝ痛い。親切にしてやればつけ上りやがつてさ。馬鹿！」

サントルで、嫌と言う程、多美子の頭をけつた。多美子は悲鳴をかすかに上げて倒れる。女は笑つて

「ざまア見る。さア、行こうか。暴れたら、海ん中へほうり込んじゃうからね」

二人は多美子をかつき上げて、階段を上る。かつがれた多美子の目に、暗い彼方は波音が見え、遠く燈台の火が見えた。磯の香がブーンと鼻をついた。

多美子は、東西はまったく分らなかったが、大阪湾か神戸港の倉庫だと思つた。倉庫の影に待つてゐる自動車へ多美子をおし込むと、一人が

「目かくし、忘れたね？」

「大丈夫かい？ 場所知られたら、大変だよ」

「たいしたことはいよ」

車内のゴム引きの床へ、多美子をころがすと、その上から毛布をかぶせて、二人は両足でおさえて、うごけないようにした。軽い音を立てて、車は走り出した。

多美子は息苦しく、体を折り曲げころがされていたが、左へ右へと行く車に、これは神戸から須磨、明石の方へ走っているにちがいないと思つた。そうして、きつと自分を探しているだろう父のことを思うと、悲しくて、泣かずに居られなかつた。

## 6

毛布に包まれたまま、多美子は椅子へ腰かけさせられた。遠くでジャズが、男女の笑い声が聞えて来る。

「この子だよ」

声がして毛布をパツと取り除けられた多美子は、目の前に男と女が立っているのを見た。男は目の鋭い、でっぷり肥つた、キヤパレのボスと言う姿だし、女はたしかにあの女だつた。街で会つた、そして自分を、車に引ずり込んだ女に間違ひなかつた。

「これが、あの話の？」

男はニヤニヤ笑つて言う。

「うん、だけど、この子は何も知らないだらう。きつと。」

「中々良い娘じやねえか。」

「駄目だよ先に手を出したら——。私がさんさんぐさんでから上げるよ。」

「まア姐さんのお下りなら仕様がねえよ。だが言つとくがね。可愛がりすぎてきずものにしねえようにね。出岸とか言う検事が身代金をもつてくるまではね。」

「来るもんかい、あの冷血漢の人非人が」

「来るよ。どんな大金だつて都合するよ、娘の親だからね。じゃおれは下へ行くが余りいじめなさんな。変なことをして——」

「ほつといてよ。私の好きにするんだから。早くお行き——」

男は笑つて出て行つた。女はニヤニヤして近づくと

「おどろいたかい？ お芝居がかつたことをして気にさわつたろ。二人になつたら、ゆつくり話して上げたいが。でもここは人が来る今夜から二三日泊つてもらうんだし、先に部屋へ連れてつて上げよう」

ベルを鳴らす。そして、多美子の両腕に手をおいて

「良い体してるね。楽しめるわ、きつと。もう少しがまんおしよ」  
言つてる時、ノックして入つて来たのはさつきのサンダルにシヨート、パンツの女だつた。

「この子をおはこび、下へ」

女はうなづいて近寄り、ものも言わずに多美子を両腕に抱き上げて、外へ出る。女は電気を消すと、細い楽屋裏のような廊下を通り階段を降りる。突きあたりにちいさな扉があり女は多美子をその中へ入れると

「良いよ。あとは私がするか  
ら」

女を追い出すと多美子のそばへ来て

「長い間縛つといて苦しかつ  
たろ？ さア、椅子に腰かけ  
て、そうよ。そしてね」

細い鎖を持つて来て椅子の  
背と多美子の胸をグツと縛る  
と

「こうやつてからじやないと  
逃げられるからね。まアこん



なにひどいあざになつて」

と言いながら手首のベルトを外して

「こうして、ひじかけの上に腕をのせてごらん」

つかれはて、されるがままになつている多美子の両腕を別の細い鎖で両腕を別々にひじかけに結えんと

「いやにおとなしいね。良い子だよ。でもだんだんあばれるよ、きつと。そうだ、足はほどうして上げるよ。きれいな足だね」

多美子のナイロンの靴下の下に見える弾力のあるスベスベした、ふくらはぎをさすりながらベルトをはずして

「靴をおぬぎ。ねえ、気持よくなつたろう？ 靴下もぬがせて上げよう」

女は手早く靴下をずり下げ、多美子の白い素足を両手でにぎりしめて

「思つてたより、ずうとあんたはきれいだよ。あんたがあの子の娘でなければ、一生こうして可愛いがつて上げるんだけれどね」

女はニヤリと微笑した。多美子はこの肥つた女の体臭と香水のむせ返えるようなにおいを、かきながら痛み、つかれはてた体をされるがままになつては居たが、目だけは懸命に、その女の体からはなさず、この女の持つ秘密を一言もききもらすまいとしていた。

「お父さんが人非人だなんて、そんなことうそだわ」

多美子は口まで出て来ている言葉が、猿ぐつわで消され、呻き声になつてゆくのが口惜しかつた。女は多美子の前のソファアに腰かけて

「最後に口もほどこいて上げるけど私がして上げる話を良く聞くのよ。途中で大声出すと承知しないから」

立上つて猿ぐつわに手をかけ、ほどこと口の中のハンカチーフを引ずり出し見ながら「ねえ、あんた。だれかにほどこいてもらつたね、猿ぐつわ。だれにだい？ フン判つてるよ。トミ公だろ」

と呟きながらソファアに腰かけて、

「そうそう自己紹介が未だだつたね。私は杉本春江つて言うのよ。生れは大連だが。国は、あんたの親父さんと同じ松山だよ。それどころか町まで一緒さ」

おどろいて、ものも言えない多美子を見て

「おどろいただろう。だけどこれからだよの本当におどろくのは」笑つてウイスキーをグラスについて一氣にのみほすと

「あゝ今夜はとつても気持が良い。二十年ぶりだよ。話を上げてよう。」春江は想い出すように「あれは二十年前のことだつた」



あんたの親父さんと私の母は小さい時から許嫁だつた。帝大法科を卒業して、松山の特高課の課長になつたんだ。晴れて故郷へ錦をかざつたつて訳さ。私の母はよろこんで迎えた。そして晴れて結婚出来る日を楽しみに待つていた。しかし話が進まない。それも道理あんたの父さんには、女があつたんだ。それも東京に……それがあんを生んだ母親さ。そしてあんたの父は強引に許嫁の間を打ち割つて、女をよびよせ、これみよがしに、はでな生活を始めたんだよ。私の母はその当時だもの、死のうとまでしたんだ。やつと親類になだめられ、死はあきらめたが数日後逃けるように、大連の親戚をたよつて行つてしまつたんだよ。これだけなら別段今おもえば、大したこともでなかつたんだ。そして私の母は大連で知合つた男と結婚した。そして私が生れたんだよ。男は小さな新聞社の記者だつた。私は十九まで二人の愛情で大きくなつた。日華事変が始まつたのはその頃だつた。私の父は一寸した反戦記事を書いたため、スパイだと憲兵に引張られた。そして私の母も引張られて行つたのさ。でも父は別にスパイしたこともなくすべてを否定した。良いかい！ 運命つて皮肉さ。その時の憲兵隊長をしていたのが、応召して来た山岸とよばれる人だつたんだ。私の母はそれを知るとだまつて官舎を訪れた。そして身を捧げて良い。その代り、良人を許してやつ



て呉れと哀願したんだ。そしてあんたの父はうまく、だまして母を弄びながら、私の父を許さなかった。母はとう／＼心の痛手をうけて狂ってしまったんだ。その上、今度は私を引張つて行つたんだ。泣きさけぶ私の前で、あんたの父は、私の父をこうしてムチでなくりつづけたんだ。

## 8

春江は平手で多美子の頬をひつぱりたいた。

「痛い！」

多美子は顔をそむけて

「うそ、うそよ、私の父は」

「そんな人じゃないと言ふんだろ。良いよ。そんならこれを見せて上げよう。」

春江は急に立上ると片足を多美子のひざにのせ

「さアごらんよ」

着物をまくつた春江の内股ふかく大きな焼キズが有る。見まいとする多美子の髪をつかんで、嫌でも、自分の秘密を見せる様にしてさけぶ。

「一体、これはだれがしたと思うんだ。えゝ、良くお聞きよ。お前の親父の部下の憲兵に、死人同然までに責められた、私の父の眼の前で——」

春江は両手で、多美子の服に手をかけて

「こうやつて、私も服を引きさかれー」

もがく多美子の服を引きさくと、悲鳴を上げてもだえる多美子のスカートをすり下げて、大声で笑い

「あの時の私と同じようになつたね。」

多美子は、シユミーズ一枚にされて、

「嫌、許して、助けてーだれかー」

縛る鎖をガチャガチャならし、両足をふみはだけてさけぶ。

春江は、笑つて

「駄目だよ。今夜は、お前さんも、昔の私と同じ姿になるんだ。それだけなら有難いとお思いよ。私はお前の親父のために、一生、女の喜びを知ることが出来ない片輪にされてしまつたんだよオー」

さけびながら、多美子のシユミーズを引きずりおろし、片掌で多美子の口をふさぐと

「良いかい。私もブラジャーをこうやつて引きちぎられ、それからこのブローズまで、こうやつて引下げられたんだ」

多美子は春江の手で一糸まとわぬ全裸にされ、ガツクリうなだれ目を閉じた。

春江はブローズをなげ出すと

「まだまだよ、上をお向き、お向きつたら。嫌でも向かせてやる」

春江は、引出しから麻縄を取り出すと多美子の額へ縄をまわし、グーとうしろへ引きしぼつた。多美子は嫌でも上を向いていなければならぬ。

そして春江は部屋の大きな姿見の鏡台を、その前へ置くと

「さア物語も大詰さ、その前に言つとくが、此所でいくらどなつたつて、さけんだつて私が特別に作つたこの部屋からは一言も、もれないんだよ。それを承知でさけぶなりもがくなりすれば良い。それからね、私はこうされたんだよ」

脂汗が流れ、それがピカピカ電燈に光り、悲鳴と言うより呻き声

をあげながらもだえる多美子の美しい片足を抱え上げて、足首に麻縄をまきつけ、そのはしを、そのために作つたようなフックへかけて、ギューと引張る。

「許して、アム嫌、かんにんしてー」

呻き声を上げる多美のもう片方の足首にも縄をまきつけると、反対側のフックに引つけて

「よいしょとフフフ……。どう？ 見たくなくても見えるだろ？

未だだれにも見せたことがない所が。良いかい。私もそうされたんだ。そのように両股を広げて上からつり下げられてね。ここをね」

長い鉄棒をとつて春江は、それをにぎりしめると、それを次第に多美子の太股へ近よせて

「これは真赤に焼けてはいないが、私のは真赤だった。そしてね。

こうやつて次第に焼かれて行つたんだ。ここも、こうやつてね」

多美子はもがきも出来ずただ頭を一寸左右にうごかせて呻き声を上げ、太腿から内股へと鉄棒のつめたさを感じながら顔を上向かせたまま気を失つていた。

## 9

次の日、此所へ連れて来られた山岸検事は、目かくしをされたまま春江の部屋の椅子に腰かけさせられていた。

別室では春江が後手に縛り上げられ、完全にはめられた猿ぐつわに息も苦しく、ただ肩で息をはずませていた。春江は、多美子の腰部だけを包んでいた布を取り除いて、多美子の体中に香料をぬりこめると、ペルをおす。女が二人入つて来て、多美子を抱き上げるとラセン階段を上りあの部屋へ連れこんだ。そして、多美子を立たせ

ると細い紐で髪の毛を両方へわけて柱に縛りつける。これでぜつた下を向けない。もう一人の女が金色の鎖で胸に二重にかけて柱に縛る。鎖は乳房の上と下にかかり、豊かな多美子の乳房は、上より以上はり出して見事だし、腹に一まき、太股に二まきしてしまふと最後に首へ鎖をかけたので、少しでも多美子がうごけば首がしまる。二人は前へ毛布を下げると出て行つた。「こんな姿を私は父さんの前に見せなければならぬ」と多美子は身動き出来ずにとめどなく涙が頬を伝つて流れおちた。

足音がする。そして、人が椅子に座る音。そして聞えて来たのはなつかしい父の声である。

「身代金はここにある。これが私の所持金の全部だ」

つづいて春江の音が

「私はそんな金なんか一文だつてほしくない。貴方が私をこんな女にしてしまつたんだ。覚えているかい、大連の当時を。私は今日の来る日をどんなに待つたことか。私は今あなたと取引しようと思ふ。良ろしいわね。その一つの方法は私の足元へ土下座して前非を心から謝まれば、娘さんをお返ししよう。もう一つは貴方が謝まるのを嫌がれば、貴方だけはお返りを願うが、多美子さんは永久に私のものになる。今、娘さんを中心にしてはつきりしたお返答がいただきたいの」

多美子の前の毛布が取られ、多美子も父を見た。父も多美子を見た。

春江は、山岸をじーと見守つて

「如何です。時間は五分です。良いですわね。」

だれもが無言、かすかに多美子の泣き声が聞えて来る。



昔は憲兵隊長として今は鬼検事としての父が、土下座するだろうか。しなければ私をこの女は永久に父のもとへは帰さないだろう。さげびたい。「お父さん」と抱きつきたい。首を動かせば髪毛がぬけるように痛む。首がしまる。

春江は「あと四分」

フフー時間はあと二分よ。娘さんはこの通り呻いてるわ。ほら、こんなに髪が引きつって痛そうよ。」

指がまるで生きた人間のように間断なく多美子の体中をはいずりまわる。多美子は呻き、腰をくねらせ少しでも五本のしなやかな指から逃げようとがく。もがけば一層春江を、しげきして、掌と指

うなだれて身動きしない父。

次第にこの光景にみせられた如く春江は立上ると多美子のそばへ来て

「どう、帰りたい？ それともこうやって何時までも、私と一緒に暮したい？」

春江の顔は紅潮して、目はこうふんに輝き、多美子の乳房を掌でにぎりしめ、もて遊びながら、

「ほら、お父さまがあんなに考えていらつしやる。あと二分なのに。フフフー。」

笑うと乳房をにぎっていた春江の五本の指はくねくねとだんだん下へはい降りて行く。

春江は多美子の頬へ口をよせて

「どう。自分の娘が目の前で、それと同じ女性に、こんなことされているのを見せられたら、どんな気持かね。まあそう嫌がるんじゃないつたらー。フ

の動きは狂つたように早くなる。

「どうするのよー、私を何時までもこうして楽しませ喜ばせ、狂い死にさすつもりかい。——ど、どうするの！ 土下座おしよ。早く早くおしつたら——」

多美子は呻きつづける。

「あと一分。」

言い終るか終らない中に山岸は手を上げ

「待つて呉れ！ 土下座しよう。そして前非を心から謝まろう。私は娘にだけは昔の話をしたくなかつた。だが多美子。許しておくれ。本当の話さ、全部本当のことだ。昔のわしはお前の父になるこ

## 【読者通信】

新年号は実に素晴しかつたですね、特は気づいた点を二つ三つ思い上つた言い分ですが、どうか御容赦願います。新年号で特に嬉しかつたのが、口絵の豪華版、その中でも実に私の胸をグーッと締めつけたのが晴雨先生画くところの「大名人飾りの図」之には全く参りました。過去の奇クその他を問わず私の見た絵の中の最も好きな絵でした。正直なところ私は晴雨先生といえは髪ぼう／＼の血みどろの陰惨な責めの絵の大家と感じていました。この絵を見てすっかり自分の考えの間違つていたことを悟りました。私がすっかり惚

れ込んだ点は、人を飾りにするという意図と飾られる女の羞恥、美しい晴着と帯をつけて居り、そこへ双肌があらわに太ももが深くむき出されている点、若しこの絵が丸つ裸又はそれに近い布片一つぐらゐの裸体であつたとしたら、興味は半減することでしょう。こゝに於て丸つ裸か着衣云々論は霧の如く解消するといふもの（私は元々裸体論者の方ですが、時宜を得た着衣の必要性をはつきりと知りました）、飾られた女の豊満な肉づき、七五三のしめ縄に裏白の面白さ、あくまで白い柔い太ももの羞恥、もがく度にチク／＼と刺すであろう松葉の針の嗜虐感、埋め

られて開かされた両足、それを見物する大衆の配置の妙と女の消えいらんばかりの羞恥、そこへ増して飾られた女のことを全然ふれぬ右の松飾りの云々の白ばくれた文句、成程、大したものですよ。どうです、私に共感を感じられる方ございませんか？（佐渡魔造）

○ 私先月お友達の家でとても羞しい目にありました。しかしこれはとつても恥しくつて夢中でしたのでよく覚えていません。学校を終わつてから帰りに私が何の気なしにお手洗に行くと、其所に奇クの七月号が置いてあつたのです。開くと、あの五人の方々のしぼられた写真、私は御小用に入つたのも忘れて、じゃがみ込んだまゝ夢中で読みふけり、その未知の世界の事柄にわくわくしてしまい、二十分以上も経つたでしようか、ようやく自分に返えり、本をそつと靴の中に入れて外へ出て二三歩歩き出すと、肩を叩かれ、上級生の人四人に囲れてしまいました。後でわかつたのですが、その人々は奇クをわざ／＼と中へ置いて陰から見張つていたのです。私が長い間して、顔を真赤にして出てきたので直ぐつかまつてしまつたのです。この時こそ本当に恥しくて、穴へでも入りたい気持ちでした。

——後略——（市川公子）

とも出来ないような悪い男だつた。わしは今土下座して、全部をお前の前で告白しよう。許しておくれ、父をなア多美子！」

山岸はベツタリと土下座して春江と多美子の前で男泣きに泣きはじめた。春江は気のぬけたようにぼんやりと無表情のまま山岸を見降ろしていた

10

あれから数年になる。多美子は最初につれて行かれた、あの町を通る時は、ぜつたい近道をせず帰る。妖しい想い出を忘れるために

（終）



Das Grausame Weib

△ 殘虐なる女性達 △

——1901年刊行の独文絵入単行本より——

森 本 愛 造・訳

第二章 奴隷所有者としての女性

若し、女性の加虐本能がその実現が容易な社会状態におかれた場合、反射的に強くなるとすれば、奴隷制度が法律上認められて居た時代には恐らく、最も典型的な加虐の史実が残つて居る筈である。事実、多くの史家や、旅行記者が述べて居る様に、その様な時代に充満して居た残虐行為の中で、殊に質的に強烈な残忍さを持つて居るのは男性より女性に多いのである。(勿論、量的にも、女性の残忍性を裏書きする様な史実は、男性の夫に匹敵するのであるが、) 女性達は、彼女達の犠牲者が、無援、且無抵抗であればあるだけその加虐を精神的にも、具体的にも熾烈に研ぎますのであつた。

「ギリシヤの古代に於て、女性達が必要に応じて、敏速に奴隷達に鞭を振つた事は周知の事である」(Corvin: Die Geißler) 又、「ローマの女達が女奴隷を仕置するとき、梁に吊し革鞭を振つたが、其の時、怒れる美女達の気分で、髪の毛によつて吊される事があつた。此の方法は、注目さるべき創案であつて後世、余り其の例を見ない」

(Cooper: History of the Rome.)

古代ローマの女達のこの未曾有の残忍さは有名なユウヴェナル (JUVENAL.) をして次の如く書かせて居る。彼はそれ等のドミナを極付の人々であると思倣して居る。或るドミナについて、  
「或時、彼女は一人の奴隷を殺そうとした。しかし、ローマ人某は、この人間を許してやる様に彼女に忠告した。このドミナは叫んだ。それじゃあ、奴隷も人間だと仰言るのですか? 又、同じ様な心を持つた他のドミナが、友人達に宝石を見せて居た時突然庭から異様な叫び声が聞えた。人々は驚いて、立上つた、ドミナは一同を鎮めてから平然と、何でもないのですよ、皆さん、今私が一人の人間を鞭で仕込む様に云い付けてゐるのですから」

【訳者註】 この次に同じユウヴェナルの詩をフォン・ベルグが独訳した詩が書かれて居るが原本がアート紙に印刷され、且保存が悪かつた為め、その前半が判読出来ない。只之と同一の内容の詩を奇クの旧号でよんだ様に思つたので、調べて見ると昨年の七月号六〇頁下段に野溝草兵氏が概要を訳出されて居る。これは「ジュヴェナルの詩の一節」と書いてあるが、恐らく同一と思う。私は比較的判読出来る箇所から訳して見る。缺けた部分に

ついで若し、読者諸賢の中で熟知の方があれば御教示を乞いたいと思う。右、野溝氏の訳は失礼乍ら甚だしく簡略であるし、全体の空

気も亦、一寸異つて居る様に思う。

(前略)配下の者達が、疲れの為に、

眠り誘われた科を、

彼(看守又は見張らしい。)はつぐな

うのだ。

或者は棒笞が折れるまで、

或者は革鞭が肉を裂くまで、

血を流さねばならないのである。

国民は科を逃れる為には、

一年の間、食を絶つにも等しい貢を捕

吏に贈る。

彼女(女帝又は王妃ならん)は

者共を鞭打たせつゝ

その側で、顔を粧い、

果しないお喋りを続ける。

又或る時は、

美しき衣、あてやかなる縫取り、

大きな黄金の指輪に、

魂を天外に飛ばせつゝ

科人を刃をもつて傷つける。

又、或る時は、

心なごむ、噂話に、耳傾けつゝ

人を斬らせ

打ち据え

る。――

逃げよ、女

主人は

怒りにふる

えて 吼え

る!

(カツコ内  
は訳者註)

(Schdrowitz; Sittengeschichte des  
Proletariats,)

「時と共に女主人達の女奴隷に対する苛酷さは目立つたものとなつて来た。そこでエルヴ

イーラ(Elvira)の集会ではこの傾向を抑圧す

る為に、若し女主人が女奴隷を死ぬほど強く

鞭で仕置をした場合、其の女主人を数年間聖

餐から除外する事を申合わせた」(Cooper)

併し乍ら、苛酷な恣意を持った女主人達に

とつて、此の様な禁圧が大した効果を持たな

かつた事が、むしろ当然であろう。矢張り、

一般的には全てが、其の儘の状態が続いたの

である。斯ういつた非常な悪徳、恣意、最も

洗練された残忍さは中世紀全体を掩い、近世

に至つて未だその猛威を熄める事なく、その

一部分は現代に至るまでその息吹きをつづけ



て居る。何時の時代でも、何処の国に於ても強者と弱者が共存する場合、権力に屈して居る側の人々を奴隷と名付けてもよいと私は思うのである。

例えば、ゲルマン民族、スラヴ民族、ローマ・ラテン民族等の下に生活した奴隷達が、如何に、無制限な我儘に支配されて居たかについては、充分に史的資料が存在する。そうして、ロシアの女性達だけが、下女に対して残酷であつたと考える事は誤りである。(訳者註、ロシアの女性達とは恐らくエカテリーナ女王、及其の精神的後継者を指すに違いないし、又、ザツハール・マゾツホ博士の著作の中、有名且優秀にして同時に最もマゾヒスティックな男性の願望を文学的興味以外に満足させてくれるのはたしかにロシアに取材し

たものが多いのでそれに対する一般的な概念に対する反対と私は解する。ハングリアの女性達等もジブシイに対する時、特に何人も考えぬ残忍さを發揮したのである。(訳者註 二・三年前、シユウベルトを主人公にしたアメリカ映画に於て、——題名失念、但しドイツの有名な未成交響楽・ハンスヤライとマルタ・エゲルト主演ではない。——女地主が監視する時に太い鞭を持つて居た事を私は想います。そうして、此等がハリウッド製品であるにも拘らず、主演者の女性が確か、洪牙利人であつた——ように思う為か、迫力を感じた事を申上げて置き、丁度手許に仏映画誌

“CINEMONDE” (シネモンド) より抜いた其の場面写真があるので御紹介して置く。

アメリカに於ける黒人奴隷の宿命は又、特に悲しむべきものであつた。そして、此の国に於ても奴隷達を野蛮に取り扱う事に於て女性性は男性の粗野を遙かに凌駕して居た。ツインメルマン (Zimmermann.) 一九〇三年版、*Faschenbuch der Reisen* よりの著作に依れば、女性達が残忍性を持った行為の愛好者である。という事は、心理学的な人間研究上特に関心を持たれるところである。多くの女性性が、男女奴隷の鞭打による体罰の現場に同

席し、又、自ら牛追い用の革鞭を手にして彼等を打ちすえ、時としてボンバ (BOMBA) (訳者註、この語はよく解らない「木綿島に彷彿く奴隷」を指すのか——Bombacese 木綿科の植物なる意味よりすれば——或は Bomb, (米俗語「怠けて働かない者」の意味か。沼氏等に伺いたい処である) を自ら鞭うつ事を仕事にして居た場合さえあつた。全く、白人女性の家に仕える黒人はドミナに対する一個の殉教者であつたのである。

コルヴィン (前出) も同じ様な考えを持っている。(Briebe über Brasilien)

其の点に関しては、ブラジルでも同様である。温和に対して、最も親近性を持つて居る。温の女の心が此の国では鬻行の弁護をするのに熱心である。女主人は眞々親娘の奴隷を引張つて来て娘に牛追い用の長い革鞭を与えてその父を力一杯打ち据える事を強いたものである。又、多くの女主人達は往々赤く灼いた鉄の棒で奴隷を打ち、責め苛む事を喜んだのであつた。



又、シエルヒル (Schölicher) の作「仏領植民地」(一八四二年田里版 *Des colonies Francoise*) は、奴隷制の下での暴行を詳しく説明して居るが、その中で、以前は大変善良であつた女性達が植民地に於ては特殊な加虐の慾望に襲われる。施行者は女達が老人や女奴隷や、子供達や、勿論逞しい男奴隷達を(鞭や馬用の手綱等の総称)で喚き叫ぶのも構わず、力の限り、打ちのめして居るのをよく見るのである。

当然アメリカの奴隷制下で生長した白人女





性達が躊躇する事なく激しい加虐の慾望を毎日満して居た事が考えられる。歐洲の女達は余りにも違つた習慣や、社会状態に慣れる為に一定の期間を要したが併し、結果は全く同じ事である。シュリヒトホルスト

(Schlichthorst; Ru de Janeiro, Wie es ist, Hannover 一八二九年刊一二五頁)はブラジルについてその著書「リオ・デ・ジャネイロとは如何なる処か」に於て述べて居る。

「一般に云つてブラジルに来る凡ゆる国の白人女性達は、当初、奴隷や奴隷制度について烈しい嫌悪を感じるが、暫らくするとその態度が變つてゆく。そうして、彼女等は「男でも、鞭を用いて仕込むのが、一番簡単であり、或いは唯一の方法であるかも知れない」という確信を持つに至る。」

アメリカ奴隷制度の真想」(Charles Sturt; American Slavery, as it is, Published by Anti-Slavery Society of New-York)の中に次の様な記事がある。『現在西印に住む一人の白人の婦人——彼女は五才——十五才迄教育の為アイルランドのベルファストの近郊に住んでいた。——は結婚の為め十五才の時、故郷西印度に帰つた。彼女は結婚後一度アイルランドへ旅行し、旧い友人を訪ねた。白人に対しては以前と全く同じであつたこの女性は全く優雅で、道德的であり、心やさしい人であつたが、一度び有色人種を語る時は全く別人の如く、恰も一匹の雌獣のようであつた。彼女はウルベルフォルス(又はウィルバーフォース Wilberforce)の名をきくと何時でも「彼奴が今西印度に居るのだつたらひどい目に合せてやりますわ。私はこいつの心臓を引っぱり出すのを真先に手伝つてやるでしょう。」というのだつた。其の話の後で彼女は得意気に西印度での奴隷の取扱方について述べ立てるのであつた。「私は女奴隷が気に入らない時はその奴隷の子供を奪つて泉の中へなげこむふりをするの

です。そうすると女奴隷等は金切声をあげるのです。その様子の愉快なことつたら……」といつて、殆んど瘻癪的に笑いこけるのだつた。」

ヨーロッパの婦人達が如何に速かに奴隷制に慣れ残虐な懲戒に興味を以つて執行する様になるかについて、エドヴァルト・フックスとアルフレード、キントの共著「女天下」(訳者註、此の書物は全訳ではないが翻譯が戦前出て居る。但し、内容は邦訳本に関する限り余りパットしないが、当時としては仲々の仕事であろう。原名と共に邦訳本の明細を書いておこう。)

Eduard Fuchs, und Alfred Kind; «Weiber-herrschaft» 邦訳本、国際文献刊行。大正十五年五月二十日發行、「世界奇書異聞類聚」全十二巻中第十一巻、村山知義訳全三八九頁、五四枚の挿絵、他に一枚削除有但し、原本全二巻の中、第一巻の抄訳)は、更に有益なもう一つの实例をあげて居る。

(続く)

×

×

×



女<sup>によ</sup>体<sup>たい</sup>自<sup>じ</sup>虐<sup>ぎやく</sup>図<sup>ず</sup>

三 富 浩 生



——映画なんか何時でも見られるのよ。

奥深い、然し何処か未だ、あどけなさの秘められた瞳で悦子は私に懇えるのであった。

ビル街の舗道を寄り添って歩く私たちの上に、夕空は、蒼い透明度を遙かな極みまで保っている。その蒼さが、ぬれ／＼とした彼女の瞳に映っているようであった。

私も勿論、映画を観るよりも、悦子と愉樂の一と時を過したいのは山々だったが、何ういうものか、私の好みは彼女と一致しなかつた。

第一、私たちは幾度も結婚に就て話合ったが、現実には不可能だった、デパートの売子で、派手な消費生活に馴らされた悦子と、不況に喘ぐ商事会社の下級社員に過ぎない私との結婚は、彼女の家庭が可成りの財産家で、私の方は親の代からの安サラリーマンである、という未生以前の運命を抜きにしても、成立たない話であつた。

悦子は美しく愛らしすぎた。女の美貌と優れた容姿が、男の財産と地位に比例する価値を持つとしたら私は彼女に値しない存在である。私は既に諦めに近いものを感じていた。

然し悦子は却って苛立っていた、結ばれ得ぬという予想が、一層彼女を苛立たせた。

それが男と女の違いかも知れなかつた。相手の体を知ることが、男にとつては愛情の目的であり、女にとつては愛情の手段なのであつた。

——ね、お互いに無駄だと思わない？こうしてるの、

——何故？しょうが無いもの、

——じれつたいわ。あゝ、死んでしまいたい！

ひや／＼と夜気を感じられる初秋の夜空を見上げ、瞬き瞬き星くずを瞞めながら、私は切なく身悶えて取纏る彼女の肩を、そつと抱いた。

——無駄と呼ぶならば、総ては無駄、

独語ちながら、私は思つた。色則是空、空則是色、俄に索莫とした無常感が私をゆさぶり、その故に亦、愛し愛されることの哀しさを、私は今更のように噛み緊めるのだつた。

月曜が定休の悦子とは、日曜の夜だけしか構えない。好みの相違は、貴重な時間の乏しさと比較すれば問題でない。いつかは悦子が煮え切らぬ私を見棄て、ゆこうと、今が今、私は悦子を失いたくない、そこに妥協があり、歩き疲れた私たちは、いつもの逸楽の部屋に、身を横たえねばならないのである。

金側の腕時計を外しながら、

——あら、未だ六時半、そんなこと無いわね？

自分で首を振つて否定してみせ、悦子は、時計が停つているのに気付いた。もう七時を過ぎているのだ。

——ネジ、巻きすぎたんだわ、

耳もとで軽く振つて、彼女は舌打ちした。

——貴方のせいよ、はき／＼しないんだものいら／＼してネジを玩具にしてたんだわ、妾ちらと上眼使いに睨む彼女の手から、時計を受取つた私は、小型の万能ナイフで金側に傷付けられないように注意しながら、時計の裏蓋を開いた、パチと微かな音と共に、幾つかの石が、きら／＼と眼を射る、ゼンマイが切れていた。

——店の時計部へ持つてきやいゝだろう。

裏蓋をまた、はめようとした時、

——ちよつと待つて、

彼女は制止し、私の胸もとに近々と寄添うと、無心に機械を瞞めている、その頬が妙に紅潮していた。

——何だい、子供みたいに、

純子は、つと挙げた瞳で笑いかけて、

——好きな、まるで、お腹ん中みたい。

瞬間、私は、どきつとして彼女の明るい笑顔を見直した、或る期待が、私の胸の中で次第に形を整えて行つた。

——そんなに見るの、いや。

私の凝視を悦子は怪訝な瞳で見ろ。私は彼女をベッドへ抱き上げた。柔かい、豊かな量感が私の腕に伝わり、今日も亦、彼女の白い肌が、淡い桃色に息づいていた。寄り添う私の体を、飽かず瞞める彼女の臉のふくらみが微かにふるえた。

——男のひと、お腹小さいのね。

始めて気付いたように、彼女の指がツイと伸びた、浅黒く引緊つた下腹の皮膚が、桜色の爪に押されて、軽く反撥する。

——締つて、硬い感じ、

はにかんだ子供のような、溶けるような笑いを浮かべる彼女の、白い額に唇を触れてから、私も彼女の滑らかな肌を突ついた。

——いや、

口で拒みながら、黒い瞳が燃えている、その酔うような表情は、彼女の体が潤つて来ている一つの証であつた。

指先が、滑り込むような按配で彼女の臍を探り当てたとき、悦子は両掌で包んだ私の指を、揉み込むように自分の体へ押し付けた。

——もつと、きつくして、

彼女の眼は、私を見ていながら、何か遠いところを瞞めているかに見えた。頬が赤く熱して来ていた、彼女の体は、既に包容への慾望に燃え切っているようであつた。——

——ね、男のひと、女のお腹を何う思つて  
るのかしら、

飯に禾だ遂情の余燼を残した悦子は、囁く  
ように言う。

私は、けだるさに、仄暗い天井を見たまゝ  
——美しい、なつかしい、故郷の匂いがす  
る。

——妾、此の間、あなたを殺して死にたく  
なつたわ、愛想つかされたと思つたもの。

——殺されるのはいい、然し死なして耐  
もんか、こんな可愛い子を

もう一度抱き寄せようとした時、もう彼女  
は体を起していた。

——あなたなんか頼りにならないよ。妾、  
死ぬんだつたら薬なんか服まない、お腹を思  
う存分切つてみせる。

うつとりとした眼差で、彼女は坐つたまゝ  
豊かに膨らんだ下腹を瞞めながら、しみじみ  
といとおしむように、美しく縮れて群がる体  
毛の直ぐ上の辺りまで、右掌で撫でるのであ

つた。

静まつていた昂奮が、思いがけない彼女の  
言葉や仕草で、また掻き立てられた私は、然  
し、もう帰らねばならぬ時間と知つて、ワン  
ピースを手にとつた悦子の、うなじに唇を接  
けるのであつた。

此の間、と悦子が言う、その日、彼女は異  
常な嗜好を告げた。それは彼女を始めて女に  
した男の、異常な嗜好に基くものだつた。

ある商事会社の課長だという、その中年の  
男は、納得の上とは云え、彼女の処女性を味  
うために、裸身に羞恥する彼女をベッドに縛  
り付け、思うさま弄んだというのである。

——ね、お願い、是で妾を結えて、

哀願するような、羞恥と期待と、幾分の危  
惧を含んだ彼女の瞳を見たとき、正直、私は  
呆然と彼女の顔と、淡紅色の腰紐とを見較べ  
たものである。

ロータスの明るいハンドバッグに、是は亦  
古風な腰紐であつた。

ベッドに縛り付けられた彼女は、脚を組合  
すようにして、私の眼から一番大切なものを  
蔽つた。それは、然し攻められるための守り  
に過ぎなかつた、悶えつゝ彼女は酔つた。

——もう何うにもならない、羞恥と恐怖、

その奥で、何だか期待めいたものが有るの。  
彼女は、あとで其の瞬間の心境を私に告げ  
るのだつた。昂奮の過ぎ去つた頬に仄かな血  
の色が射し、淋しげに潤む眼もとが、淡い弱  
を宿していた。

——愛想が尽きたでしょう。

思いがけない淋しい微笑が、私の心を締め  
付けた。

アブノーマルなもの、それは或いは人生の  
薬味かも知れない。そして様々なアブノーマ  
ルの姿態を、人々は愉しんでいる。

然し私は悦子を縛ることに愉しみを感得  
なかつた、虐げられる女体よりも、むしろ、  
自虐する女体に、私は魅力を感じていた。

アブノーマルな性心理の一つに、「切腹」  
への憧憬が有つて。それは、幼い性慾以前の  
然し性的な好奇心が、膨満な自分自身の腹部  
に向けられることに始まり、やがて、満たさ  
れ切らぬ思春期の性慾に結び付いて行くこと  
を、私は最近の或る雑誌で興味深く読んだ。

同じ雑誌の旧い号で、信太蓉子という若い  
女性の、そういう悦びを悩む手記も見た。ナ  
ルシズムと自虐への憧憬に根ざす性衝動が鈍  
い刃物で切腹の姿態を真似ることによつて、

彼女に一種の陶醉を味わしているのだった。

悦子が此の型の女性であつてくれたら——と、時々私は空想していた。

偶々此の夜の金時計を廻る對話が、私に可能性を暗示した。

次の日曜の夜「開花の契機」と題された、

其の人の手記を私は悦子に読ませた。

——羨ましいわ、蓉子さんて方、

悦子は悩ましく眼を潤ませた。私の予想通り、彼女は明らかに興奮していた。そういう彼女に、私は切ないほどの、愛おしさを感じないでは居れなかつた。

——ねえ、何故もつと早く読ませてくれなかつたの。

悦子の瞳が私を軽く睨む。

——だって、知らないじゃないか。

——貴方が悪いのよ、此の間時計なんか開けてみせるんだもの、いけない人ね。

二つに折つた雑誌を、バッグから取出した風呂敷に包み込んだ、えんじに千羽鶴を白く抜いた風呂敷であつた。

——その代り今日は妾の言う通りしてね。

彼女は椅子に縛り付けることを要求した。ふつくらした下腹の方を、私は縛りたかつたが、彼女の言い付け、通り乳房を強く緊めた。

柔かい肌に腰紐が艶めかしく喰い込み、彼女は切なげに吐息をもらして、私の愛撫を全身で応えようとして待つのだつた。……

別れぎわ、いつものように沈み込んでいた悦子は、

悦子は、

——明日つから無休よ。

ぽつりと云つた。秋の観光期を迎えて忙しいのであつた。

——じゃ今度いつ？

十日と会わずにはいられないような気がした。その思いは彼女も同じらしかつた。

——次の次の日曜、休暇貰うわ。それ迄おとなしくしてね。

——悦ちゃんこそ、

可愛く睨むと、彼女は別れて行つた。あの雑誌を、頬を火熱らせて読む彼女を想像し、私は切ない疼きを覚えるのだつた。

約束の午後、とある駐車場で待つていた私の前へ、ネイビイブルウのウールでジレーと対のスカートを着けた悦子は、明るく微笑いかけていた。

雑誌を包んだ風呂敷か、脇にさも大切なもののように抱え込まれている。

——何だ、あの雑誌なら上げるよ、

——うゝん、

叱ツ、と云うように唇を指で抑え、彼女はいつもの室へ入る廊下を先に歩いて行つた。

サイドテーブルにバッグと風呂敷包みを置くと、

——是、もう覚えちやうほど読んだわ、でも家においとけなくてよ、見つかつたら大変なもの、

私は苦笑してベッドに腰を下した。

——家では何読んでるの？

——何も読むひまなんかないわ、くたびれるのよ、有ることは沢山あるけど、文学全集なんか……だって、つまらない、伏字だらけ。

そう言いながら、何時ものようにパンティースーツになると千羽鶴の風呂敷を解いた。

二つに折つた雑誌の間から、巾七分長さ六寸ほどの白い布包みが出て来る。不審の視線を注ぐ私を、彼女は横眼で見ながらさつと片手で布を解いた。さらさらと解けた中から、硬い青白さで鋼の色が私の眼を射た。それは刃渡り二寸余りの切出しであつた。反りをもたぬ刃が、却つて、鋭利で強靱な貫通への意志を秘めているように見える。

私は驚いて彼女の手から引つた。切



先はもとより、刃も磨り減らされて、切れる憂いはないようであつた。

——心配ないのよ、此の前言つた埋め合せに、蓉子さんて方のようにして見せただけのよ。

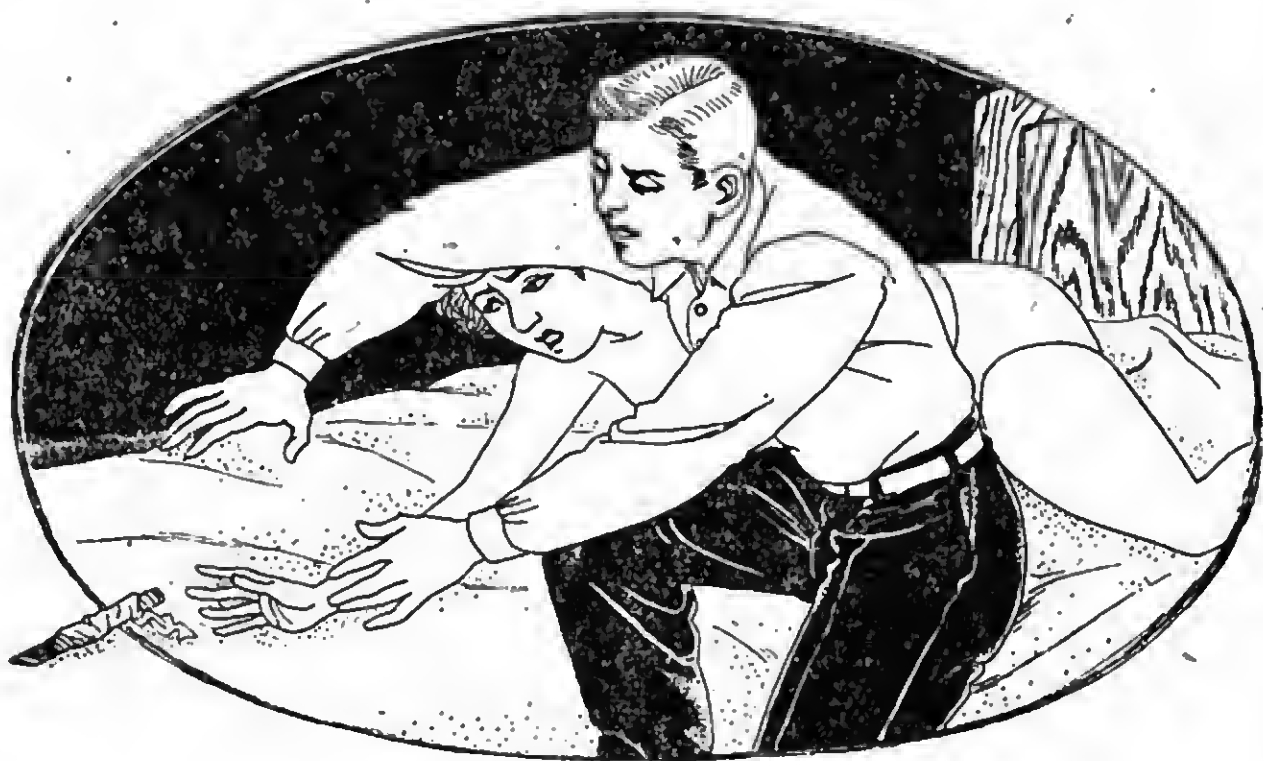
言いさして首を振り

——本当は、見てほしいの、

ベッドの白いシーツの上に、膝を揃えて坐るのであつた。

昂奮で息詰るほどの苦しさを私は覚えた悦子の柔かい、然し弾み切つた下腹を、硬く冷たい刃先が走り、薄赤い血腫れを作つて行く、而も、それが彼女自身の手で為される……女体の、言い知れぬ哀しさ、切ない美しさを、予想せずには居れないのである。彼女の仕草を見つめながら、固唾を呑む、という形容が是ほど、ぴつたり当てはまることは無かるう、と、ふと思つた。

柄も鞘も無い切出しの、握りに当る部分を布で巻くと、彼女は逆手に把つて、左手でパンテイスをずらした。ゆつくりと太腿の中ほどまで押し下げると、悦子は眼を閉じて下腹を撫でた。ふさふさと美しく縮れた茂みが、真珠色に輝く爪で、梳き分けられるようにも見える。膝の上で握りしめていた切



出しの切先が左の下腹に当てられていた。切れない、と知りつゝ私は、掌に汗の滲む心持であつた。彼女の右手が小刻みに震え、激しい昂奮と闘っている心の動きが、ありあ

りと感じられる。力を込めて張り切らせた下腹の柔かい皮膚が硬く非情な刃先に押されて深く凹んで行く。是以上右手の力を加えたらふつと白い肌が破れ、真赤な血汐が噴き出しそうである。

——じれつたい。

激しく身を悶えて、彼女は呻いた。

——よせ。

小さいが心もち厚い下唇を噛み緊めたまま悦子は、私の声で酔から覚めたように眼を見開くと、ゆつくり刃先を右に引いて行く。下腹の最も豊満な辺りを、すゝと微妙なかけが一とすじ走り、彼女はほつと息を吐いた。童女めいて一途だつた表情に翳が射し、右手の切出しを枕許におくと、

——抱いて、

言いさま、死んで行くもののように体を捻り、斜めに倒れ伏した。むつくりと肉付きの良い背筋を、波のようにうねらせるのであつた。

無言で、すべすべとあたたかい体を抱き起すと、私は彼女の下腹を、そつと撫でた。臍の直ぐ下で、横に一とすじ、血腫れの痕が、いたいたしく私の指先に触れる。

——大切な体を何てことするんだ。

思わずきびしくなつた私の声で、悦子は弾かれたように体を離した。

——もつと、してやる。

眼が凄艶な光りを私の方へ向けていた。枕許の切出しに、また手を伸ばそうとする其の瞬間、私の手の方が先に伸び、切出しを床に払い落していた。柔軟な指が私の掌で悶えた

——バカ、バカ。

わけもなく怒つたように繰り返して、悦子は胸を打突けて来た。乳房が弾み切つていたし、私も昂奮の絶頂に近付いていた。

——妾、「女の一生」を始めて読んで、何だか判らなかつたわ、何が痛く、苦しく、恐しいのか。

悦子は静かに仰臥したまゝ、呟くように云う。私も始めて其の名作を読んだ時のことを思い出した。

——誰だつて判らないのさ、その頃は、未だ十三だつた、と、しみじみ思つた。

——それから間もなくお知り遊ばしましたでしょう、女の何処が痛むものか、

悦子は皮肉な口調に似ず、淋しい笑顔を向けた。

——今だつて知らないよ、

——えゝ、そうでしょうとも、苦しむのは妾一人、口惜しいわ、死にたい。

——死なしやしないよ。

——いいえ妾、死ぬわ、捨てられて。

返事をせずに抱きしめて唇を求める私から彼女は、わざと激しく脱れようと努める。

——妾みたいな女、もうお厭でしょう。さつき止めないでくれたら、死ぬ……むッ……

私は唇で、彼女の唇の動きを止めてしまうのだつた。二人の鼓動を除いては、あらゆるものが静止したようであつた。

離れたとき、彼女はクルリと背を向けた。

——かなしいわ。

静かな、然し思い詰めた声だつた。

肩に手をかけて此方に向かすと、顔だけを背向けた。然し仄かなスタンドの灯でも、彼女の閉じた睫毛の震えが感じられた。

不意に悦子は、がばと俯伏して、肩を震わせた。私は、そつと手を伸ばして、彼女の体へのせた。

起き直つて坐つたとき、彼女は、もう泣いてはいなかつた。ただ臉が、ふつくらと赭らんでいた。

右手を後ろに付いて横坐りに膝を崩した悦子は、左手で下腹の血腫れを撫でた。

——此の辺りが疼く日、女の宿命ね、そんなとき抉つてやりたくなるの。妾を厭になつたら男らしく言つてね。先刻のようにして死ぬわ。止めないでね。

——ばか、そんなこと、させるものか、

——死ぬんだつたら、十文字の方が素晴らしいわね。こうしたらいいのね。

言いざま、彼女は右腕を廻して、いつの間に拾い取つたのか、切出しを鳩尾、雙つの乳房の谷間やゝ下つた辺りへ突立てるような形で当てていた。

——また、危いじゃないか、

止めようとする私の手を、空いている左手で払つて、悦子は切先を、さつと臍の方へ走らせた。さらさらと微かな音とともに、一とすじ血腫れが白い滑かな肌を走つた。

臍に近く、ふつくらと盛り上る辺りで、肌は強く傷付けられ、血が滲みそうに見える。

私は慌てて彼女の右腕を抱え込んだ。もぎ放した刃物を投げ出すと、彼女を抱きしめた私の指先に、血腫れが、十文字に交又する血腫れが、切なく触れた。

——あゝ、切れたらいいのに、刃を残しとけばよかつた。羞かしくて、死にたい。私の腕の中で抗がいがら彼女は呟いた。

彼女の下腹を愛撫しながら、私は、今眼の 辺り見た彼女の自虐の姿態を、夢のように追 つていたのであった。



## 縄 抜 け 【悦虐に悶えて】

川 端 多 奈 子

あゝ、いつの間に寝入ってしまったのでしようか、現実と夢とがごっちゃになつて、私は初めて自分が縛られたまゝ眠ってしまったことに気がついたのです。それも畳の上へじかに素裸のままころがつているのです。襖の隙間をのぞきに行つたまま、きつと眠つてしまつたのでしよう。胸から肩にかけて夏蒲団がはずれていて、そのため身体が冷えて目が覚めたのかもしれません。身体を起そうとして、下になつた方の腕が痺れて感覚のなくなつていることに気がつきました。

このまま、いつまでもじつとしたいというつもりとした気持、何時だろう？、雨も上つたらしく、それにあれだけ賑やかだつた炭坑節もぴたりと止んで物音一つしませんでした。縛られたまゝ、何も知らずに眠つてしまうなんて、私は本当に縛られることが大好きな女なのかしら。最初は皆からお前はマゾだ、縛られるのが好きなんだ、と言われていて、そうかしら、でもと否定するような、あやふやな気持だつたのが、今こんなに雁字搦目に縛られたまゝ放つておかれても余り苦痛に感じないんだもの。

本当にマゾになつたのかもしれない。本当にマゾになつたのかしら。時間もわかんないけれど無性に御不浄へ行きたくなりました。夏とはいつても畳へじかに素肌をつけていると冷たくつて、身体芯まで冷えてしまいます。髪の毛はいつの間にか乾いています御不浄、それに身体中をぎゅつと締めつけている縄の味、上半身に反動をつけて起き上ります。

隣は人の気配もありません。蒲団を蹴つて立ち上りましたが御不浄へ行くのにはこの縄を解かねばなりません。でも痺れたように感覚のなくなつた指では動かさもうにまるで自分の手でないように力が入らないのです。足で御不浄との間の硝子戸を開けようとしてもピツタリと閉つていて足がかりがありません。仕方がないので柱へお尻を当てて足の拇指で棧を押してやつと少しばかり隙間をあけて外へ出ました。そこは二畳ばかりのベランダになつていて、御不浄へ行くのは更にひらき戸を開けねばなりません。素裸で後手に縛られた若い女が真夜中、真暗の室でうろろしている姿なんて本当におかしくなつて仕方がありません動いたせいか、もう御不浄へ行きたくつて、いても立つてもいられません。でも、ノツブを廻して開くドアでは後手に縛られていてのではどうにも仕様がないうす。再び引き返して隣室との間の襖を苦心の末開けて中へ入りま

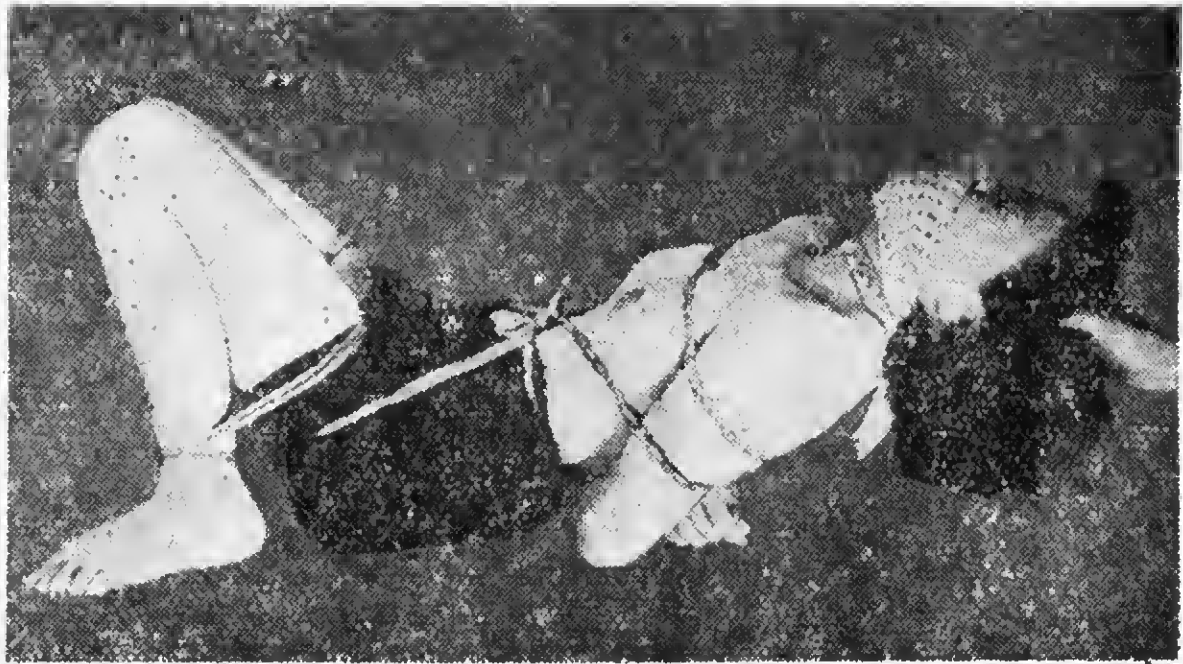
す。お座敷机が部屋真中の一つあるきりでがらんとしています。彼は私一人を置いてきぼりにして帰ってしまったに違いないのです。私を縛ったまゝで放つておいてどうしようというのかしら。

押入れの中にも隠れてはいはないかと、耳を当ててみますがそんな気配さえありません。益々尿意がたまらなく催してきます。下腹がぶうつと膨れてお臍の高がべこんとへこんでいるのが見えます。仕方がないので、机の角へ右腕に掛つた縄をこすりつけるようにしてはすそうとしますが、肌は埋れるように喰い込んだ縄はそんなこと位でびくともしません。裸でいるのに額にじつとりと汗がにじんでくるのです。

右腕が駄目だとわかつたので、今度は左腕の縄目が乳房と腕の間で少し隙間のあるところを机の角へ立てて、胸の空気を全部吐き出して両腕を合せるように胸全体を細めました。肘の少し上にかかつ

ていた縄がじりじりと肩の方へずつてゆきます。数回の繰りかえしでやつと肩から二本の縄がすつぽりとはずれました。あとは後手に両手首だけです。二の腕の縄がはずれると身体のかなしが自由になつたので、手首を右へやつたり左へやつたりしているうちにだんだんゆるんできて、とうとうはずれました。

寝巻を着る余裕もなく、そのまま御不浄へ走つてゆきました。あゝなんという爽快、全身の重荷を一時に下したような気持、最後の一筆を終つた時の気持をもう一度味わいたいという変な慾望を抱く位です。這うようにして帰る寝床、掛蒲団にくるまるとそのまゝ前後不覚に快い眠りにおちてしまいました。「なんだ、縄を解いてしまつたの



か？」軽く失望したような彼の言葉が頭の上でしました。硝子窓ではもう朝日が明るく輝いています。

昨夜の雨は嘘のような晴れ方なのです。私は朝の明るさが無性に恥しくつて、蒲団の襟を両手でしつかりと掴んで顔を蒲団の中へ埋めていました。もつれたまゝに畳の上へ投げ出してあつた縄を彼は解いているのでしよう。縄尻が畳の表に当つて、ぱた／＼という音がしています。

まだこの上、私を縛ろうというのかしら。半ば夢うつゝの中で、そんな事を考えていると、パツと激しい勢で蒲団がめくられましたと同時に二人の口から「あッ」という驚きの声が洩れました。

「なんだ、まだ素裸で寝ていたのか？」

夕は裸で縛られていても、なんとも感じなかつたのに、朝日のさす中で素肌を見られるということにはなんという恥しさでしょうか。

私は「いや、いやッ」と悲鳴を挙げるなり、柏餅のように蒲団にくるまつて息をこらしていました。夕一晚無断で家をあけた事を、何と言いつくしかと考えながら。

(おわり)



股間縛りについての作者が自己の体験を公開した問題作

アブ小説

# 罪 あ る 女

櫻井京一郎

サド性を帯びた男とマゾ女性の心理をこれ程迄深く抉つて人生の哀感をしみじみと味わさせる作品が今迄あつたであろうか、読みごたえあるアブノーマル読切小説として読者に訴えるべく敢てこゝに一搦に掲載した。

1

夏子は洗面道具を入れたビニールの包をかかえて、国電の踏切を駅の方へ渡つて行つた。

商店街は大方店終いをして、飲屋と、一、二軒のパチンコ屋の明りがもれているだけで、十二時近くともなれば、サラリーマンの多い住宅地の盛り場はすっかり淋しくなる。はげしい地響きをたてて電車がホームに着くと、帰りのおそい一団の男女が改札口から流れ出てきてすれちがい、わき目もふらずそれぞれの方角に速足で散つてしまふ。

「こんな時間にお風呂へ行くのもずいぶん久しぶりのことだ」

と、思う。浴場は駅から三分ばかりの所にある。しかし、夏子は駅の改札口の所で歩をゆるめた。彼女の胸はドキドキ鳴っている。そのまゝ出札口の上にかゝつた時間表を見上げるふりをして立止まる。「あゝ、どうしよう」悲しげな吐息をついた。

「お風呂、空いていてくれればいいんだけど……それより、今日お休みだつたらどんなに嬉しいでしょう！」

うさん臭そうな眼で駅員に見られて夏子は仕方なくそこを離れる。浴場の前に来たが、彼女はす通りしてしまふ。幾度も行きもどりしたあげく、女湯の下足箱の様子で多くとも四、五人以上の客が



ないと知ると、思い切つて戸を開けた。

脱衣場の方で、あたりに気をくぼりながらタオルを腰に巻き、それから下ばきをはずした。洗い場を小走りに横切つてタイルの浴槽に片足を入れた夏子は「熱い!」と、顔をしかめたが、唇をかみしめてそのまゝすばやく身を沈めてしまった。

「もう大丈夫。お湯もこんなに濁っているし、これで恥をかかずにすむわ……」

ほつとした面持ちの彼女は、もうもうとした湯気の中に中年の女

が一人身を沈めて、じつと自分を見つめているのに気がついた。それは下も洗わずにいきなりとび込んだ夏子を非難するような眼差しだったので、夏子は、はつと顔を赤らめるのだった。

志賀は寝床に腹ばいになつて、ウイスキーのグラスをかたむけていた。

「おや、早かつたね、本当に行つてきたのかい?」

入つてきた夏子を見ると、そう云つて上半身を起した。夏子は答えなかつた。

「誰にも見られなかつた?」

「おそいから、すいていましたもの」

夏子は志賀の枕もとに膝を折つて坐つた。むせるような湯上りの肌の匂いが志賀の鼻をついた。

「なるほど、本当らしい」

「すつかり落してしまつたわ。もうあんなことなならないでね……」

「ふん、まあね……」

志賀は夏子を抱き上げて唇を近づけた。仰向いた彼女の睫毛が明るい電燈の下でかすかに震えた。

「結婚、して」

それをきくと志賀は夏子のからだを投げ出すように放した。

「またそれを云うのか? お気の毒だが何度云つても無駄だよ。女房こそ失くしたが、ぼくにはちゃんとした家庭がある」

「じゃ私はちゃんとした女じゃないとおつしやるの?」

「そんなことは自分に聞いてみるがいい。要するに夏子はぼくのおめかけに過ぎないのさ。二号だ。いや、三号、四号あたりかも知れ

ない」

「私は生活に困つてあなたのおめかけになつたんじやありません。母と妹を養うくらいのお金はまだあります。私はただ……」

「結構なことだ。おまえはぼくを愛している。祝福しよう。二人のために——だが、めかけが旦那を愛しておかしいことがあるかい？そして、ひる間のことを忘れないように、夏子のからだにはどんな印がつけられていたか、夏子はぼくにどんなことばをささやいたか……」

「……………」

「ぼくは、おまえがあゝいう女になることを望むし、すでにおまえはそうなりかけているんだ」

「私には、わからない……あなたはちつとも私を愛していない、しかも私をあんなにひどい目にあわせる……それなのに、私はこんなにあなたが好きなの……」

「その通り。それですべてO・Kさ。なんて物わりのいいお嬢さんだろう」

「いいわ、私あきらめずに一生の間待つています」

「ハハハ……、たぶんそういうことになるだろうよ。だが、ぼくも夏子を手放さないぞ。ただで奴隷を手放す主人がどこにある、逃げたら殺してしまうとも！」

「じゃ、やつぱり私は一生あなたの奴隷なの？」

「もちろんさ。さ、つまらない話はやめて、それを脱ぎなさい」

「今夜は、いや！」

身をひいて逃げだす夏子を引きもどして寝床の上に押さえつけると、手早く服を脱がせはじめた。スカートの合せ目が音をたててほ

ころびた時、夏子は「かんにんして……………」とつぶやくように云つて、ぐつたりと身をまかせた。

「なんだ、もう観念しちまつたのかい？ おまえみたいな女は、強盗に入られて、ほれ……ここを……こんなふうになれたら……もうかんたんに参つてしまうんだらう？ ほら……どうだ？」

「あ、や、やめて……やめて……」

「なんだ、もう、こんなに……………」

「……………」

志賀は脱ぎすてた夏子の下ばきで……………き、その片手をのぼして夜具の下から細引をとりだすと彼女の両腕を後にねじ上げた。胸には縄を廻さず後手の縄を首にかけて両ひじが水平になるまで引き絞つた。その縄を腹へ廻し、おへそのあたりで固い結び目をこしらえ、余りを夏子の目の前に示して云つた。

「ほら、こいつでどこを縛るのかわかるかい？ さあお嬢さん、そうおしとやかに膝を合せて坐つちやだめだ。立つんだ！」

夏子は腹の縄を引かれてよろよろと立つた。

「じゃ仕事がやりよいように、あんよを開いてもらいましょうか」志賀の手は夏子の膝を割つて、その二本の細引を前から尻の割目に廻し、腹の縄にからげて力一ぱい引きしぼつた。首縄にひかれてぐつと仰向いている夏子に、下を向くことは不可能だったが、やけるような股間の痛みでその恥しい縄の掛け方を知ることができた。

「い、痛い！ 痛いの！ そんなところを……あなた、ゆるめてちようだい！」

志賀はもたえる夏子のからだを前から後からむさぼるように眺めた。夏子は痛さよりも恥しさが勝つて——殊にうしろに回つて縄の

喰い込んでいるそんな場所を見られるのは、女としてたえがたいことなので、志賀の動きにつれて体を廻らせて、尻を見せまいとした。

「おや、敵にうしろを見せまいとのお覚悟とみえる」

志賀は上気嫌でそんな軽口をたふきながら意地悪く夏子のまわりをぐるぐる廻った——やがて、志賀は鏡台を部屋の中央に運んできて、鏡の面を水平に倒した。首縄をとかれた夏子は、それを中腰で跨がされて、二本の細引が女の最も大切な場所を、どのようにして痛めつけているのかを、自身の眼でのぞき込まねばならなかった。

## 2

志賀は毎週、土曜日の午後から日曜にかけて夏子の家に泊った。

だからウィーク・デーは夏子にとつて全く自由なのだ。時々、淋しくなつて実家の母の許へ泊りに行く以外、彼女は独りで外出することとはめつたになかった。退屈な毎日を読書にまぎらわせた。朝から「アンナ・カレーニナ」に読みふけり、作中の女主人公に魅せられるあまり時を忘れ、すっかり薄暗くなつた部屋にはつと我に返つて、夕飯の仕度立つのだが、女ひとりの食卓にはこれといつて色どりもなく、冷えたごはんにつくだにをのせて頬ばりながら、思わず涙ぐむこともしばしばだった。他に男を見つけることなど、思いも寄らず、ただ、土曜日の午後が待ち遠しかった。

まだ四十には手のとどかぬ志賀は、その陰影の深い温厚な顔立ちのために、むしろ年よりは老けて見えた。夏子は、以前勤めていた銀行の取引関係から志賀を知つた時、十五も年のちがう志賀のたくましい生活力と、大学教授のような智的な風格にぐんぐん引きつけ

られて行く自分を意識して途方にくれた。妻子のある男に恋をするなんて許されないことだと、夏子は感情を圧えに压えたが、とある晩のこと、志賀にたわむれに大きな齒跡を、二の腕に印された時、夏子は痛さとうずくような快感に身震いして、その夜、志賀にすべてを許した。

「私は一生、あなたの愛人でいます」

夏子は固く誓うのだつた。

夏子が中央沿線の住宅地に一軒の家を持たされてから半年ほどたつて、志賀の妻が病死した。志賀には幼い女の児が残された。夏子は彼が自分と正式に結婚するものと信じていた。しかし頃合いを過ぎて志賀はそのことを、おくびにも出さなかった。夏子のほうから思いきつて持出してみると、意外にも一言のもとに拒絶された。傷ついた夏子はその場に泣き伏した。

「なぜなの？なぜなの？ 私には資格がないと云うの？ それとも私がお嫌いななの？」

「ぼくは、おまえに平凡な妻になつてもらいたくないんだ。もう云つてもいい頃だと思ふが、ぼくはおまえを、ある理想的な女に完成するつもりでこうして交際をはじめたんだからね」

「理想的な……？ それならば、なおさらのこと、私を妻にしてくだされば」

「では、はつきり云おう。おまえにはぼくの妻としての資格がないし、ぼくは妻としてはおまえを愛することができないのだ。おまえはおめかけとして生れついたような女なんだ」

「あなたは、本気で、おつしやるの？なんて、ひどいことを……」



「ひどいかも知れないが、本当のことだ。やがておまえもそう信ずるようになる」

「そんなことなんかおつしやらないで！……でも、私、あなたにそうしてじつと見つめられるとからだがすくんでしまうの。今まで考えていた自分自身がみんな嘘で、あなたのおつしやる私が本当の自分のような気がしてくるの。おしえて、なぜなの、これは？」

「ぼくにはものの本質を見ぬく力があるからだ。ぼくはあらゆるとりすましたものの仮面をひきはがして、その内にひそむ獣性をばくろしてやることができる」

「私どうしよう？ このまゝでは、あなたの好きな様な女にされてしまいそう、まるであなたの奴隷のように……」

「夏子はそれを望んでいるよ」

「もうやめて！ 私、こわい……」

その次の土曜の晩、夏子はもう一度結婚の話をもちだしてみた。志賀は、にべもなくそれを拒絶して、唇の端に冷笑を浮かべながら、手さげカバンから細引きをとり出したのだ。彼がそれを手に夏子の背後に廻った時も、彼女はぼんやりしていた。両手をうしろに廻され、×字型に縛られながらも、夏子はぼかんと口を開いてされるままになつていた。その口に猿轡がかまされたとき、彼女は自分がどうされたのか、全く合点のゆかない面もちで、ぱつちりと睫毛の長い物問いたげな眼を志賀に向けていた。

その次の土曜日——というのは、この小説の冒頭で夏子が洗面道具をかゝえて深夜の踏切りを渡つて行つた日の、午後のこと。



志賀は買物の包と、菓子折をさげて居間に通つた。

「あら、私へのおみやげですの？」

「いや、よそへもつて行くんだが——そんなことより、今日はおまえに少し教えることがある。ちよつと来ておくれ」

と、志賀は着がえもせずに寝室に入つた。つづいて入つて来た夏

子にスカートをとるように云いつけるのだった……彼女の腰から下はなまめかしいピンクのスリッパにおもわれていた。

「それから、パンツも脱いで。もしはいているのならね」

夏子はぱつと頬を染めたが、はいていたのだということを実証するためにも、それを脱いで見せねばならなかった。やがて夏子はスリッパの裾を自分の両手で腹の上までたくしあげて立つことを命ぜられた。

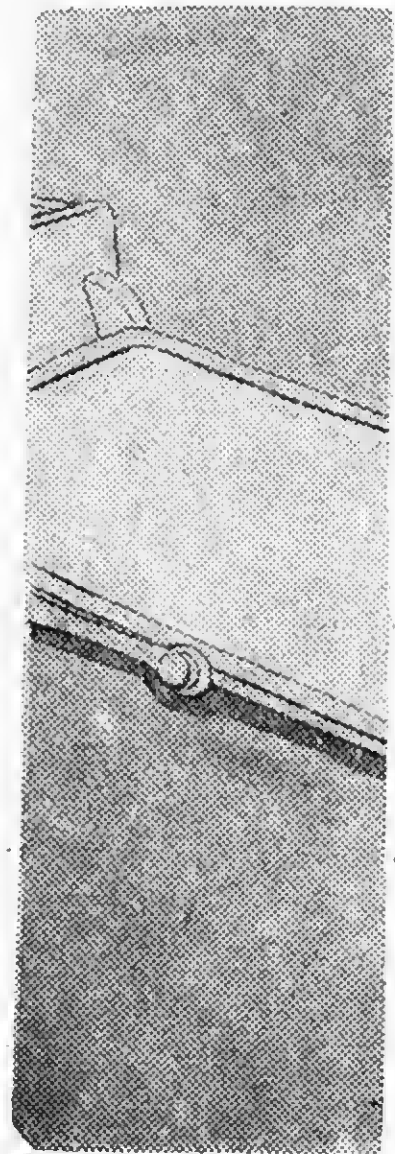
いつのまにか墨汁と毛筆を手にした志賀がその前にしやがみこんだ。

「あなた、何をなさるの！」

それには耳もかさず、彼はまるでカンヴァスに向う画家のように、たつぷり墨汁を吸った筆をゆたかな夏子の下腹部に走らせはじめた。最初、彼女は腰を引いて筆先を逃れようとしたが、志賀の左手にしつかり腰をかゝえられると、身動きひとつ自分の意志通りにならないのだった。やがて夏子は紙のように「裏がえ」をされ、お尻の上に走るそのくすぐつたさに、思わずうめき声をもらさねばならないほどだった。

「さあ、見てごらん」

云われるまゝに、姿見の前に立つたとき、夏子をはじめて自分の皮膚の上に書き散らされたものの意味を知ったのだ。小さな文字で彼女にはとうてい口にするのできない言葉が一ぱいに書きしるされていたのだった。一字一字読み下しながら、夏子は恥しきで体中がもえあがるような気がした。殊に、首を後に向けて鏡の中に自分のみごとなお尻をのぞき込んだ時、夏子は浅ましさに、その場に泣き伏してしまつた。



「きたない、きたないひと！ 私、死んでしまいたい……」

志賀は落着いて煙草に火をつけた。

「そう逆上してはいけない。おまえは、そこに書かれた言葉を否定することはできないはずだ。口では否定しても、その皮膚みずからが思い当ることがあるはずだ」

「うそです！ そんな……私が淫売婦だなんて、私が……」

それ以上の言葉は、夏子にとつて口にする勇氣がなかった。

志賀は突然、煙草をもみ消して、夏子の肩にやさしく手を置いた。

「ぼくが悪かった、ゆるしておくれ。ちよつとおまえを困らせてみたくなつただけのことなんだ……しかし、本当は、夏子が悪いんだよ、夏子はある可憐すぎるんだもの……」

志賀は夏子の横顔に熱い息をかけながら、耳たぶを噛んだ。足の爪先までしびれるような戦慄が走つて、夏子はもう何を考える力も失つてしまふのだった……涙の一ぱいたまつた眼を大きく見開いたまま、自分から志賀に唇をおしつけて行つた。

——唇が放れたとき、志賀はもう立ち上つていた。  
「さあ、仕度しなさい、一しよに出かけよう」

夏子が志賀と連立つて散歩や用足しに出るのはめずらしいことではなかつた。殊に志賀の妻が亡つてから、それは大げらになり、途すがらお互いの知人にばつたり顔を合せることもしばしばだつた。

志賀はもとより平気だつたし、夏子も別にそれを恥じなかつた。

二人は夏子の家を出て往来でタクシーをひろつた。

「世田ヶ谷の経堂へ」

「あら、経堂つて……母のところへおいでになるの？」

「久しぶりで義理を果そうと思つてね」

志賀はかゝえてきた包と菓子折を指した。

「そんなことなさらなくて、よろしいのに」

玄関には、夏子の妹のユリ子が出むかえたが、姉の後にいる志賀を見るとびつくりして家の中に引込み、母を伴つて再び現れた。

「まあまあ、志賀さんも一緒に！ほんとうによくおいでくださいました。さ、どうぞおあがりなさつて——ユリ子さん、お帽子をお持ちして——さあ、どうぞ」

すつかりあがり気味の母を見ながら、夏子は幸福な微笑を浮かべた。（この母を説得するのに、私はどれだけ苦勞したことだつたらう）

そろつてお茶のテーブルについた時、志賀とマリ子を中心に演劇の話がはずんだ。ユリ子は大学で演劇を専攻していた。歌舞伎、新劇から話題がシエクスピア時代の劇場の構造がどうの、中世のペーチェントとギルドとの関係がどうの、劇場気象学がどうのと、こみ入つくと先ず母が口をつぐみ、つづいて夏子が脱落した。あとはユリ子と志賀の独壇場だつた。志賀は少しも知識をひけらかす態度でなく、年頃の娘の虚栄心を満足させてやるための深い心使いから、

時々正確な知識をもつてユリ子に応じている様子が、夏子にはよく理解できるのだつた。それは丁度姪のいい話相手になつてゐる優しい叔父という恰好だつた。（そうだ、私は志賀のこういう男らしい落着いた態度にぐんぐんひきつけられて行つたのだ）と彼女は考えた。

だが、その時、ほゝえみかけた夏子の頬に突然微笑がこわばつてしまつた。彼女の目の前を、黒い、露骨な文字が、電光のようにかすめ通つた——おめかけ？ 淫売婦？……彼女の意識は下半身に集中して、スカートの下、その白いゆたかな自分の皮膚の上に、今なお生々しく印されている言葉が、打消しても打消しても、悪魔の翼のように彼女をおそうのだつた。コーヒー・カツプを持つ手が震えた。ユリ子の澄んだ視線に会うと、再び顔をあげる事ができなくなつた。（このことを知つたら、二人ともおどろきのあまり気を失うにちがいない、自分は生きていられないだろう）「いや、お姉さま！きたないひと！恥しくないの？」ユリ子の声がそう云つてゐるのかのように聞えてくるのだつた。

夏子は、女学生の頃、制服の下にはじめて月経帯を秘めて教室に出たとき、ちやうどこれと同じような苦しみを味つたことがある。すべてが美しく、自分ひとりが汚れて見えた。（そうなの、ユリちゃん、かんにんして……私は偽善者なの、罪人なの、淫売婦なの……私はいつもぬれてゐるの……）「おまえはそれを否定することはできないはずだ」

夏子は心を他へ外らそうと努めた。だが、そんな恥しい秘密を包んで肉身と向き合つてゐることは死に勝る苦痛であつた。全身に脂汗が滲んだ。志賀は夏子のそんな様子に時折すばやい視線を投げ





た。夏子には、自分の狼狽を、志賀がすっかり見抜いているように思えた。いや、むしろ最初から計画的だったのではないかとさえ邪推されてくるのだった。

「憎いひと！ ざんこくなひと！」

夏子は唇を噛んだ。

## 3

ガラツと、玄関が開いて、

「お姉さま、いらつしやる？」

と、ユリ子の声だった。

「まあ、ユリ子さん？ どうぞ、あがつてちようだい」

「お義兄さま、まだ？」

と学校の帰りらしいユリ子がノートの包をかゝえて入ってきた。

「もういらつしやる時分だけど、何かご用？」

「あらお姉さま、ご存知ないの？ 今日、三越劇場へ連れて行つていたゞくお約束だったの。文学座の公演なのよ」

「へえ？ 初耳だわ。あなた、いつうちにお会いしたの？」

「こないだお葉書いただいたの」

「そう？」

ユリ子はオーバーを着たまゝ、学生らしい白いソックスをはいた足を横座りにして火鉢に手をかざした。

「いま、お紅茶いれるわね」

二人は何杯も熱い紅茶をすゝりながら、何とはなしに口数少く向き合っていた。

「なぜ、結婚、なさらないの？」

ちよつとあらたまつた口調でユリ子が云つた。

「私のこと？ なぜつて……」夏子は狼狽した。

「……どちでも同じことよ、今のままでいた方が、氣持がらくでいいわ」



「そうかしら？　でも、私にはそうは思えないわ——お義兄さまはどうお考えなの？」

「どうつて……そんなことまだ話したことないもの……でもユリちゃん、あなたがそんな心配することないじゃありませんか。あなたには、まだわからないことですもの」

「いいえ、私、よく知つてゐるわ」

ユリ子は落着いてそう云うと夏子の眼をのぞき込んだが、すぐに眼をそらした。夏子はその視線を追つて、

「なんですつて？」と、思わず固い声になつたとき、ガラツと玄関があいて、耳なれた志賀の靴音だつた。

「やあ、ユリちゃん、失敬々々！　会議があつたもんで、すつかりおそくなつちやつた」

志賀は部屋に入るなりそう云つて火鉢に手をかざした。

「ほくにも熱いのを一杯たのむ。それからすぐに出かけよう」

志賀が紅茶を飲みながらユリ子と芝居の話を始めたのをしおに、

夏子は着がえに立つた。

丁度スリツブ一つになつてゐる所へ、オーバーを着けた志賀が入つてきた。

「これ、夏子への贈物」

と、紙包をひろげたのを見ると、ピンクの絹の上に銀糸の縫取りが星のように輝く、まるでレヴィユー・ガールが用いるようなパンティだつた。

「まあ、きれい！」

と眼を見張る夏子が手にとつてみるひまもなく「さ、はいてごらん」と、志賀は彼女の前に膝まづいてゐた。……夏子はその腰廻

りと両裾が、ふつうのゴムテープではなく、フサのついた美しい絹紐で結ぶようになってゐることを知つた。少しきつすぎるのが氣になつた。「ゆるめて」と云おうとした時、志賀は夏子の裾をおろして、脱ぎすてた白いネルのそれをひろいあげ、ちよつと鼻のところへもつていつた。

「ごらん、こんなによごれてゐる」

「まあ、いやなかつた……」

夏子は首のつけ根まで紅くした。

芝居が終つて、三越を出た三人は、ネオンの輝く大通りを日本橋から銀座に向つた。並木通りでは一ヶ月も早いクリスマス・デコレーションが路行く人々の目をうばつてゐた。

数寄屋橋近くの、とあるレストランに入つて、テーブルについた時夏子は、つと席を外して化粧室に立つた。先刻からがまんしていたので、つい立てのかげからは思わず小走りだつた。

——下ばきを降ろそうとした時、夏子はそれが丈夫な絹紐でしっかりと結ばれてゐたことを思い出した。見ると、結び目は志賀の手で何重にも固くこま結びにされていた。

「あゝ、どうしよう……」

あせればあせるほど、結び目は固く肉に喰い込んで、きやしやな夏子の指先は生爪がはかれるような痛さだつた。——彼女は途方にくれて白いタイルの床に立ちつくしてゐたが、外からのノックにあわててそこを飛出してしまつた。

青ざめてテーブルに帰ると、志賀が意味あり気な眼で笑いかけてきた。（すると、彼はわざとあんなことをしたのかしら？　でもまさ

か。

「ユリ子さん、あなた、ナイフかハサミ持っていない？」

「いいえ」

「なにするんだね？」

「なければ、いいの……」

スーブが運ばれて、会話が中断された。

デザートがすんでユリ子が化粧室に立つたすきに、夏子は志賀の耳もとにさゝやいた。

「あなたつて、ひどい方ね、ひもがどうしても解けないのよ……」

「それは、何の話だね？」

「ご存知のくせに……パンティの紐のことよ」

志賀は事もなげに笑いだして、とり合おうとしなかった。

「まるで大きな赤ん坊だね。そのまゝやつてくるといいや」

西銀座の喫茶店に入つた時、夏子はもう一度手洗いに立つた。

落着かねばいけないのだと自分に云いきかせて試みたが同じことだった。彼女は小娘のように地団駄をふんだ。一度そこを出て女給の一人に耳うちした。

「ナイフでございますか？」「かしこまりました、少々お待ちください」

と、女給が奥へ入つたとたん、「さ、出よう」という志賀の聲がして夏子は腕をとられてその店を連出されてしまった。ジャズのレコードが流れ、クリスマス気分はやくも街中にあふれたが、夏子にとってそれは遠い世界のできごとだった。

「もう帰りましょう！ ユリちゃん、ごめんなさい、私少し気分がわるいの」

「まあ、お顔が真青！」

「困つたね、冷えたんだろう。じゃそこで温いものでもたべて帰ろう」

「私、もうたくさん！ 何ならお先に帰らせてもらいますわ」

「困つたわがまゝだね。まるで大きな赤ん坊だ。おむつを当てて、乳母車にでも乗せて歩かなくちやならない」

夏子はぱつと顔を赤らめて妹をぬすみ見たが、彼女は単に冗談と解したらしく、無邪気にほゝえんでいた。

新橋駅でタクシーをひろつてユリ子を帰すと、志賀は黙つて銀座の方角へひきかえしはじめた。夏子はもう恥も外聞もなかった。

「あなた！ 私、もう歩けない……」

志賀は落着いて云つた。

「日比谷までがまんしなさい。何とかなるだろう。さ、もつとしやんとできないか？ 人が見るじやないか！」

夏子はその二十分ばかりの時間が何時間にも思えた。文字通り半死半生の気持で日比谷公園にたどりついた。

常夜燈の光がほのかにとゞく植込みのかけに夏子を導いた志賀は裾をあげさせて結び目を解きにかゝつた。……夏子がいつ果てるとも知れぬ恍惚とした解放感に身をまかせている間中、志賀はその背後に立つて、高々と笑声を上げていた。

## 4

翌朝、志賀が眠っているうちに、夏子はあの奇妙な貞操帯が二度と自分を苦しめることのないように、ゴム紐を通してしまった。いまゝで、何かの模様だと思つていた銀糸の縫取が、実は英語の文字であるのに気がついた。the smoothest placeと、my haleとい

う単語から想像すると、それは恥しい性質の文章とわかつたが、彼女のもつているコンサイスには出ていない隠語が殆んどだつた。

年が暮れて新年を迎えたが、夏子ははじめて囲われた者の肩身のせまい正月を送つた。元旦は実家に帰つたが、母子水いらずのカルタにも心が浮かなかつた。

四日に志賀が来た。いきなり部屋に連れ込まれて晴着のまゝ後手に縛り上げられた。せつかくの髪が無残に乱された。

翌朝、夏子は志賀のために心をこめてこしらえた雑煮を、便所の中で食べねばならなかつた。志賀の表現によれば「上から、入ると同時に、下から出る」ようにおもちを口へ入れねばならないのだ。彼女にとつてそれは大へんなげいとうだつた。胸がむかついて何度のももどしそうになるのを、無理に呼吸を止めて、涙と一しよくたにのみ下すのだつた。

「どうだ、わかつたろう？ 夏子はそういう女なんだ」

戸の傍に立つて一部始終を眺めていた志賀は、夏子がはしを置いて落し紙に手をのびした時、ゆつくりした口調でそう云つた。夏子には、たゞ自分の生理が悲しく思われた。志賀をうらむ気持は、なぜか無かつた。（これが私にふさわしいお正月なのかも知れない……）

また、或る日、夏子は自分の経血を吸つたガーゼを、白いマスクの内側に当てて、口と鼻をおゝわねばならなかつた。そのまゝ銀座を歩き、（志賀の表現によれば「上も下も汚れたまゝ」）日比谷公会堂でベートーヴェンの「運命」を聞かねばならなかつたのだ。

夏子は次第に公然とあらゆる方法で恥しめられ苦しめられるようになった。だが志賀は彼女をたゞいたり鞭打つたりは決してしない。自ら手を下すことといえ、縛る時くらいのもので、その他すべての責め苦は殆んど夏子自身の手で行わねばならないように仕組まれていた。志賀が夏子を縛る時は女にとつて最も恥しい場所に常に意識を集中させておくような縛り方——あの股から尻の割目にかけて縄を廻す方法を用いるのだつた。むしろ、手も足も自由のまゝ、そこだけを縛られて、その上に服を着け、例の散歩に連れ出されることの方が多かつた。これは夏子にとつて一ばんつらかつた。歩いたり腹をおろしたりするときの痛みばかりではない、タイトのスカートをはくと、はつきりとそれとわかるほどに縄目が浮いて見えるのだつた。常に背後に氣を配らねばならないのだ。志賀はこういう時に好んで妹のユリ子も散歩にさそつた。

次から次と新しい方法で恥しめられる毎に、彼女はますます自分の肉体を悲しいと意識した、何ヶ月か前、志賀の手によつて下半身に黒々と書きしるされたあの恥しい言葉通りの自分を見出して、はつと胸をつかれることも幾度かだつた。——毎週悪夢のような土曜と日曜が過ぎると彼女には魂の抜けた一個の肉塊だけが残された。

「罪ある女」——夏子はしだいにそんな言葉に酔つて行つた。

## 5

夏子は、熱に浮かされたように、何かを求めて夜の街をさまようようになった。それが至上命令であるかのように、ハンド・バッグの中にはきちんと巻いた細引が入れてあつた。

有楽町、新宿、渋谷、上野……そのごみごみした裏町は、それなりに整頓されていて、パンパンにもごろつきにも、それぞれの規律があるように見えた。それ以上のことは夏子にわかるはずもなかった。

ある夜のこと、彼女は上野のとあるバーでポートワインのグラスを前に腰をおろしていた。なぐめ向いにいたサラリーマン風の男が大きな吐息と一しよに、夏子の顔へ煙草の煙をはきかけてきた。外



つたとき、

「私を縛つてみてくださいませんか？」

男はますます眼を丸くしたが、夏子のさし出す細引をだまつてうけとつた。男は、おそらく女を縛ることなぞ初めての経験なのであるう、あまりの刺戟の強さに声も出ず、不器用にふるえる両手を夏子の云うまゝに仿かせた。だらしなく胸の縄が外れたり、脚にからまつたりした。彼女はじれつたかつた。それでもどうやら後手の型が、

国映画によくあるやつだつた。そういえばその男も、名は忘れたが何とかいうアメリカの男優に似たところがあつた。連れ立つて外に出た。連込み宿は目と鼻の間だつた。狭い廊下を案内されながら夏子は何の感動もなかつた

「私、ご不浄へゆきます。いつしよにいらつしやいまん？」

男は、眼をまるくしたが、黙つてついてきた。

「ごらんになつて、結構よ」

せまいドアの中で男は犬のように身をかがめて、最後の一滴をも見逃すまいとした。夏子が渡すうすいペーパーで云われる通りにしながら、男はかすれたような声でつぶやいた

「すてきだ……」

部屋にかえつて、シユミーズ一つにな



できあがると、夏子は自分から脚を開いて、股の間に縄をかけさせもした。だが、いつものあの焼けるような股間の緊縛感には、ほど遠かった。何よりも彼女に幻滅を与えたのは、バーで見た時とはうって変った男の様子だった。その顔は緊張のあまりみにくくこわばり、苦しげに開いた口からは犬のように荒い息をふきかけた。

「す、すてきだ！……」

「どうもありがとう。ほどこいてちょうだい」

（なにが、すてきな！）自ら進んでこれほど恥しい姿になった女を、この男はなぜ軽べつしないのだろうか？……胸がふさがるほど、志賀が恋しかつた。

夏子はさつさと服を着ると、引きとめて住所をたずねる男をふり切つて廊下に出た。ホテルをとび出してすがすがしい春の夜の空気を一ぱいに吸込んだ時、悪夢からさめたような夏子は、たつたいまどんな危険に自分が身をさらしていたかに、改めて気がついた。暗い不忍池のほとりを一散に電車通りに向つて走つた。

6

ある日のこと、夏子は久しぶりで世田ヶ谷の実家を訪れた。疲れ果てた神経をゆつくり休めたかつた。母は外出の支度をしていた。

「あゝ夏子さん、いいところへきてくれたわちよつと用事ができてね、ユリ子もおつつけ帰ると思うけど、それまで留守番たのむわ」  
独りになつた夏子は、子供のよう縁側で近所の小犬と遊んだり台所でつまみぐいをしたりした。

やがて退屈した夏子はぶらりとユリ子の部屋に入つた。壁にピンで止めたイブセンの肖像画の隣りに、美術雑誌から切りぬいたシヤ

ガールのサーカスの画が額に入つていたりして女学生らしくきちんと整頓された部屋だった。片隅の洋ダンスは以前夏子が使つていたもので、当時の位置もそのまゝだった。手もちぶさたの夏子は扉をあけてはめ込みの鏡をのぞいたり、引出しを開けてみたりした。一ばん下の引出しには洗濯した下着類が入れてあつた。隅の方に丸めてあるピンクのものに何気なく手がのびて、見るともなくとりあげてみると、それとわかるかすかな匂いがして——たしかにO・S・Sで売っている米国製のバンドだった。

「まあ、女学生のくせになかなかしやれたの使っているのね……」

夏子はくすぐつたい思いでそつともとの場所へもどした。そのとき夏子の手が何か固いものにふれた。とり出してみると、それは刺繍に用いる丸い木の棒で、なにか銀糸で刺繍をしかけた絹のものがはめてあつた。夏子とはつさに、どこかで見たことがあるような……という気がした。

——それは、いつか志賀が夏子に贈つて苦しめたあのパンティと寸分ちがわなものであつた。しかも、そこに刺繍されかけている縫取りの英文まで……

夏子は息のとまるほどびつくりした。……まさか……いや、しかし、これは目の誤りではないのだ。夏子にはユリ子と志賀の関係がさまざまに思いえがかれて、いつも三人で散歩する時のユリ子の無邪気な眼差しや微笑までもが、深い悪意のそれとして、走馬燈のように夏子の心をかすめ通るのだつた。……しかし、まさかユリ子……あゝ何かの間違いであつてくれればいいのだが……

「ユリ子さん、これは何なの！」

ユリ子が学校から帰ると、夏子は震える声を無理に押えて詰問した。ユリ子はハツと顔色を変えて姉の手からそれをひつたくると、「お姉さま、ひどいひと！ひとのするにそんなとかきまわすなんて！」

「それは、あやまるわ。でも、これは、何なの？誰に教えられてこんなことしているの？汚ない子！汚ないユリ子さん！不良よ、あなたは！……はつきり、おつしやい、誰なの？まさか志賀……」

両手で顔をおおつて泣いていたユリ子は突然キツと面をあげて

「お友達にたのまれたの……私のアルバイトです。お姉さま、いまなぜ志賀さんて、おつしやつたの？ねえ、なぜなの？……私があの人に何かしたというの？それとも、あのひとはお姉さまにいつもこういうことをやらせているの？お姉さまこそへんじやありませんか」夏子はうるたえた。

「そ、そういうわけじゃないの……でも、アルバイトつて、こんなものがどうして……」

「GIがおみやげに買つて国へ送るのよ。ばかばかしい、私達はいべつします。でも私達は何か助かなければ満足に本も買えないのよ。指の先でこんなふざけた英語を一字一字刺繍してゆきながら、私達の頭はもつと高い理想で一ぱいな。魂を悪魔に売つたなんて思わないでほしい……私、恥しいとも感じないわ、私とは何の交渉もない人達の間のことなんです。これ、一しようけんめいにやれば一晩に三百円以上にもなるの……」

ユリ子はそういうと、つ、と台所へ立つていつてしまった。

夏子は太い鉄棒で頭をなぐられたような気がした。たまらない！

たまらない！自分は何という女なのだろう、女という名のけだものなのだ……夏子の胸には、何故ともわからぬくやしさがこみ上げてきた。ユリ子のバカ、ユリ子のバガ！なにが理想なのさ！なにが大学生なの！いずれは男に汚されるくせに、毎月こんなみづともないバンドを使つてくるくせに……「高い理想で一ぱいな」はずのユリ子のからだから、いくらかでも動物的な匂いを嗅ぎ出そうとするかのように、夏子はさつきのバンドをしつかりと顔にあてがつて忍び泣くのだつた。しかし、そこにはあのいやな自分のそれの匂いとは似もつかぬ、清潔な乙女の残り香がふくいくとたよつているように思えた。あゝ、ユリ子と自分とでは、もう体臭さえもがこんなに違つてしまつていくのだ……

ユリ子は台所の柱にもたれていた。戦後の学生らしく頭でははつきり割切つているものの、やはり恥しい秘密を見られたくやしさに彼女の心はかたくなになつていた。

青白い顔に無理に浮べたような微笑をたよわせて、夏子が近づいてきた。

「ユリ子さん、ごめんなさい。私、なんにも知らなかつたものだから……でも、もうあんなアルバイトはおやめなさいね。ご本は都合するからね……」

夏子は自分の言葉の白々しさに気がとがめ、一そうみじめな気持ちになつていた。

「そんな心配なさらないで。自分のことは自分でします」  
「あなた、まだおこつているの？」

ユリ子の唇を、自分でも予期しない言葉がもれた。

「おめかけさんのお金なんか」

「あなたは、そ、それを云うの！」

引きさくような声だつた。

ビシリ、ビシリ、ビシリ……夏子は平手で妹の両頬を交互にうつた。

その夜、夏子は独り寝の床で多量の睡眠薬をのんだ。

——水の底から浮上がるように意識がめざめたとき、夏子は病院の一室にいた。

胸の上にびつたり顔を伏せて、志賀が眠っていた。彼はすぐに目をさました。

「夏子、ゆるしてくれ、わるかつた、おまえを見誤っていたのだ。

いやそれよりも、一個の人間を自分の思い通りに改造することができると信じていたばくがごうまんだつた……ばくは、まずこれか

ら自分を改造することに努力するつもりだ……ばくらは、結婚しよう——でも、やつぱり本当は夏子が悪いんだよ、夏子は、あんまり可愛く生れすぎてるんだもの……」

「ごめんなさい、あなた……私よくわかつたの……結婚はしません。でも、せめて私を助けてちょうだい。そして私は独立して一生あなたの愛人でいます……けれども、おめかけと同じようにあなたのお好きにしてちょうだい。ほんとうは……私、その方が嬉しいの……」

「ばかだ！ 夏子はばかだよ……」

「よくなつたら、また私を、縛つてね……」

「縛つてやるとも、はりつけのお仕置だ！」

「まあ、こわい」

夏子は幸福な微笑をうかべて、両ひ深い眠りに落ちてゆくのだつた。

(完)

その夜、僕はある若い人妻のメリヤスのズロースを盗んだのだ。

和服姿のその人のゆたかなヒップにびつたりとまきついた白いズロース、星月夜に、その一枚の白いズロースが僕を苦しめるのだ。

ゆるやかな襷で飾られたメリヤスの小さなズロースに、その人妻の頭文字が月の光に悪魔の微笑を浮かべていた。

しつかり胸に抱きしめると無我夢中で逃げた。

何もない。

アスファルトに誰か靴の音を聞いた。

あわてて小路にかけ込むとバンドをはずした。若い人妻のズロースをはいた。

つめたかつた。肌にびつたりくつついた。

歓喜の鳴咽。

誰も通らない。気のまよいであろう。

部屋に飛び込むなり、夢中でズロースに顔を埋めた。押しつけた。吸いついた。かみついた。甜めまわした。頭からかぶつた。無理矢理に押し込んだ。

ズロースの感触に狂つた。

羞恥と喜悅の戦慄。

わずかでも人妻の香をかぎとりたかつた。

が、香はなかつた。

洗われて香は逃げていた。あまりにも綺麗すぎた。

朝、乾いてきたズロースに、わずかに黄色い尿のしみを見た。

若い人妻の尿のしみだつた。

そつとくちづけした。

うんとよごれているのがほしい。そう思つ

た。

若い人妻はマージャンに興奮するとやたらに脚をひねりたがる。

蜘蛛の網の様に薄いペティコートが僕を悩ませる。

何か混つた香がし半ば厭な臭い、半ば髪の毛と衣裳より来る白ばらの香り。

ナイロンブラウスに、引き締つて丸く突き出たふたつの乳房だ。心もちうちふるえる。ばら色の突起した可愛い乳首が見える様だ。

雨がまた激しく降りだした。鎌倉のある一日。

二人が海辺に出ると、僕は若夫婦の居間に忍び込んだ。

ペティコートにふれる手がかすかにふるえ、顔はかつかと燃えて、胸の動気が激しくなる。

乱暴にペティコートをめくる。

よごれた一枚のパンティ。無造作にまるめられた薄い小さな絹のパンティ。

一瞬狂おしげに顔を埋めた。

快楽の喘ぎ。

パンティの裏を返す。

それは、遮閉された処女の門を守るのではなく、うつとりとうちふくらんだヴィーナスの丘に成熟して真赤に咲き乱れる花びらにびつたりまといつて、愛の快楽ににじみでる甘い蜜を吸う一匹の白妖虫。

思いもよらぬ雨のわざわいか、予定より滞在が長のびしたためか、白いパンティにこび

## 蜘蛛とパンティ

芳野眉美



りつく愛液と尿の着色、人妻の強烈な体臭に健康な尿の粉末。

吸いつきたい。かみつきたい。甜めまわしたい。ぼろぼろになるまでひきちぎりたい。あゝあゝ、それもできぬ。このいらだつた

気持。

この狂気。

これが猿ぐつわだつたなら。

夢中で唇を押しつける

恍惚とした口の中に優しく若い人妻の芳し

い生のエッセンスは流れ込む。

盗むか。東京に帰ろうか。

歓楽の獻献。

海辺で若い人妻は夫を砂に埋めている。

僕に気づくと彼女は軽くまねいた。

僕は微笑を浮かべながら近づく。

不思議な微笑だ。

ふと、強烈な人妻のパンティの香がよみが

えつた。ぎくりとした。あわてた。

浜のにおいだ。海のおいだ。

ほつとする。

彼女は気がつかない。無心に砂をかけてい

る。夫にいたずらする。馬乗りになる。私、

魔女よ。いちめてやる。

魔女か。可愛いパンティアだ。

僕は立ち上る。ボートに向つて走つた。

応接間でマージャンを囲むと、若い人妻のすんなりした脚が必要以上に動きだす。

短いスカートの着返えした彼女のふともも

から、たまたま白いパンティがまるで好奇心

にかられた様にのぞきだす。

この小さな薄い絹のパンティは、高く丸み

を帯びた彼女のゆたかな尻にきつちりとひ

ろがつていた。

手洗いに立つたあとの彼女のパンティは、

何かしつとりぬれているかの様な錯覚を僕に

あたえた。

明日もまたキスできるだろう。

僕は微笑む。

無数の蜘蛛の糸が若い人妻のパンティにへ

ばりつき、やがて彼女の美しい雪の肌に消え

ていた。





一月号の長谷川洋さんのコンビネーションについて、及び読者通信の東京の市川公子さんにお知らせします。東京都渋谷区代々木山谷町一八五、文化服装学院装苑代理部にコンベロップコンビネーションというのが発売されています。これは半袖のメリヤス製で前に三つのボタンがついています。ぜひ試して見て下さい。女の貴めをやっている方々もこのコンビネーションを使用して見なさい。新しい興奮が増します。御希望の方にこのコンビネーションを使用した女性の写真を差し上げます。

(岩手・T O 生)

KKの素晴らしい、その編集の良さにあるのでしようが、殊に毎号の豪華な口絵写真にある事はいう迄ありません。滝さんの「股

間縛り」は殊に立派なもので何度見ても見飽きません。桜井さんの「股間縛り」について「を讀み乍ら眺めると更に興味深いです。女性の最も恥しい

部分、そして最も柔かな部分にひしひしと縄を喰い込ませた時はどんな表情をするか、考えただけで胸がわくわくするのを覚えます。モデル嬢には気の毒ですが、今後は荒縄、豆鎖などを用いたものを描いて頂きたいものです。私は男性スードには興味はありませんが時代物——即ち若侍が縛られ責められる場面にはなんとなく興味をそゝられます。大勢の悪人達に取囲れた若侍が奮斗空しく奸計によつて遂に縛り上げられて拷問される。そしてその責道具には彼の愛する女が使われるという場面をいつも想像しているのですが……

(岡田芳夫)

切腹マニアの一人として写真又は絵画のいずれの場合でも素足の時は足首及び足指の表情に注意して下さい。それから立腹の場合は右の手で切腹させておいて、左の

手を高く上げさせて、木の枝とかを掴ませた姿勢としておき、その左手の二の腕から腋の下へ流れる流麗な肉の曲線美を見せるのも一工夫だろうと思います。(その上腋毛を些か見せたら生々しくて一層いゝでしょう)むろん、やゝ斜め向きをの体位にしますが、乳房の片方位や臍は見せる要あり片肌ぬぎというところ、表情は陶醉哀艶的に、ぐらりと倒れるその少し前の瞬間、他に中康弘通氏の構成案等も必ず実現してみせて下さい。

(熊本・K S 生)

只今新年号を拝読させていたゞきました。宮津の岡田芳夫様が言っていました通り、沼田さんの若草山、穴責め、肛門いじめ等早く発表して下さい。前に小坂多美枝の女囚私刑体験記もよかつたですが、沼田さんののは一番傑作だと思います。私はリンチの模様を描写したものが好きなので沼田さん、小坂さんのものが一番良いと思います。一度沼田さんにお会いしたいと思っています。(文通でも可)

(三重・Z O 生)

毎日奇譚クラブ楽しく読ませて頂いております。次の月がとても

待遠しくてなりません。特に責写真に興味を感じています。小生の好みを申しますと小生は豊満な女体がタイトスカートの包まれているのを見ると非常に刺戟されるのです。下はタイトスカートを着て上はシュミーズ又はブラウスにて両手を上に上げて(両手に開く)縛るか又は同じく両手を上げ、壁又は柱に向つて縛る。或は椅子にタイトスカートを縛る。その他同じ姿の逆エビ等。その場合猿ぐつわは必要、モデルは中富綾子さんが良いと思います。その次に小生の好みはドレスにて両手を上げさせて縛るかドレスで木馬に乗せる木馬に乗せる時、手は木馬の前足に縛る。早くこのようなポーズの写真が本誌に載る事を待ちっています。(神奈川・T S 生)

新年号で口絵の滝麗子さん描くところの妊婦の片足吊り(苛責)には全く驚きました。私が特に妊婦に対して普通の人々より強い関心を持つてゐるからでしょうが、今迄見たいろいろの絵や写真の中で一番圧倒されました。よく女が妊娠するときはたなと云われますが、私はむしろ反対で美しくなると思います。殊に妊娠した女性

はエロチックなものです。

この絵で吊られているのが両足でなく片足であること。肉体がねじるように半吊りにされているのがお腹の大きな女だけに私にいろいろの空想を働かせるのです。全裸でなく、腰巻が半ばとれそうになり乍ら縛られた女体にまといついているのも一層エロチックな感じを与えます。どなたか妊娠している方で私のモデルになつて下さる人はありませんか、妊婦の膨満な腹部を本当に見たことはありませんが、是非一度写真に撮つて見たいと思います。若しそういう方がありましたらお手紙下さい。

(大阪・久方生)

月毎に新鮮な読物を加えてゆく貴誌を楽しみに愛読して居ります。先日は古川裕子様宛の手紙を送付しましたが御取次下さいましたでしょうか、面倒なことをお願い致しまして済ませんが宜敷しく御願ひ致します。さて、又こゝで御願ひがあるのですが、それは同封しました下絵の様なポーズでモデルさんに御願ひしたいのです。前にも一回お便りしましたが、古川さんがマスクへの異常な憧れがあるように、私も皆様とは一風変つ

ており、女の方の眼帯を掛けたのに魅惑を感じるので。昔から「眼病み女に風邪き男」と云われる様に、女の人は眼を患つて眼帯を掛けてゐるのはまことに奇麗に見える云われております。私が何故此の様に眼帯に魅力を感じるかという、私の友達の女学生の人がよく眼帯をしてゐるので、「よく眼を悪くするね」と聞くと「悪くないのよ今東京の女学生の間で流行してゐる一種のおしゃれよ」と答えました。これも赤いスタイルブツクを手についたりネツカチーフをしたりするのと同じ様に病みもしない眼帯をするのも一つの流行だそうです。それで若し写真のせて頂けるなら、なるべく正面を向いた所が良いと思います。

(山田一生)

◎古川さんへのお手紙は回送しておきました。絵や写真についての特殊なアイディアが貴方の外にも沢山参つております。本誌写真部とモデル陣を挙げて、皆様の御希望による奇抜なもの撮影すべく企画中です。

(T・T生)

「兵庫・悩める倒錯男氏」へ一月号記載の貴兄の通信拝見致しました。小生本年二十六才にて

貴兄の云われる教授タイプの五十年輩には程遠い者ですが、一昨年来の東京の大学卒業以来、商社務めをして現在に及んでいます。現在まで女性に恋された事もありましたが、私自身異性には興味がないうめキャンセルしました。勿論まだ童貞で今までも街を歩いて清潔の感じのする学生等には気のひかれる事もたびたびありました。友達にはなれませんでした。就いては貴兄と面会の上落ちついて御話したく思います。如何なる連絡方法をとればよろしいでしょうか、奇譚クラブ誌上へ御返事下さい。

(吹田・MY生)

別便でお送りしました「爛花」(仮題)の原稿御笑覧下さいませ

宅と親しく交際してゐる方の偽らざる体験談で少しも加筆潤色してありません。この話の出てる富士枝という女性はサド的、マソ的には余り強い現われを見せて居りませんが相当露出症のようです。話はまだまだ続くのですが掲載して頂けるのでしたら続稿御送り申し上げます。恐れ入ります。誌上で御連絡賜りとう存じます。向寒の折から編集部の御一同様御自愛遊ばします様祈上します。

十二月七日

かしこ 川合伊都子

◎先便にて切腹通信有難うございました。本号では誌面の都合で間に合いかねました。「爛花」の続稿は何卒お送り下さるよう御待ち

## ☆代理部月報☆

### 台上の殉教者

(新年号口絵既載の分)

キヤビネ版

二枚一組 二百円送八円

二枚一組 (第二組)

(二月号口絵掲載の分)

キヤビネ版

一枚 百円 送八円

右御注文により焼増し致します。

### 男性ヌード写真

手札型 五枚一組 三百円

第一組、第二組

### 男性被縛写真

手札型 五枚一組 三百円

### 虐待 (男性マソ写真)

キヤビネ版

五枚一組 五百円

(右は何れも送料共)

申し上げます。

(K・M)

前略、ごめん下さいませ、沼田でございます。新年号拝見させていただきました。いつもの事乍らとてもすばらしいやうございましたわ、ほんとうにあれだけのものをお作りになるのは、さぞ苦心なさる事でございましょう。今後一層の発展を心からお祈りします。十二月号の私の文に新年号誌上で一読者の方が少しホメて下さつてゐるのはまことに汗顔の至りです。たとえ一部の方に認められただけでも私の女としての意気、接客婦生活としてのミジメサを人様に知つていただけた満足感でもう涙が出てしまうのです。これはウソでもこちようでもございせん、ほんとうのことです。——中略——もつともつと魅力ある読者を今書きつゝあります。二月号を見る頃お送り出来るでしよう。本当に今度はまだ一度載せて下さつたら、私、男の編集者様なんて、とつてもおつかないから女の方、家原様にお会いしたいんです。家原様なら私のこの性向をよくお聞き下さる事でしよう。では今日はさようなら。

十二月七日

(沼田扶二世)

愛川晃子様、お手紙有難うございました。次号でお返事申し上げます。お体大切に (中康弘通)

新年号を手にして写真口絵のすばらしさに思わず嘆声をあげました。殊に「まぞひすちつくなペー」は何れも待望のものだけに責めのアルバムとしては近來にない切実感があふれ又美的観点からも得がたい逸品と申されましょう。なかんずく「虐待」は着衣の女性が裸体の男性を責めるアイディアで思ひきつて美しい脚線を露わにした構図にはマゾヒストならずともひかれます。この場合責める方の女性性は袖を二の腕までたくし上げて腕の曲線美をも示し、合せて甲斐々々しい姿の責の心理の準備過程をそれで表現したならば一層効果的ではないでしょうか、尙欲を言えば責める方はもう少し年増のつくりにしたならば、もつと切実感が得られるのではないでしようか。これに反して、屈伏への過程は一寸悪戯のような感を受けました。「切腹の擬態」は構図といふモデルの表情といふ何れも傑出した作品で我が意を得たものでした。

今後はどしどこのページを充実拡張して一層濃厚な場面をあきる程堪能させて下さるようお願いいたします。尙美しいプロマイドにしてお分け下さることも忘れなく。

(一読者)

中康先生の「切腹史談」以来奇クの熱烈な愛読者で毎日発売日近くになると気が落着かずまるで小学生のような気持で待焦れていました。私は生来の切腹願望者でまたペダラストの傾向を持つ同性々慾者でございしますが、切腹のことなど書いてある雑誌の他には例がなく私の永年にわたる夢が実現されたことを深く感謝いたします。中康先生の文中に「切腹願望(高橋鉄氏命名)なる日本人独特の性心

理云々」とありましたが、実は私もその命名を受けた第一号の切腹願望者でございします。御誌の中では妖異聚落第、若衆武士道など実に楽しく読み、また田谷氏の「女腹切の考察と女性の切腹例」もすばらしい価値のあるものと思ひました。同封の絵は誠に推拙なものでお恥しい次第ですが御笑覧下さい。最後に御誌の今後の隆盛をお祈りして筆をおきます。

(仙台 児島輝彦)



# 奇譚クラス

3月号は皆様待望の  
倒錯の手記と告白の  
大特集号です

断然！ 群誌を圧して独走を続ける本誌の清新且つ豊富な内容を誇る大特集号

## 絢爛豪華な口絵

二十数頁！

サドマゾフェティッシュ同性愛等のア  
ブマニア垂涎の資料を網羅何が飛び  
出すか手に汗を握って御待ち下さい

魔性の姉妹真木不二夫

謎の女と私岡田 咲子

女看守と囚人

横井 英一

女体哀歓……邑鳥 訓右

星は濡れている 亀岡絃七郎

秘録 高遠落城……川野 京輔

裕子の告別の言葉……古川 裕子

(私を愛して下さった皆様へ)

責めのモデルとなつてみてー

初めて縛られて……村田那美子

痛いと感じた時……川端多奈子

嫌だつた思い出……中富 綾子

非小説 性液……伊藤晴雨

変態讚美論……鬼山絢策

サディズム感情教育……吾妻 新  
ム小説 残虐なる女性達……森本愛造譯

悪の部屋……二俣志津子

蜘蛛と蝶々……飛田 良二

痴 迷……鬼山 絢策

私の求めた男……松井 籟子

マゾヒストの手帖……沼 正三

4644 マゾツホの伝記書 45 手紙(其三)  
47 かさぶたを食う 48  
「揮発した踊子」49 「仇討三鞭風呂」

紅 花 草 紙……川合伊都子

女体解剖の経験……吉田一太郎

○マゾヒスチックな境地に

切腹研究夜話……中康 弘通

現代マゾヒズム芸術時評

……原 忠正

## 大特集倒錯の手記と告白

項目の一部(ドレイボーイ) (無惨絵マ  
ニア) (継子いじめ) (内に秘むもの)  
(肛門いじめ) (長煙管責め) (苛めら  
れたい気持) (女性の鼻) (少年の切腹)  
(私は切腹した) (少年時代の犯罪) (乗  
馬靴への執著) (悦慮遊戯) 以上の外多  
くの手記告白を準備してあります

## 編集後記

病癡的な陰惨さを極力排撃  
した明るく愉しい風俗雑誌の  
奇ク二月号をお届けします。  
定価据置きのみ、大増頁い  
たしました読んだえある読物  
本位の本号の御感想は如何で  
すか、夜長をかこつ皆様の  
手元へ届けるべく一生懸命作  
りました。新年号で愛読者の  
皆様への呼び掛けをいたしま  
したに對し、全国津々浦々か  
ら激励や鞭撻の御言葉を頂き  
厚く感謝いたしております。  
書店の片隅どころか、東京  
の一流書店の一番いゝ場所に  
特異な表紙の奇クが顔を出し  
ているというお便りや、田舎  
の町では着荷した奇クが奪い  
あいでは忽ちなくなつてゆくと  
いつた御通信を得て大変心強  
く思っております。然し私達  
は圧倒的な売行きにも決して  
慢心せず、あくまで皆様の御  
期待にそつ雑誌として育つて  
ゆきたいと思つております。  
来月号は倒錯の手記と告白  
の大特集号として、颯爽と皆  
様の前に姿を現す筈でありま  
すから何卒御期待下さい  
(K・M生)



# 集募稿原懸賞四十万記念七周年刊創

本誌創刊七周年を記念して  
 広く既成、新人、有名、無  
 名を問わず新しいジャンル  
 の開拓に目ざす同好者の方  
 々から本誌の内容にふさわ  
 しい原稿の大募集を行いま  
 す。何卒昭和二十九年の本  
 誌の輝かしい前途を祝福し  
 て奮って傑作を寄せられん  
 ことを期待いたします。

## 賞金

|         |     |    |
|---------|-----|----|
| 一席      | 参萬円 | 一名 |
| 二席      | 壹萬円 | 二名 |
| 三席      | 五千元 | 三名 |
| 四席      | 三千元 | 五名 |
| 佳作      |     |    |
| 本誌一カ年贈呈 |     | 十名 |
| 本誌半カ年贈呈 |     | 十名 |
| 本誌三カ月贈呈 |     | 十名 |

## 規定

- 一、内容はアブノーマルな題材を扱い本誌にふさわしいものであれば如何なるものにてても可、形式も問わず。
- 一、枚数は四百字詰五十枚迄
- 一、必ず未発表のものたること
- 一、締切、昭和二十九年一月末
- 一、入選作品の版權は本社が保有する
- 一、銓衡は編集部選
- 一、賞金は入選発表一週間以内に送付入選作は本誌に掲載す
- 一、入選者発表は本誌四月号誌上の予定、
- 一、送り先、曙書房編集部懸賞原稿係宛、封筒に懸賞原稿と朱書のこと
- 一、原稿の返戻御希望の方は返券同封の上原稿第一頁に要返却と朱書して下さい

◎日本唯一の特色ある雑誌としてその文献的価値を高く評価されて居ります本誌は是非毎号欠号のないようお揃え下さい。

## ◎直接購読者募集◎

三月分三冊(送料共)三百円  
 半年分六冊(送料共)六百円  
 一年分十二冊(送料共)壹千二百円

毎月売切れにて御迷惑をかけていますが、御買洩れのないよう是非直接購読の御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真二枚一組一年分御申込の方には五枚一組サービスピス品として贈呈申し上げます。

## 奇譚クラブ

第八巻 第二号  
 毎月一回一日発行

二月号 定価 百円

昭和二十九年一月三十日印刷  
 昭和二十九年二月一日発行

編集人 箕田 京二  
 印刷人 上田 庄之助  
 発行人 吉田 稔

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。